

同じ景色を見られたら

粗茶3頭身

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校1年生の春、関西から引っ越してきた牛込ゆりは、新たな地で新たな制服を着て、新たな学校生活を送ろうとしていた。その晴れやかな入学式の日、他校に入学するあ
る人物と出会う。

目次

9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	第1部 高校1年生	プロローグ		
117	106	93	80	66	51	37	20	6			1	
1話	第2部 高校2年生	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話	11話	10話
303		278	255	238	227	215	199	182	169	158	146	130

1 3 話	1 2 話	1 1 話	1 0 話	9 話	8 話	7 話	回 帰	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話

495 482 466 450 434 422 405 401 381 368 353 339 320

5 話	4 話	3 話	2 話	1 話	第 3 部	2 0 話	1 9 話	1 8 話	1 7 話	1 6 話	1 5 話	1 4 話
					高 校 三 年 生							

697 678 646 636 624 608 594 580 562 542 523 511

愛する人への祝福を	823
牛込ゆり誕生日回	803
番外編	
もう一つの可能性	793
彩ルート	
10話	774
9話	758
8話	743
7話	726
6話	712

プロローグ

常緑樹が多い町中だけど、全部がそうというわけじゃない。川沿いなら葉の色が変わり始めている。もうしばらくしたら紅葉に染まるんだろうね。：君が大好きな紅葉に。

去年も一昨年も連れて行ってくれたよね。ネットとかSNSとか口コミとか、そういうの載ってない所に。君が自分で見つけて、お気に入り場所なんだって言って、他に人を連れてきたのは私が初めて、だなんて言っちゃって。でも、君がその場所が好きな理由は、なんとなく伝わってきた。不思議なことだけど、その場に君がいると、その場が”完成”されたように見えたから。

「あ〜！ゆり先輩！」

「あら？久しぶりだね香澄ちゃん。相変わらず元気そうだね」

「はい！自分でも分かるぐらい最近上達できてきましたし、次のライブも近いんですよ！もうキラキラドキドキしまくりです！」

「そ、そうなんだ」

戸山香澄ちゃん。中学、高校とエスカレーター方式で上がれる花咲川女子高校の1年生。香澄ちゃんは外部から来た子。私が3年生だから、二つ先輩ってことになって、香澄ちゃんの妹は私と同じ水泳部に入ってる。あの子は中学3年生だけだね。大会で活躍するのを期待してたけど、受験があるから辞退したんだよね。残念とも思うけど、同じ受験生だから気持ちがよくわかる。私は両方捨てないけどね。やりたいことも、やらないといけないこともやる。…これも君の口癖だよ。私が言うようになってからは聞かないけど。

「ゆり先輩はここで何してるんですか？」

「葉っぱの色が変わってきたなーって見てただけだよ。私、紅葉見るのが好きだからね」
「おおー！大人っぽいです！」

「あはは、ありがとう」

川沿いのベンチに腰掛けて色の移りゆく葉を見てたら、そりやあ何してるの？ってなるよね。…これって大人っぽい？なんかお祖母ちゃんっぽい気がしてきたんだけど、香澄ちゃんは正直だから、大人っぽいんだろうね。

「グリグリはライブしないんですか？」

「受験が目の前に迫ってるからね。みんなの受験が終わったらライブをしようって思ってるよ。勉強の息抜きでギター弾くし」

「そうなんですね！じゃあじゃあー、グリグリがライブする時に、また呼んでもらってもいいですか？」

「もつちろん！ポピパのライブも全然見れてないし、りみの成長も見たいからね」

「やったー！約束ですよ！」

「うん。約束」

私の前に立っている香澄ちゃんは、キラキラと目を輝かせながら手を伸ばしてくる。その手は小指だけ立てられているから、指切りをしようってことだよ。指切りをするのはいつぶりなんだろう、なんて考えながら香澄ちゃんの小指に私の小指を絡める。小さい頃はよくしていたことだけど、小学校高学年くらいからやる人が極端に減るよね。

「楽しみだなあ〜♪」

「香澄ちゃんは本当にライブが好きだよ」

「はい！キラキラドキドキしますから！それに、有咲がいて、りみりんがいて、おたえがいて、沙綾がいますから。ポピパのみんなと一緒にだから、すーっごい楽しいんです！」
「なるほどね。たしかにみんながいるから楽しいって気持ちもあるよね」
「はい！」

私もグリグリ みんながいるから楽しいって気持ちがある。グリグリ、正式には *Little*Green*。それがバンドの名前、私の居場所。大切な友達と四人で組んでるバンド。

「そういえばゆり先輩！りみりんが言ってたんですけど！」

「何を？」

「ゆり先輩彼氏さんがいるんですよね！」

「…え」

「私ビックリしちゃいましたー！どんな人なんですか？いつ出会ったんですか？あ、もしかして関西の人ですか？」

「待って待って落ちついて。…香澄ちゃん。それ本当にりみが言ったの？」

「うーん、うっかりって感じで言っていましたよ。ゆり先輩に彼氏がいるってことを聞いて

て、いろいろ聞こうって思ったらこれ以上は話せないって言われちゃって」

「あくなるほどね。そういう感じなんだ」

「それでそれで！彼氏さんはどんな人なんですか？」

「グイグイ来るねー」

彼と出会ったのは、高校1年生の時に、しかも入学式の日だったね。∴仕方ない。あの程度は教えてあげようかな。

第1部 高校1年生

1話

春、卒業する人は卒業して、入学する人は入学する。進級だつたり入社だつたりと忙しい時期だ。出会いの季節とも別れの季節とも言ふ。俺はそのへんのことを意識したことないし、虫が増える嫌な時期だと思つてゐる。花見してたつて毛虫が嫌というほどいるわけだしな。夏になれば蚊と蜂が増えるし、頭がおかしくなるんじゃないかというほど暑くなる。やっぱり秋がいいんだよ、秋が。冬は寒いからダメ。2番目に好きだけど。

さて、朝食も軽く済ませたし、家の掃除もできた。戸締まりも確認したし、ブレザーの袖に手を通して学校に向かうとしよう。独り暮らし用の安いアパートを後にして通学路を歩く。アパートの隣にはマンションがあつて日照権はどうした、と思つたが、アパートの隣といえど北側だから問題ないらしい。

(…なぜ女子はスカート丈が短い方が好きなんだろうか。みんな変態としか思えない)

通学時間はたいてい似た時間になるから、すれ違う他校の生徒だったり、方向が同じ生徒だったりを見てそう思う。学校が用意した制服が元から短いなら仕方ないと思う。それはもう作った人と、それを変えない教師陣の性癖が出てるだけだろう。捕まればいい。

関東では短いスカートが多いとは聞いたことがある。だから仕方ないわけだし、実際に女子が気にしてないから変わらないのだろう。嫌がる女子もいるとは思いますが、民主主義は数の暴力を振りかざせるから結局変わらないな。

(自分からスカートの裾を折って短くする奴は、ただの変態だろう。それで興奮する男もいるから需要と供給が成り立ってるわけだが)

自分が今日から通う学校はどうか変態の集まりであってほしくない。そんな残念なことを願いながら歩いていて気づいた。どうやらまたチンピラにつけられているようだ。原因はちゃんと覚えているが、あれは平和的解決を拒まれたんだよな。逆恨みもいところだ。そしてお前らも学校行くかバイトするかしろ。入学式の日にチンピラと絡んでいた、なんて目撃情報はあつてほしくないから、俺はわざと道を変えてひと目が

つかない場所に移動する。

「ここならいいだろ？」

「話が早いこった。今日こそ借りを返させてもらうぜ？」

「貸しを作った覚えはないから返さなくていいぞ？」

「うるせー！こつちの気がすまねえんだよ！」

「そんなの知らねえよ」

目の前のこいつの他に四人か。暇な奴らめ。入学式に行かせろ。変に目立ちたくな
いんだよ。俺を囲むように広がったチンピラたちの位置を頭に叩き込む。正面に一人、
左右に二人、斜め後ろに二人。後ろのは視覚外か、誰しもが考えるやり方だな。時間も
かけてられないことだし、正面の奴をふっ飛ばして強行突破。それで学校に向かうとし
よう。

そう決めた俺は、鞆を持ち直して全力ダッシュ。まさか俺から仕掛けると思つてな
かった、という顔で反応が遅れたそいつの腹に飛び蹴り：はさすがにダメージが酷そう
だから、そうすると思わせて横をすり抜ける。その際にスネを蹴るのも忘れない。

「いでっ！」

「じゃあなー」

「クソ！逃がすな！今日こそ絶対に借りを返させるんだ！飯を奢るんだー！」
「まじで!?!借り返すってそっち!?!スネ蹴ったこと謝るから飯奢ってくれね？」

~~~~~

今まで話を聞かなかったせいだな。俺が勘違いしてずっと逃げ回っていたから、あいつらもずつとつけまわっていたらしい。悪いことをしてしまった。でも飯を奢ってくれるのはありがたい。クソ親父からのギリギリの仕送りだけじゃあ生活が厳しいからな。

中学を卒業できたからバイトを始められるわけだが。：バイトはどこでやろうか。やるなら飯食えるところがいいか：、でもああいうのって面倒な客も相手しないといけないよな。イラッとして殴り飛ばしそうだから向いてない気がする。でも生活が：。とりあえずバイトのことは後で考えるとするか。

チンピラ（良い奴）と連絡先を交換して、俺は急ぎ足で学校に向かう。俺は早めに行動するタイプだから、時間はまだ大丈夫。ギリギリになりそうだけど遅刻にはならな

い。何事もなければ。

「フラグって回収すんのこんな早いもんだっけ？」

道路を挟んで反対側にいかにも困ってますよオーラを出している黒髪の女子がいた。あの制服はたしか花咲川女子の制服だったかな。中学の時に女子たちがパンフを広げて話してるのを聞いたことがある。制服が可愛いという感覚は分らないが、人気があるらしい。同じく女子校の羽丘はブレザーだしな。学力レベルは似たもんだから、制服で選んでる奴が大半だったな。真面目なやつは別の高校、共学のともことかも検討してたっけ。

さて、あの子がどう困っているのかは少し様子を見てたらわかった。あの子は迷子のようだ。手には学校の地図でも乗っついていそうなパンフがある。でもあの子は辺りを見渡しては地図を見て、また辺りを見ては地図を見て、を繰り返していた。そして、迷っていても仕方ないと思ったのか、止めていた足を動かし始めた。行動するのはいいことだよな。そう思いつつも俺は横断歩道を渡ってその子に近づいた。

なぜなら――



「そつちじゃ花咲川には着かないぞ」  
「え？」

反対方向に歩いていたからだ。

背中に届くぐらいの長い黒髪に赤い目に整った顔立ち。拗らせてるやつじゃなければ誰しもが美少女もしくは可愛いと思うだろう。俺だつてこの子は可愛いと思う。別にタイプというわけでもないが。

突然見知らぬ人、しかも異性に話しかけられたら驚きもするよな。今の位置関係はこの子の距離感に合わなかったのか、一歩下がつてこちらの様子を見てくる。話が進まないと俺は入学式早々遅刻になってしまう。だからすぐに話を済ませるとしよう。

「その制服つてたしか花咲川女子のだろ?…違つたか?」

「い、いえ、そうですけど…」

「あ、敬語いらないから。今日制服着てるつてことは1年だろ?俺も1年だから」

「そうなんで…:そうなんだ」

「順応が早くて助かるよ。俺もそんな時間があるわけじゃないし」

「君も入学式だよな?どこの高校?」

「教えない」

「なんで!？」

「時間ないんだよ。お前が迷子になってそうだから声かけただけ。場所教えるから一回で覚えろよ」

なんか言いたそうにしてるが、何度も言わせてもらおう。時間がないんだと。だから、ここからどうやったら花咲川に行けるかを口で説明した。道を曲がるときに目印となる場所も教えたから、間違えることはないだろう。説明を終えて俺も自分の学校に向かおうと思った時に気づいた。急に黙り込んだ俺を不審に思ったのか、少し顔を覗き込むようにしながらどうしたのか聞かれた。相変わらず距離があるが。

「方向一緒だったわ」

「え……」

「しかも俺のほうが遠いから、学校まで送ってやるよ」

「それはさすがに悪いよ!時間ないんでしょ?寄り道になっちゃうだろうし」

「大した寄り道にもならん。言い合ってる時間のほうが無駄だから、さっさと行くぞ。嫌なら俺を見失わないように付いて来い」

これでさらに距離を開けられたらさすがに思うところもあるんだが、どうやらそこまでは気にしてないらしい。斜め後ろを歩いてしたが、会話がないのも嫌なのか、少し距離を縮めてきた。

「それで、どこの学校なの？」

「教える必要があるか？」

「私だけ知られてるのってなんだか不公平」

「俺は聞いたわけじゃない。知ってたからわかっただ。だから不公平じゃない。…それに、この辺の高校って制服の見分けがつきやすいから分かるだろ？」

「私中学までは関西にいたの。だからこっちは全然」

「なるほど、それで地図持って迷子か」  
「うっ」

ただの迷子なら別にいいんだよ。いや、よくないけどさ。この子は地図を持っていて迷子になったんだ。地図を読めない人ってやつのようなだが、それならそれでスマホでも使えばいいだろうに。…もしかしたら、携帯を持ってきてはいけないなんて校則でもあ

るのかもしれない。てつきり俺の高校だけかと思つたが、どうなのだろうな。

「…関西か。大阪風お好み焼きの」

「お好み焼きや！大阪風はいらん！広島のがパクリやねん！」

「すげー反応したな。ま、そのへんはどっちでもいいけど、急に関西弁になつたな」

「…あ、いや、あのこれは…」

「気にかつることなのか？話しやすい口調でいいと思うが」

「…でも、こつちに馴染みたいし」

「話し方を変えるのが馴染むつてことやないやろ」

「え…関西弁？」

「まあな。小6でこつちに來たらなんか染まつたけど、関西弁に違和感もないし、極々稀

に使うこともある」

「そうなんだ…」

話し方なんて人それぞれなものだし、その土地の文化でもあるんだから良いも悪いもないんだよ。馴染みのない話し方に珍しがるのは仕方ないが、からかうものでも、ましてや馬鹿にするものでもない。ちなみに、馬鹿にしてきた奴は絞め上げてる。

そうそう、お好み焼きのことも過敏になつてるのは当事者達だけだよな。広島の方は広島焼きって言われるのが嫌らしいし、かと言つて広島風もあまりよくないみたいだ。だから、どっちもお好み焼きでいいんだよ。会話で「どっちの？」つてなつた時にどっちのかを言う。そんなんでいいじゃないか。

「ほら見えてきたぞ。あそこが正門な」

「あ、着いたんだ。ホントにありがとう!」

「気にするな。ただの気まぐれだから。じゃ、俺も急ぐから」

「ううん。それでもお礼は言うよ。ごめんね、時間取っちゃつて」

「だから気にするなつて」

「あ、私牛込ゆりつて言うんだ。改めてお礼したいからよかつたら名前と連絡先教えてくれない?」

へー、そんな名前なんだ。珍しいような珍しくないような。あ、でも「ゆり」つて名前は珍しくないか。なんでもいいけど。それで、お礼をしたいから名前と連絡先を教えてください、ね。

「やだ」

「……………ええ!?なんで!」

「牛込はもつと男を警戒しろよ…。思春期はもちろん、思春期を終えた男だってみんな狼だから。簡単に名前も連絡先も教えるな。嫌な目に合うぞ」

「でも君はそういう人じゃないでしょ?優しいもん」

「疑うことを覚えろつての…。とりあえず何も教えてやんねーし、一回優しくされたからつて心を許すな。騙すための罠の可能性を考えろ」

「…君もそういう目で見てたの?」

「それ本人に聞くか?…別にお前をそういう目で見ねえよ。可愛い部類だとは思うが、残念だったな。俺にはときめかない」

「…複雑」

「知らんがな。じゃあな牛込。もう会わねえだろうが」

「ま、待つてよ!せめて名前だけ!私だけ教えて君が教えてくれないのは不公平!」

「不公平でけつこう!遅刻したくないんだよ!」

「あ……………行っちゃった。……………バカ」

思わぬタイムロスをしてしまったが、走ればまだ間に合うかもしれない。そんなこと

を思っていましたとも。だが残念、歩道橋を上がろうとしてるヨボヨボの老夫婦を見かけてしまった。あんなんほつとけないからな。順番におぶってあげましたよ。

—遅刻したが、あの理由なら全然いい

—ただし牛込お前は駄目だ

あ、昼飯はチンピラ共と食べました。バイトも紹介してくれた。良い奴だわホント。

~~~~~

私はベッドに寝転んで、枕に顔を埋めながら今日のことを思い返してた。高校までの道を完璧に覚えてるって自信がなかったから、地図が書いてあるパンフレットを片手に家を出た。でもパンフレットの地図は学校周辺しかないから、家からの道がすべて分かるわけじゃない。それで困ってたところに、赤みがかった茶色の髪をした男の子が助けてくれた。私と同じ赤い目をしてて、ちよつと怖い雰囲気があつたけど、優しい人だった。学校の近くまで案内してくれたし、そこまで歩いてる間も会話を繋げてくれた。ちよつと意地悪っぽいところもあるけど、それは彼なりの愛嬌なんだろうなって伝わってきた。そう感じ取れたのも、彼の目がまっすぐだったからかな。

彼にお礼がしたいし、名前も知りたかったから、先に私の名前を言つて彼の名前と連

絡先を聞いた。先に言っておけば、公平性を保つて言ってくれると思ったから。でも彼は教えてくれなかった。

『もつと男を警戒しろ』

『疑うことを覚えろ』

『優しくされたからって心を許すな』

彼の言ってることは別に間違ってることじゃない。それに、初対面の人にそんな忠告をするってことは、やっぱり彼は優しい人なんだ。そのことを裏付けるのは彼自身の発言で、それが分かるからこそやっぱりお礼がしたい。

「名前ぐらい教えてくれたっていいじゃん」

10分ぐらいだったかな。彼と歩いて、話したのは。そんな短い時間だったけど楽しかった。同じ関西出身ってわかったのもなんか親近感が湧いた。そうだというのに、向こうは全然距離感を詰めようとしなかった。好感を持てることだけど、ただどー

「お礼ぐらいさせてよね！」

「お姉ちゃんどうしたの!？」

2話

入学式が終わって2週間。なぜやるのかわからないテストを受けさせられたが、その分授業開始が遅いのはありがたかった。まだ俺は春休み気分なのだ。と言っても、今週からは授業が始まったんだけどな。今日は金曜日だからそれももう終わりなのだが。

「商業科って授業楽だよな」

「そうか？プログラミングとかわけわかんねえじゃん」

「なんかパズル感覚でいけるくね？」

「頭大丈夫か？」

HRも終わって、掃除当番の奴らが駄弁りながら掃除を始める。俺は当番じゃないから、荷物を纏めてさっさと教室から出て帰る。部活をするやつはするが、あいにくと俺は何か部活をしよう、という気にはならなかった。

この学校は、大学進学する人全員に推薦状を書く。つまり全員推薦入試で大学受験ができ、書類を書く際に部活をやっていたらそれを書けるから、部活を推進してくるのだ。

だが、あんなものあつてもなくても変わらない。空欄があるかないかなど気にするような奴は、面接の試験監督なんてしないからな。しかも俺進学希望じやないし、そんな金ないし、奨学金（借）も嫌だし。

「しかも学校の体裁なんてもん気にしてる教師の言うことなんて聞きたくないしな」

うちの高校は、商業科の中で言えばトップ争いする進学率兼合格率だ。だから進学関連のを担当してる教師陣は、ウザったいぐらい進学を勧めてくる。まあ担任はそうでもないから、気持ちが悪なんだけどな。どんな人かと言うとマザー的な人だわ。

「アニキ！お疲れ様です！」

「アニキじゃねえよ。アンタの方が年上だろ。それと学校の近くに来るな」

「失礼しました、若」

「ヤクザかよ！……とりまさつさとここ離れるぞ。変に目つけられると面倒なんだよ」

「わかりました。これからは場所を決めておきましょう！」

「合流する必要ないだろ」

入学式の時に飯を奢ってくれたチンピラは、なぜか俺を慕っている。その理由は全く分からないが、バイト先を紹介してくれたことはありがたかった。こいつらチンピラを採用した社員の頭を疑うけどな。…だってファストフード店で。

これからそのバイトに行くし、こいつがわざわざ来たのもシフトが被ってるからなんだろうな。それでも合流して行く必要性は感じられないんだよな。なんでシヨック受けてる、みたいな顔してんだか。

「こう、あの…交流とか」

「バイト一緒だからそれでよくね？」

「…若がそう言うのなら」

「誰が若だ。てかなんでこうなってんだよ…」

「若は覚えてないでしょうね…」

「だからその呼び方やめろ」

「あれは昨年末のことでした」

「語り始めたぞこいつ」

悪いやつじゃないから、つるむのは全然いいんだけど、こういうのはちよつと考えも

のだな。変に語り部を始めたバカの話をテキトウに聞き流していると、バイト先の裏口に着いた。学校からそこまで遠くないのがあるがたいんだよな。家からも遠いつてわけでもないし。

学校帰りで働きだす俺と似た感じで、学校帰りに店によるやつも珍しくない。地理的に花女と羽丘の割合が多いんだけどな。そんな奴らを見かけて、ふと入学式のことを思い出した。そういえばあの時に花女のやつにあつたな、程度だが。あれ以降一度も会ってないし、クラスの奴らの名前を覚えてたらそいつの名前も忘れた。顔もぼんやりとか覚えてない。ま、忘れても問題ないだろう。

~~~~~

「ゆり、ちよつと寄つてかない？」

「いいよ。∴それにしても意外かも、七が寄り道するの」

「そう？」

「うん。寄り道はしないタイプつて雰囲気だから」

「ふふつ、案外するタイプよ？校則で禁止されてたら別だけど」

「なるほどね〜」

今一緒にいるのは、鰐部七菜わにべななさん。同じクラスですぐに友達になった人。出席番号順で並んでたらすつごい離れてたけど、すぐに席替えがあつて、それで席が前後になつて仲良くなつた。

遅刻したわけじゃないんだけど、クラス内で言えば入学式の日には私一人だけ遅く教室に入ったみたい。そのことをからかわれたけど、引越してきたばかりでまだここに慣れてないつてことを話したらすぐに納得してくれた。それに謝罪もついていた時はビツクリしたけど。

「それで、ゆりがお礼したいつて人は見つかったの？」

「全然。本人の名前も連絡先も分かんないし、学校の名前もわからないし、どこに住んでるのかもわからないから」

「前途多難ね。そもそも本人が気にしてないなら、そこまで拘らなくてもいいんじゃないかな」

「お世話になつたからお礼をする。こういうのはきつちりしたいじゃん？七菜もそうだしよ。」

「…まあそうね」

二人でファストフード店に入る。私たちみたいに学校帰りに寄ってる人が多いけど、まだ席は余ってるみたい。買ってる間に席が埋まる、なんてこともなさそうだから、先に注文をすることにした——んだけど。

「あ、いた」

「…誰が？」

「お礼をしたい人」

「え!？」

「右のレジにいる人がそう。間違いないよ」

「あの人が…。なんだか意外ね。こういうところでは働いてなさそうな雰囲気なのに」

「実際には良い人だからね」

「あつちのレジに並ぶ？」

「そうする」

私がお礼をしたい人が、たまたま寄った店で働いてた。意外性しかないし、接客とかしたくなさそうな人だと思ってたんだけどなあ。しばらく待ってたら、私たちの順番に

なった。彼はどんな反応するんだろう。案外彼の驚く顔とか見れるのかな。

「いらつしやいませ。店内でお召し上がりですか？」

「え……あ、はい店内です」

（あれ？全然動じてない……？）

「ご注文をお伺いします」

「えと、このセットを一つお願いします」

とりあえず注文を先に済ませてから話せばいいかな。そう思つて注文して、なのも一緒に注文した。お金は後で貰えばいいしね。

注文が終わつたら「久しぶりだね」つて彼に話しかけた。そしたら彼は、接客の口調を崩して、素の状態で話してくれた。でも、彼の反応は予想とは真反対のものだった。

「……初対面じゃね？」

「……え。いや、あの……2週間前に入学式の時に助けてもらったんだけど」

「2週間前？……俺は覚えてないから人違いだよ」

「そ、そんなことないよ。ずっとお礼がしたかつたもん！間違えるわけないよ！」



「知らん。世界には似た人間が三人いるって言われてるし、俺によく似た奴がこの街にいるという偶然もあるだろ」

「ちよつといい？もう少し思い出す努力してくれないかしら？ゆりがここまで言い切るのだから、ゆりが正しいって可能性もあるでしょ？」

「あるかもしれないが仕事 중이다。そして今は暇ってわけじゃない。わかったら横にズレてくれ。他の客の迷惑だ」

「っ……わかった」

「ゆり……いいの？」

「うん……。迷惑かけるのはよくないから」

私が一方的に覚えてるって、結構辛いんだね。彼が私を助けてくれたように、他の人も助けるような人なら、私はあくまで助けたうちの一人というだけ。彼からしたら、ただそれだけの存在なんだ。

「…ゆり、お礼するのやめといたら？彼は気にしないどころか覚えすらしないみたいだし」

「…みたいだね」

「さすがに…堪えてる？」

「うん…。私だけがこんなに気にしてたなんて、おかしな話だもん。…馬鹿みたい」

「そんなことない。絶対に」

「七菜…？」

「ゆりの方がおかしいなんてことは、絶対にない。恩を忘れないことはいいことだもの。

…こじらせなければ」

「あ、あはは…」

私は…まだこじらせてないよね。たぶん。でも、これからどうしよう…。入学式のあの日からは、お礼をしようってことで頭がいつぱいだったのに。結局お礼もできてないんだけど…。

「ゆりはどうしたいの？」

「へ？」

「だって、納得いつてないって顔してるわよ？」

「そうなの？」

「うん。不満そうにしてる」

そんな顔してたんだ。全然そんなつもりなかったのに。でも、そうやって指摘されたらそうなのかなってなるし、そしたらやっぱりお礼したいってなる。

「お礼はやっぱりしたいかな」

「でも相手は忘れちゃってるわよ」

「うん。だから、思い出してもらおう」

「どうやって?」

「何があったのか全部聞いてもらう。2週間前のことだし、思い出してくれるかも」

~~~~~

「若一、帰りどつか行きます?」

「いや、自分で飯作る」

「作れるんですね」

「まあな。簡単なやつだけだが」

「ねえ、ちよつといい?」

「あん？誰だアンタ」

「いきなりガン飛ばすなよ」

「す、すみません」

「…わざわざこんな時間まで待つてたとはな。馬鹿たるお前」

彼の連絡先を知らない私は、彼のバイトが終わるまで待つことにした。さすがに七菜に付き合ってもらうわけにはいかないから、七菜には先に帰ってもらった。…ちよつと強引に押し切ったけど。

この店の裏口は分かりやすいし、高校生が働ける時間も決まっているから、ある程度予想つけて待機してた。結構待ったけど、待った甲斐もあった。ここまですたらさすがの彼も話に付き合ってくれるみたい。

「この女と知り合いつすか？」

「別に。…ま、話があるのは俺のようだし、お前は先に帰れ」

「お供しますよ？」

「妹に怒られても知らんぞ」

「帰らせていただきますす！」

「お疲れ」

「お疲れ様です！」

…あの人の妹さんってどんな人なんだろ。妹さんに頭が上がりたくないみたいだし、”怒られる”ってことを怖がってる感じだったし…。でも、あのチャラチャラした人がいなくなつたおかげで、一対一で話せる。

「…こんなところで話しても仕方ないか。近くの公園とかでいいか？」

「うん。ありがとう」

「物好きだよな。知らんやつにそんなグイグイ来るなんて」

「だから、私は君を知ってるの！」

「俺が覚えてないから知り合いじゃないだろ」

「むうー」

「そんな顔されても怖くないから」

私と同じで、学校帰りに店に行つてみたいだね。働く側とお客さん側っていう違いはあるけど。…どこの学校なんだろ、制服に何か書いてあつたらそれをヒントにできる

はずなんだけど。あ、でもブレザーだから、それで絞れるかも。…七菜に頼るしかないけど。

公園についたら、飲み物を買ってくれてそれを持ってベンチに座った。彼は話すことがないって感じを出してて、背もたれに頭を乗せて空を見てる。私はそれをじつと見ちゃって、そのせいで完全に話しかけるタイミングを逃しちゃった。

「……なんでじつと俺見てんだよ」

「へっ…あ、いや。その…」

「見とれたか？」

「そんなんじゃないから！私のタイプじゃないもん！」

「ならよかった」

「え？」

「俺もお前はタイプじゃないから」

「……そんなこと言うんだ？」

「先に言ったのそっちだろ…」

「ううん、君だよ。2週間前にも言われたもん。デリカシーないんだから…」

「2週間前、ねー」

彼は、街の明かりのせいではほとんど見えない星を眺めてたけど、思い出そうとしてくれているのか目を閉じた。彼が思い出してくれるかもって、そう思って待ってても、彼は目を閉じたままだった。もう少し待ってたら、気持ちよさそうな寝息が……って、

「なんで寝てるの!?!」

「ぐへっ!……なんで叩くんだよ牛込」

「だって君が思い出してくれるかもって思ってたら寝始めたんだもん!……って、あれ?」

「……………どうかしたか?」

「さっき名前呼んでくれた?」

「……………気のせいだろ」

「ううん!絶対呼んでくれた!」

「気のせいだ!」

「強く否定してるのが怪しい!」

「くっ……」

「覚えてるんでしょ?」

私がググつと彼に詰め寄ると、彼は反対方向に顔をそらした。私が彼の顔を挟んでこつちに向けさせても、必死にそらそうとするし、目も合わせようとしない。もうこの反応が答えだよな。

「なんで忘れたつてことにしてたの？」

「だから覚えてないんだつて」

「頑固者」

「ブーメラン発言だぞ」

「ふふつ、やつと目を合わせてくれたね」

「…なんなんだよお前。俺とどうこうなりたいつてわけでもないんだろ？俺もサラサラないが。とにかく、ここまで付きまとう必要ないだろ。時間の無駄だ」

「前にも言つたじゃんお礼させてつて」

「前にも言つたら？男をそう簡単に信用するなつて」

「え…ひやつ!？」

私は、彼がため息をついてすぐに押し倒された。彼に詰め寄つた分、押し倒されて

もベンチに収まるし、私は両手を彼の片手で頭の上に抑え込まれた。彼のもう片方の手で、今度は私が顔を固定されて彼が顔を近づけてきた。お互いの吐息がかかるぐらい距離を詰めて…。

彼の目は、見たことないような目をしてて、私はその目ですくんでしまつて抵抗する力も出なかつた。蛇に睨まれた蛙つて感じで。

「男を狼だと思え。そう言つたはずだ。こんな時間に二人きりで人気のない公園に来た。こうなる可能性を考えなかつたのか？」

「だ…だつて…君はこんなこと…しないつて」

「俺がそう断言したか？言つたとしてもそれが嘘じゃないつてなんで言える？」

「でも……」

「お礼がしたいつて言つてたな？だが具体的なことは言つてこなかつた。なら身体でお礼してもらうのもありだよな？」

「え……や……そんなの……」

彼は獯猛な目をして、舌なめずりをした。私は自分が嫌になつた。なんで彼の忠告を聞かなかつたんだろう。なんで彼はそんなことしないつて信じきつてたんだろうつて。

これからされることが怖くて、嫌で、でも身体は動かなくて！。

3話

「牛込ってスタイルいい方だよな」

「ううっ……なんで……なん、でえ……」

私の顔を固定してた手は離れたけど、体に沿うようにゆっくりと撫でてる。さっき彼が言ったように、私の体を確かめるためなんだろうね。制服越しだけど、彼の手の触れ方は、私の体になんとも言えない感覚を与えてきた。くすぐりたいような、なんかゾクゾクするような、そんな感覚を。

私は顔をそらして目を瞑った。そうしたところで現実は変わらないし、体を伝う彼の手も離れない。脇あたりから下へと動かして、腰を通り過ぎてそのまま太ももの方に。強く瞑った目からは涙が溢れてて、止まりそうになかった。

「んっ……ふうっ……あぁっ」

私が顔をそらしてるのもあって、耳裏や首筋を彼の舌が這っていく。鎖骨の方にも舌

が這つてきたし、耳を口でふくまれたり、耳穴も舌で舐められた。なんでか分かんないけど、耳をやられると変で恥ずかしい声が出ちゃつた。太ももを撫でた手が、また私の頬を挟んだ。とうとう唇を奪われるんだ。

初めてのキスは好きな人ができたらつて、乙女チックだと笑われそんなことを今まで思つてた。でも、そんな願いは他でもない、自分のせいで叶わなくなる…。

そういうことをする時は、舌を絡めあつたりするつて中学の時に聞いたことがあつた。だから、そんなことされないように、口を思いつきり閉じた。

—でも

—それは意味がなくて

—私はキスされなかつた

「これでわかったろ？」

「はあはあ……え？」

「男をそう簡単に信用するなつてことを」

「……なん……で……？」

気づいたら私の体は起こされて、目の前にいる彼はさつきまでとは正反対の、とても優しい目をしてた。私の手の拘束もなくなつて、彼は手が疲れたのか、プランプランと振ってる。

私は彼の行動が全然理解できなくて、思ったことをそのまますぐに言葉に出してた。混乱してて考える余裕がないから。そんな私の言葉に、彼は不思議そうに首を傾げた。

「キスされたかったのか？」

「ち、違う！」

「ならいいじゃねえか」

「でも……君はさつき、お礼は身体でつて……」

「……やりたいのか？」

「ふえ!? ……やり……!? ……しよ、しよにや……!」

「顔真つ赤…初だな」

「ううー」

「ん? ……わけわかんないやつ」

「うるさい! ……今はこうさせてよ」

熱くなった顔を隠すっていうのもあるけど、泣いてるところを見られたくもない。…さつきまで見られてたけど、状況も違うし。だから、私は彼の胸に額を当てて、顔を見られないように隠した。彼はそれを拒まずにいてくれて、頭をそつと撫でてくれた。

「…こわかった。本当に襲われるって…そう思ったんだよ?」

「悪かったな。そうしないと牛込が理解しないだろうと思っただよ。頑固だし、これなら手っ取り早いし」

「ひどいよ…すつごい舐められたし、フェチなの?」

「んなわけあるか。…ともかく、俺はお前が思ってるような良い人間じゃない。平気で酷いことをする」

「…でも、優しさもあるよ。今みたいに」

「…はあ、だからそういうところが駄目なんだっての」

「ほら…また注意してくれた」

「…お前、知り合いの年中発情期共のところに投げ込むぞ」

「それは嫌だね。うん、これ以上は言わないよ」

彼の目が本気だったから、私はすぐに言及するのをやめた。彼は優しさが無いわけじゃない。でも、酷いことだつて平気でする人なんだ…。きつと自分を基準に生きて、自分の物差しで測つて物事を決める。でも、氣にくわないことはすぐに排除する。優しくて酷い、一見矛盾したような人だね。

私の目から流れてた涙もいつの間にか止まつて、目に溜まつてるのを手で拭こうとしたら、彼に手首を握られた。

「目にゴミが入るかもしれないだろ。ハンカチ使えよ」

「…余計なお世話」

「そういう奴にはこうだな」

彼はポケットからハンカチを出して、私の涙を優しく拭ってくれた。彼が舐めたことで濡れてたところ。…私からも何回も言いたい。君はやっぱり優しい人だつて。でも、

さつきみたいな会話になるだろうから言わない。代わりに素直にお礼を言おう。

「ありがとう」

「礼なんかいらぬ。俺はお前を襲ったわけだしな。…そろそろ帰るぞ。誰かさんが泣いたせいで遅くなつたし」

「その誰かさんを泣かせたのは誰かな？」

「さあ？ 誰だろうな。きっと性格の歪んだ捻くれ者なんだろうな。関わらない方が良さそうタイプ」

「…自分のことそこまで言う？」

「事実だからな。否定しても仕方ない。俺は俺を否定しないし、俺が決めた道を進むつて決めてんだよ」

彼のその言葉は、ここにはいない誰かに向けて宣言してるように感じた。その人がいったいどういう人なのか分からないけど、少なくとも彼がその人のことを心底嫌ってるのは分かった。

私があることに何も反応できないでいると、彼は無言で鞆を取って帰り始めた。私はこのままじゃ置いていかれるって分かって、慌てて彼の後を追いかけた。走って彼に追

いついて、横に並んで歩く。

入学式の時とは少しだけ違う距離感だね。私が道路側を歩いてると、腕を引つ張られて強制的に反対側に移動させられた。こういう気遣いは嬉しいけど、やり方が雑だね。

「…そーいや牛込の家はこつち方面なのか？」

「うん。あつちにあるマンションなんだ」

「ならマンションの前までは送ってやるよ。詫びも兼ねてな」

「ありがとう。律儀なんだね」

「どうだかな。…今何時かわかるか？」

「えつとね、22時46分だね。それがどうかしたの？」

横にいる彼の顔を見ると、彼は空を見上げながら何か考えてた。横にいても聞き取れないような独り言を呟いた後、視線を私の方に向けてきた。まさか視線を戻すんじゃないかな、こつちを見てくるとは思ってた。だって私は彼を見てたわけで、そのことをまたからかわれそうだったから。

「やっぱ牛込の家行くわ」

「……え……ええ!! あ、家はさすがに……ちよつと……男の子を家に泊めるのは……私達つてそういう関係じゃないし。そもそもそんなのありえないし」

「なんで俺が泊まりに行くんだよ……」

「え? そういうことじゃないの?」

「脳内ピンクめ」

「むつ、そういうこと言わないでよね」

「なら発言に気をつけろ」

彼は私から視線を外して前を見た。結局なんで家にまで来るって言うてるのかは教えてくれないみたい。その後は特に会話がなかった。でも、不思議と気まずさもなくて、マンションに着くまでの時間も短く思えた。

「このマンションだよ」

「いいとこ住んでんな」

(まじか。俺が住んでるアパートの隣じゃねえか)

「……今さらだけどさ、君の家はこっちの方だったの?」

「ほんとに今さらだな」

「うっ…」

「方向はこつちだな。もうしばらく歩くが」

「そうなんだ。…時間も遅いし、君もすぐに帰ったほうがいいんじゃない？」

「門限なんてないから問題ない」

そう言つて彼はマンションの自動ドアを通つて行く。1個目は鍵がなくても入れて、そのすぐ後にある2個目のドアは鍵がないと通れない。だから彼はそこで立ち止まつて、早く開けろつて目線で訴えてきた。

「…別にここまで来たら大丈夫なだけど」

「そういう問題じゃない」

「じゃあどういふ問題？ 教えてくれないと開けないよ？」

「必要なことなんだよ。それと、俺はいつまでも粘れるぞ？ それで困るのは牛込だろ」

「…ズルい」

「褒め言葉だな」

私は聞き出すのを諦めてドアを開けた。その後は私が先を歩いて、後ろから彼が追ってきた。部屋の場所は彼も分からないからね。

玄関を開けたら、ちょうどりみが廊下において、りみに「ただいま」って言った。いつもならすぐに「おかえり」って言ってしてくれるんだけど、りみは口をパクパクさせて固まっていた。なんだろうと思つて後ろを見たら、彼も中に入っていた。

「なんで!？」

「親御さんに話があるからな」

「お父さんとお母さんに…、じゃ、じゃあお姉ちゃんの彼氏さん!？」

「えっ…」

「それは違「お父さーんお母さーん！ お姉ちゃんが！」話聞けよ」

「りみ勘違いしてるからね!？」 ちよつと待つてて！ りみ止めてくるからー!？」

急いで靴を脱いでりみの後を追いかけた。けど、りみの行動は「いつものおどおどした感じはどうした」って言いたくなるぐらい早かった。お母さんは嬉しそうに「お赤飯炊いてたらよかったわね♪」なんて言うし、お父さんは「どこの馬の骨だ!」って騒いでる。

そしてりみが玄関に彼がいるって言ったせいで、お父さんは玄関に走って行くし、お母さんはノリノリで後を追いかけた。私は二人を止められなくて、すぐさま追いかけて玄関に戻った。お父さんは彼を厳しい目で見てて、お母さんは成り行きを見守るって感じ。。。

「君がゆりの彼氏か。こんな時間まで連れ回して、何を考えている」

「…お前誤解を解いてくるって言ってなかった？」

「だってみんな早いんだもん…」

「あつそ。…まず誤解を解くことから始めましょうか」

「誤解？」

「俺は娘さんとは付き合ってますよ」

「違うのか」

「当然でしょう。お互いそういう意識はありませんからね。で、時間が遅くなつたことも話しますよ」

「…ふむ」

お母さんとりみは、面白くないなんて小声で呟いてたけど、私としては付き合つて

るってされる方が面白くないよ。父さんは少しホツとしてるみたいだけど、時間が遅くなったことはまた別問題だから、切り替えてすぐにまた厳しい目になった。

「おたくの娘さん。意識が低すぎますよ。だから俺みたいな男にすぐはめ^犯られる」

「…は？ …君は今なんと言った？」

「だから、ちよつと優しくされたからつて、会つてすぐの男を信用するのはよくないつて言つてるんですよ。簡単でしたよ？ 2週間前に迷子になつてのを助けて、お礼をし

たいつていうのをわざと放置した。今日たまたま会つたら、まだお礼したいなんて言うから、人気のない公園に連れ込んでお礼してもらいましたよ。抱き心地よかつたですよ」

「な、何言つてんの君！」

「ゆりはこつちに来なさい！」

私が彼の嘘を止めようと思つたらお母さんに腕を引つ張られてリビングの方に連れて行かれた。りみもお母さんに協力したから抵抗してもリビングまで力づくで移動させられた。

——バキツ！ ドオオン！！

お父さんが彼を本気で殴ったのが見えた。彼は避けもしなかったし、防ごうともしなかった。殴り飛ばされて、すぐ後ろにある扉に頭を強く打つた。お父さんがすぐに彼を追い出したけど、扉が閉まる寸前に彼の口角が上がったのが見えた。

——まるでこの展開狙ってたかのように計画通りと言わんばかりに

「ゆり…酷い目に合ってたんだな。大丈夫か」

「…大丈夫じゃないよ」

「…そうよね。今日はゆつくりしなさい。ちようど週末だし、どこか出かけるのも「違う」ゆり？」

「そうじゃないよ！ 大丈夫じゃないってのはそういうことじゃない！」

「ゆ、ゆり？」

「彼は何もしてない！ 彼は何も悪くない！」

「それは彼に騙されてるのよ！」

お母さんのその言葉に、私の中で何かが切れた気がした。今までそんなこと今までな

かったら、どうしたらいいのかわからなくて、感情に突き動かされる。

「ふざけないでよ!!」

「なにを…」

「なんでお母さん達が彼を信じるの!」

「っ!!」

「なんで娘の私の言うことより今日会ったばかりの彼の言うことを信じるの!? 私のことそんな信じられないの!」

「ち、違うのよ」

「違うしないでしょ!? 違うって言うならなんで私が彼を止めようとした時に、私を止めたの!? なんでお父さんは彼を殴ったの!」

「ゆり待て! ゆり!」

私は家を飛び出した。

彼に謝らないといけないから。

彼が殴られる理由なんてどこにもないんだから。

4 話

「うう〜」

週明けの学校で、自分の席に座ってた私は机に突っ伏しながら唸ってた。というのも、結局彼を見つけることができなかったからだ。マンシヨンの廊下から下を見て、彼が歩いていく方向を確かめた。

エレベーターを待つのも煩わしくて、階段を駆け下りたんだけど、マンシヨンの外に出た時には彼の姿は見当たらなくなった。一応彼が進んだ方向をしばらく走ったけど、それでも人影すらなかった。

お父さんとお母さんとは仲直りできた。それでも二人ともまだ彼のことを信じられないみたいだったけど。それは仕方ないよね。

…彼は人の心理を利用するのが上手なんだ。その人の立場、その時の状況、そんなことも踏まえた上で発言して信じ込ませる。しかも知らない人からしたら簡単に信じられちゃうし、嘘だとは見抜けないように彼も立ち振る舞う。

「どうしたの？ ゆり」

「…七菜、おはよう」

「はいおはよう。それで、彼のことでは何かあったの？」

「うん……………うん!？」

「ゆりって家族と仲いいんでしょ？ バイトもしてないし、そんなに悩むなら最近の出来事からして彼かなって」

「七菜って探偵？」

「違うわよ」

苦笑した七菜も席に座って、私の方に視線を向けてくれた。私は先週のあの後に何かあったのかを話して、彼に謝りたいのだと伝えた。そしたら七菜は口元を手で隠して、何か考え込み始めた。

「七菜？」

「…ゆり、それが彼の狙いだったらどうするの？」

「…え？ どうゆうこと？」

「ゆりの話を信じるなら、彼はわざと〴〵両親を怒らせたのよね？」

「……うん。私にはそう見えた」

「それでゆりが彼に負い目を感じてまた接触を図る。それが彼の狙いの可能性もあるんじゃない？ 2回同じことを忠告して、2回目なんてわざと行為を未遂で終わらせた」

「……それで？」

「……今ゆりは彼のことを信じてる。そんなことしないのは、ゆりに警戒心をつけさせるためって。でも、彼がそうする理由がどこにあるの？ 普通ならそんなことする必要ないわよね？」

「それ……は……」

否定する材料が無かった。七菜が言ってる可能性も十分ある。だって先週は少しだけやられたのだから。でも、七菜が言ってることも彼のことを考えたらおかしい点がある。

「彼は別にそういう狙いは無いと思うよ」

「なんでそう言えるのかしら？」

「だって、彼は私に興味ないんだから」

「そうなの？」

「うん。むしろ関わろうとしてないから、お父さんとお母さんを怒らせたんだと思う」
「……なるほど」

お父さんとお母さんを怒らせて、二人が私に彼との接触をやめさせるように仕向ける。それで彼は私と関わらないで済むから。なんで彼がそうしたいのかも明白だね。彼は私に興味がないのだから、関わろうとも思わないわけで、距離を取ろうとしてるんだ。

彼がその気でも、私の気が済まない。だから私は彼の思惑を推理しても、彼の狙い通りになんてしてあげない。我儘だつて言われても気にしない。”やりたいことをやる”って決めてるんだから。

「それで、七葉に協力してほしいことがあるんだけど、いい?」

「……どうしようかしら」

「え、渋るの!?!」

~~~~~

「き、きた！ サトカンが来やがった！」

「クソっ！ もう来やがった！」

「まだ時間足んねえぞ！」

「この世の終わりだあー！」

阿鼻叫喚してる馬鹿達がいるが、なんてことはない。課題をやり忘れた奴らが騒いでるだけだ。サトカンっていうのは、これから授業する先生のあだ名だ。この学校には佐藤先生が二人いるから、上の名前と下の名前を組み合わせて呼びわけている。怖い人だから、誰も当人に向かってその呼び方はしてないが…。

「何を騒いでる。席につけ」

『ハッ！』

「……軍隊か。まあいい。課題の答え合わせからするぞ。今日は……出席番号15番から」

「俺……この授業が終わったら彼女作るんだ」

「安心しろ。お前ならフラレる」

「先生酷くないっすか!？」

「答えを言え。答えを」

「血も涙もねえ！」

課題をやらないからそうなるんだ。間違ってたって別に怒られるわけでもないし、むしろ解説が始まる。この科目が苦手なやつからすれば、当たった人が間違った答えを言う方がありがたいだろうな。

……先生の眼力が強過ぎるからみんな必死になって正解を求めるわけだが。怒られるのは、” やつてこなかった ” 場合と、” どう考えてもその間違え方はしないだろう ” っ場合だけだ。

退屈な授業が大半なのがこの学校の嫌なところだ。簿記とプログラミングだけで、この学校が力を入れてる授業って。普通科の科目なんて教科書に書かれていることしか喋らないからな。

授業を受けている意義なんてない。自分で読んで理解すればいいだけなんだから。テストも事前にプリントを配られて、それを丸暗記したは100点取れるからな。

「明日の連絡ですが——」

テキトウに授業を受けている間に、いつの間にかHRが始まっていた。明日は何やら外部から講師が来るんだとか。……めんどくさいな。明日は自主休校だ。

今日はバイトもないしさっさと帰ろうと思ったたら、校門前が何やら騒がしい。……騒いでるのは一部の生徒……じゃないな。男子たちだ。あの騒ぎようから判断すると、他校の女子でも来てるんだろうな。誰かの彼女かなんかだろう。ま、俺には関係ないし、あつこの騒いでる奴らからはできるだけ離れて帰るとしよう。

「ねえねえ！ 誰かの彼女？」

「い、いえ、そういうわけじゃ……。ちよつと人を探してまして……」

「見つけられるかわかんないんだし、俺と遊ぼうぜ？」

「ダメエ！ 抜けがけしやがって！」

(……最近聞いた声な気がするが、まさか……)

あの集団に目を向けたのが間違いだった。もしやと思って見たら、たしかに思っていた通りの人物がそこにいた。確かめられたのは、まあいいとしよう。よくないのは、そいつと目があつたことだ。目があつた瞬間、その女子は大声をあげて俺を指差しやがったからな。

「いたー!!」

「え? え? らあいつのこと?」

「そうです! ちょっと通らせてもらいますね!」

「:めんどくせー」

「やっと思っつけられた!」

「ダルいことしてくれたな」

「え?」

「はあ:、まあ牛込はそういうやつだよな。ちょっと走るぞ」

「なんで?」

「後ろ見たら分かる」

「後ろ? ……あれ?」

牛込の後方には、さっきまでナンパしてた男たちが殺意に満ちた目でこつちを睨んでいた。牛込はその理由が分かっていないようだ、とりあえず何かヤバイ程度には分かっただらしい。

苦笑いしてる牛込の手を引いて逃走を開始。無論馬鹿たちは俺達を追いかけてくる。



俺は身体能力に自信があつて、後ろの奴らから逃げられることは分かっている。だが、それは俺一人の場合だ。今は牛込がいる。

正直に言おう。この女の速さは俺からしたら遅い。女子の中では動ける方だろう。だが、男子の動ける人間からすれば遅いのだ。このままでは追いつかれるのは明白。しかし、そんな面倒なことにはなりたくない。ならば取る手段は一つだけだ。

「捕まつてろよ」

「え、きやつ!? ちよつ……え? え!」

「お前走るの遅いんだよ。それと口閉じてろ。舌嚙むぞ」

牛込を抱きかかえ——俗に言うお姫様抱っこ……これも走りにくいから、これで追いつかれそうになつたらこいつを捨てて逃げる——加速して走る。牛込を抱きかかえた途端後ろの奴らが発狂し、雄叫びを上げ始めた。

「あいつら……。チツ、久々にやってみるか」

「や、やるって何を?」

「だから口閉じてろって」

「ひゃっ……！」

「あの野郎何てことしやがる！　また高校にクレーム来るじゃねえか！」

「何人かは回り込め！」

俺が今やっていることは、完全に非常識なことだ。民家の塀の上を走って、逃走して  
るんだからな。これは怒られても仕方ないが、とりあえずあいつらの追跡はかわせる。

~~~~~

「…はあ、つつかれた」

「ご、ごめんね？」

「なんで謝ってるんだよ」

「だって私のせいなんですよ？」

「そうなんだが…、理由は分かっているのか？」

私たちは商店街にある喫茶店に逃げ込んだ。彼は他の男の子達を振り切れたと判断するまで私を抱えて走っていたから、すごい疲れてるんだろうね…。だから私は謝つ

ただ、それもその原因に関してはまいち分かってなかった。そこなんだろうね。彼が聞いてきてるのは。

「…ごめん、分かってない」

「だろうな。まず、牛込は男に対する意識が低すぎる。これは前から言ってるよな？」

「うん」

「他校の生徒が来るだけでもみんな関心を持つ。これも分かるな？」

「……うん」

「で、うちの男子たちは自校の女子たちを女子って思ってる」

「うん……んん!？」

「そこは気にするな。話がめんどくなるから。で、牛込は自覚してないだろうが、お前は十分可愛い女子だから」

「にやっ……!？」

「猫かよ……。ともかく、女に飢えてる男子たちがいる場所に、牛込みたいな子が来たらみんな食い付くわけ」

「……なるほど」

たしかに男の子たちにすぐに声をかけられた。彼の学校に着いてすぐに声をかけられて、気づいたら人が増えてた。そのすぐ後に彼を見つけられたからよかったけど、そうじゃなかったらどうなってたんだろ…。

「んでな。そんなお前が俺を呼んだわけだろ？」

「そうだね。だつて君を探してたわけだし」

「そのせいで追いかけられたんだよ」

「え？」

「付き合ってるって勘違いされたんだよ！」

「ええ!？」

「それで嫉妬した奴らに追いかけられたんだよ！」

「ごめんなさい！」

「まあいいんだけどな」

「いいの!？」

「コロって態度が変わる彼に翻弄されてて気づいたけど、私またからかわれてるみたい。彼は本当に気にしてないみたいで、店員さんにおかわりを頼んだ。……ここ珈琲

店なのにコーヒー飲まないんだね。

「それよか、よく学校わかったな？」

「あ、うん。制服の特徴を友達に言ったら教えてくれたんだ」

「なるほどな。で？ 何の用なんだよ」

「先週のことを謝らないとって思つて」

「先週？ ……あー、あれか」

「本当にごめんなさい！」

「牛込が謝ることじゃないだろ。それにあれは——」

「わざとつて言うんでしょ？」

「……へー。気づけたのか」

彼は一瞬意外そうな顔をした。どうやら私に気づかれることはないと思つてたみたい。……私も、彼が帰る時に笑つてるのを見てなかったら気づけなかったけど。

「気づけたのなら、なおさら何の用だなんで来た」

「お礼兼お詫びをさせてほしい」

「いらん」

「私の気がすまないの」

「知ったことじゃないな」

「1回だけ、1回だけでいいから」

「それフラグだろ。どうせズルズル付き合わされていくようになるんだろ?」

「それは分かんないよ? だって私は君と仲良くなりたいてって思ってるわけじゃないから」

「自己中め」

「それはお互い様♪」

なんとか私が押し切ることができて、彼は心底嫌そうにため息をついてから了承してくれた。連絡を取れるようにするために、彼の連絡先も交換できた。それじゃあさっそく。

「……なんで目の前にいるのに電話かけるんだよ」

「え? 疑うってこういうことでしょ? 本当の連絡先かわかんないし」

「マウント取られた気分……」

「君のおかげかな〜♪」

「めんどくさい奴を助けちゃったもんだ」

ちやんと彼の連絡先って分かったところで、改めて画面に映ってる彼の名前を見る。
……なんて読むんだろ。名字は分かるけど。

「……ねえ。なんて読むの？」

「萩近はぎちか 玲音れおと」

「萩近くんか〜。よろしくね!」

「よろしくはしたくないな」

「捻くれ者!」

初めて追加された男の子の連絡先は、とても捻くれた人物の連絡先だった。

5話

鳴り始めた目覚まし時計を止めて体を起き上がらせる。睡眠を邪魔した時計が示す時刻は8時。今日は土曜日で、いつもならもつと寝ている。

なぜこの時間に目が覚めたのかと言うと、誠に不本意ながら今日は牛込と出かける日なのだ。てつきり放課後の時間を使うと思っていたのに、まさかの休日を丸一日使うという暴挙。

貴重な休日が無くなるのだから、これは満足できるぐらいのお礼お詫びを貰わねえとな。

「……何時集合だっけ」

携帯のメッセージアプリを見る。1番上にある牛込との連絡履歴を確認すると、集合時間と集合場所が書かれており、最後にはすっほかすなと念を押されている。いくら面倒なことはいえ約束を違えることはもうしないんだがな。

「時間は……8時半か。……場所はそう遠くないし着替えて出りや間に合うな」

なぜ時計を8時にセットしたのだろうか。昨日の俺は何を考えていたのやら。……いや、わかるけどな。ギリギリまで寝ようってことだろ。せめて飯を食う時間ぐらい考慮しておくべきだったな。

そんなことを心の中でぼやきつつ着替えを済ませて家を出る。牛込家があるマンションはすぐ隣なのだが、あの真面目な性格だからか、俺みたいに時間ギリギリに家を出るなんてことはしないらしい。おかげで家を出て早々に遭遇なんてことはなく、合流したのは狙い通り集合場所だった。

~~~~~

「……遅い」

集合時間より早く着いた私は、一人で彼を待っているんだけど、萩坂くんは5分前になつても姿を見せない。捻くれてるけど約束をすっぽかすようなことはしないって本人が言ってたから、来るはずなんだけど……。

彼をただ待つのも退屈になってきたから、手鏡使っておかしな所がないか確認する。と言つてもメイクしてるわけでもないし、おしゃれしてるわけでもない。服装が乱れてないかとか、髪が跳ねてないかを見るだけ。

「うん。どこもおかしくないね」

「おかしな独り言はしてるけどな」

「ひゃっ!?!」

「……声かけただけだろ」

「耳元で言わないでよ!」

「これも弱いのかな」

私の弱点を新たに見つけたからか、萩近く人は楽しそうにニヤついてる。時間を確認すると8時半ピツタリ。彼の状態を見てみると、少し髪が跳ねていることから寝起きなことがわかる。どうやら時間ギリギリまで寝てたみたいだね。

「髪跳ねてるよ」

「デフォルトだ」

「直してあげるから、ほらそのベンチ座って」

「別にいい。気にしてないから」

「一緒にいる私が気にするの!」

「なんで牛込が気にするんだよ……」

「い・い・か・ら!　そこに座りなさい!」

「朝から煩いなあ」

萩近くんは文句を言いながら大人しくベンチに座ってくれた。いつもの彼ならのりくらりと躲すんだけど……、まだ寝ぼけてるみたい。時々妹のりみにしてあげるみたい。彼の髪を直してあげる。クセが強い髪だったけど、なんとか直すことができた。

「直ったよ」

「ありがとう」

「う、うん」

「……なんで言い淀んでんだよ」

「だって君が正直なのって珍しいし」

「俺だって礼は言うからな?　……なんで俺牛込に辱められてるんだ?」

「今さら!? しかも辱めてないからね!」

今になって彼の意識が完全に覚醒したみたいで、一生の恥と言わんばかりに項垂れ始めた。彼のその態度は不服なんだけど、でもこれでこそ萩近くんだなって思う自分もある。

「あ? もしかしてお前すつぴんか?」

「え? うん、そうだけど……、それがどうかしたの?」

「馬鹿め」

「むっ、罵倒される謂れはないんだけど?」

「どうせ俺相手にメイクしてもなって思っただらうが、考えが甘い」

「当たってるけど、どういうこと?」

そんなことも分からないのか、って顔してる萩近くんを一発ビンタしたところだけど、とりあえず彼の意見を聞いてから決めるとしようかな。彼はなんだかんだで気にかけてくれて、こういう事を言ってくるわけだし。

「仮に俺と牛込が付き合ってるならそれでもいいさ。天地がひっくり返ってもありえな  
い事だが」

「いつも一言余計だよね」

「それはいいんだよ。ともかく、俺と牛込は付き合ってるんかいな」

「うん」

「俺は他の男が言い寄ってきても守る気なんかない」

「そこは嘘でも守ってほしいな」

「ない。んで、メイクってのは下手くそじゃない限り、素顔より可愛くなるものだろ？」

「まあそうだね」

「メイクしてたら、初対面の奴とかはメイクした状態しか知らないことになるわけだ。  
つまり、メイクしてるから可愛いともなるんだよ。ま、言わば一種の防衛手段だ。俺み  
たいに行方を止めるやつなんて少ない。お前はすっぴんでも可愛くてスタイルいいん  
だから、ちよつとでも身を守るようにしとけ。ただでさえ騙されやすいんだから」

「う、うん……」

「なんで照れてんだよ」

「君のせいだよ！ ばーかばーか！」

不意打ちで”可愛い”とか”スタイルいい”とか言われたら照れるに決まってるじゃん。冗談で言ってるわけじゃないのも分かるから、余計に恥ずかしいよ。なんで朝からこんなことになってるんだろ……。

それに、メイクしてない理由はもう一つある。昨日の夜、部屋で服どうしようかなくて悩んでたら、りみに「お姉ちゃん明日デートなの？」って聞かれたから。そんなわけないって否定してりみの誤解を解いたけど、当日にメイクして出かけたなら「やつぱりデートだ」って言われかねない。だからメイクしなかった。

「納得いかないが……ともかく、これからの年齢でメイクしてない女性の方が珍しいのも事実だ。一種の嗜みとも言える。特定の日だけメイクしてたら周りに疑われるだろうが、普段からしとけばなんともないだろ？」

「普段からメイクって……」

「軽くていいんだよ軽くて。ナチュラルメイクってやつがあるんだろ？」

「あ、なるほどね。……とところで、君って他の男のよりそういうの詳しくない？」

「他の男子と喋ったことあるのか？」

「……ないけど」

「なら比較対象いねえじゃねえか。ま、俺の知り合いで詳しい女子がいてな。受け売り

だ

「なるほどね〜」

メイクに詳しい他の女の子……、いったい誰なんだろ。私の知ってる子……ってわけでもないか。萩近くんのクラスの子かもしれないし。

「で？ 今日はどこに連れ回されるんだ？」

「言い方酷くない？」

「お前の我儘に付き合ってるんだ。間違っではないだろ。こちらら放課後に連れてかれろと思っただのに、貴重な休日を潰されてるんだからな。ちゃんと俺を楽しませてくれよっ。」

「それは……ごめん。ちゃんと考えてきてるけど、もし楽しめなかったら？」

「そうだな……。今後一切俺に関わるな。連絡先も消せ」

「!? ……なん……で……」

「何度も言ってるだろ？ 仲良くなりたいたいわけじゃない。はつきり言っただけからしたら迷惑だ。だから俺が今日楽しめなかったら連絡先を消して、接触もしてくるな」

「……………わかった」

正直に言うのと、萩近くんの連絡先を消したくない。仲良くなりたいし、仲良くなり過ぎたくない。彼とは程よい距離感での友達になりたい。そして、何よりも彼のことをちゃんと知りたい。お父さんたちの誤解を完全に解けるようにしたいから。

だから、これから始まるのはお礼お詫だけじゃない。やつとできた彼との関わりが終わるかどうかが、その勝負でもあるんだ。

「絶対に満足させてみせるから」

「なんか無駄にやる気出てね？ あと今の発言は年中発情期の奴からしたら誘ってるようにしか聞こえないから気をつけろ」

「へ？ ……あ……いや、あの……そ、そういう意味じゃないんだよ？」

「分かってるから。……で、無駄に燃えがってるのはなんで？」

「……えつとね、私負けず嫌いなんだ」

争いごと自体が好きってわけじゃない。みんなで楽しめるならそれが一番だから。でも、勝負事になつちゃうことはどうしてもある。スポーツとかもそうだし、学校行事とでもそう。元からそういうものは仕方ないって割り切ってる。そして、やるなら勝ち



たい。そっちの方が嬉しいし、今回みたいに負けられないものもあるから。

「負けず嫌い、ね。らしいっちゃらしいか」

「そう?」

「だって牛込って自己中だし」

「君には言われたくないかな」

「言うようになったな。……まあでも今回は諦めろ」

「諦めないよ。始まってすらいないんだから」

「……そうかよ。ただ、言つとくが俺は勝負事に興味ないから。気分じゃない時は勝負すら始めねえから」

「え……」

なにそれ……、それってどう考えても私の方が分が悪いじゃん。たぶんだけど、萩近くんってやる気に満ちてる人を見ると反対にやる気無くす人だよ。捻くれてるし。……つまり、今の私は彼を冷めさせちやつてる。

「それはズルい!」

「なんでだよ!？」

「だって私の勝ち目が薄いもん! フェアじゃないよ!」

「俺の気持ち次第で変わる勝負だぞ!? 元々フェアなんかじゃねえだろ! そもそも勝負ですらねえからな!」

「むうー! いいもん! いっぱい連れ回して無理矢理にでも楽しかったって言わせるから!」

「タノシカッタナー」

「もう!」

どこまでも不真面目な態度を取る彼のお腹を軽く殴ったけど、力を入れてたみたいで硬かった。高笑いする彼の頬を抓ってから腕を引っ張って、今日ショッピングモールの目的地へと向かう。この街にもあと2年ぐらいしたら大型ショッピングモールができるらしいんだけど、今はない。だから電車で移動して他の街に行かないといけない。だから集合場所は駅前の広場だったし、すぐに切符を買うこともできた。

「そろそろ腕放してくれね? 彼女でもない奴に腕つかまれてるの嫌なんだけど」

「あ……ごめん! ……萩近くんって彼女いるの?」

「は？　なんだ急に」

「だって今、彼女じゃない人に腕を掴まれたくないって」

「牛込に教える必要があるのか？」

「そうだけど……そういうのって気になるじゃん？」

「こういう奴が野次馬って呼ばれるんだろうな」

「うっ」

　　どうやら萩近く人は野次馬のことが嫌いみたいで、今までで一番嫌そうな顔をしてた。野次馬が嫌いっていうのもわかるんだけどね。関係ないのにいろいろと揶揄してくるから。その人達と一緒にされたくないけど、彼からしたら私も一緒にいたいだね。でも、女の子って恋話好きなんだもん。

「ま、彼女なんぞできたことないけどな」

「え、ないの？」

「なんだその意外そうな反応は」

「だって彼女いそうな感じだったもん。いろいろと教えてくれるし」

「どんなだよ……。ともかく彼女はできたことないし、作ろうと思ったこともない。こ

れで満足か?」

「……なんか微妙」

「野次馬め」

電車に乗り込んでドアの近くに立つ。二駅隣だから座る必要もないんだよね。それに外眺めるの好きだし。彼は壁にもたれかかりながら外を見て、私達の間には話さなかった。なんか気まずいかもって思った時だった。電車が大きくカーブして、態勢が崩れちゃった。バランスが崩れて転げそうになったんだけど、萩近くが私を支えてくれた。

「大丈夫か?」

「う、うん。ありが……どう?」

「どうした? 何か無くしたか?」

「ち、ちかい……」

「なんて? ……本当に大丈夫か?」

「ふあい」

駆けそうになつた私を支えてくれているということは、当然彼との距離が近くなるわけで、すぐ目の前に彼の顔があつた。

こんな至近距離になるのは、あの時以来で、つまりあの時のことがすぐに脳裏をよぎつた。思い出してしまつて、一気に恥ずかしくなつた。頭がボーツとするぐらい熱を帯びてしまつて、彼にまともに返事できているのかも分からない。

気づいた時には目的の駅に着いていて、急いで彼の手を引いて電車を降りた。改札口を通るまで彼の手を握つているという意識もなく、また顔が熱くなつちやつた。別に恋してるわけじゃない。それは明確に分かつてる。あの時のを思い出しちやつたからこゝうなつてただけ。

(あーもう!こんな忘れなきや!)

「すぐそのショツピングモールだからね! 早く行くよ!」

「そんな急ぐ必要があるか!」

「いいから行くの!」

熱くなつた顔を冷ますために駆け足気味で移動したのも仕方ないよね。

## 6話

朝からいろんなリアクションを取っては騒いでる牛込に手を引つ張られること3分。牛込の言っていたショッピングモールに着いた。ショッピングモールとかデパートはたいてい10時から開店するが、ここは9時から開いているらしい。

「で？　いつまで手繋ぐ気だよ」

「あ……ご、ごめん！」

「……どこ行くんだ？」

「えっとね、洋服屋さんに行こうかなって。ちよつと早いけど夏服も売ってるはずだし」

「夏服なあ。……女子ってすぐ服買うよな」

「菘近くんは買わないの？」

「着れるやつを着回す」

「え!？」

なんでそんな驚かれないといけないんだよ。服なんて着れるやつ着てたらいいじゃないか。どこに問題があると言うんだ。どうせ着なくなったやつとかあるだろ。2着あつたらいいんだよ2着。

「……君の分も買うよ」

「え、牛込の金でか？」

「なんで!？」

「貧乏人舐めんなよテメエ！ こちとら生活切り詰めてんだよ！」

「……ごめん」

「……つたく」

申し訳なさそうに目を伏せる牛込を置いて服屋に入る。少し足取りが重くなった牛込が後ろからついてくるが、俺としては先に行つてほしい。

なぜならここは女物の服しか置いてないからだ。まず場違いでしかない場所なのに、率先して入つていつてるようで嫌気が差す。男物の服が置いてあるなら関係ないのだがな。見ていたとしても買う余裕もないから、どのみち行つても仕方ないのだが。

「……………どういふのを買うか決めてんのか？」

「……………え？」

「え、じゃねえよ。買いに来たんだろ？ ある程度決めてるもんじゃないのか？」

「あ、うん……。でもいろいろ見たいから時間かかるよ？」

「丸一日潰されることが確定してんだ。どこでどれだけ時間かかろうと気にしねえよ」

「棘のある発言だね」

「隠す気はないからな」

とは言ってもずっと不貞腐れても仕方がない。時間を長く感じるだけだし、その方がダルい。そんなわけで、女物しかないが軽く見てみることにした。さすがに牛込から離れて見てたら不審だから、同じ場所において違う服を見るって形になる。

「あ、これ可愛い」

「そういうのが好きなのか？」

「うん。こういうのも好き」

「……………ちなみにこっちは？」

「え……？ それも可愛い！ 好き！」



「……何でもいいんじゃないか」

「それは違うからね！　好みはあるの！　可愛いと思うけど好みじゃない、みたいなのもあるんだよ？」

「わけわからねえ」

「どういう感覚してたらそんなことになるんだよ。可愛いけど可愛くない、みたいな発言だぞ。……女子は日頃から哲学でもしてるつての。哲学好きの女子なんて全然見たことないが。あ、存在自体が哲学なのか。」

「今変なこと考えなかった？」

「考えてないぞ。お前のスリーサイズなら今測ってたが」

「え!？」

「嘘だけだな。引つかかりやがって」

「くく！　もう！　からかわないでよ！」

「だってスリーサイズなら前把握したし」

「もう引つかからないよ？　それも嘘でしょ」

「牛込がそう思いたいならそれでいいんじゃないか？」

「…………え、うそ…………え？　ほんとに？」

相変わらず反応が面白いな。純粹なくせにノリがいいから、からかい甲斐がある。まあスリーサイズなんぞ知らんけどな。……おい距離を取るな。

「冗談だから。そんなん見ただけで分かるわけないだろ？」

「…………じゃあ今証明してみて」

「は？」

「今上から順番に言ってみて。それで外れてたら嘘つて信じられるから」

「…………なるほど。じゃあ上から——。な？　外れてるだろ？」

「…………」

「…………まさか」

「外れてるよ」

「外れてんのかよ！　ややこしい反応すんな！」

「あはは！　仕返しだよくだ」

くそ、一気に疲れた。精神的に疲れたぞ。俺にそんな不名誉な特技があつたとは

……つてなるとこだった。

俺に仕返しをできたことがよっぽど嬉しかったのか、牛込は上機嫌で服選びに戻った。手にとつてはみては元に戻し、候補になった服は手に持ったままだった。3着ほど候補に絞ったところでこちらに視線を向けてきた。この状況で言われることは分かるが、断固として断る。ファッションなんぞ分らないからな。

「この中だったら「店員に聞け」……早くない？」

「俺に聞いてどうする。今の俺の服装を見る。ファッションなんて皆無だろ」

「……そうだけど、男の子の意見だつて聞きたいし」

「なんだ気になる男でもできたのか？」

「んー、ある意味気になる子かな」

「それなら尚更俺と関わるのはやめた方がいいぞ。お前が頑張つてアプローチかけても、『あの男誰？』つてなるから」

「……そうだね」

こいつなんで軽く拗ねるんだよ。わりと真当なアドバイスしたじゃねえか。昼ドラでよく女の人が『あの女誰なのよ！』みたいなことするじゃん。

それを男がしないなんてなんで言い切れるんだよ。このご時世じゃ草食系男子って呼ばれる奴らが多いんだぞ。『僕だけを見てればいいんだよ』みたいな男が湧いてるんだからな。

正直そんな男や女とは絡みたくないけどな。そういうことになるってことは、自分が相手に魅力がないって思われてるってことだろ。拘束しようとするなよな。自分を磨け。これは誰にも負けないって胸張って言えることを一つでも身につける。

ちなみに俺は“自分を誇る”ことなら誰にも負けない自身がある。自分を好きにならない奴がどうやったたら人生を楽しめるってんだ。生きていく以上“自分”とはずつと付き合っていくんだ。受け入れるしかないだろ。今は受け入れられなくても、折り合いはつけられるようにしろ。それすら嫌なら死ぬ。

「とにかく、私は萩近くんを選んでほしいの」

「奇抜なファッションだねって友達に言われても知らねえぞ? ……あ、友達いないのか」

「いるからね!! 萩近くんと一緒にしないで!」

「さらつと酷いこと言うよな。合ってるけど」

「え……いないの? 前にあったチャライ人は?」

「……ばし……じゃなかった。舎弟」

「今パシリって言おうとしてなかった？」

「気のせいだ。それと友達なんぞいらん。俺の人生にプラスになる奴ならともかくとして、足引つ張る奴なんかいても邪魔なだけだからな」

「ほんつと捻くれてるよね」

何を今さら言っているんだこいつは。既に分かりきつてることじゃないか。自覚もしているが、改める気もない。自分の邪魔をする奴と一緒にいる意味がどこにある。極端な例え話だと、受験勉強しているところに「遊びに行こうぜ」って言ってくる、そういう奴はいらないだろうってことだ。他にはタバコ勧めてくる奴とかな。

「私は友達って、良いことも悪いことも受け入れあえる人のことだと思うよ。お互いに直し合って高め合えるような」

「……友達、ね。それなら今のお前にそんな相手がいるのか？」

「そうなれそうな人ならいるよ。七菜がそうだと思う」

「七？ 数字が友達なのか？ 案外寂しいやつなんだな」

「違うよ！ 七菜！ ほら、前私と一緒に君のバイト先に行った子」

「……ああ、あのクソ真面目そうな子か」

「クソは余計だよ」

いやな、だってあの子はどう考えても超堅物だろ。教師陣が優等生の鏡とか言いそう  
な子だよな。俺とは絶対に相容れない存在だわ。完全に正反対の性格してるしな。

「ほら、話を逸らそうとしないで服選びしてよ」

「チツ、覚えてたか」

「手に持つてるからね」

「男なら誰でもいいんだろ？　ならそのへんの男捕まえて意見聞いたらいいんじゃない  
か？　俺よか断然良いコメントしてくれるぞ」

「知らない人には頼みたくないかな。それに、そういう事するのは良くないんでしょ？  
知らない人を警戒しろって言ったの萩近くんだよ？」

「……はああー……、わかったよ。期待なんてするなよ？」

「ため息長すぎ。うん、どう見えるかを言ってくれたらそれでいいから」

実際に着てもらった方がまだマシなコメントできるかもしれない。そんなわけで牛

込には試着してもらうことにした。試着室に入った牛込が「覗かないでね」って言うから、「それはフリか？」って聞いたら怒られた。タイプじゃない女の着替えを覗くわけないのだが、ああやって言われたらやってやるしかない。

というわけにもいかなかった。後ろの方で店員がこつちをガン見してるし、片手にはスマホが握られているからだ。これで中を覗いたら即通報される。イタズラ心を抑えるしかないな。

「ど、どうかな?」

なんかイタズラできないものかと考えていると、牛込が着替え終わったようだ。別に下着やら裸やらを見せるわけでもないくせに、何を気恥ずかしそうにしているのやら。さっきまで着ていたタイプとは打って変わって、今牛込が着ているのはワンピースタイプの服だった。夏用だからか、爽やかな水色を選んだんだろうな。

「いいんじゃない?」

「むう、テキトウだね」

「だから期待すんなって言っただろ」

「もうちよつとマシなこと言ってくれと思うた」

「……夏を意識してるからその色にしたんだよな？ その目的は果たせてるし、どこことなく落ち着いた印象を与えてるし、牛込に似合ってるとは思う。だが、どこか少し違う気もする。何がかは分からないけどな。……これでいいか？」

「……」

「なんだよ」

「ちやんとと言えるなら最初からそうしてよ！」

「俺の好みを言うだけになりそうだからやりたくねえんだよ。牛込も俺みたい人間を対象とした服を着たいわけじゃないだろ？」

「……そうだけど」

少し違う、というのも似合っていないってわけじゃない。正確には何か足りないんだ。そのへんはアクセサリー類で解消しそうだが、それこそ牛込が俺の着せ替え人形と化すからやらない。牛込は元々の素材がいいんだからたいいの物を着こなせる気がするんだよな。……だからこそ悩んでるのかもしれないが、贅沢な悩みだ。

「とりあえず他のも着てみるよ」



「うん。そうする」

残りの2着も試着させ、それぞれ雑にコメントもしといた。雑すぎて文句を言われたが、雑にするか俺の好みに沿って細かく言うかしかできないから仕方がない。それに、何が嬉しくて好きでもない女のために真面目に評価しないといけないんだ。

「結局どれにするんだ？」

「うーん、2個目のがいいかなって思ったんだけど、萩近くんはあんまい反応じゃなかったし、……どれもだけど」

「そりやあまあ相手が牛込だからな」

「どういうこと!？」

「そのまんまの意味だ。一応言つといてやるが、2個目のが1番合ってたぞ」

「ほんと!？」

「俺にはそう見えた」

「じゃあこれにするね！　ありがとう♪」

嬉しそうに分かりやすくはしゃいで服をレジへと持っていった。さり気なく他

の2着を俺に押し付けているあたり、ガメつい面もあるようだ。男が持っていても気持ち悪いだけだから、すぐに元の場所に服を戻して店の外に出る。牛込が買ったのは青系統の服で、少し首元の緩い服だった。鎖骨がはつきり見えてたしな。その服が入った袋を持ち、笑顔で出てきた牛込に次の予定を聞くことにした。

「別の服屋さんだよ♪」

「……は？」

「まだ1着しか買っていないもん」

「……まじか」

女の買い物は長い。

その理由が少しわかった瞬間だった。

## 7 話

約3時間に渡るシヨツピングに付き合わされ、俺は精神的に疲れた。楽しい時間ならあつという間に終わる。それは誰しもが分かっていることだろう。そしてその逆も然り。楽しい時間はない時間は本来の何倍も長く感じる。俺とつて今回のこれは後者だ。と言つてもそこまで極端というわけではない。服の組み合わせによる印象の違いについて考えることは楽しめた。

(でもそれだけなんだよな。俺には縁のない話だから考えても虚しいだけだし、飽き性だからすぐに暇になるわけだし)

飽きてからはただただしんどかった。全く進まないように感じる時間を過ごし、尽く俺に意見を聞いてくる牛込の相手をした。最終的に牛込は3時間程で6着買っていた。そんなに余裕がない俺からしたら何とも贅沢な話だ。

「お昼にしょっか」

こちらの疲労を知ってか知らずか、牛込は覗いてくるように顔を傾けてそう言ってきた。これも無意識にやっているんだろうな。牛込に気がある男だったらイチコロだろう。そういうことも教えながら足を運び、やって来たのはイタリアンの店。なぜここなのかは、牛込の気分なんだそうだ。

「どれにしょっかな〜」

「一番安いやつ」

「じゃあ萩近くんはデザートだね」

「言うようになったな。味はバニラで」

「え、いやいや！ ちゃんどご飯食べてよ！」

「一番安いやつって言ったろ？ それに牛込もデザートにしろって」

「しろとまでは言っていないよ!? 冗談で言ったわけだし……」

またからかつてるだろって疑いの目を向けていた牛込だが、俺が聞く耳もたないって態度を取ると本気だと受け取ったようであわてふためき始めた。メニュー表を何度も

捲り、何やら頭を悩ませている。やはり女子は分からん。

「……何してんだ」

「……これなら君も食べられるんじゃない？」

「は？」

牛込は俺がメニューを見やすいようにメニュー表の向きを変え、あるメニューを見せてきた。もしやと思ったが、どうやら本当に俺が食べるものを考えていたらしい。ネタの提供が上手い女子だ。

「俺は本気でアイスだけを食べるなんて考えてないぞ」

「……え？」

「俺をからかおうなんて100年早いぞ」

「くっつ！ ばか！」

「うるせえな。……ま、これにするよ」

「へっ？」

「牛込が選んでくれたしな」

「なっ……いっ！　ズルいよ」

急に視線を合わせなくなったが、こいつまだ自分のを選んでないだろ。視線そらしてないで決めてくれよ。……あれか、決めてもらったから俺が決めてやればいいのか。そう判断してメニュー表を見ていたら、復活した牛込に没収された。俺が変なもの頼もうとでも思っているのか。だとしたら失礼な奴だな。それと結局自分で決めるんだな。

~~~~~

萩近くさんのお昼ご飯を食べ終わって、お店も混んでるからすぐに出ることにした。食べ終わった時に「ジツとしてろ」って言われて、何だろうって大人しくしてたらナフキンを片手に口の周りを拭かれた。

高校生になって、しかも異性の人にそんなことされるなんて思ってたなくて、すつごく恥ずかしかった。口角を上げていたから、からかうって目的もあったんだらうね。

「次どこ行くか決めてるのか？」

「えつと……少しお店見て回ったら楽器屋さんに行こうかなって思ってるよ」

「楽器屋？」

「うん。私音楽好きだから」

「……………そうか」

何やら不思議な間があつたんだけど、萩近く人は音楽好きじゃないのかな。チラツと顔を見てみたらそれなら楽器屋さんは今日じゃない方がいいかな。そう思つて代案を言おうと思つたんだけど、それより先に彼が口を開いた。

「楽器屋に行く以外の予定が無いなら本屋に寄つていいか？」

「うん、いいよ。どういの買いに行くの？」

「いや買わない」

「え」

「パラ読みするだけだ。そこまで時間を取るわけでもないし、悪いが付き合つてくれ」「私も付き合つてもらつてるわけだし、それぐらい全然いいよ」

エスカレーターで下の階に降りて本屋さんに行く。彼がどういふのに興味があるのか気になつて後ろを付いていくと、参考書にザツと目を通し始めた。捻くれてるけど勤

勉強な人みたいだね。一通り5科目に目を通したらいろんな資格のコーナーに移動して。どの資格がどう使えるかを見ては難しい顔をした。

「資格取るの？」

「就職で使えるやつならな。就職したあとでも活用できるのがベストだが……」

「それは就職先次第だよね」

「そうだな」

完全に手探りってわけでもないみたい。どういう方面に就職するかは考えてるみたいで、目を通すどころか手に取らなかつた分野もあったしね。彼の目的は本当にすぐに終わったみたいで、もう本屋を出るみたい。

「もういいの？」

「ああ。ひとまず仮定はしたが、そっち方面のバイトしてから決める。俺には無作為に時間を潰す余裕もないからな」

「……ごめんね。大事な1日だったんだよね」

「……いいさ。予定を組み直せばどうとでもできる。やりたいこともやらないといけな

いこともやる。それだけだ」

「それいいね。私気に入っちゃった」

「使いたきゃ使え」

「やった！」

（俺はもうそう言つてられないからな）

彼の信条……なのかな。とりあえずその言葉は私にもスツと入つてきて、すつごい同意できた。どこか冷めたような態度ばかり取る人だけど、根底には熱い気持ちがあるのかな。ただ捻かれてるだけじゃない気がしてきて、そしたら不思議な人って印象も出てきた。そんな彼の目がある雑誌をずっと見てた。女性向けの雑誌で、可愛いかったり大人っぽかったりするアクセサリー類が紹介されてるやつだった。

「気になるの？」

「……少し、な」

「へー意外。興味無さそうな感じなのに」

「興味があるわけじゃない。ただ贈り物としては悪くないかと思っただけだ」

「贈り物？ 萩近くんが女の子に？」

「まあな。これを男に送るわけないだろ」

「……女の子に」

「1ヶ月先がそいつの誕生日なんだよ。1ヶ月なんてあつという間だし、慣れないジャンルだから早めに行動しとこうかと思つてな」

「へ、へー？ ……うん。いいと思うよ……」

萩近くが知らない子に贈り物をする。別に私がどうこうする話じゃない。全然人と関わろうとしないのに女の子目線の意見も知つてたりする人だもの。きつとその人に教えられてるんだらうね。それなら萩近くがお礼として誕生日プレゼントを買つたっておかしくない。

その人のことは性格ぐらいいしか教えてくれなかつたけど、明るくて元気な子だということとは分かつた。……これ教えてくれたつて言つていいのかな。そんなツツコミもしたかつたけど、話す気がないみたいだし仕方ないよね。

二人で雑誌を見てはどういうのが良いか話した。彼の中でどういふのにするか決まつたところで今度こそ本屋さんを出た。

電車に乗つて街に戻つて、私が行こうと決めていた楽器屋さんに行くことにした。向かつている時に彼が”音楽”に微妙な反応を示したことを思い出して、そのことを聞いて

てみた。でも予想通り教えてくれなかった。私の中にあるこのひっかかりは、当分取れそうにないね。

「いらつしやいませ。ややつ！ お二人さんデートですかな？」

「その人形もぐぞ」

「それだけは勘弁を！」

「過剰になりすぎでしょ……」

「牛込となんてごめんだからな」

「むっ！ 私だつて萩近くんが彼氏なんてごめんだから！」

「お二人とも仲いいね」

「人形もぐぞ／もぐよ」

「ええ!？」

失礼なことを言ってくる店員さんだったけど、冷静になつてみれば同い年くらいの人だった。ここでバイトでもしてるのかな。なんか仲良くなれそうな感じがするけど、今はそれが目的じゃないから後回しだね。

私が店の奥に歩いていくと萩近くんも付いてきてくれた。……単純にあの人と絡み

たかないのかもしれないけど。私にここに来たのはちゃんと目的があつてのことだけ
ど、萩近くんはそうじゃない。それに彼はあまり音楽と関わりたくないみたいだしね。

「……ギターか？」

「うん。ベースなら持つてるんだけど、ギターもやりたくて」

「へー」

「聞いたわりに反応薄いんだね」

「牛込が何やろうと俺には関係ないからな。それより買えるだけの金あるのか？」

「あるよ。ベースを妹に譲るって言ったらお父さんがお金出してくれた」

「……………愛されてるな」

彼のその返しに私は何も言えなくなった。言葉を聞いただけなら何か言えたと思う。
でも、彼の表情を見たら言葉を失っちゃった。

彼の表情はとても怖かったから。今まで見たことなくて、まるで何かに取り憑かれた
んじゃないかって、そう疑いたくなるぐらい恐怖を覚える表情だった。彼は家族と上手
くいつてない……どころじゃないみたい。そこは流石に踏み込めないや。

雰囲気を変えるためにもギターへと目を向け、どれか自分に合うものがないか探す。

焦り気味に目を動かしていたけど、なんとか気になるギターを見つけたことができた。それを取ろうと思ったんだけど、ちよつと手が届かなかった。なにか台が無いかと辺りを見回していると、横にいた彼が私が取ろうとしたギターを取ってくれた。白色のギターを。

「これでいいんだろ？」

「そう。ありがとう」

「ちよこつと弾いてみるー？」

「うわっ!? びっくりした〜」

「カウンター離れていいのかわ？」

「社員さんが今カウンターにいるからね〜」

カウンターを覗いてみるとこの子の代わりに男の人がたつてた。あの人が社員さんなんだね。視線を戻すと目の前にさっきの女の子が立っててまたびっくりさせられた。

「私は鶴沢リイ。花咲川の1年生だよ。よろしく!」

「あ……私は牛込ゆり。私も花咲川の1年生なんだ。よろしくね!」

「うん！ それでそっちの君は？」

「……萩近玲音だ。同じ1年だな。よろしくはしたくない」

「もう！ またそんなこと言って！」

「あはは！ 面白い人だね！」

鵜沢さんと少し話し込んだらすぐに打ち解けられて、お互いに名前呼びになった。彼はその間ずっと他の楽器を眺めてた。音楽に対して微妙な反応してたのに、興味はあるのかな。それもこれから分かるのかな。

試し弾きをさせてもらったたら余計に引き込まれちゃって、私はこの白いギターを買うことにした。ケースとピックも買ったけど、それ以外の機材は今日は買ってない。重たいものもあるし、お父さんとくる時に買うことにする。

その後もリイと話しこんじゃって、萩近くんは店員さんと話してた。さすがに申し訳なかったね。夕飯も萩近くんと食べることにして、日が暮れてからお店を出た。

「ごめんね。家の前まで送ってもらっちゃって」

「気にするな。俺も帰り道がこっちだからな」

「ありがとう。ところで……その、楽しんでくれた？」

「まあそれなりにな」

「よかつた」

リイと話してたときのことを思い出すと、今日を楽しんでくれなかつたんじゃないかつて思つちやつてた。でも、彼は楽しんでくれたみたいで、そのことにすごい安心しちゃった。

——だから

「そんなわけで牛込。俺の連絡先を消せ」

「……………え」

——彼に言われたことを理解できなかつた

8話

牛込と遊んでから3週間。あれ以降一度も会うことがなければ、連絡を取ることもない。やっと俺が求めていた元の生活に戻っていた。自分だけで完結する狭い世界。それが俺の世界で、これが俺が生きるべき世界だ。

馬鹿なクラスメイト達を眺めて過ごす学校生活で、空いている時間のほとんどをバイトに費やし、余った時間を学校の課題や資格の勉強に費やす。4月の入学早々にバイトを始めることができ、生活も安定するようになった。

牛込と遊ぶという思わぬ出費もあったが、そこまで影響は出ていない。5月も働き時であるゴールデンウィークをバイトで埋めた。下旬になった今も変わらない生活を送っている。あと1ヶ月もすればあいつの誕生日だから。バイトで貯めたお金をそこに使う。

今日も学校が終わってバイトをしているのだが、もうすぐ休憩に入る。いつも休憩ついでに飯を食べるのだが、今日はどうやらいつもとパターンが違うらしい。というのも

「萩近くん休憩行つていいよー」

「わかりました」

「それと萩近くんにお客さんが来てるから、会つてあげてね」

「はい？ ……ちなみにどんな人ですか？」

「黒髪で眼鏡かけた女の子だよ。制服はたぶん花咲川のかな」

「……それ休憩になります？」

「じゃあ今日は10分多めでいいよ。タイムカードはいつも通りにしといていいから。その代わりちゃんと話を聞いてあげてね。それが条件」

「はあー。わかりましたよ」

「……ごめんね。余計なお節介だろうけど、わざわざ来てくれたあの子も無下にできないから」

「気にしないでください。自分で蒔いた種ですから」

タイムカードを押して休憩に入り、上の服だけ着替えたら店内に出る。分かりやすいところで待っていたのは、予想通り牛込の友人だった。名前は知らないが。

「呼び出してごめんなさい。それと自己紹介はしてなかったわよね。鰐部七菜よ」

「……そういやそんな名前だったな。牛込が言つてた気がする。萩近玲音だ。立ち話してたら休憩にならないし、適当に席につくか」

「ええ。そうしましょうか」

席を取つて荷物を置いたが、鰐部もここで夕食を済ませるらしく、今から注文するようだ。俺は既に用意してあるから、荷物番を兼ねて席で待つこととなった。ある程度話の展開を予想できるが、はつきり言つて面倒だ。そもそもあの利口そうな鰐部がこうやつて来たことに驚いている。

「お待たせ」

「そんな待つてないぞ。……先に食べるか」

「そうね。冷めてしまわないうちにいただこうかしら」

第一印象は「利口な女子」あるいは「真面目」と言つたところだが、少し話してみたらそこに「上品」という言葉が追加された。正直言つて、こういう場所に来るのが意外だ。……いや、もしかしたら普段来ていなくて、前回は牛込と一緒にだったから、今回は

俺に用があるから来ているだけなのかもしれない。

そんなどうでもいいことを考えながら食事を済ませ、鰐部が食べ終わるのを待つ。俺は食べるペースが早い方らしく、牛込と遊んだ時も先に食べ終わった。鰐部も食べ終わりに、口周りを拭いて一息ついてから今日の本題に入った。ちなみに、食べてる間は一切会話はなかった。

「分かってると思うけど、今日はゆりのことでここに来たわ」

「それは予想通りだが、尚更分からないな。来る必要がどこにある？ 利口な鰐部なら分かっているだろう。俺と牛込は決定的に違う。相容れない存在で関わるべきじゃないってことが」

「……それは私もそう思っているわ。あなたがゆりと関わろうとしていないし、ゆりもお礼兼お詫びが終わった。もう関わる必要が無いもの」

「ならなんでだよ」

「ゆりが泣いたのよ」

「……………はっ？」

「だからゆりが泣いたの。本人が気落ちしていたことは、3週間前から分かってた。本人が気丈に振る舞うし、話してくれるのを待っていたのだけど、抱え込むだけ抱えて、話

してくれないから強引に聞き出したわ。それでやっと分かったけど、その時に泣いたの」

ますます意味がわからない。俺たちの関係なんて薄っぺらいもののはずだ。俺は迷子になっていた牛込に道案内した。そのお礼とその後のことのお詫びを兼ねて1日遊んだ。それで完結のはずだ。お互い別に好きになってるわけじゃない。歩み寄りたいたいと思っっているわけじゃない。そうだというのになぜ牛込が泣く。

「分からないの?」

「わかっただけならまず牛込が泣くってことにはなっていない」

「……それもそうね。話を聞いただけだし、当事者じゃないけれど、それでもあなたがやったことは褒められたことじゃないって言えるわ」

「自覚してる。関わりたくない人間と繋がりを絶つためなら、あれぐらいのことはやって当然だろう。それに、結局牛込は俺の連絡先を消してないしな」

☆☆☆

「俺の連絡先を消せ」

「…………え」

彼が言っていることが分からなかった。だって楽しんでくれたら彼は連絡先を残してくれるって約束だったから。そして彼はさっき楽しめたって言うてくれたから。

私が固まっているからかな、萩近くんが自分で連絡先を消すために私に近づいてきた。私は全然理解が追いついていないけど、でも連絡先を消したくなくて後退した。彼のペースと同じように下がっているから追いつかれない。

——そう思ってた

でも、実際には下がる限界があつて、マンションの壁に後ろ向きで当たってしまった。つまり、もうこれ以上彼から逃げる事ができない。横に逃げようとしたけど、それより先に彼の手が伸びてきて私の逃亡が事前に阻止された。所謂壁ドンって構図になっている。この状況じゃなかったら、萩近くんが相手でもドキッとしたかもしれない。でも、今の私にはそんな余裕がなくて、ただ怖かった。

「約束を破るなよ」

「約束って……………だって楽しんでくれたら連絡先は消さないって……………」

「満足したら、だろ？ 牛込が俺を満足させるって言ったんだ。もしそうできたら連絡先は残す。それが決めてたことだろ？」

「そんなの……」

「自分の失言でこうなったんだよ。お前が下手に『満足させる』なんて言ったからだ。俺の主観だけで決められることだぞ？ 初めからこうするに決まってるだろ」

「……いや……そんなのやだよ」

「約束は約束だ。消せ」

たしかに私はそう言った。そのことは覚えてる。覚えてしまっているから、彼が言っていることがおかしくないって分かる。身勝手な人だし、関わりとうとしないってことは前からそうだった。強引に連絡先を交換して今日にこぎ着けたんだ。彼からしたらもう今日で終わらせたいんだろうね。

私はポケットを抑えて、携帯電話が取られないように抵抗した。彼はなんだかんだで優しいところがあって、力技には出てこない。こうやって抵抗していると、彼も携帯電話を奪うことは諦めたみたい。目を伏せて深いため息をついてた。

「こういうのは死ぬほど嫌いだ……」

「え……う？」

彼との距離がさらに縮まって、彼の頭が私の横に置かれた。クラスメイトの会話を聞いて、人間には力が抜けちゃう弱点があるって知った。その話がだんだんエツチな方に言ったから必死に聞かないようにしてたんだけど、その話から考えてみるに、どうやら私は耳が弱点らしい。そしてそれに思い当たる節があった。彼に公園のベンチで押し倒された時、私は耳を攻められて力が抜けていったから。

それを彼も分かっているんだろうね。私の耳元でくすぐったい声で囁き始めるんだもん。

「なあゆり」

「——っ！」

「まさか約束、破らないよな？」

「やめ……」

「答えてくれよ」

「やあ……んっ……んんっ」

萩坂くんのその口調も、どうやら私にとって効果的みたい。思考が弱まっちゃって、彼の問いかけに答えられなくなっちゃった。そしたら彼に耳を舐められて、変な声が出ちやいそうになるのを必死に堪えた。それでもポケットを抑えてる手だけは出せる力を出して守った。きつと萩坂くんなら手をどかせられたと思う。だけど彼はそんなことしなくて、膝から崩れそうになった私を支えてくれた。

「はあはあ……あ……」

「……やり過ぎたか。まあいいや。とりあえず牛込」

「……ん……な、に……？」

「自覚できてるんだらうけど、弱点はしつかり守れ。やるのが目的の男はよく耳元で囁くから、簡単に連れてかれるぞ」

「……う、ん……」

「それと連絡先も消さなくていい」

「……え？」

「俺の方でブロックするから」

「っ!!」

足に力が入るようになるまで支えてくれたけど、彼からの宣告はとても辛いことだった。去っていく彼を追いかけることもできず、その場に立っていることしかできなかった自分を情けなく思った。止めたいのに止められず、声をかけることすらできない。

もしかしたらメッセージを送ったら反応してくれるかも、なんて甘い希望を抱いたけど、結局萩近くんが電話に出ることもなく、メッセージアプリで既読がつくこともなかった。

「なんで……なんでえ……」

その日枕を濡らしたのも仕方ないことだと思う。

☆☆☆

『ゆりともう一度だけ向き合ってほしい。私たちはバンドを組むことにしたから、ライブをする時に見に来て』

「ライブ、ね。ガールズバンドでやれるところなんてあそこしかないが、まずあそこでライブできるかだよな。……いや、見に行く必要もないか」

あのライブハウスのオーナーとは顔見知りではあるが、顔を合わせるのも憚られる。あの頃のようにはいかないんだよ。俺が音楽に関わる場所に行くなんて、虫のいい話だからな。

バイト終わりの帰り道に内心で自分に悪態をつきまくった。ろくに真っ直ぐに生きられない自分に。

9 話

彼と連絡を取れないようになって3週間。私はそのショックを今も少し引きずっている。けど、元々彼は私と関わりううなんて思ってたから、これが望んだ状態なんだ。私も彼を好きになったわけじゃなくて、ただ友達になりたかっただけ。

意地悪で捻くれてて、たまに見せる優しさが不器用で、

——それでも萩近くと過ごす時間は楽しかった

男の子の友達なんて小学校の時しかいなかった。中学校の時からは、クラスで話すことがあつても放課後に一緒にいることなんてなかった。部活に行つて、それが終わつたら帰るだけ。友達と言える子はみんな女の子だけ。

だから新鮮だった。高校生ともなれば、男の子も女の子も体格的にも大人になる。彼は精神的にも大人びてるところがあつて、私ができていないことを言ってくれて、いろんなことを教えてくれた。他の子と変わらないって思ってたけど、私は結構な箱入り娘だったみたい。関わりをなくしたいって言いながら、私の無知などを気にかけてくれ

る。それで、男の子の友達ができるって思った。

(でも君からしたら迷惑なんだよね……)

「ゆり、ちよつといい?」

「七菜?……うん、いいよ」

席に座って教室の外をボーッと眺めてたら七菜に話しかけられた。その雰囲気から楽しい話じゃないってことがわかった。ううん、きつと私がウジウジしてることを突っ込まれるんだよね。そしてそれはつまり、萩近くんと何があったかを話さないといけな
いってこと。

「話が話だし、屋上でいいかしら?」

「そうだね。その方がいいかも」

「それじゃあさっそく行こっか」

「うん」

私と七菜にしては珍しく移動してる時に会話が無かった。七菜の心境は分からない

けど、私は複雑だった。誰かに打ち明けて楽になりたいって気持ちと、話したくないって気持ちがあつて……、なによりも私が重く受け止めてる分口を開きにくい。

それでも、もう話さないといけないんだよね。七菜はずっと待つてくれた。だけど私が自分から話せないから、こうやつて聞き出すことにしたんだろうね。嫌な役回りをさせちやつてるよね。そう思つてたけど、屋上について私の目を真つ直ぐ見てくる七菜は、そんなことを露ほども思つてないみたいだった。

「私が何を聞きたいのかはゆりもわかつてるわよね？」

「……うん。萩近くんとのことだよね」

「そうよ。どう転ぶかは正直分かりかねてただけど、週明けに会つた時に分かつたわ。最悪と言えることがあつたんだって」

「彼に襲われたとかじゃないよ？」

「それは分かかつてるわよ。彼はそういうのするタイプじゃないもの」

彼に耳を攻められて、実は変な気持ちになつちやつてたことは話さないほうがいいよね。とうか話したくない。あれはすごい恥ずかしいから。

普段は見守つてくれる七菜が、わざわざこうやつて聞き出しに来たんだ。私も話さな

いといけない。逃げるのはやめよう。友達に失礼だもの。そう決意しても、なかなか言葉を出せなくて、結局七菜の方から聞き出してくれるって形になっちゃった。

「まず、遊びには行けたのよね？」

「うん。集合時間に合わせて来てくれたよ。それで隣のショッピングモールまで出かけたんだ」

「チヨイスがデートみたいなのだけど」

「え……いや、だって男の子と遊ぶのってどうしたらいいか分からないし……」

「まあそこは過ぎたことだからいいわ。私も分からないし」

七菜も分からないんだ……。あ、でもこの中等部も女子校だからそうなるのも仕方ないか。むしろ中学校が共学だったのに分からない私って……。そこはひとまず置いとくことにしよう。七菜が言ったとおり過ぎたことだもんね。

「事細かに聞けばいいってわけじゃないだろうから、最後に何があったかを教えてくれる？」

「——っ！……それは……」

「ゆりの気持ちに沈んでるのもそこに関係してるのよね？」

七菜から視線を下げて床を見つめる。話さないといけない。だってさつき話すつて自分で決めたのだから。七菜も私を助けてくれようとしてるんだから、その気持ちを無下にしていいはずがない。友達想いの人を、友達の私が拒んでいいはずがない。七菜は余計なお節介をしてるわけじゃない。触れないでいてくれることもある。ちゃんと弃えてる人なんだから。

「彼に……萩近くん……連絡先を消せ……」

「本当にそう言われたの？」

「うん。私が……ね。彼に『満足してもらおうから』って言っちゃって……そしたら、彼が『ならそうできなかつたら連絡先を消せ』って……それで」

「そうなった時点で彼はそうする気だったのね……。それで連絡先が無くなったからゆりはショックを受けたと」

「ううん」

私は首を横に振って七菜の推測を否定した。七菜はそれに驚いてたけど、誰しもが驚

くよね。だって、話の流れからして連絡先が消えたって思うのが当たり前なんだから。でも、私は彼の連絡先をまだ持つてる。これだけは守り抜いた……と言うよりも、彼が諦めてくれたって言った方が正しいかな。でも、萩近くんとは一切連絡を取れてない。電話は着信拒否されてるのか一回も出てくれないし、メッセージを送っても見てくれない。こつちも本人が言ったとおりブロックされてるんだらうね。

「はあ、生殺しね」

「そう……なるのかな」

「……ゆりはどうしたいの？」

「え……？」

「彼ともう会えなくていいの？ 連絡取れなくてもいいの？ 諦められる？ ゆりが最

初に言っていたお礼兼お詫びは、形はどうであれ終わったわけだけど」

「それは……」

どうしたいんだらう。萩近くんも連絡を取れなくなったショックで何も考えてなかったや。たしかに私が当初目的にしていたことはもう終わった。なら何を悩む必要があるのだらうか。……いや、答えなんてとつくに出てる。心の中で決まってることを

ちゃんと出してないだけなんだ。

「私は……萩近く人と友達になりたい。……こんなので……終わりたいよお」

勝手に涙が出てくる。まるで私の心からの願いが飛び出したことに反応するように。止めようと思っても止まってくれなくて、手で顔を覆っていると七菜にそつと包まれた。柔らかい手でそつと頭を撫でられて、そしたらさつきよりも涙が溢れてきちゃった。止めることを諦めてもう全部出しちゃおうって、そう思った瞬間自分を止められなくなった。七菜に抱きついてすつごい泣いた。こんなに泣いたのはいつぶりなんだろう。

「ごめんね七菜……もう大丈夫だから」

「いいのよ。ゆりの力になれたのならそれでいいもの」

「あはは、ありがとう」

「どういたしまして。それで、これからどうするの?」

「……萩近く人と友達になりたいけど、私からは何もできないし……」

「それなら良い手があるよ!」

「えっ……リイ!」

屋上のドアの方から突然大きな声が聞こえてきて、そこにはリイが立ってた。珍しく今日は人形を持ってないけど、たぶん鞆の中に入ってるね。鞆が不自然に膨らんでるし。

七菜はリイのことを知らないから、私が間に入って二人のことを紹介する。二人とも持ち前の人の良さがあって、すぐに仲良くなってくれた。挨拶が終わったから、私と七菜はリイが言う『良い手』が何なのか聞くことにした。

「バンドを組むんだよ」

「バンド?」

「それがどう関係あるのかしら」

「まず、ゆりちゃんからは萩近くんを誘えない。ならゆりちゃんと同じグループの人が誘えばいい」

「それでバンド……」

「そう! そこは単純にバンド組みたいからなんだけどね。でも、バンドを組めばライブするから見に来てって言えるでしょ? いい考えだと思うけど、どう?」

「私は賛成かな。せっかくギターも買ったんだし、バンドを組めるなら組みたいかな。」

七菜は？」

そう簡単にできるとは思わないけど、私だってバンドを組みたい。一石二鳥とまでは言わないけど、悪くない考えだと思う。できれば七菜ともバンドを組みたいけど、無理に誘うことはできない。そもそも七菜がバンドに興味があるのかも分からない。だけど、私の不安を吹き飛ばすように柔らかい笑顔を浮かべてた。

「私も協力するわ。キーボードならできると思うし」

「いいの？」

「もちろんですよ。ゆりたちとバンドを組むの楽しそうなもの」

「ありがとう！」

「よーし！ これで四人揃ったね！」

またリイが疑問を持たせるような発言をしたけど、屋上のドアが勢い良く開いて、リイが言う四人目の子が現れた。見た感じ大人しそうな子なのに、滲み出てるテンションの高さが既にその印象を壊してた。

「わたしは二十騎にじっきひなこ！ よろしくね〜！」

” ひなちゃんワールド” っていう独特な感性があるみたいで、いろんな子にあだ名をつけてみたい。この子はドラムができるらしくて、リイがベース。七がキーボードで、私がギター。

「……ところでボーカルは？」

「わたしはドラムしながらとかできないからパス」

「私もキーボードしながらなんてとてもできないわね」

「二人はそうだよね。リイは？」

「え？ ムリムリ。ゆりちゃんよろしく！」

「え……」

「おー！ ギターボーカルの誕生だね〜！」

「ゆり、頑張つてね」

「ええー！！」

バンド名は今度決めることになったけど、とりあえず私がギターボーカルすることに

なりました。

~~~~~

鰐部の話に付き合つて、ライブをする時が来たら見に来て欲しいという面倒なことを言われた。この辺でやるとなればあそこだけのはずだが、そのためにはオーナーを認めさせないといけない。果たして牛込たちに”それだけのモノ”があるかどうか、だな。行つてやる気にもならないがな。牛込たちのバンド活動の話を頭の片隅にすら残さないようにしようと思つていたが、どうやら世の中そう簡単にはいかないらしい。

「……なんのようだ。二十騎」

「あはは、いやーわたしもゆりちゃんやバンド組むんだよね。そしたら君の名前が出てきたし、これは会つて様子を見てないとなくつて」

「小学生の時しか絡みないし、しかもそこまで絡んでたわけでもないだろ」

「でもわりと萩ほんのこと気に入ってるんだよ?」

「知らん。それと変なあだ名で呼ぶなって言つてるだろ」

「なんて呼ぼうとわたしの勝手でしょー。君もそういう人間なんだし?」

あー面倒だ。牛込とか鰐部以上に面倒だ。なまじ小学生の時に絡みがある分やりにくいんだよな。あの頃はまだ捻くれてなかったから、今との違いがあつて余計に。

「ま、変わつてないようでも何よりだよ」

「はっ。」

「捻くれてるけど、根本は何も変わつてない。ゆりちゃんとのことは聞いたけど、本気になればゆりちゃんに恐怖を植え付けられてたはず。でも君はそうしなかった。それが証拠だよ」

「……本当にお前は嫌な奴だよ」

「ええー。ひなちゃんも嫌な子じゃないよ。用件をすぐに済ませるから堪忍してちょうだい」

「はあ。なるはやで」

用件は言つてしまえば鰐部と同じだった。『ライブを見に来い』それだけだった。こいつもこの辺のことは分かっているから、ライブする場所が“SPACE”になることも分かっている。だからこそ、『オーナーが認めたら見に来てね』なんて言つたんだろう

な。

—— 厳しい人だからこそ、認めたバンドは「それだけのモノ」があるって証になる  
見に行つて損することはないということだ。牛込周辺の人間で俺の素を一番正しく  
把握してるのは二十騎だろうな。だから、『君が来るのを楽しみにしてるね』なんて言つ  
て、返事を聞かずに走り去つたんだろう。

(ほんつつとに嫌な奴だよ。お前は)

## 10話

SPACEでライブできるようになったら、また声をかけに来るらしい。連絡先を覚えてないし、二十騎といえど俺の家を知っているわけではない。だからまたバイト先に来るのだろう。正直バイト先に来られたくはないが、連絡先を教える気にもなれないからそこは大目に見ることにした。鰐部来た時に俺が心底嫌そうにしたし、休憩から戻った時も機嫌が悪かったから幸いからかわれることもない。

SPACE……、俺が勝手に足を踏み入れていい場所ではないし、あいつから許可を取りたいところだが、生憎と連絡手段がない。牛込たちがライブを行い俺がそれに行くとなると……、仮に会えることがあればその時に謝罪するしかないか。

「萩近くん！ 大量弁当入るよ！」

「ダルいつすね。形が崩れても文句は受け付けませんよ」

「初めから諦めてなければ見逃すよ！」

「よしきた！」



一個目は真面目にやろう。スピード勝負みたいな仕事なんだから二個目からは形が崩れても仕方ない。ここに来る奴らは『早くて当り前』って考えが念頭にあるからな。ご期待に応えて早くやってやるから文句は言うなよってスタンスでいいんだよ。

ついでに俺は接客で他の人ほど笑顔を振りまくことはない。雇用契約書に『笑顔で接客』なんて書かれてなかったからな。つまり笑顔ですることは仕事の範疇ではない。

日本だから笑顔が当り前なんて言う奴もいるだろう。俺からすれば頭がおかしいと思えない。仕事内容に無い仕事をなぜしなければならないのか。極端に言うとしてるんだよ。必要以上の仕事なんて自分を苦しめるだけだ。社員に文句を言われようと契約書に書いてないと言うからな。てかこの前言ったし。

「先輩遅いつすよ！」

「なんで最近はそのままで形崩さずにそのペースで作れんだよ！」

「慣れですよ慣れ！ 形が崩れるなんて気にしないってスタンスでやればこうなりますって！」

「なんで後輩に教えられてんの俺!?!」

この先輩は俺が独り暮らししていることを知る数少ない人間だ。たまに先輩の家に呼ばれてご飯を貰うこともある。その時の彼女自慢がウザったいことを除けばいい人だ。憐れんでくれることもなければ同情もしない。何も言わずに気まぐれで遊びや食事に呼ばれるだけだ。遊びの時も絶対平日中だし、息抜き程度にゲーセンやカラオケに行されるだけ。こつちが本気で嫌になるようなことはせずに、程よい距離感で接してくれる。

(首を突っ込まないくせに『何かあったら相談に来いよ』なんて言ってくるからなあ。さすがイケメン。そりゃあ彼女でできるわ)

ファストフード店の特性上大量弁当なんて珍しいことじゃない。もちろんそんなの入っても嬉しいことでもないんだがな。しかし慣れとは恐ろしいもので、初めは脳がフリーズしていたのに、今ではメンバー同士でふざけながらこなせてしまう。そのふざけ方も酷いっただらありやしない。社員がいたら全員説教をくらうようなものだ。

流れ作業でバウンズに具材を乗せていって、包装したら持ち帰り用の袋に入れる。それがマニュアルだ。ふざける場合、ハンバーグの部分をつリスビーよろしく投げて、それをバウンズで挟んでキャッチ。野菜やケチャップなどを無視して順番を変えるのだ。

その後には無視したものを挟んで袋で包装。完成すれば砲丸投げの投げ方で次の奴に渡す。それをキャッチしてもらって持ち帰り用の袋に入れてもらう。たいていこのふざけ方になり、そしてほとんどの場合酷い崩れ方をしている。

マシンふざけ方の場合にはポテト食べながらとか、販売用のジュースを飲みながらとかだ。ストローを5本ぐらい繋げて遠距離で飲むこともある。中の様子を覗き込んでくるチビツ子には大好評だが、あの子達は真似出来ない。なぜならストローを一本しか渡さないからだ。他の国がどうかは知らないが、マレーシアなら客が好きなだけストローを取れるらしい。そして壁の絵では10本ほど繋げてるものが描かれているとか。

「つつかれた〜！ 萩近ラーメン食いに行こうぜ！」

「金をケチるから無理です」

「ちえー。じゃあうちに食いに来いよ。妹がまた呼んでくれて言うし、親父とお袋も歓迎してるしよ」

「それ妹さんがからかいただけでしょ。あの子絶妙に距離感を保つからやりにくいんですよね」

「ははは！ 誰に似たんだろうな〜！」

「距離感を掴む上手さはあなたにそっくりですよ」

その日は結局ご馳走になった。そしたら家の前まで車で送られることもセットになるのだが、そこは気にしてない。この家族はみんな必要以上に首を突っ込むことがないからだ。だからつついっつい気を許してしまう。

そうやってなんだかんだで周りに助けてもらいながら過ごすこと2週間。……あれ、10日だけ。まあ細かいことはいいか。6月にもなれば期末テストへと意識を向け始める時期だろう。勉強できない奴にとっては地獄だが、この学校はとにかく勉強というものを馬鹿にしてる。各教科対策プリントを配られて、それを丸暗記すれば100点取れるのだから。こんなものはテスト勉強とは言えない。

(それでも点を取るには最良であることに変わりないから活用するんだけどな)

「おっす萩近ー！ 今日も機嫌悪そうな顔してんな」

「くたばれ」

「会話って知ってるか？」

「今なんの時間か知ってるか？」

「数学の小テストだけど？ それがどうした？ それと全然わかんないから解答見させて」

「よくも堂々とできるもんだな。先生感心するわー」  
「正々堂々と！ をモットーにしてますからね！」

俺の前の席に座っているバカは、スポーツ推薦でこの学校に入ってきた奴だ。校長がテニス好きらしく、テニス部はスポーツ推薦枠を設けているらしい。教頭がバスケット好きだからバスケット部もスポーツ推薦があつて、校長の息子がサッカー好きだから来年からサッカー部もスポーツ推薦を始めるらしい。

とにかく、目の前のコイツは所謂テニスバカで、テニス以外のことはさっぱりだ。30点さえ超えれば追試を逃れられるのに、中間テストでは全教科の3分の1が追試となっていた。理由は対策プリントを無くしたからだそうだ。そして開き直ってテニスしてたらしい。救いようがないし、救う気にもならない。

「よく言った！ 放課後この小テストの追試だ！」  
「そんな馬鹿な！」

『馬鹿はお前だ』つておそらくクラス全員が思っただろうな。小テストの最中だから誰もツツコまなかったが。

放課後となり、掃除を終わらせてすぐに教室を出る。今日はバイトを入れてなくて、家でのんびりと過ごすと決めていた。たまには息抜きしないと体が持たないからな。コンビニでお菓子でも買って帰ろうかと思ったが、どうやら久しぶりに俺の予定は崩れるらしい。

「若！ やつと見つけれた！」

「誰が若だ。それと学校に来るなって言っただろ。用件があるなら移動しながらな」  
「す、すみません。でもあまり悠長にできない用件かと思ひまして」

堅物教師に見つかると面倒だから、足早に学校から離れながら話を聞く。なんか穏やかじゃないことを言ってる気がするが、足を止めることも速度を緩めることもせずに耳を傾ける。はっきり言って俺の人間関係はとてつもなく狭いものだ。意図的にそうしているのだが、こいつや先輩みたいに勝手に絡んでくる奴はどうしようもない。その場合はそれなりにつるむ気にはなる……こともある。

「前に若に絡んでた奴がいたじゃないですか」

「誰のことだよ」

「えつと……ウツスイー？」

「悪いが俺は外国人と絡んだことはないぞ」

「いえ日本人です。あの、髪が濃い青だか黒だか分かりにくい女子ですよ」

「あれはもう黒でいいだろ。それと誰のことかは分かったが、あいつがどうした」

「ガラの悪いチンピラ共に絡まれてまして」

やっぱそういう話になるのか。そしてそれが俺にどう関係してくるっていうんだ。俺が牛込のことを鬱陶しく思つて繋がりを切りたいがっていたことをこいつも知ってるはずだ。……いや、それならこの話を持ってきたつてことは、俺に関係する事態になつてゐることか。

「手短に全部話せ」

「黒髪美少女強制連行。聞こえてきた会話によると若を誘い出すための餌」

「チツ、面倒だな。そいつらの特徴は？ それでどこに行つたか割り出す」

牛込が勝手に一人で絡まれてるだけならどうでもよかつた。それならこいつもわざわざ学校にまで来て俺に話を持ってこなかつただろう。だが今起きてることはそれと

は違う。

そいつらの目的は俺で、そのために牛込が巻き込まれたってだけだ。こんなクソみたいな話はねえわ。最高に機嫌が悪くなりながら、鞆を預けて駆ける。頭の悪い奴らには痛い目に合ってもらわれないといけないからな。

残念な話だが、俺はチンピラだのヤンキーだのに目をつけられている。中学時代の話で、受験あたりからそれも無くなり始めてたんだが、ネチツコイ奴は諦めてなかったよ。うだ。俺だけを捕まえりゃいいものの、どうして人質なんてものを考えるのか。しかもチヨイスが酷いな。

——人質牛込なんてどうでもいいとして成立しないというのに

「この子の携帯で呼び出そうと思ってたのに、まさか着拒してるとはなく。おかげで作戦が序盤でパーになりかけたぜ？ 来てくれたおかげで助かったが」

「作戦なんてもんは最低でもセカンドプランは用意するもんだ。それすらできてない時点で底が知れてるぞ」

「ククツ、こ高説どうも。次に活かすとするが、お前には次なんてないぜ？」

相手の人数分は四人。リーダー格と牛込を捉えてる奴が後方にいて、その斜め前に二



人。困ってリンチにでもしたいんだらうな。作戦がバレバレだってえの。それと人質を取ってる気にいるから随分と余裕そうだな。付け入る隙がありすぎて困る。とりあえず牛込と喋ってやるか。

「何面倒なことしてくれてんだよ。男には気をつけるって言っただろ」

「警戒はしたんだよ？　でも力で勝てないもん。どうしようもないじゃん。それと着拒解除して」

「……わりと余裕そうだな」

「え？　だって助けてくれるんでしょ？」

「ヒロイン願望強すぎだな。なんで俺が助けなきゃいけないんだよ。怪我しても巻き込まれた自分を恨めよ」

「……え」

「ちよいちよいちよいちよい萩近くん!?　この子がどうなってもいいの!?!」

「好きにしろよ。むしろそうしてくれたほうが俺としてはありがたい。絡まれるのが面倒なんだよ」

「ええー……」

「あいつ屑だな」

「漢じゃねえな」

「ここは逆上するところだろ」

なんでこいつら全員めでたい頭してんだよ。漫画の読みすぎだろ。まず俺の性格がそういう作品の主人公と一致しねえだろ。むしろ逆だわ。

だがまあこいつらを叩きのめすことは決定事項だ。ストレス発散に付き合ってもらおうとしよう。……それに、俺が好きにしるって言った瞬間牛込を見る目が変わった。単細胞共め。あのクソ野郎と思考が一緒ってだけで俺の琴線に触れてんだよ。

「それじゃあまあ、お楽しみは萩近をノシた後ってことで、……そうだ萩近。大金くれたら見逃してやるぜ?」

「あ? 俺は貧乏人だぞ」

「ウソつけ。知ったぜ? お前の親父はどこぞの社長だつてな。息子のお前も他のやつより金があるのは明白。なんなら口座番号とかでもいいじうえ!」

「……悪いが俺はあいつを親父とは思ってねえんだわ」

「あ、兄貴! あつ! ゲホッ、ゴホッ……がつ!」

「余所見するとは余裕だな?」

全員が牛込に視線を向けた時から近づいておいた。リーダー格の奴が目線を戻すタイミングに合わせて走り出して全力で殴り飛ばす。勢い良く振り抜けたからか、リーダー格はよくぶつ飛んでくれた。それで俺じやなくて、リーダー格に目を向けた奴の喉にアツパーを入れる。呼吸が一時的にできなくなったのか、蹲って咽てるところを蹴る。もちろん顔をフルスイング。

起き上がって殴りかかってくるリーダー格を背負い投げ。さすがにガン無視しすぎようで、横から頭に両手で拳骨を落とされる。

「ナメ過ぎだぞ萩近あ！」

「人数で勝負いい気になってんじやねえよ木偶の坊」

上から叩きつけられたから当然俺の姿勢は低くなる。それで馬鹿はイキつたようだが、隙だらけだ。勢い良く上体を起こしながら溝内に拳を叩き込む。喧嘩のやり方はよく知ってる。パンチだつて正しい打ち方を身につけた。つまり、素人相手に叩き込めば一発で倒せる。ダメージが後から来るし残るからな。

背負い投げされた時に肺から空気が出たんだろうな。今起き上がろうとしてるリー

ダー格を踏みつけ、ポケットにしまっておいたボールペンを目に突きつける。これはリーダー格を牽制するためだけじゃない。今牛込にナイフを突きつけた男を牽制するためでもある。

「動くなつて言つて俺をボコリたかつたんだろが、行動が遅かつたな」

「あ、兄貴を解放しろ！ さもなくばこの女を切るぞ！」

「やりたきややれよ。言つたら？ 俺はそいつがどうなろうとどうでもいいつて。そいつがそこにいたらお前を殴りにくい。解放しろ。さもないとこの男は片目生活になるぞ？」

「お、お前にそんな覚悟が「があああ！」兄貴！」

「今のは警告だ。肩に刺してやったが、次は目だ。お前の行動で兄貴の目が無くなるぞ？ いいのか？」

「……か、解放したぞ。頼むから兄貴も解放してくれ！」

なんて美しい絆なんだろうなあ。まあ牛込を解放しなかつたところで俺にデメリツトなぞないわけだが。ここはそいつの行動を賞賛して解放してやろう。

リーダー格から退いてやると、そいつらは気絶してる仲間を連れて路地裏のさらに入

り組んだところへと逃げていった。これで俺ももう絡まれることはないだろ。久しぶりに暴れられたし、おかげでストレスも発散できた。もう少し殴り合えたら最高なのが、あのモヒカン共が大人しくなったせいでもやり甲斐がある相手がないな。

「……いつまでそこでへたり込んでる気だ。置いてくぞ」

「怖かったもん」

「まあ牛込にしたら無縁の世界だからな。これでよく分かったろ？ 俺と関わっても口くいな目に合わないって」

「やだ」

「なにが」

「君とは友達になるって決めたから！」

地面にへたり込んでくるくせに、いつちよ前に言い切るなあ。今の今までナイフ突きつけられてたのに、だいぶ肝が座ってるらしい。俺を真つ直ぐ見てくる目に迷いがなくて、腹立つくらいに光があった。とにかくずっとここにいても仕方ないわけで、俺は帰ろうと思うのだがなかなか牛込が立ち上がらない。

「腰が抜けちゃった……」

「……今カッコよく言い切ったのになあ」

「ううー、そこは言わないでよ」

「はあ、ほらよ」

「え？」

「背負ってやるよ。俺のせいで巻き込んだことに変わりはないからな。家まで送ってやる」

「……やっぱり君は優しいね」

「やめた。一人で勝手に帰れ」

「嘘ウソ！ ごめんってば！ 置いて行かないで！」

（足を掴むな歩きづらい）

足を掴まれたと思ったら、すぐに抱え込むように足に抱きついてきた。実は歩けるんじゃないかって思ったが、今回のことを悪く思ってるのも事実だ。牛込を背負ってちゃんとマンションの前まで送ってやった。

「ライブのこと、七菜から聞いた？」

「……まあな。二十騎からも言われたが、そもそもライブできるのか？」

「そこは大丈夫。オーディション受かったから」

「まじか……。……まあオーナーが認めたわけだし、今回の詫びも兼ねて見に行つてやるよ」

「ほんと!? よーし！ 今度こそ絶対楽しんでもらうからね！」

「ならそれで失敗したら、今度こそ俺と関わるのは止める。メンバーも使うな」

「いいよ。自信あるもん。その代わり楽しんでくれたら友達になつてね。そして私達の活動のサポートしてね」

「……二つ目が面倒だが、まあそれぐらいが対価になるか。いいぜ。捻くれてる俺を認めさせられたらな」

「やってみせるよ。勝つのは私達だから」

## 11話

ライブの連絡をしやすくするために着拒を解除してつて言われたが、もちろんそんなことはしない。そもそもライブが決まってるのなら、日程を聞くだけでいいからな。そんなんで俺を引つ掛けられると思つたら大間違いだ。不貞腐れる牛込から日程を聞いてそれを覚える。メモもしない。忘れたらその時はその時だ。

「覚えてたわけだが……」

「そんなところでボサツとしてないで入るなら入りな。客じゃないなら帰つてくれ」

「相変わらず毒舌だな。ばあさん」

「オーナーだ。……ふんっ、あんたは見ないうちに捻くれたね。それに、あの子がないのに来るとはね」

「……ま、それは会うことがあれば謝るさ」

「このライブハウス”SPACE”のオーナーこと都築詩船さん。俺の家のことを細



かく知ってる数少ない人物の一人だ。オーナーの性格上あまり首を突っ込んでこないが、こつちに引越してきたばかりの頃に世話になった。

「悪いがアタシはあんたらのことを助けられないよ」

「いいよ。俺が自分でなんとかする。高望みなんてしないで堅実的なやり方でな」

「そうかい……。何かあつたらいいな。できることならしてやるよ」

「どうしたオーナー。変なもんでも食ったか？」

「黙りな。口の減らない子だね」

「ははは、……。ありがとうオーナー。その時があれば頼む」

「ふんつ。最初からそう言いな」

オーナーに料金を払ってカウンターから離れる。まさかオーナーがあんなことを言ってくるなんて思ってたが、事情を知ってる人にそう言われると気持ちか幾分か楽になるな。こんなことを言ったらまた文句を言われそうだが、伊達に長生きしてないな。

ライブが始まるまでもう少し時間がある。ほとんどの客はもう奥に入ってるようだが、俺は今日出演する全バンドを聞きたいわけじゃない。飲み物でも買つといて、壁に

でも寄りかかりながらライブを観させてもらうとしよう。オーナーも受け付けを他の店員と交代して中に入っただけだ。照明やら音響やらの指示を全部飛ばすらしいし、自分でも調整するらしいからな。

「オーナーの基準は技術じゃない。……ま、どのバンドも聴いてて損することはないだろ」

今日は全部で4バンドするらしい。牛込たちがやるのは3番目なんだとか。どのバンドも2曲するようだから、交代の時間も多めに考慮して欲しい30分後か。時間にして考えると短いけど、ライブは時間を忘れさせるものだ。時間じゃ語ることでできないものを披露してくれるだろう。

『大きくなったらここに来ようね！ 抜けがけしちや駄目だからね！』

『観客としては？』

『うーん……それも駄目！ 一緒にここでステージに立つの！』

『ええ。でも、——がそう言うのならそれでいいよ』

『うん！ 約束！』

『指切りしようか』

(ごめんな——。約束破っちゃった)

一つ目のバンドの演奏が始めるのを見ると、こっちに来たばかりの頃に交した約束を思い出した。小学6年生の時だったかな。オーナーと母さんが仲良くなつて、母さんが一度だけステージに立った時に交した約束だ。あいつが歌って俺がギターを弾きながら時にコーラスを入れる。そんなことまで決めて、そして今になつては叶わない約束だ。

(オーナーに弟子入りなんて言つてギターの話を聞いてたっけな)

弦一本一本の説明、チューニングのやり方、押さえ方に弾き方。初歩中の初歩をしつこく頼んで教わつた。オーナーのギターは当時の俺からすれば大きくてまともに弾くことができなかった。ギターを買うことはできなかったから、オーナーの時間がある時にサイズの合わないギターで基礎だけを練習した。それに対して、あいつはどこでも練習できるから、はつきりと分かるほど次々と上達していった。焦つたりもしたが、楽しんで歌うから焦ることがバカバカしく思えた。

「ありがとうございますー！」  
「つと、一つ目のが終わったか」

過去を思い出して感傷的になっている間に一つ目のバンドの演奏が終わったようだ。はつきり言つて全く聞いてなかった。さすがにこれは演奏してる子たちに悪いな。過去を振り返るのはやめて、次のバンドからはちゃんと聞くとしよう。

しばらく待っていると、二つ目のバンドの準備が終わったようで、簡単なMCをしてから演奏を始めた。俺はライブなんて母さんのを観たあの日以降観たことがない。バンドの演奏も分からない。だから今演奏してる彼女たちのレベルなんて分からない。だが、全力でやっていることだけは分かる。趣味と言えばそれまでなんだろう。それでも、趣味と一言で言い表せる程度のものじゃない。これまでの積み重ねをぶつけていることが伝わってくる。

(それが俺に響くかは別としてな)

彼女たちの全力、練習してきたその量。それは素直に賞賛する。彼女たちも誇ること

ができるものだ。観客も盛り上がってる。これは良いライブなんだろう。しかし、俺の心は冷めきっていた。そこには、嫉妬もあるのだろう。俺が約束を果たせず、破つてここにいることが関係しているのだろう。まだまだ子供の証だ。

拍手は送るが、心が冷めてしまっている。幸いなのは近くに他の客がいないことだ。今の盛り上がりには水を指すようなことにはなっていない。次が俺にとつては本命と言える牛込たちのライブだ。果たしてどんなライブをするのか。

これは嫉妬も他所にして聞かないと勝負にならない。公平も何もあつたものじゃないが、とりあえずは邪魔な感情をどけるしかない。感情をコントロールしたところで、思いがけないことが起きた。

——出演の順番が入れ替わった

大したことじゃないと思う人もいるだろう。現に観客の大半は気にしてる様子がない。しかし、俺からしたらたまたまもんじゃない。この日にケリをつけたいのにこのまま出てこないなんてことがあつたら困るんだ。もしかしたら単純に入れ替わっただけなのかもしれない。しかし、あのオーナーがそんなことを容易く認めるとも思えない。だから俺は部屋を出た。向かう先はただ一つ。スタッフの静止なんぞ無視だ。

~~~~~

「ゆり大丈夫？」

「ごめん……みんな、ごめん……」

「そんなのはいいから。ゆりちゃんが最優先だから」

「できそうならこの後やらせてもらおう」

今の自分が情けなくて、膝を抱え込んで顔も俯かせる。萩近くんにわざわざ来てもらってるのに、私たちの全力をぶつけるだけなのに、それなのに順番が回ってきたら足が動かなくなつた。言葉も発せなくなつてとうとうその場に膝をおつて座り込んでしまった。急遽トリの予定だった人たちが演奏してくれて時間を稼いでくれる。このまま私が何もできなければあの人たちがアンコールとしてもう一度出るらしい。

でも、そんなことになれば私たちはもうこの場でライブをやらせてもらうことができなくなる。なによりも、このまま何もできなくてライブをしなかったらもう二度と萩近くんと話せなくなる。それだけは嫌なのに、ライブをしたいのに、なんで……なんで……。

「やっぱこうなってたか」

「…………え」

こんな場所にいるはずがない人の声。自分から私に話しかけるなんてことがないはずの人の声でした。

「萩りやんにゃん」

「殴りたいのか二十騎」

「きやあく暴力はんたーい」

「…………」

「え、無視？ ショックなんだけど」

顔を上げたら目の前に萩近くんがいた。座り込んでる私に合わせてしゃがみ込んでるけど、彼のほうが高いから少し見上げる形になる。怒ってるわけでもなくて、心配してくれてたわけでもなさそう。彼は相手の考えを読み取れちゃうけど、私は仲良くなつてたくさん時間を過ごした人じゃないと無理。だから萩近くんが今何を思っ

るのかは分からない。

「お前の負けでいいのか？」

「……よくない」

「ならなんで演奏しない。緊張にでも負けたか」

「……分かんないよ。何も分かんなくなつて……」

「はあく。立てるか？」

呆れてるわけでもない。本当に彼は何を考えてるんだろう。何も分からないけれど、彼の質問には答えられる。今は立てられないって首を横に振ったら、私の腕を掴まれた。

「よつと」

「ひゃあつ！」

「ほら、立てたじゃねえか」

「これは君が引つ張つたから！」

「立てないって言うなら、俺が引つ張り上げた後にまた座り込んで。でも牛込はそう

ならなかった。自分で立つ気があるからだ」

萩近くに急に引つ張り上げられたことで、立ち上がったもののバランスが崩れた。彼に持たれかかることでなんとかバランスを取って、自分の足で立ててるんだけど、彼の顔が凄く近い。でも彼はそんなこと気にしてない。

「やる気がないやつ。できないって決め込んでるやつには何もできないさ。でも、できるとして思ってる奴はそうじゃない。成功するかは別として、挑むことはできる。牛込は今挑むことすらやめてるんだよ。このままでいいのか？」

「やだ……けど………」

「ならやるしかないだろ。……もう引退しちやつたけど、俺が素直に尊敬できる人がいてな。その人が言ったらしいんだよ

——『ステージに立てば私たちが世界で一番カッコいいバンドだから』ってよ」

その人がいったい誰なのか私には分からなかった。だけど、きつとみんなに愛された人だと思う。そして、同じバンドの人にもスタッフさんにもお客さんにも、みんなに負けないだけ愛した人なんだろうって思った。その言葉は不思議と私の胸に響いた。優

しくて温かい言葉で、力が湧いてくる。

「このライブハウスに来た人達はライブしてるお前たちを見に来たんだ。他の誰でもないステージに立ってるお前たちを。だからやってみせろ。全力でやり抜いてみせろ」

「萩近くくんは？ 萩近くくんは見ててくれる？」

「そりゃあな。そのために今日は来たわけだし、牛込を観とくから、俺を魅せてみろ」

「！……うん！ ありがとう。もう大丈夫だから。みんなもごめんね」

「いいのよ。最高のライブにしましょう？」

「七菜……、うん！」

萩近くんに背中を押されて私は前に進むことができた。彼は他のお客さんと同じ場所に戻って、一番うしろで壁に持たれながらだっただけ私を見ていてくれた。本当はお客さんみんなに向けて歌わないといけないって分かっている。

でも、今日だけは萩近くんにに向けて歌った。私たちの演奏が終わったら萩坂くんがすぐに出て行っちゃって、私は慌てて控室に戻って携帯電話を回収した。画面は彼からのメッセージを表示してる。

『着拒を解除しといた』

それだけの一言だったけど、すっごい嬉しかった。支えてくれたお礼を言いたい、ライブの感想を聞きたい、話したいことがいっぱいある。だから着替えを後回しにしてライブハウスを出た。彼はまだライブハウスの近くにいて、話しかけようと側に行ったら電話してた。だから電話が終わるまで待つことにしたんだけど、彼の声は聞こえてて耳を疑う言葉が聞こえてきた。

「……は？ 仕送りをやめる？ 本気で言ってるのか？」

「……え？」

12話

「……わかった。あのクソツタレがそう言ってるならそれでいいさ。縁を切る機会だし。……別にあんたは関係ないだろ。それよりアレは？ それならよかった。それだけで十分だ。ありがとう。なんかあったらまた連絡してくれ。それじゃあ」

電話を切った萩近くんは、しばらく空を眺めてからライブハウスから離れ始めた。電話のために外に出たのになんて思ったけど、どうやらあのメッセージだけで十分だろうって判断してたみたいだね。私は急いで彼を追いかけた。

「萩近くん待ってよ」

「牛込か。とりあえず手を離せ。逃げないから」

「あ、うん」

「それでなんか用なのか？」

予想外にも彼は平然としていた。『仕送り』という言葉が出てたということは独り暮

らし。前に助けてもらった時に親御さんとうまくいってないことは察せたけど、まさか仕送りが止められるほどだとは思ってなかった。とりあえず萩近くを今帰らせちやいけないって思つて止めたんだけど、頭が混乱しちゃつて何を話せばいいのか分らない。

「つたく。話すこと纏まつてないのに話しかけるなよ」

「ぞ、ぞめん」

「……さっきの電話聞こえてたのか？」

「……うん」

「そうか。……牛込は馬鹿じゃないからある程度推測できてるだろうけど、たぶんそれで合つてる」

「なんで……！」

分からなかった。萩近くは根が優しい人だから、無闇矢鱈に仲が悪くなるようなことはしないはず。きつと原因があつてうまくいってないだけのはず。そんな萩近くがなんでこんな仕打ちを受けないといけないのか分らなかった。

なによりも、彼が動じてないことが分からなかった。

「なんで平気なの…………？」

「繋がりが断てて嬉しいからだよ。それに、これで動きやすくなった。ああ金のことなら心配するな。前からやってることがあつてそっちの収入を生活費に回せばいいだけだからな。…………貯金を貯めにくくなったことは残念だが、社会人になりや何とか「分からないよ!」…………なにごだよ」

「分からないよ…………。なんで君は平然とできるの? 独りぼっちになっちゃったんだよ?」

「それこそ今さらなんだよ」

「え?」

「…………人の家庭事情にこれ以上首を突っ込むな。この話は終わりだ」

萩近くんは話を切つていなくなっちゃった。私は今度は追いかけることができなくて、しばらく動けないでいた。彼が歩いていった方向をずっと見てただけど、ひなに手を引かれてライブハウスの中へと戻された。まず私はまだ着替えてなかったしね。

ロッカールームに戻って着替えを済ませると、みんなにさっきまでのことを聞かれた。どこまで話しているのかわからないし、私の最初の目的だったライブの感想を聞

くつてことも達成できなかったからね。どうしたらいいか悩んでると、オーナーに早くロッカールームから出るように言われた。ロッカールームを出て受け付けの近くにゐる席に座つてると、部屋の戸締まりをしてきたオーナーに声をかけられた。

「あんたはどこまであいつのことを知ってるんだい？」

「えつと……全然知らないです。さつきも首を突つ込むなつて怒られちゃつて」

「まあそうだろうね。……本人が話さないのならアタシも勝手に話せないけど、そつちの子は多少は知ってるんだつたね」

「え？ ……あ、ひな」

「あはは。小学校が一緒だつただけなんだけどね。私を知つてることも少ないけど、それでもいいなら話そうか？」

「お願い」

「はいはい。ゆりちゃんは萩ぼんのこと好きだね」

「そんなんじゃないから！」

真面目な話をするはずなのに、ひなのせいで調子を崩される。オーナーもある程度補足してくれるみたいで、近くにある椅子に座つた。どこから話そうかつて悩んでるひな

の表情は、どうしても半分ふざけてるように見えた。でもこれはひななりの気遣い……だったらしいなあ。

「本当に知ってることは全然ないんだけど、萩ぼんには妹がいたのと、母子家庭で育ってたってことかな。たしか中学1年生の途中でお母さんが亡くなっちゃったんだって」

「そん……なの……」

「あの子の家の事情は特殊もいところさ。父親が生きていることは確かだけど、アタシでも顔と名前は知らないね。妹の方は母親が亡くなつてすぐに行方不明になった」

「行方不明!? それは何かの事件に巻き込まれたということですか?」

「あの頃ってそんな話あつたっけ?」

「行方不明ということになつたんだよ。実際には父親の方に連れて行かれたのさ。歌の才能があつたから特訓させて芸能界に入れるつもりなんだろうね」

訳が分からなかった。そもそも父親はなんで一緒に住んでなかったのか。なぜ妹さんの方だけ連れ去つたのか。萩近くのことを教わっているのに分からないことが増えていく。

「……話せるのはこのあたりが限度かね。いや、少し話し過ぎたか。とにかくこの事は他言無用にするように。それとあいつ本人にも気づかれないうようにしなよ。本気で行方を眩ませたら探し出せないからね」

「……はい。教えていただいてありがとうございます」

「ふん。礼はいらないよ。ライブの失態もあるんだから」

「うっ、それは本当にごめんなさい」

「あれで舐めたライブをされたら出禁にするところだったが、玲音のやつが楽しめていたことに免じて許すよ」

萩近くんからメッセージが届いてたつてことは、彼が私たちのライブに満足してくれ たつてこと。オーナーからもこう言ってもらえると、それをより実感できた。話は終わ りつてことでオーナーが立ち上がって、私たちも荷物を持って店の外に出る。この後は 打ち上げの予定で萩近くんも誘いたかったけど、今日は無理だよね。お店に移動しよう としたところで私だけオーナーに呼ばれた。

「なんででしょうか」

「あんたはあの子のことをどう思ってるんだい？」

「へ!? いや、えつと……友達……です。正確にはこれからって感じですけど、……萩近くんとは仲良くなりたいです。今回の勝負に勝ったので、萩近くんが私たちのサポートをしてくれることになりましたし」

「あの子が、ね。……これからあんたらはここでライブをしていくだろうし、その時にアタシもあいつに声をかけたりはするけど、……あの子のことを頼むよ」
「え」

「このままいけば間違いなく心が死ぬ。ただでさえ3年前の時点で追い込まれてるんだ。これ以上孤独にさせちゃいけない。だから一緒に行動するようになる牛込たちが支えてやりな。あの捻くれ者の友達になるのなら、重たいことだけどそうしないと友達になれないだろうからね」

「……はい！ 任せてください！」

オーナーからすれば萩近くんは孫みたいな存在らしい。オーナーが萩近くんのお母さんと仲が良かったんだとか。萩坂くんのお母さんのことはオーナーも教えてくれなかったけど、これは萩近くんから聞くことができればいいかな。オーナーにお礼を言うてからみんなと合流して打ち上げに行った。私たちのバンドはまだまだこれからだし、萩近くんとの事もこれから。

~~~~~

牛込たちのライブは予想以上によかった。ライブ前にあんな状態に陥っていたとは思えないほど堂々としていた。おそらく牛込一人ではあそこまでのライブを音も歌も響かせられなかっただろう。バンドだからこそ、あのメンバーだからこそできたライブだ。結成から日が浅いはずのバンドだが、そんなことを感じさせないものだった。

「楽しそうにしてたな」

全員が笑顔だった。緊張もあつたはずだ。恐れもあつたはずだ。しかし四人全員が笑顔でライブをしていた。その中でも、バンドの中心としてギターボーカルを努めた牛込。あいつがああの演奏に込めたものはさすがの俺にも伝わってきた。冷めきっている俺に正面から向き合う、その想いを込めて俺に向けて歌っていたが分かった。

「ほんつとに物好きだよ、お前は」

それでもその物好きな牛込に心を動かされたのも事実だ。冷めきっている俺にさえ届かせたあの熱意。それを受けてしまった以上あの勝負は俺の敗北ということだ。着拒を解除し、あいつらのサポーターとしてこれから関わっていくのだろう。まあ仕送りが途絶えたからそこまで時間を割けないだろうがな。

『これからよろしくね！　これから一緒なんだし、君は独りじゃないから！』

今牛込から送られてきたメッセージ。一見俺を気遣ったメッセージだと受け取れるのだが、その裏に隠されてることが分かる。まさかあの婆さんが全部を話すとは思えないが、老婆心でも働いたのか、はたまた二十騎が知ってることを語ったのか。ともかく俺の家庭事情を軽く知ったということだろう。

事前に釘を差してはいる。だから下手に家の話をしてくることはない。余計に気を使うなんてこともしないだろう。ベースを弾いていた鵜沢や少し話した程度の鰐部のことはよく分からないが、その二人も会話ベタというわけでもないはずだ。二十騎もなんだかんだで細かいところまで見ており、気を使うこともできる。だからこれ以上家のことを突っ込まれるなんて面倒なことにはならないはずだ。牛込のお望み通り”友達”として過ごせばいいのだろう。本当にそうなれるかは別としてな。

『余計なお世話だ。俺なんかを気にかける暇があるなら練習に励め』

自分でも捻くれている返事だと思う。しかしこれでいい。これから関わっていくことになるとはいえ、距離を縮めたいわけじゃないのだから。そう思つて携帯から目を離そうとしたらすぐに牛込から返信が来た。女子はわりとこういうの早いよな。……人によるか。

『この捻くれ者！ でもよかった。君がいつも通りで』

『誰目線で言つてんだよ。俺がシヨックでへこたれるなんてことはない。強いて言うならお前にメッセージを返す今の方が辛いぞ』

『友達目線ですー！ それとそんなこと言うならこれから君の学校の前で待ち伏せするからね！』

『マジでそれは面倒だからやめろ。来て襲われようと今度は助けないからな』

学習することもあれば、これみたいに全く学習していないこともある。いつそ本当に一度襲われないと自覚できないんだろうか。それなら呼んで放置してやってもいいか。

そんなことを考えていると、他のメンバーからもメッセージが来た。基本的に『よろしく』やら『登録しといて』やらそんなことが送られてきている。二十騎のやつだけ『ゆりちゃんが酷い目にあつたら萩ぼんのせいにするから』という恐ろしいことを送ってきていた。冤罪も甚だしいぞ。

とりあえず短い返事をそれぞれに送りながら、ふとあることに気づいた。

——これからこうやってやりとりする羽目になるのか、と

面倒事が増え、それに付き合っていないといけないことに思わずため息が漏れた。

## 13話

6月も終わり、日に日に気温が上昇し始めている7月。期末テストも近づいてきてるわけだが、そんなものを気にすることなくバイトに明け暮れている。仕送りが止められた以上、可能な限り働いて少しでも金を稼ぐ必要があるからな。学費は問題ない。特待生は免除されるから。

そんな俺だが、バイトとは別の理由で疲労が溜まっていた。

「はああ〜」

「……若大丈夫つすか？」

「タバコがほしい」

「駄目つすよ!？」

「どうしたよ萩近。まるで嫌な奴に追いかけて回されて疲れ果てたようなため息ついて」

「どんなため息だ」

「合ってたんだけどな」

「合ってるんすか!？」

「うん。……牛込がウザい」

そう、牛込だ。あの日以降毎日連絡が来るんだよ。毎朝毎晩、おはようからおやすみまで連絡が来る。鬱陶しく思つて返さなかつたら電話がかかってくるし、電話を放置したら出るまでずっと電話がかかってくる。

酷かつたのは昼休みに電話がかかつてきたことだな。電話に出たら他の男子が盗み聞きしてて、牛込の声を聞いた瞬間敵意を剥き出しにしてきた。牛込からの苦言を聞きながら嫉妬した馬鹿たちとのデツドヒート<sup>追いかけっこ</sup>。

放課後に遊んでやるという約束をして、電話を切つてから追いかけてる奴らを返り討ち。教師がキレたが、事情を話せば俺は説教だけで済んだ。

そんなことがあつたから、学校にいる時に電話をしないということを確約させたが、代わりに夜に電話するということを取り付けられた。で、案の定その電話が長いのだ。寝る時間を変えたくなくてそれを伝えただが、電話の時間を確保したいらしく家に帰ったら連絡するように言われた。

心底面倒なのだが、これを無視するとさらに面倒なことをカマしてくるから大人しく従つてる。だが、エスカレートしてきてるから、そろそろ本気で止める必要があるん



だよ。

「……タバコはどこだ」

「駄目ですってば!!」

「せめて成人するまで耐えろ」

「馬鹿野郎！ 成人しても体に悪いから駄目だろ！ 若の体をなんだと思ってる！」  
「いやそこは自己責任だろ……。つてかまじでなんでお前そこまで心酔してんだよ」

実はこの二人とも俺の一つ上なんだよな。バイトもほぼ同時に始めたらしくて、それなりにつるむらしい。片やヤンキーなんだけど、世の中不思議だよな。

バイトを上がって三人で食べに行こうか、なんて話をしながら着替えを済ませる。社員や深夜に働く人に挨拶をして裏口から出ようとしたところで扉を閉めた。……いや、閉まってないな。ギリギリ閉まってない。反対側から必死に止めてるようだ。

「なんで閉めるの!？」

「なんではこっちのセリフだわ！ 何しに来やがった!」

「君に会いに来たの！ というか扉閉めようとしないでよ！ 出てきてよ!」

「いろいろと嫌だわ！ 彼女みたいな行動取るな！ そして帰れ！」

「まあまあ痴話喧嘩はそのへんで。出ないと帰れねえし、萩近が諦めろよ」

「……チツ！」

俺一人ならともかく、他に二人帰るのだから俺が諦めるしかないな。何かと良くしてくれてる二人に迷惑をかけるのは、俺も望むところではないし。

いやいや扉を開けると、その向こうには頬を膨らませてる牛込が立っていた。一般的に牛込レベルの女子がそういう仕事をする可愛らしいのだが、疲労が溜まってる俺は微塵もそう思えない。というか軽く殺意が湧いてきた。

「……で、何のようだ」

「あ、あれ？ もしかしなくても怒ってる？」

「まあな。バイト先にまで来やがって」

「ごめん……」

「わ、若……さすがに……」

「……二人は帰ってて。今日は食べに行けなくなった」

「しゃーね。今週末はラーメン行こうな」

「はっ」

俺が本気で怒つてることを察した牛込は、視線を落としていた。二人と今週末ラーメンを食べに行くことを約束して見送る。見えなくなるまでそつちを見て、鞆からある物を取り出しながら牛込に声をかける。

自分でも予想外な程低い声が出て、牛込は体をビクツと震わせて恐る恐るといった調子で視線を上げた。俺はそれに合わせて鞆から取り出した物を投げつける。

「わぶっ」

「それで汗拭いとけ」

「え……」

「ただだけ待ったのかは知らないが、そのままだと体を冷やすだろ。そのタオルは使っていないやつだから、その点は気にするな」

「あ、ありがとう」

牛込が渡したタオルで汗を拭き始め、俺はそれが視界に入らないように背を向ける。今日はバイトがあるということを伝えてあるはずなのに、いったいどれだけ待ってたん

だろうか。今日は夜になっても蒸し暑いというのに。

「もう大丈夫。これ洗って返すね」

「んなもん気にしなくていいんだが、……言っても無駄か」  
「もちろん」

「返すのはいつでもいい。……で、結局何しに来たんだよ」

「だから会いに来たんだよ？」

「しばき倒すぞ。本当のことを言え」

「……えつとー、半分は本当なんだよ？ もう半分は……相談というか……」

「歯切れ悪いな。帰るぞ」

「ダメダメ！ あのね、勉強を教えてほしいなって……」

「はっ？」

こいつマジで頭おかしいだろ。そもそも俺の学校は普通科じゃない。勉強の内容は全くとっていいほど違う。もちろん普通科の科目も軽くは触れるが、それでも深くはやらない。本当に浅い内容しかやらない。

だから牛込たちの学校でやってる内容を俺が教えられるわけがないのだ。それに牛

込って勉強できないわけじゃないだろ。中間テストでも平均点以上の点数は取ったって聞いたし。何よりもメンバーで勉強会でもすればいいじゃないか。

「俺が教えられるわけないだろ」

「嘘だよね」

「なにが」

「だって模試で全国30位以内に入ったって言ってたじゃん。自主的に普通科のも勉強してるってことでしょ？」

「……まあそうだが、牛込って勉強できないわけじゃないだろ？ それにバンドメンバーで勉強会でも開けばいいじゃないか」

「……まず七菜は一人の方が勉強できるって。ひなはあれで頭いいから勉強の必要ないって言うし、リイはみんながいらないならやんないって。今回の内容はちよつと付いていけないのが多くて……」

「仲がいいのか悪いのか……。俺がそれに付き合うメリットは？ 時期は被ってるんだ。明らかに俺の勉強時間が減るだろ」

ぶつちやけ教えることはできる。その自信はある。だがそうすると俺が勉強できな

くなる。ギブアンドテイクが成り立っていないんだ。交渉するならこれは成り立たせてほしいものだが、はたして牛込は俺に何を提示してくるのやら。

「……わかんない」

「ならこの話は無かったことに。もしくは俺がお前たちのサポーターを辞めるかだな」

「それは絶対駄目！ ……あ、ご飯作るってのは？」

「はあ？ お前どこで勉強しようと思ってるんだよ」

「萩坂くんの家……うそうそ！ 帰ろうとしないで！ 図書館で勉強しよ！ それで私がお弁当作るから！」

「お前それで俺を釣れるとでも？」

「やっぱり駄目……だよね……。ごめんね」

目に見えて落ち込みやがって。だからやりにくいってんだよ。……ぶっちゃけ俺はそこまでテスト勉強に時間を割かない。だって対策プリント丸暗記すればいいから。なら何を対価として貰うか。あ、そういや連絡の頻度減らしてほしいんだったわ。対価はそれにさせるか。

「牛込。勉強見てやるよ」

「え……いいの？」

「対価は弁当と連絡を取る頻度を減らすこと。それでいいなら勉強見てやる」

「……わかった。お願いね」

「待ち合わせとかはまた今度決めるか。今日は遅くなつたし、マンションの前まで送つてやる」

「いつもそれじゃ悪いよ。たまには逆でも……」

「だから牛込の家のほうが先に着くんだったの」

「あう。……あ、せめて晩御飯は」

「自炊するからいい。ほら帰るぞ」

牛込が持つてきた話が終わったから、俺は会話を強制的に終わらせて足を家へと向ける。牛込が急いで追いかけてきて隣に並ぶ。ここ最近直接会うことは無かつたのだが、こうやって二人並ぶことが当然のようになっていた。回数も少ないのになんでだろうな。

牛込が最近のバンドのことや学校での出来事を話してきて、俺がそれを適当に聞き流す。軽く流すとすぐに気づかれて文句を言われるのだが、どうでもいい話を真剣に聞く

奴のほうが少ないと思うんだよな。

なんで俺がこんな面倒な羽目に合うんだろうかと思っていると、ようやく牛込が住むマンションに着いた。明日勉強会のことを決めることにし、そこで牛込と別れる。

と言つても俺の家もすぐそこなんだけだな。今日は早めに寝るなんて思ってたんだが、さつきまで一緒にいたというのに牛込から連絡が来た。これは頻度を減らすってこと理解してないな。回数を決めるしかないか。

~~~~~

萩近くとの勉強会当日。私は前に言われたことを思い出して、軽くメイクをしてから家を出た。図書館に入ってすぐの広場で待ち合わせをしていて、今回も萩近くの方が後だね。なんで図書館の中で待ち合わせなのかって言うと、気温が高いから。快適なところでの待ち合わせの方がいいよね。

5分ほど待ったら萩近くも図書館に着いて、合流したところで早速移動する。基本的に静かにしないといけないんだけど、喋っても問題ない部屋があつてそこで勉強会をする。私達の他にもそうしてる人がいるけど、みんな真剣に勉強のことしか話さないからお互い集中できる空間になつてる。

「何を教えればいい？」

「今日は数学と古典をお願い」

「りよーかい。……今日は？　まさか今日以外でも面倒見ると思ってる？」

「え、教えてくれないの？　あと私はそんな一気に覚えられないよ？」

「……チツ。わかったよ。予定が合わせられる時は見てやる。それ以外は自力でなんとかしやがれ」

「ありがとう」

萩近くんの教え方はすごいわかりやすかった。教えてもらって解いてみると、なんでもこんなのできなかったんだらうって思っちゃうぐらいわかりやすい。数学だと萩近くんが問題まで作ってくれて、解説までしてくれた。学校の先生とかなれそうだよ。……性格さえどうにかすれば。

「一区切りつてとこだな。昼にするか」

「ふう。疲れたよ」

「ま、こんなだけやってりやテストも大丈夫だろ」

「えへへ、そうだったらいいなあ。あ、ちゃんとお弁当を持ってきたから一緒に食べよ」
「サンキュ」

朝頑張って作ったお弁当を萩近くに渡す。お母さんに誰のを作ってるのかを聞かれて、正直に萩近くんのとて伝えたら複雑な顔をされた。あれ以降会ってないから、私がいだけ言っても萩近くんの悪印象は払拭されてない。

できれば萩近くんと両親にもう一度会って話をしてほしいんだけど、なかなか実現しなさそう。

「なに辛気臭い顔してんだよ。弁当作んの失敗したのか？」

「ううん。そんなことないよ。わりとうまくできたって思ってるもん」

「へえー。ま、たしかに美味いしな」

「ほんと!? よかった。お弁当を作るの初めてだったから不安だったんだけど」

「初めてなのか。それでこれって凄いな。牛込はいい嫁になるな」

「よ、嫁って……!! もう、からかわないでよ!」

「本音だけどな」

「ふえ!!」

お、お嫁さんなんてまだ早いよ……。……って、なんでその気になっちゃってんだろ。そもそも相手が萩近くんとかごめんだし。でも萩近くんってこういうことは嘘つかないし、本当に褒めてくれてるんだよね。照れくさいけど嬉しいかな。

お弁当は思ってたより好評で、萩近くんはすぐに食べ終わった。もしかして量が少なかったかもしれない。この年頃の男の子っていっぱい食べるって言うし。

でも萩近くんは満足したって言ってくれた。その後も勉強して、夕方までには解散。萩近くんは夕方からバイトに行くみたいだから。

テストの結果は中間テストの時よりもよかった。またテストが近づいたらお願いしようかな。

ちなみに、連絡頻度を減らすってことを忘れてたら萩近くに怒られました。

14話

終業式も終わり夏休みが始まった7月。

家から学校に行くまでの間に汗をかくことが当たり前となった気温。

甚だ鬱陶しいのだが、気温に文句を言ったところで何が変わるわけでもない。それでも文句は言うわけだが、そんな日々とはひとまずお別れだ。これからは学校ではなくバイト先に通う毎日となるのだから。

あまり変わってない気もするが、学校に行つてからというワンクッションを挟むことがなくなつたから大きな変化と言える。

——なによりも稼ぎ時だ

今まで土日祝でしか朝から働けなかったが、学校が休みになったから平日でも朝から働けるようになった。まだ比較的涼しい時間に通勤するために、余裕を持つて家を出るようにしてる。

副業の方も成果が出てるからギリギリ生活が成り立っている。この夏休みで、少しづつ貯金が消えていくという日々からもお別れできる。死活問題にも光が見えてきた。

それでもウザったい日も来たりする。面倒な客とか、口先だけのマネージャーとか、責任転嫁する応援の奴とか。

そういう奴とは少し違うが、今日も厄介な奴が来た。

「おう、萩ぼん今日はレジなんだ？ 珍しいね」

「出口はそちらとなつております」

「今来たところなんだけどな」

「相手したくないから帰れ」

「私お客さんなんだけど？ まあ気にすることでもないけどさ。他に買う人もいないみたいだしちよつとくらい話そうよ」

「二十騎の相手は疲れんだよ」

そう二十騎だ。

掴みどころもなく、何を考へてるのかもわからない。一見ただの馬鹿で、實際馬鹿なところもあるのだが、これこゝろでいてよく見てる。

それだけならまだいいんだが、俺の過去を知っている人物でもある。

——やりづらい

それが二十騎に抱く印象だ。

何が楽しいのか上機嫌にメニユーを眺めてるが、一人だけで来たということは何か話があるんだろう。今日働いてるオバちゃんや二十騎と知り合いだから、俺がこれから休憩だということも把握してるんだろうな。後ろを見たらサムズアップされたし。

「このセットかな。お金は任せました！」

「払えよ」

「ちえー。萩ぼんと私の仲だからいけると思ったんだけどなあ」

「ただの知り合いだろ」

「冷たいね。ゆりちゃんぐらいじゃないと駄目ってことか」

「よかったな。永遠にサービスなんぞしねえぞ」

なんで牛込をそこで出してくる。アイツに頼まれてもサービスなんぞしないし、むしろケチるわ。

そんなこつちの思いを理解しているのかしていかないのか、二十騎は笑みを浮かべている。基本的に笑顔の奴だから、捻くれた考えしかできない俺にはその真意を知ることが難しい。だからやりづらいんだ。

レジを打って料金を表示させ、二十騎から代金を預かる。またレジを操作して精算を済ませ、おつりを二十騎に渡ししたら本題に入る。話を早く終わらせたいからな。

「お、このひなちゃんのを考えを見抜くなんて、萩ぼんはもしかして「話がないなら俺は休憩室から出ないぞ」ええー。……遊びのお誘いだよ」

「行かない。これで話は終わりだな」

「終わってませーん。ちゃんと客席の方来てよー？ 待つてるから」

「メンドクセ」

~~~~~

「あ、萩近くん来てくれたんだ！」

「誰のせいだと思ってやがる」

「へ？」

集合場所の駅前にいると、萩近くんが不機嫌ながらも来てくれた。けど私が萩近くんを呼んだわけじゃないから、そう言われてもなんのことか分からなかった。

そんな私の反応から察したのか、彼はあからさまにため息をついた。今の状況がどういふことか理解したみたい。私には何も教えてくれないけど。

「……他に誰が来る？」

「グリグリメンバーだよ」

「グリグリ？ 頭大丈夫か？ ……ああ、元から駄目だったな」

「勝手に変なこと言って納得しないでよ！ 私たちのバンド名『G l i t t e r \* G r e e n』の略称！」

「そういうことか。面白くねえな」

「何か言った？」

「他のやつがまだ来ないなってだけだ」

彼はスマホで時間を確認してそう言った。今は集合時間の5分前。たしかに他に誰も来てないのは不思議。七菜とか10分前にいそうなのに。リイとひなも遅れたりはないはずなのに。

呼ばれるだけ呼ばれて他に来ないとかはないよね。それ絶対萩近くんが帰って今日がお流れてことになっちゃうし。せつかくみんなで遊ぼうって話になったのに、それ



が無くなるのは寂しい。

「ごめんなさいゆり。待たせちゃったわね。萩近くんもわざわざありがとう」

「あ、七菜！ よかつた、てつきりみんな来ないのかと思っちゃったよ」

「そしたら帰れたんだけどな」

「そういうこと言わないでよ」

「ふふつ、途中ちよつと、ね」

「……あゝ、二十騎か」

七菜がなんのことを言っているのか分からなかったんだけど、萩近くんは理解したみたい。なんでそう簡単に分かるんだろ。それに七菜が言ったことをすぐに分かっちゃうところに嫉妬する。私の方が七菜と仲がいいのにつて。

どういふことか聞こうと思つたら、ひな本人とリイが一緒に来た。噂をすればつてやつだね。一緒に来た二人の様子を見て、やっと私もどういふことか分かつた。

まだ眠たそうにしてるひなを、どこか疲れた様子のリイが引つ張つてる。

リイが一番ひなの家に近いからよく一緒になつてる。だから今日も一緒に来ることにしてたらしいんだけど、ひなが朝起きなかつた。ご両親は先に家を出てみたいで、

リイが起こしに行くことになったけど、なかなか起きない。

そこで、どうしたらひなを起こせるか七菜に相談してみた。七菜が何個か案を出してもひなは起きなくて、それで他に案はないかと考えてたら、七菜も時間ギリギリになったんだとか。それでどうやってひなを起こしたんだろ。

「可愛い子がいるって言ったら起きたんだろ」

「お、正解！ さすが萩近。昔からの付き合いは伊達じゃないね」

「付き合いなんて全くねえよ。小6の時もたまに話す程度だったしな」

「ありや？ そうなんだ？ むしろそれでよく一発で当てられたね」

「二十騎はそこだけ単純だからな」

……なんか疎外感あるんだけど。これってもしかしなくても、萩近くんって私以外の子とはそれなりに仲良いよね。思い当たることがないってわけじゃないけどさ。でも、それならひなも萩近くんに距離を取られたっていいじゃん。

他にも理由があるのかな。考えたらすぐに分かるけども。だって私がダントツで彼と連絡取ってるから。返事を貰えなかったら貰えなかったで文句言うし。

「んで？ 今日の予定はどうなってんだよ」

「あら？ ひなこから聞いてなかったの？」

「興味ないからな」

「はあ。……今日は水着を買いに行くのよ」

「帰る」

「だめ！」

今日彼が来るなんてどうしたんだろって思ってたけど、ひなは今日の予定話さなかったんだね。しかも彼は彼で聞かないし。その結果今から帰ろうとしちゃうし。

せっかく来てくれたのに何もせずに帰るなんて認められない。私はすぐに踵を返した彼の手を掴んだ。帰ってほしくないから。リイとひなが何故かニヤニヤしてるけど、今は気にしてられない。彼を帰らせないことが最優先。

「手を離せ」

「今日付き合ってくれるならいいよ」

「なんで俺が同行しないと行けないんだよ。水着買うなら女子だけで行けよ。それとも何か？ 俺に選べってか？」

「……………たしかに。今思うと恥ずかしいね」

「それいいね！ ゆりちゃんのは萩ぼんが選ぶってことで！ それじゃあ出発！」

「ちよつ！ ひな!？」

さつきのニヤつきはそういう事だったんだ……。ひなは警戒しないといけないってことだね。これからは気をつけよ。

ところで本気で言ってるのかな。そんなの恥ずかしくって嫌なんだけど。でもひなはもう歩き始めてるし、リイも面白がつてひなの味方してる。最後の砦の七菜に助けもらいたかったけど、七菜は萩坂くんとの手を離さないようにって言って、二人の後を追いかけて行っちゃった。

「どうする気だ？ 俺は帰らせてもらえるほうが嬉しいんだが？」

「……………選んで」

「は？」

「わ、私の水着を選んで！」

「はあ!?! お前正気か!?!」

「だ、だって……………こうしないと萩近くん帰っちゃうじゃん！」

「いやそう言われたところで嫌なもんは嫌だから帰りたいたいが」  
「いいから行くの！」

恥ずかしくてちよつと赤くなつちやつてるであろう顔を伏せながら、彼の手を引つ張つて歩く。彼の方が力が強いけど、私は全力で彼の手を握つた。

彼がその気になつたら簡単に振りほどけるんだらうけど、彼はそんなことしなかつた。言葉は荒いけど、不用意に他の人が傷つかないようにする人だからかな。

先に歩いていった三人に追いつくように早歩きして合流。七菜はともかくひなとリイの目線が変に生暖かくて、そんなんじゃないって怒つた。全然分かつてくれなかつたけど。

シヨツピングモールに入つて早速私たちの水着を買いに行く。プールとか海とか行こうつて話をしてるからね。せつかくだから萩近くんも誘いたいし、彼も水着を買つてくれたらいいんだけど……。

「お前らが水着買ったら帰つていいよな？」

「んー、ご飯食べに行つてから解散だからそれまではいてよ」

「黙れデベ子投げるぞ」

「やめて!」

「ファミレスぐらい付き合ってくれないかしら。安いところに行くし、夏休みの予定を合わせたいから」

「予定? バイト」

「休みを作りなさいってことよ。グリグリのサポーターさん?」

「……チツ。わーったよ」

七菜って萩近く丸め込むの上手いね。今度やり方教えてもらおっかな。ひなに聞いても参考にならないし。

それでそのひなはって言うと、すでに水着を物色し始めてる。先陣を切るというか、集団行動できてないレベルじゃないかな。遊びに来てるわけだからそれぐらい気にしないけどさ。

……とここでさっきから選んでるのが、過激なやつばかりな気がするんだけど。まあひなの感性は独特だから、なんてツツコめばいいか分からないし、そこはリイに任せようかな。

「とりあえずこんなところかなー!」

「5着て……。しかも全部過激だし。ひなってこういうの着るタイプだったのか」

「何言ってるのリーちゃん？ これゆりちゃんのだよ？」

「え？」

「よくやったひな！ 流石だな！」

「いやいやおかしいでしょ!？」

「ゆりちゃん試着して。それを萩ぼんに見てもらおうよ」

「嫌や！ そんなん着たない！」

思わず関西弁出ちゃったけど、そんなこと言ってられない。あんなの着てられないよ。布面積少なすぎるし、それを萩近くんに見られるって……。何もしてないのに罰ゲームやらされてる気分。

さすがにこれはふぎけ過ぎてことで、七菜が二人に説教を始めた。ひなとリーは文句言ってたけど、七菜の笑顔が怖いって言ってすぐに水着を戻した。それからは水着を物色し始めたんだけど、いつの間にか萩近くんがいなくなってた。

「なんで外で待ってるの？」

「俺があの場合にいる必要があるか？」

「私の選んでよ」

「馬鹿だろお前。プールとか海行つて男釣りたいのか？」

「そんなわけないじゃん。ただ異性の意見もあつたらいいかなつて」

「だからそれが釣りに繋がんだつて」

「そうなの？」

「そうなの」

そんなこと言われちゃうとたしかにつて思うけど、こういうことを教えてもらえるだけやっぱり参考になる。萩近くんは私が無意識にやり過ぎちやう時にストツパー役になつてくれる。

本人は否定気味に文句言つてるだけのつもりだろうし、実際に棘のある言い方ばかりだけど、それでも助かつてることは事実。

だから萩近くんの手を引いて中に入った。試着してるとこなんて見せられないから、「こういうタイプならどう思うのか」つてことを言ってもらうことにした。あくまで本人の主観だけど、それでも異性の意見に変わりはないからね。

これは別にデートじゃない。だつてお互いにそんな気持ちがあく無いから。でもリイとひなはデートだねつてからかつてきた。まず男女比がおかしいと思うんだけど



な。

萩近くんは二人のことを完全に無視して、私が聞いたことにずっと答えてくれた。そのおかげもあつてか、私も二人のからかいがそこまで気にならなくなった。水着もこれがいいって思えるのを見つけられたしね。

——店員さんに「彼氏ですか？」って聞かれたのは解せない。

シヨッピングモールの中にあるファミレスで五人でお昼を食べて、夏休みの予定を合わせた。みんな萩近くんの事情を知ってるから、萩近くんにも来てもらう日は最低限の日数だけ。それ以外を全部バイトにしようとした萩近くんを、さすがに四人全員で止めた。体が休まらなくて倒れちゃうからね。

ファミレスを出たらその場で解散。七菜は本屋に行くらしくて、リイは後輩の子と予定があるみたい。ひなはセンサーに従うなんてよく分からないこと言つてた。私はこの後特に予定がないから、彼と一緒に帰路につくことに。

「改めて今日はありがとう」

「……………どういたしまして」

「? 今日<sup>も</sup>は素直だね」

「疲れたからな」

女性用の水着コーナーにずっと居させられたことを考えると、たしかに精神的に疲れちゃうよね。帰ってほしくないってことだけが頭にあつたから、その事までは考えられなかった。

その事を謝つたんだけど、気づいてないことなんて分かりきつてたつて言われちゃつた。その言い草にムツとなつたけど、事実だから何も言い返せなかつた。お詫びに喫茶店かどこかでデザートでも奢ろうつて思った。でも、彼の目線は前にも私の方にも向いてなかつた。

「どうしたの?」

「いや、面白い奴がいるなってだけだ」

「へ? えーつと、あの男の子のこと?」

「正解。……帰るぞ」

「ううん。声かけてみるね」

「は?」

「なんか困ってそうにも見えるから」

その男の子は公園の木陰に入ってるベンチに座って無表情で上を眺めてた。何を思っただけでもない。ただブーツとしてるだけなのかもしれない。

萩近くんみたいに自分から考えを読まれないようにしてるわけじゃない。だって彼以上に何を考えてるのか分からなかったから。その無表情はわざととかじゃなくて、黄昏れてるとかでもなくて、それがその子にとって当たり前らしい。

「何か困り事かな？」

「……誰ですか？」

「いきなりごめんね。私は牛込ゆり。こっちの男の人は友達の新近玲音くん」

「友達になった気はないんだが？」

「それについては後で詳しく話そうか？　ってごめんね。君が困ってそうに見えたから声をかけたんだけど」

「俺って困ってるんですか？」

「へ？　えっと、勘違いだったかな……。少なくとも私にはそう見えたんだけど」

「そうですか。……そう見えたのならそうなんでしょうね。自己紹介してませんでした

ね。雄弥です。名字はありません」

すごく奇妙な自己紹介だった。名字が無いなんて聞いたことがないからね。でも、事情があることは私でも分かった。萩近くんはどこかこの子を面白がつちやってるけどね。

この子——雄弥くんとの出会いは、間接的に私たち……特に萩坂くんに影響を及ぼすことになる。あんな事になるなんてこの時の私は微塵も思っただけじゃなかった。

## 15話

牛込が声をかけた少年こと雄弥は、人気急上昇中のバンド Augenclick のメンバーでベース担当だ。牛込は知らなかったらしいが、俺はクラスの女子たちが話題にしているのを小耳に挟んでいたから知っていた。だから面白い状態で見つけられたなと思って。

公園にいたあの様子が間違いなくアイツの素だ。相手の事どころか感情も理解できず、表情なんて無い。それが雄弥という人間で、バンドとして活動してる時は作られている状態だろう。……たしか『湊雄弥』として出てたはずだが、名乗る時に『湊』を言わなかった。その辺は何かしら事情があるんだろう。首を突っ込むわけにもいかなから放置するわけだが。

それで結局アイツが何してたかって言うと、作詞に悩んでたらしい。なんでも自分で自分の歌を作ることになったようなんだが、本人には全くそのやり方が分からないのだから。

それを聞いた牛込が、浅い知識ながらもレクチャーを始めた。俺も数少ない知識を総

動員して牛込の説明を補足した。それでも歌詞を書けるようになるわけじゃない。だから牛込は時間を作っては協力していたし、俺もそれに付き合わされる羽目になった。珍しい……というか他にいないタイプの人間だからか、牛込一人じゃ荷が重かつたらしい。俺は通訳じゃないんだがな。まあ、俗に天才と呼ばれる部類に入る雄弥だ。取っ掛かりさえ掴んでしまえばそこからは早かった。すぐに歌詞を完成させていた。

プロレベルの奴に教えるなんていう不思議な体験があつたが、それ以外はバイト三昧だ。基本的に朝から晩まで。極力家に居ないようにすれば水道代やらガス代やらも少なくなるからな。

バイトが無いときは町の図書館に行つて涼みながら夏休みの課題を片付ける。問題が簡単すぎるからほとんどノンストップで手を動かしていた。そのおかげでバイトに打ち込めるわけなんだがな。

そうやって代わり映えのしない日々を送っていたのだが、残念なことに今日からの二日間はバイトも勉強もない。ある意味バイト自体はあるか。まあ何が言いたいのかというと、グリグリに予定を合わせている二日間なのだ。合宿兼海での遊びらしい。

合宿には反対したのだが、鰐部の知り合いの別荘を借りるらしく、宿代はかからない。食材も用意してくれるらしく、自炊してしまえば食費も抑えられる。そして鵜沢の知り

合いが海の家の店長で、俺はそこでバイトしているのだとか。1日5時間という限定付きだが、働かせてもらえるならありがたい。

(そんなことを思ってたが……)

「萩近くんどうかしたの？」

「帰りたい」

「駄目だからね？」

「わーってるよ」

費用を最小限に抑えられるどころか稼がせてくれる。そんな常套句で失念していたが、別荘に全員で宿泊だ。何が嬉しくてタイプじゃない女四人と一つ屋根の下で過ごすなければならぬのか。

別荘持ちということはもちろん金持ちなわけで、部屋の数もそれなりにあるだろう。なんせ合宿を兼ねてるのだから、楽器を弾ける空間があるんだ。たとえその分部屋の数が少なくなっているとしても、男女を分けるぐらいの余裕はあるはずだ。

——だが問題はそこじゃない

「なあにー萩ぼん？ ひなちゃんが魅力的ってー？」

「後で投げ捨てるぞ。デベ子を」

「とばつちり!？」

「合宿はともかくとして、まさか飛行機とはな」

「場所が丹後なのだし、こつちの方が割り引いてもらえたのよ。あまり大きい声では言えないけど、学割だけじゃなくて特別割引までしてもらえたのだから」

「……まあ感謝はしてるよ」

そう。鰐部の知り合いが貸してくれた別荘がまさかの京都。その人があの弦巻家に劣らない大富豪でこの飛行機代も割り引いてくれた。学割も効いてまさかの半額以下。樋口一葉さんを一人旅立たせてお釣りが来るといふ謎。金持ちが怖く思えたな。

本当は全部費用を持つとうとしたらしいのだが、鰐部がそこだけは譲らなくて多少は払うことにしたのだとか。最初は半分の予定だったらしいが、いざ請求がくればさらに少ない金額だったとか。さすが大人。手段が巧妙だ。

「あ、萩近くん富士山見えるよ！ ほらー！」



「見りやわかるからくつつくこつち来るなな。それと騒ぐな」

「富士山おつきいね〜」

「聞いてねえし……」

「ゆりちゃんは萩ぼんのこと大好きだよねえ〜」

「え？　なんで？」

「だってそんなに密着してるんだもん」

「これは鰐ちゃんもフオローできないんじゃない？」

横一列が3人、4人、3人となってる飛行機で、俺は一番右の窓側に座っていた。左横が牛込で、その横が鰐部。通路を挟んで二十騎、その横が鵜沢だ。

そんな席順で、俺は肘をつきながら窓の外を眺めていた。それにも拘わらず牛込は富士山見たさに窓に近づいた。そうなれば当然体が当たる。そんなイジれる状況をあの二人が見逃すわけもなく、すぐさま指摘し始めた。

この状態は鰐部も庇うことはできず、周りに迷惑がかからない限り静観を決め込むうだ。ため息をついて視線を逸らしたからな。

「わ、私別に萩近くんのこと好きじゃないから」

「ほんとにー?」

「お姉さんたちが納得できる理由を言ってごらん?」

「同じ年じゃん。……理由も何も好きじゃないのは好きじゃないの!」

「じゃあなんでゆりは今も萩近にくっついてんの?」

「これは動かぬ証拠じゃないか?」

「ふえ!」

なんでこいつ気づいてなかったんだよ。普通分かるだろ。……あー、馬鹿だからか。

鵜沢に指摘された途端、俺を突き飛ばすように離れた牛込は、何か言い返そうとしていたが結局言葉が見つからなかったのか、鰐部を盾にして顔を隠した。そんな反応するからあいつらが止めないのだという加減気づけばいいんだがな。

空港に着いたらまさかの送迎リムジン。これは誰も予想してなかったのだが、時間を無駄に消費しても仕方ない。お礼を言って真っ先に車の中に入ると、後から四人も入ってきた。……とところで、ナチュラルに毎回牛込が横に来るのだが、これも無くせばからかいが無くな……るわけでもないか。それはそれで何か言いそうだな。俺は無視するから何でもいいけど。

「皆様、ご到着致しました。こちらが皆様にご宿泊していただく宿となります」

「……これが別荘」

「小さかったでしょうか？」

「いやいや逆ですから！ 予想以上に大きかったので驚いたんです！」

「これより大きいのもあるらしいんだけどね……」

「「え!？」」

これだから金持ちは……。まあ、この大きさなら不便なこともないだろう。2階建てでテラスがあるんだからな。横から温泉もあるって聞こえたが、これマジで別荘なのか。旅館にでもしてしまえ。

設備のことを教えてもらい、気になったことも聞き終わったら執事の人は帰っていった。明日の飛行機に間に合うようにまた来てくれるらしい。いたりつくせりとはこのことか。

「寝室も問題なさそうね」

「せっかくだから一緒の部屋で寝ない？」

「それはいいけど、私たちがじゃベッドは動かせないわ。せいぜい二人ずつね」

「部屋割りは寝る時に決めよ。今はそれよりも海だよ！」

「さあ行くよりイちゃん！」

「おうさ！」

「二人とも早すぎない!? ……行っちゃった」

「服の下に既に着てたのね。合宿ってことを忘れてなかったらいいのだけど」

ツツコむところはそこだけか。俺はボールやボートをいつ膨らませたのかが気になったんだけどな。あれは普通時間かかるだろ。ここに来るまでは鞆に締まつてたはずだし。それとこの場に男がいたのに、水着を着てるからって躊躇いなく服を脱いだことも驚きだわ。それとせめて服は片付けて行け。

俺たちも着替えを済ませ、二人の後を追いかける。と言っても俺は海に入るのが目的ではないし、鰐部と牛込も海の家のお店長に一言言ってから遊びに行くらしい。お前らは保護者か何かか。

「お、来たな！ さつきリイから話は聞いた。さつそく働いてけ！」

「……リイって意外と面倒見いいよね」

「忘れがちだけどね」

日に焼けた肌をしている店長は、ノリが軽く気前が良さそうだった。鵜沢とどういう知り合いなのかは簡単なことで、鵜沢の父親と同じ大学のサークルにいたらしい。それで今になっても付き合いがあつて、それで鵜沢のも知り合ったということだ。

「話を通つてるならそうさせてもらいます。じゃ、お前らは好きに遊んでこい」

「うん。頑張つてね。後でお客さんとしてここに来るから」

「いいからさっさと行け。それとナンパは躲しとけよ。下手に喋らず一言で断つて離れりゃなんとかなる。ならなかつたら周りに助けてもらえ」

「ありがと♪ 行つてきます！」

「なんだかんだでゆりの心配するのね」

「面倒事に巻き込まれたくないだけだ。余計なこと言つてるとシメるぞ」

「ふふつ、それじゃあまた後で」

鰐部つて案外ああいふ事言ってくるよな。基本的にストッパーなんだが、止める相手がいなくなるとな。軽く一言だけだが。

二人がいなくなつたところで、仕事の内容を覚えてもらう。わりとすぐに記憶できる

方だから、忙しくなる前にそれなりに動けるようになった。それでも客の数が数だからしんどかったんだけどな。

「お疲れさん玲音」

「お疲れ様です。海の家ってこんなに忙しいんですね」

「だいたいこんなもんだな。今日は人数がギリギリだったが、明日は増える。ま、ちつたあ楽になるだろ」

「だといいですけどね」

「それよか飯食えや。好きだけ食っていいぞ！」

「ありがとうございます」

食材を借りて食べたい分だけを作る。大量に食べてもいいんだが、晩飯をあまり食べられなくなるのも嫌だしな。腹八分目がちょうどいいだろう。

食べ終わって食器を片付けたら今日は上がりだ。給料は明日の分と合わせて貰うことになってる。店の飲み物をもらってもよかったんだが、今飲みたい炭酸飲料が売り切れてるから自動販売機で買うことにした。

——それで面倒事に巻き込まれたわけだが

「——だからあ、今から一緒に遊ぼうって」

「あの、ですから友達と来てるのでいいですって」

「それなら友達も一緒にさ」

ナンパだナンパ。海とナンパはセットなのかは知らないが、飲み物を求める俺に対して自販機の前でナンパとはな。今だと遠回しに嫌がらせさせられてるとしか思えないな。それにその相手が相手なんだよな。一気に機嫌が悪くなつたぞ。

飲み物を買いたいのが、買うためにはナンパしてる馬鹿どもを追い払わないといけない。鬱陶しくて腹立たしいが、初めは穏便にしてやろう。その後は向こうの出方次第だ。そんなわけで俺はナンパされてる奴の後ろから声をかけつつ肩に手を回すことにした。

「何してんだゆり。合わせろ」

「わっ、ビックリした。あ、合わせるって……」

「あん？ 誰だテメエは」

「それはこっちの台詞だ。俺の女に何しようとしてる？」

「れ、レオくん……」

牛込の肩に回していた手に力を入れて体を引き寄せる。牛込が頬を赤くして黙り込んだが、むしろこの状況だと好都合だ。ナンパしてた馬鹿どもが悪態つきながらどこぞへと消えて行ったからな。

もつと突つ掛かつてくれたら久々に喧嘩できたんだが、そこまでにはならなかったな。もつと非道だったら楽しかったんだが、それは高望みつてやつか。

「あいつらどつか行つたぞ。……おい牛込」

「ほえっ!? あ、うん……ありがと……」

「言つたのにナンパされやがって。……他の三人は?」

「みんなはあつちにいるよ。ジャンケンに負けた私がジューズを買いに来たらナンパされちゃって」

「あーね。じゃあ買うもん買つたら向こう行くぞ」

「うん」

他の三人と合流してからは、昼寝してた。この後練習があるつてことを本人たちが忘



れてそうだが、そこは本人たちが決めればいいこと。やらないならやらないで飯を作る時間を早めたらいい。海から上がったら真つ先に体を洗うだろうしな。その間に作ればいいだろう。

そうして別荘に戻ったらやはり女性陣は体を洗うために風呂へと向かっていった。一足先に戻ってお湯は貯めといてやったから、すぐに温泉を楽しめるだろう。俺は予定通り飯を作るとしよう。安定のカレーだ。やりやすい。

「萩ぼん誘惑に負けて覗いたら駄目だよ〜?」

「やるかアホ。魅力的だと思っただことないからな?」

「えー? じゃあまずはゆりちゃん裸見てみるー?」

「じゃあつて何!? そんなの嫌だからね!!」

「あ、逃げた」

「そりゃあ逃げるでしょ……。馬鹿なことしてないで私たちも行きましょう」

鰐部が牛込の後を追いかけて、鶯沢に引きずられるように二十騎も風呂場に行く。俺はいつも飯を食ってから風呂に入るからな。この役回りはちようどいい。俺は食べる量が多いが、あいつらはそうもいかないだろう。作る量には気をつけないとな。用意して

もらったものを無駄にするのはよくない。

てつきり長風呂するかと思つたが、四人はすぐに上がつてきた。晩飯を食べて食休みすれば練習するらしい。その後にもう一度入り直すのだとか。練習を忘れてなかつたことに感心しかけたが、鵜沢と二十騎が忘れてたあたりそうもいかないな。

サポーターつて言つても、俺にできることはほとんどない。せいぜい演奏を聞いて感想を言うぐらいだ。機材の準備とか片付けぐらいは手伝うし、作詞作曲も少し囁つてる程度だから似たようなもんだな。

明日は朝から演奏して、昼前から海で遊び、風呂を済ませて掃除と片付けをしたら帰るらしい。鵜部らしい予定の組み立てだな。明日の予定を聞いた俺は、風呂を済ませた後、部屋に向かわず飲み物を片手にテラスに出ていた。一人くつろいでいると隣に腰掛けてきた奴がいた。

わざわざ肩が触れ合う程距離を詰めなくてもいいと思うのだが、風で靡く髪を片手で抑えながら微笑んできたのはやはり牛込だった。鵜部と鵜沢だったらある程度距離を取つて座るし、二十騎なら不意打ちがたら飛びついてくるからな。

「女子トークはしてこなくていいのか？」

「それはもういっぱいしたからね。まだまだ話せるけど、ちよつと風に当たりたかつた

し」

「あつそ」

「うん。……気持ちいい風だよ。波音も聞こえるし」

「それもあがるが、上見たほうがさらに楽しめるぞ」

「上？ あ……、きれい……」

「町明かりがないからよく星が見える」

俺の言葉に相槌を打った牛込は、空を眺めながら星座の名前を連ねていく。学校で習うような有名な星座だけじゃない。凶鑑に記されているのを覚えているのだろうか。俺が知らない星座もあげていく。それで得意げな顔をするあたり子供だって思うんだがな。

「あのね。風に当たりたかったってのもあるんだけど、もう一個理由があるんだ」

「……なんか話か？」

「えへへ、外れだよ。話ではあるけど、改めてお礼を言いたかったから」

「お礼？ あー、ナンパの件か。あれは飲み物買うのに邪魔だったから。場所が違ったら放置してたわ」

「あ、あはは。でも助けしてくれたのは事実だし——ありがとう」

礼なんかいららないんだけどな。本当にたまたまなわけだし。本人がそうしたいならそれでいいけどさ。

礼を言ったら満足したのか、牛込は部屋へと戻るらしい。立ち上がってこつちを見下ろしてくる牛込は、この状況のせいなのかいつもより女性らしく見える。

「あの時にね。君が……その……お、俺の女……って言ったじゃん？ 手っ取り早いからってのは分かるけど……、その……ドキってしちやつたんだ。……おやすみ！」

「脳検査してこい……って聞こえてないか」

まったく、らしくないことはするもんじゃないな。

## 16話

合宿二日目の朝。今日は朝ご飯を食べたらさっそく練習の日なんだけど、昨日は萩近くんにご飯作ってもらったから、今日は私たちで作ろうってことになってる。このことは萩近くんにも伝えてるからかな、まだ部屋で寝てるみたい。

休める時に休んでほしいから朝ご飯ができるまで待とうってなってただけど、そろそろ出来るから呼びに行かないといけない。私が呼びに行こうとしたんだけど、エプロンを外そうとした手をリイに掴まれた。

「どうしたの?」

「アタシが起こして来ようかなって。いつつもゆりに萩近のこと任せてるからこれくらいはね」

「別に気にしてないんだけど……、リイがそう言うなら。……あ、変なことしちや駄目だよ?」

「大丈夫大丈夫。ゆりを差し置いて寝取ったりしないから〜!」

「ねとっ!? そ、そういうことじゃないし! それに私そういう目で見てるわけじゃないもん!」

「ゆりちゃんゆりちゃん! そういう目ってどういう目なの?」

「はいはいその辺にしなさい。リイも早く起こしてきて」

またイジられそうになったところで七菜が止めに入ってくれた。七菜が止めに入るとリイもひなも大人しくなるんだよね。それで結局リイが起こしに行つて、私たちが食器の準備も済ませることになった。リイが何もしなかつたらいいんだけど、ひなじゃないんだし大丈夫だよね。

しばらくしたらリイと一緒に萩近くんがリビングに来た。萩近くんの様子を見る限り普通に起こされたみたいだね。リイが何もなくてよかつたよ。そうやって安堵してたらリイにブーイングされちゃったけど、これは普段の行いがそうさせてると思うんだよね。

四人で用意したのは軽い軽食。お昼を海の家で食べることを考えたら、緑黄色野菜を今多めに食べたほうがいいだろうってことで、テーブルの真ん中に大皿を置いて野菜が盛られてる。私たちが作った朝ご飯は萩坂くんにも好評で一安心できた。

今日の練習は個々人のスキルアップを目的にした練習が中心だった。みんな自分で課題が分かっているから、うまい人の動画を見たりひたすら弾いたりと自分のやり方で取り組んだ。私もギターの練習をするんだけど、萩坂くんもギターの経験者だから意見を聞きながら練習することにした。

「経験者つってもほとんど素人も同然だぞ？」

「それでも全くの素人じゃないでしょ？ 一緒に考えてくれるだけでいいから」

「……役に立つなんて思うなよ」

「あはは、ありがとう」

そんなことを言っただけど、萩坂くんは私とは考え方が違うから凄く助かったんだよね。私が見落とすことを指摘してくれるから。反対に萩坂くんが分からないことは私に分かった。そうやって二人で練習していると時間が来て、最後に曲を通して練習は終わりってことになった。

練習が終わったら楽器や機材を片付けて部屋の掃除をする。機材は用意してもらったものだから、言われた場所に固めという楽器だけ持ち帰る。それも終わったら今日も海で遊ぶ。萩坂くんは今日もバイトだね。一緒に遊べたらいいんだけど本人はその気

がないし、そもそも異性がばっかりな状態じゃ遊びにくいのもあるのかな。

海で遊ぶ前に五人で海の家に寄ったんだけど、昨日と違って海を家の従業員の数が多かった。人が増えるとは聞いてたけど、三人増えるって増え過ぎじゃないかな。

「お、来たか玲音！」

「来ましたけど……、人数だいぶ多いですね」

「まあなー！ そんなわけで玲音は今日休み！ 有給ってことにするから遊んでこい！」

「え、いやでも……」

「人の好意は受け取れっの！ それに、わざわざここまで来たんだ。海を満喫してこい」

「……わかりました。ありがとうございます」

さすがに店長さんに言われたら萩近くんも折れたみたい。そうは言っても彼は元から海に入る気はなかったみたいだから、一旦別荘に戻って着替えてくるらしい。



「……で、牛込は一人で何してんの？」

「取り残されました」

「何言ってるの？」

彼を待つてる間に日焼け止めを塗ろうってことになったんだけど、見事に嵌められたんだよね。私が最後に背中に塗ってもらったことになったんだけど、その時になってみんな海に行っちゃった。追いかけたかったけど、なかなか捕まえられないだろうし、その間に日焼けしちやいそうだから諦めた。

事情を知った彼が、もの凄い馬鹿にした顔で肩に手を置いてきた。私をからかっただけのことなの分かって、軽く肩を押す。もっと怒ってもいいんだけど、今の私はそういうことができない。だって日焼け止めを背中に塗ってもらったとしたら、この場にいる彼にしか頼めないのだから。

「さてと、適当にぶらついてくるか」

「ま、待つてよ！」

「あ？　なんで？」

「分かってて言ってるでしょ……」

「分かんないなあ」

「絶対嘘だよお……。……。あのね……。……。その……。……。日焼け止め塗ってほしいなあって……。……」

「やだ」

「断らないですよ！ 恥ずかしい思いして言ったのに！」

絶対に私のことからかかってるよ。ニヤついてるもん。彼ならそれすら抑えられるはずなのに、わざわざあからさまにしてるってことは、そういうことだよ。でも、ここで彼までいなくなったら私は遊べない。遊んでもいいけどそうしたら背中の方だけ日焼けっていうシチュールなことになっちゃう。

そんなことは絶対に嫌で、何がなんでも羞恥に耐えて彼に日焼け止めを塗ってもらわないといけない。だから私は彼の腕にしがみついて必死に食い止めた。そうしたら彼も諦めてくれた。

「さっさと終わらずで。脱げ」

「言い方がやらしいよ！」

「日焼け止めってそうやって塗るもんじゃなかったっけ？ 違うなら水着の部分だけ避けるけど、どうするんだ？」

「……………うう……………」

「……………なんか俺が変態みたいな状況になったな」

「自業自得だからね！ 恥ずかしいのはこっちなんだから！」

うつ伏せに寝転がって上の水着の紐を解く。うつ伏せだから隠せてるけど、恥ずかしいものは恥ずかしい。異性にこんな状態を見られてるせいもあって、顔が熱くなる。分  
かりきつてることで、真つ赤になつてるんだらうね。

彼は日焼け止めを塗り始める前に声をかけてくれたんだけど、恥ずかしすぎてなんて返事したかは覚えてない。変な返事はしてないはず。

「ひゃっ！」

「なんでそんな声上げんだよ。どういふもんか分かつてるだろ」

「わかっ……………てる、けど……………！ あっ……………人にやられると……………んっ……………なんか違って……………！」

「まじで声抑えてくんね？ 俺が通報されかねないわ。それに他の三人は声抑えられてたんじゃないのか？ 妹にやった時もお前みたいな反応しなかつたんだが」

「そう……………だけど……………っ！ んあっ……………！ ……なんでか……………声……………出ちやうんだ……………も

んっー！」

「せめて手とかで口塞げ」

「う、んっ。……んんっ、んんー！」

なんか口を抑えてたら余計に変な感じになっちゃったんだけど。背中とか腰、肩とかまでやってもらっちゃって、彼の手がダイレクトに肌に当たるからかな。なんかむずむずしい感じもしちゃう。なんか背中がゾクゾクってなって、呼吸が乱れちゃう。これ続ければ、なんか大変なことになりそう……。

「よし終わり」

「ふえ……？　もう……おわひ……？」

「不満か？　なんならやらしくやってやるが？」

「う……ううん。……らいりようふ」

「駄目だなこりゃ」

息が乱れてうまく力が入らなくて、私の代わりに彼が水着の紐を締めてくれた。私の体を起こしてもらったんだけど、全然自分で起きてられなくて彼にもたれかかっちゃっ

た。この状態ってほんと周りの人に勘違いされそうだよな。

——顔を赤くして呼吸が乱れてる女子が男子にもたれかかる

うん。彼の危惧どおり通報されてもおかしくないや。彼ならこういう状況すらうまいこと躲しそうだけどね。

「少しはマシになったか？」

「うん……。でも……。もうちよつと待って」

「世話の焼ける奴。……お前敏感すぎなんだよ」

「そう言われても、どうしようもないじゃん。……りみとかお母さんに塗ってもらう時はこんなことにならなかつたんだけどね」

「男なら駄目なのか？」

「それか君だからかな。……うう」

「自滅すんのかよ」

ふと思ったことをそのまま口にしただけなのに、後からすつごい恥ずかしくなった。彼にもたれてかかっている状態だから、彼が私の顔を見ることはない。それが唯一の救いかな。

救いではあるんだけど、この状態は状態で彼から追撃されることに繋がっちゃった。顔が見えないことを理由にからかいたがる彼は、体を少し動かして後ろから私の体を包み込むように抱きしめてきた。それだけで終わらなくて、耳に口を近づけて名前を囁かれた。たったそれだけなのにまた力が抜けちゃった。

「ほんと耳弱いなあ。ここまで弱いとなると致命傷だぞ?」

「きみのしえい」

「なんでだよ……。ま、ふざけるのもこれくらいにしてそろそろ行くか」

「う……。ん……。立たせて?」

「……。仕方ないか」

彼に立たせてもらって、手を引かれて歩く。彼の追撃のせいで回復しかけてた私はまた駄目になっちゃったから、彼の腕にしがみつくようにしないとうまく歩けなかった。これだとまるでカツプルみたいで、そう見られるのは嫌だった。でも彼が平然とするから、そっちのほうが不満だった。

だっただけ……。ふと思いい出したように彼に水着を着てる私を褒められた。

——ズルいよ。本当に……。だってそう言われたら不満がなくなっちゃうじゃん。

これすら彼の計算だったのか、それともただの思いつきだったのか分からない。でも、たとえ計算だったとしても彼と一緒に選んだ水着を着て、それを褒められたのは嬉しかった。

みんなと合流したらいろんなこととして遊んだ。スイカ割りをしたし、海上バレー的なこともした。海に潜ったりしたし、貝殻探しなんてこともした。

楽しい時間はすぐに過ぎ去るもので、休憩しようって休んで時計を見たらもう戻らないといけない時間だった。萩近さんの好意に甘えて先に戻らせてもらって体を洗い流す。萩近くんは給料を貰うことも兼ねて片付けをしてくれた。テキパキし過ぎだよ。独り暮らしで鍛えられたのかな。

飛行機に乗っていざ帰るってなった時にひなが突然騒ぎ始めた。その理由がなんともひならしくて、『花火するの忘れてた!』だった。だから地元に戻ったら花火をするこ  
とになった。萩近くんも流れに合わせてくれたしね。

~~~~~

家に帰ってから、今朝萩近と話したことを思い返した。昨日の夜の女子トークとも合わせると、なんとも不思議な話なんだよね。

『だから、萩近くんのはそういうふうに見てないってば。友達だつてば』

それがゆりちゃんの本心だつてことは、七菜もひなも分かった。

そして萩近は――

『あいつを彼女になんてしたくねえよ。友達とすら思つてないんだしな』

これが二人の本心。ゆりちゃんが面白い反応してくれるからネタはやめないけど、思つてた以上に二人の関係はドライなんだね。

「簡単に壊れそうだよねえ。もしそうならゆりちゃん大丈夫かな……」

17 話

夏休みが終わり、ダルい始業式を行つてからはまた退屈な学校生活が始まった。始業式のダルい点を上げるとすれば、表彰の時間が長いのと校長の話が長いのが上げられる。

夏休みの間は部活の大会が多いようで、うちの学校はわりと強豪として知られる部活が多い。その中でも飛び抜けているのが男子ソフトボールテニス部だ。全国の常連校だからな。

たいていいくつかの部活が呼ばれて壇上で順に受け取るのだが、男テニだけは違う。あいつらは一つの部だけで壇上を埋め尽くす。その中でもさらに飛び抜けてる奴は、一人で複数回表彰状やメダルを受け取るし、トロフィーまで貰う奴もいる。それ自体は素直に賞賛するが、読み上げるだけでいいだろうって思う。そいつらは大会時に一度受け取ってるのだから。

それで校長の話だが、話が長いという点は他の高校でも十分ありえることだろう。だが、原稿を読み終わったら身内話を始めるのは、ここの校長ぐらいじゃないだろうか。

しかも話がループするし。さっさと引退しやがれ。

そんな始業式が終わって次の日からは課題テスト。夏休みの課題がテスト範囲と
なってるものだ。これはほぼ成績に反映されないから覚えてくる奴は少ない。成績へ
の影響が少ないなんて教師が生徒に教えるなよな。そりゃあ誰も勉強しようなんて思
わないわ。

そんなテストも終われば後は退屈な授業の繰り返し。10月後半にある体育祭ぐら
いしか目立った行事もないしな。ここの体育祭って数年に一回救急車が来るらしいか
ら、あまり乗り気じゃないんだがな。

「ぶっ潰すぞお前らアア!!」

『つたりめえだああ!!』

馬鹿どもがこうやってヒートアップするんだよ。学年対抗らしいんだがな、親の仇で
も取るのかつてぐらいやる殺る気が漲あってんだよ。騎馬戦が種目から消えたのも必ず怪我
人が出るからなんだとか。

そんなわけだから無論のこと棒倒しなんて種目もない。棒引きならあるし、綱引きも

あるのだが、男子には物足りないんだよな。文句を言っても種目が増えないからその二つが一番殺伐とするんだが。

棒引きの場合だと、まずフライングが当たり前。先制で棒を取れそうになかったら棒を掴まずに走り続け、棒を挟んで反対側にいる敵にドロップキック。最低限の時間で棒を確保することが必須条件という頭の悪い戦いだ。最後の方になれば少ない本数に大勢群がることになるのだが、棒に関わつてなくて群がってる奴らは、よく見るとただ乱闘してただけだ。それで人数を減らして引つ張つてる人もノックアウトしようという魂胆。無論棒引きには出場しなかったがな。

一番酷いのが棒引きなのだが、綱引きがその次に酷い。フライングは当然のことながら行われる。勝敗が決したら場所を交代するが、すれ違うメンチを切ることも当たり前。もはや社交辞令として行つてるとも言える。掛け声も「オーエス」じゃなくて「殺す」って直球だしな。

「おらお前らも続けよー。点差ねえし」

「おういえー!」

運動が苦手な人も当然いる。そんな人たちのために用意されてる種目もあり、今から

行われるラケットリレーがそうだ。三人一組のチーム戦で、テニスのラケットの上に乗って、サッカードールサイズのゴムボールを乗せ、決められたコースを走って次の人に渡す。それだけの分かりやすい競技だ。そして地味に配点が高い。

運動できない人たちも熱に当てられてるのか、普段見せないテンションになっていく。これは運動神経がいいやつが出ず、基本的に泥試合となるらしいが、俺達の学年はそうならなかった。出たメンバーが中学時代にもこれと似た競技をやってきたらしい。要はプロフェッショナルだ。結果はもちろんのことながら圧勝。

「丸。あのカーブのときにラケットの角度をあと7度上げて、体を3度曲げておけばもっと早く帰ってこれたぞ」

「さすがですな。来年に向けて調整しておきましょう」
「お前らナチュラルにキモいな」

リレーはもちろんあるのだが、ここの学校はグラウンドがクソだし、指定されてる靴も最悪だ。本気で走ってカーブを素早く抜けようと思つたら一時スケートしないといけない。そうしないと確実にコケるからだ。

滑るポイントが決まったら全員対策できるのだが、人によって靴が滑るタイミング

が違う。つまり不意打ちで滑ることになり、勝つためにはそれに反応してコケずにスケートする必要がある。体幹を鍛えてる奴が有利な勝負だ。

「で、萩近はダントツで帰ってきたと」

「油よりは滑らないだろ」

「……お前のバイトってそんな床なのか？」

「いや喧嘩ばっかしてた中学時代の話」

「どんな喧嘩だよ!？」

発火させられた時はさすがに死ぬかと思った。まあそんな話はどうでもよくて、こかしあいをする女子の恐ろしいリレーがやっと終わったんだが、後はオールスター戦。学年でトップテンの足の速さのメンバーがリレーするやつだ。それに教師陣が2チーム参加して、計5チームで戦う。まあ教師陣の1チームはシニア教師と保護者代表が頑張つて走るっていう微笑ましいチームなんだけどな。

このオールスター戦の酷い話は、ハンデをつけられた教師チームに生徒が負けるってことなんだよな。陸上部の顧問が最初のランナーで、15mのハンデがその人につけられる。リレーという短距離走で15mは大きい。大きいのだが、その顧問は半周で全員

を抜き、残りの半周で差をつける怪物だ。教師してないで陸上選手として世界大会狙ってこいつでレベルだな。

——結果はもちろん教師陣の圧勝。生徒チームでさえ周回遅れとか酷い話だ

体育祭の結果は僅差で二年の勝利。俺達一年は2位に終わったわけだが、二年が勝つのも毎年のことらしい。三年は大半が引退してるから運動能力が落ちる。一年は二年ほどまだ鍛えられてない。そのことが如実に現れただけだ。

体育祭が終わり、運動部が後片付けをする。帰宅部は準備も片付けも一切しないでいから楽だ。シャワーを浴びたらバイトに行こうと思っていたのだが、牛込と鰐部の二人に止められて断念。やることもなく、家でのんびりと過ごして早めに寝ようと思ったのだが、帰り道の途中にある公園を横切った時に声をかけられると同時に肩を叩かれた。

「やけにテンション高いな、牛込」

「えへへ、君を待ってたからね」

「話があるなら携帯にかけてくりやいいだろ」

「君が出てくれないんだもん」

「は？ ……あー、教師に見つからないようにするために電源切ってたな」

携帯の持ち込みを一応禁止されてるからな。見られないようにしとけば回収されないし、荷物検査なんてクソみたいなこともないしな。今回の牛込みみたいに不意打ちで電話がかかってくることを警戒して電源を切ったんだが、戻すのを忘れてたな。電源を入れて通知を確認しても牛込からの着信ぐらいだな。

「で、話ってなんだよ」

「次のライブが決まったから、君にも来てもらおうって思つて」

「……行かないといけないのか？」

「来てくれてもいいじゃん。サポーターなんだし」

「仮つて言えるレベルだけだな」

「来てくれた時は凄い助かつてるよ」

何もしてない気がするんだけどな。合宿の時にやってたことと何ら変わらない。できることをしてるだけだ。それで助かつてるなんて、俺は到底思えないんだがな。牛込は本気で言つてそうだからそのことは黙っておくけど。

ライブね。俺が行ったあの最初のライブ以降も何度かしてららしいんだが、なんで今さらになって誘ってきてるんだらうな。それにバイトのシフトは決まってるから日程次第ってことを理解してるはずだし。

「ライブの日程は再来週の金曜日だよ。夕方からだし来れるかなって。たしか金曜日はいつもバイト入れてなかったよね？」

「空いてるが……俺のシフトまで覚えるなよ」

「……ごめん。でも君をあまり困らせたくなくて、できるだけ把握してたら無理にお願いすることもないかなって……」

「……はあ」

急にしおらしくなりやがって、調子が狂うたらありやしない。俺の機嫌が悪くなつたでも思ったのか、牛込は目を伏せた。勘違いされても面倒だから、目を伏せてる牛込の頭を撫でてライブに行くことを伝える。

目を丸くして驚いた牛込だったが、すぐに嬉しそうにはにかんだ。こいつはこうやって能天気そうにしてる方がらしいんだよな。

「変に気を回してくるな。そっちのほうが面倒だわ」

「……でも、いつも迷惑そうにしてるし……」

「まあな。そこは否定しない。けどな、お前に気を回されてしおらしくされる方が調子狂うんだよ」

「……我儘」

「そうだな」

「自分勝手」

「俺だからな………つていきなりなんだよ」

「文句を連ねてた牛込が急に抱きついてきた。こういうことはするなつて前に教えた気がするんだがな。両肩に手を置いて引き離そうとするも、牛込は回してきた手に力を込めて抵抗してくる。何がしたいのかさっぱり分からないから肩から手を離して、今度は両頬を挟んで目を合わせせる。」

「こういうのはやめろつて言っただろ。自滅するなら尚更だ」

「い、いいじゃん。君が自分勝手にするなら、私も自分勝手にするつてだけだよ」

「何張り合つてんだよ……」

「張り合つてないもん。……これからもいっぱい誘うからね」

「好きにしろ。行くかは俺が決める」

「うん！」

ようやく離れた牛込に軽くデコピンして止めていた足を動かす。帰り道が一緒だから、自然と牛込が住むマンションの前まで一緒になる。体育祭の話を聞かれたから話してやったが、話を盛るなって言われた。事実なんだがな、牛込には理解できない世界らしい。

ライブ会場は安定のSPACE。数カ月ぶりに会ったオーナーに生存報告をして、最近の生活のことを話す。大家がいい人で家賃を下げてくれたからなんとか生きてられている状況だ。バーガー店のバイトとは別にやっつてることもある程度収入があることだしな。

オーナーが認めたバンドだけがライブをできる。それがSPACEの在り方だ。だから中途半端なライブをするバンドなんて存在しない。それはGlitter*Greenも同じこと。着実にステップアップしてただけあって、さらにレベルの高いライブをできるようになっていた。

ライブを見に来いとは言われたが、それ以外は特に言われていない。ライブが終わったら颯爽と帰って飯を食べる。どうせライブがどうだったかを電話で聞かれるだろうと思っていた。

その予想は半分当たって半分外れた。

電話をかけてきたのが牛込じゃなくて鰐部だった。

珍しいと思ったが、どうやら真面目な話らしい。軽く聞いてみると流石に驚く内容だった。

——牛込が演奏できなくなったらしい

18話

鰐部から話を聞いたが、具体的なことは牛込本人に聞かないと分からない。分からないのだがぶつちやけどうでもよかった。牛込から何か言ってくるなら話は聞く。相談があるなら受けはする。だが俺から動くことはない。

——このままいけば俺が当初に望んでた状態になれそうだからだ

人でなしとでも言われるだろうな。人情が無いと。だが周りになんと言われようと思ったことではない。今までの方が、俺が望んでた生活から離れているのだから。望みが叶えられるかもしれないのだから。

そんなわけで特に俺から動くことなく日々を送っていたのだが、俺を放っておいてくれる人はそうそういないのが現実だ。こいつにバイト先に突撃かまされるのはこれで二度目だな。

バイト終わりに合わせて来られるのは牛込ぐらいだったが、こいつもやるようになってたのか。

「何しに来た鰐部」

「私が何をしに来たのかはあなたなら分かりきってるんじゃないかしら？」

「牛込のことだろ？ 俺はどうする気もないぞ」

「なんでそんなこと言うのよ……。なんとも思わないの？」

「わかりきってることを聞くなよ。なんとも思わない当然だろ」

「……！」

いったいどういう思考をしたら俺が牛込のことを気にかけてるなんて思うんだよ。常日頃から非協力的だったじゃねえか。仕方なく合わせてただけって分かるだろ。

俺の返答が全くの予想外……なんておめでたい思考を鰐部はしていない。予想の範囲内だが外れてほしかった。そんな反応だな。俺への失望でもあるのか、唇を噛んだ鰐部だったが、簡単には引き下がらないらしい。

「手を貸してよ……」

「俺が何かしたところで何も変わらないだろ。俺一人の力なんて無いにも等しい。お前たちのほうが牛込と過ぎして時間が多いんだからな」

「時間はそうね。でも、……それだけよ。ゆりに一番影響を与えてきたのは間違いなく

萩近くん、あなたよ」

「嘘臭え話だ。俺は何もしてないんだぞ？」

「してるわ。ゆりは萩近くんという時、少し違う表情で楽しんでるもの。だから……お願いだから手を貸して！ 今まで何もしなかったわけじゃないわ！ 三人で話し合っ
てできる限りのことをした！ それでも好転してないのよ！ だからもうあなたに頼
むしかなくて……！」

道端でこんな深々と頭を下げられてもな。俺が悪いみたいなことになってうざつ
たいんだが。それに、さつきも言ったがメンバーで出来ないことをなぜ俺なら出来ると
思っただがる。演奏のことで躓いてるなら尚更だ。

だがまあ、頭を下げられてここまで頼み込まれるとな——

——嫌気が差す

「視点を变えて考えて見るんだな。今のお前らは視野が狭まつてるだけだ」

「え……、それってどういう……」

「一旦頭をリセットして状況を整理しろ。牛込がどういう状況に合っただけか」

知らないが、そこも改めて踏まえてみる。それでも無理ならもう諦めるんだな」
「萩近くんは!？」

「手を貸すわけ無いだろ。面倒だし。ま、せいぜい頑張るんだな」

鰐部の頼みを断つて家に帰る。だいぶ文句を言われたが、残念ながらそんなの俺には届かないんだよ。

——なんせ本人の口からは何も聞いてないのだから

だから俺は他の奴になんと言われようと行動する気はない。本人の口から必要なだと言われただけ、なんて思う奴もいるだろう。否定したところでそんなことを言う奴らは聞く耳を持たない。決めつけてかかるのだから。

だがまあ、一つだけ言わせてもらおうとすれば

——勝手に出しやばって善人気取りでもしたいのか？

と、なるわけだ。頼まれるか頼まれないか。違いはそこしかないってことに気づかずに口出しされてもな。全員がそうとは言わない。そのことを分かっているだけでも言ってくる奴もいる。

だが俺の考えは変わらない。本人に頼まれたら最低限の協力はしてやる。ただしそれだけだ。今回の場合なんて尚更な。演奏できなくなつたなんて、どう考えても本人が

乗り越えるしかないんだ。周りにできることは支えてやるだけ。

担いではないけない

引つ張り上げてもしけない

やっていいことは、一人で歩めるように支えるだけだ。崩れそうになったら掴んでやる。立ち上がることにすらできない今なら取っ掛かりを用意してやる。それだけだ。それ以上は本人のためにならない。それが俺の考えだ。

そうやってグリグリから離れた生活を送ることにしたのだが、鰐部がバイト先に来た一週間後。正門で見たことがある光景が広がっていた。放課後に男子たちが群がるということ、他校の女子が来たということだろう。

あいつらも飽きないなって思い、素通りしようと思つたがそういうわけにもいかなかった。今回絡んでる男子たちが普段素行の悪い奴らだったことと、絡まれてる女子が知り合いだったからだ。

「どけ」

「ア？　なんだよ萩近」

「何しに来たんだ。こうなるから来るなって言つただろ」

「あ……萩近くん……うん。……ごめん」

「……はあ。用があるんだろ？ 移動するぞ」

「おい待てよ萩近ア！ 何かつでえ!？」

「うるせーな。今虫の居所が悪いんだよ。死にたいなら付き合つてやるが?」

「……チツ」

突っかかってくる馬鹿の腹にジャブを入れて怯んだところで髪を掴む。速攻でここまでやると向こうも実力差が分かったようだ。大人しく引いてくれたところで牛込の手を掴んで移動する。場所は……喫茶店でいいだろう。

こんな状態のくせしてなんで来たのかは分からないが、それは話せば分かることだろう。謝ってくる牛込にそこまで気にしてないと伝え頭を撫でる。これくらいで調子が戻るなら鰐部たちも悩んでない。とりあえず謝るのは止めてくれたから、改めて手を引いて喫茶店へと入っていった。

「で？ お前は何しに来た?」

「………助けて」

「……自分で乗り越えられないのか？ 鰐部たちも手を貸してくれてるだろ?」

「うん。でも……わたし……もうどうすればいいか……分からなくて……」

顔を伏せた牛込は、涙声になつてそう訴えてきた。だからなんで鰐部も牛込も俺ならなんとかできるなんて思い込んでんだよ。そんな前例なかつただろ。

どうしたものか思考するために頼んでおいたミルクティーを飲む。そうしてる間にも牛込はさらに思い詰め、自分を責めてるようだった。顔を伏せている牛込から涙が溢れたのが見えた。

「まったく……手を焼かせてくれる奴だな」

「うえ？ 萩近……くん……？」

「そう泣くなよ。できる限りのことはしてやる」

「あ……う、ううああー」

「だから泣くなつて……」

牛込の隣に移動して涙を拭つて声をかけてやる。たったそれだけのことなのに牛込に泣かれた。それを受け止めてやって、片手は牛込の背中に回して、もう片方の手で牛込が落ち着くまで髪を撫でる。

こういう奴じゃないと思つてたんだがな。知れば知るほど子供な奴だよ。
——さてと、なんとかかしてみるか

~~~~~

11月に入つて最初の土日。私は萩近くに言われて二日間とも予定を空けた。聞けば七菜たちはその事を知らないみたい。つまり二人でどこかに行くつてことになるんだよね。

萩近くんがそんな急に予定を空けられるのか疑問に思つたけど、そこは教えてくれなかつた。たぶん強引に空けてくれたんだらうね。私のせいで悪いことさせちゃつた。そう思つた途端頭を軽く小突かれた。顔を上げたらそこには彼がいて、とても呆れた顔してた。

「迷惑だと思つたらこんなことしねえよ」

「……でも」

「でもない。それよか電車乗るぞ」

「うん」

萩近くんについて行って行って電車に乗る。今から向かう所は都会から離れてるみたいで、彼は都会よりそういうところの方が好きみたい。椅子に並んで座ってから気づいたんだけど、こうやって彼から誘われるのは初めてなんじゃないかなって。

そう思ったら気恥しくなっちゃって、気を紛らわせるために外を眺めることにした。でも窓側は彼が座ってるから結局彼の顔を見ちやうことになっちゃう。

「ん？ どうかしたか？」

「う、ううん。なんでもないよ」

「そうか？ だいが電車に乗ることになるから寝てもいいぞ？」

「え、それは悪いよ……」

「気にしなくていいのにな。俺は寝るし」

「え？」

「おやすみ」

「ええ……」

彼はどこでもすぐに寝付けちやう人みたいで、目を瞑ってしばらくしたら静かに寝息

が聞こえてきた。普段はあんななのに、寝顔は穏やかだよ。

(いつも文句ばつか言うのに、こうやって気にかけてくれる。本当に優しい人だよね)  
瞼に掛かっている前髪をそつと横に流してみる。いつも話に振り回されてたけど、こうやって落ち着いてみたら整った顔立ちで人の良さそうな感じなのね。……見てたらこつちも眠たくなってきちゃった。

「ここから10分くらい歩いたら目的地に着くわけだが、……どうしたんだ？」

「なつ、なんでもないから！」

(お、起きたら目の前に彼の顔があつたんだもん！ ビックリしすぎて変にドキドキしちゃった……！ 恥ずかしい！)

「……なんでもいいか」

彼の横に並んで一緒に歩く。いつの間にかこの距離間が当たり前前になつてくる気がするし、こうして並んでると落ち着いてられる。隣りに居てくれるだけなのね。

海が見えるし、反対側にはすぐ近くに山がある。海と山に挟まれたとこだけど、不思議なことに窮屈な感じがしない。地元と違って自然が溢れてるからなのかな。それに、

ここに来てから彼の表情がどこか嬉しそうになってる。この場所が好きなのかな。

——『明星館』

それが彼と一緒に来た場所の名前。和風の旅館で心が安らぐ空間が広がってる。そんな館んだけど、ここは彼のお婆ちゃんが経営してる旅館みたい。特に手続きすることなく部屋に案内されたんだけど……。

「もしかして同じ部屋？」

「宿代を支払わないからな。それくらい我慢しろ」

「それはありがたいことだし、文句なんて言わないけど……」

「あー大丈夫大丈夫。お前が横で着替え始めても欲情しねえから」

「それはそれで傷つくかな！」

「面倒なやつ」

なんでそんなこと言われなさいいけないんだろ。女性としての魅力がないって言われてるようなことだから反論しただけなのに。というかそんなこと絶対にしないんだからね。

荷物を置いてお昼をいただいたらすぐに旅館を出ることになった。彼に手を握られ

て山に入ること十数分。途中から整備されてない道を歩いたりして、ちよつと苦勞してたどり着いた場所が凄かった。

——紅葉が広がっているのだから

「紅葉狩りつてとこだな。ま、ここは他に誰も来ない穴場なんだが」

「……すごい。……ここは萩近くが見つけたの？」

「まあな。この地域が好きだからよく散策しててな。その時に見つけた」

「ふふつ、腕白な時もあったんだね」

「うるせ」

「……あ」

彼が見つけた秘密の場所。その中でも彼のお気に入りポイントがあるみたいで、彼はその場所に移動した。それを見て私は言葉を失った。

——彼がそこにいるとすごい絵になるから

元々綺麗な空間だったのに、彼がその場所にいるとそれで完成されたような光景になる。鮮やかな状況で、私がいるのはこの場を汚してるんじゃないかって思うぐらいだった。

でも彼は私を手招きして、私はそれに従ってゆっくりと隣に移動した。肩に手を回されて、彼が見ている景色を見るように促される。今度はもう息を呑むしかなかった。広がる紅葉の隙間から見える海が幻想的だったから。間に人工物も見えないし。

「誰にも教える気はなかったんだがな」

「……え」

「牛込がこんな状態にならなかつたら教えてなかった。……歌かギター、あるいは両方を誰かに否定されたか？」

「……！ なん、で……」

「それぐらいしか思いつかなかったから」

彼に全てのことを話した。私がグリグリの魅力を消してらって話を聞いてしまったことを。歌と同時にギターを弾く。初めての挑戦でギターだって練習してる段階。うまくできてないのなんて分かってた。分かってたけど、いざそんな話を聞いてしまうとショックだった。現実を突きつけられてるように思えて。否定されてるようで。

「——気づいたら何もできなくなっちゃってた」



「そうか。……牛込はなんでバンドをしてる？」

「え？」

「やりたいからやってるんだろ？ 『やりたいこともやらないといけないことも両方やる』 って言ってただろ。客のことなんていちいち気にするな」

「君みたいにそうやって割り切れないの！ お客さんにも……楽しんでもらいたいんだもん……」

肩に回されてる腕を解いて彼の胸を思いつき叩いた。いくらなんでもこんなものしちゃいけないはずなのに、それでも彼は何も返してこなかった。腰に手を回されて、反対の手で頭を撫でられる。引き寄せられるのに逆らえなくて彼の胸に頭を預けることになった。

いつもなら恥ずかしいことなのに、彼の雰囲気が違うからかな。そんな気持ちが出てこなかった。

「歌を歌いたいなら歌えばいい。ライブをしたいならグリグリとしてライブをしたらいい。傷つくことがあるなら俺を呼べばいい。話ぐらい聞いてやるし、場合によっちゃあ動いてやる。一人で抱え込もうとしなくていい。頑張り過ぎるな」

「あ…………うあ…………」

「俺だけじゃないだろ？ グリグリをちやんと抛り所にしろよ。…………これは牛込の心の問題だ。結局自分の力で乗り越えてもらわないといけない。でも、それは周りを頼っちゃいけない理由にはならない。友達って助け合うもんだろ？」

「うん…………うん…………！」

彼に縋りついていっぱい泣いた。家族にもみんなにも心配かけたくなかったから、今まで溜まっていたものを吐き出すように泣いた。迷惑をかけたくない。その思いがむしろみんなと距離を作っちゃってたんだ。それも辛かった。そんなのみんなを信じてないのも同然なんだから。

私が泣きやんだら、彼が一曲だけ歌を歌ってくれた。歌うのは好きじゃないって言うてたのに。

最初は寂しい曲に思えたのに、聴いてるとどこか暖かみがある。そんな不思議だけど綺麗な曲を。

聴き入ってたんだけど、それを聴き終わったらとても不安な気持ちになって彼の背中

に腕を回してギュって抱きついた。こうしないとなくなっちゃいそうだから。そんなふうに思えたから。

「牛込？ どうした？」

「いなくならないで」

「ん？」

「いなくならないで！」

「いきなりどうしたよ」

彼に返事をできなくて、代わりに腕の力を強めた。そうしたらまた彼は頭を優しく撫でてくれた。でも、それだけじゃあ私には何も分からなくて、頭を左右に振った。

「言葉がほしいってか……。そんな心配しなくていい。お前らが活動してる間はグリグリのサポーターとして側にいるから。ま、今回みたいに止まりかけたらどうするか分からんがな」

「絶対にいなくならないで……。ずっとずっと支えて……！」

「つくづく我儘だな。ま、お前に彼氏ができてサポーターは続けてやるよ。高校を出

「たらどうするか分からんがな」

一言余計なのは止めてくれないけど、そのほうが彼らしかった。だからかな、その方が荒れてた心も落ち着くのが早かった。

夕暮れまでここでずっと一緒にいた。話をいっぱいしたわけじゃない。でも、無言の状態も全然苦じゃなかった。心地よかった。

夜、我儘を聞いてもらって距離を詰めて寝させてもらった。今日だけは彼に甘えたい気分だったから。

彼が歌ってくれた曲が心にずっと残ってて、誰のなんて曲なのか聞いた。誰の曲かは教えてくれなかったけど、曲名だけは教えてくれた。

——『あかほし明星』

それが歌ってくれた曲名。

いつか歌ってみたいな。

## 19 話

クリスマスイヴ。イベント好きの日本人がヨーロッパから取り入れたイベントの一つ。本番はクリスマスだというのに、イヴで浮かれるだけ浮かれて次の日からは年末年始に目を向ける。企業によっては一番忙しい時期になる。

飲食店でいえばレストランが代表格と言ったところか。デパートも忙しいだろうな。クリスマスを意識しないでいい販売店なら福袋の用意だろうか。そんな中で暇になる飲食店もある。ファストフードとかだな。つまりバイトからしたら稼ぎ時だ。暇なのに給料は変わらない。最高だな。

「クリスマスイヴにバイト入れないでね」

「は？ 何言ってるのお前」

「グリグリでクリスマスパーティーするから、君も来なさいってこと」

「馬鹿なの？ イヴは店に人が全然来ないらしいんだぞ？ この日に稼がなくてどうする」

楽に稼ぐ。誰しもが喜ぶ展開じゃないか。理想と言ってもいい。それが実現する日なんだぞ。なんでそんな時に働かないなんて選択肢が出てくるんだ。

おかしい理屈なんかじゃない。その日に働きたいから働く。それができるのがバイトのメリットだ。そうだというのに牛込には理解できないことらしい。あからさまに不服そうな顔をしている。不服なのはこっちだと言いたい。

「バイト代をくれるならいいぞ？」

「じゃあ半日は？」

「話聞かねえのな。……半日ね。昼間はあんま変わんねえ気がするんだが、……あ、夜だけ働いていいなら」

「ダメ。そんなことするならお店でクリスマスパーティーするから」

「他の客に迷惑だ」

「大丈夫。事務所の中だから」

「あの社員なら許しそうなんだよなあ！」

あの三十路め。牛込たちが来ると年甲斐もなく浮かれやがる。そんなんだから男が

できないというのに。そんなことは本人の前では言わないがな。前にポロツと言ったから豹変したし。

とりあえず牛込たちが店に遊びに来るようなことは避けたいといけない。最近行動力が増したこいつなら本当に実行しかねない。逃げ道を塞がれた以上諦めるしかないか。

「……はあ、イヴの夜はバイト入れなきやいいんだろ？」

「うん。18時からパーティーだから」

「はいはい。その時間からはバイトしねーよ」

「他の予定も入れちゃ駄目だよ？」

「……」

「なんで目を逸らすのかな？」

こいつ……、俺の行動を読むようになってきたな。それにわりと遠慮が消えてきてる気がする。弁えるところは弁えているんだが、その見極めが上手くなったというか。原因となりそうなのは先月のアレくらいか。

その後もしつこく誘ってこられたから、結局こつちが折れるしかなかった。集合する

場所と時間を聞いたんだが、本気で正気を疑ったな。パーティーどころじゃなくなるだろ。

『パーティーは私の家でするから、18時に間に合うように来てね』

ほんと……何考えてんだか。最初はそう思ったが、牛込がそうする理由に思い当たることがある。だから、きつとそういうことなんだろう。

~~~~~

クリスマスパーティーを家でするのは、メンバーとりみも面識ができてるから。やるなら一緒にいいよねって。そういう話をしてたらお母さんに家でやっていいって言われたから、そのまま場所も家で決定。時間はみんなの予定に合わせて決めた。

家でやるならそのまま萩近くんともう一度話し合っただけで、みんなには内緒で誘った。予想通りバイトしようとしてたから、無理矢理押切ってこつちに来てもらうことにした。

きつとお父さんたちは怒ると思う。でも、それでも話し合っただけでよかった。彼はお父

さんたちが思ってるほど酷い人じゃないって。私の友達を信じてほしかったから。

『マンションの前に着いたぞ』

部屋で冬休みの課題を解いたら彼から連絡が来た。時間を確認するとまだ30分もある。今までこんなに早く来るなんてことなかったし、珍し過ぎる行動だね。

『今から下に降りるから待ってて』

『了解』

すぐに戻ってくるわけだし、上着も薄いやつで大丈夫だね。すぐに玄関を出てエレベーターで下まで降りる。外に出ると彼はポケットに手を入れて、柱に持たれかかってた。相変わらずの手ぶらだけど、何も言っていなかったから仕方ないね。

『お待ちせ。中に入る？』

「ああ。……それ寒くないのか？」

「すぐに戻るしこれくらいでいいかなって。……寒いけど」

「馬鹿だな」

「どうしようと私の勝手ですー。……わわっ!？」

「着てろ。見てるこっちが寒い」

「ありがとう」

乱暴に投げ渡されたのは、彼がさつきまで着ていた上着。袖を通したら体が温まるのが分かった。思ってた以上にすぐに体が冷えてたみたい。彼が着てたから温まるってのも関係あるのかな。

そこまで思ってた気がした。これは彼の体温で、この服には彼の匂いもあるって。嫌とかじゃない。ただ変に意識しちゃうってだけ。気恥ずかしさとはまた少し違う何とも言えない感覚。

「ドア開けてくれよ」

「あ……ご、ごめん」

「それと匂い嗅ぐなよ」

「嗅がないよ!」

すぐにこうやって擲揄ってくる。……擲揄ってるだけだよ。本気で言ってるわけじゃないよね。私がそんなことするなんて思っただけだよ。……こういう時の彼は全く読めない。

彼がなんでこんな早く来たのかはシンプルなことだった。私がパーティーに彼を誘った理由を彼が察したから。みんなより一足先に来て話し合う。それでも駄目ならみんなが来る前に帰る。それが彼の考えみたい。わざと帰るように仕向けないでほしいとこだけどね。

「ちよつと待っててね。お父さんたちに説明してくるから」

「寒いからなるはやで」

「うん。……あ、この上着返すね。ありがとう」

「はいはい」

家族全員がリビングでテレビを見てた。私が帰ってきたことにりみが気付いて、お父さんとお母さんもそれで気付いた。

私はすぐに話を切り出した。萩近くんに来てもらってるからきちんと言合っしてほしい。お父さんとお母さんは彼に良い印象を持ってきてない。だからか話し合っ

ても、って思うらしい。

「話し合った方がいいんじゃないかな？」

「りみ？」

「ちゃんと話さないと相手のこと分からないって、そう言ったのお父さんとお母さんだよ。」

「！……そうだったな。ごめんゆり。頭が固くなつてたみたいだ」

「それじゃあ……」

「ええ。彼を呼んでちようだい。向き合うから」

「うん！」

りみのおかげで二人とも話を聞いてくれることになった。玄関を開けて彼を中に呼び込む。前のときもそうだったけど、彼は人の家に入るってなつても全然緊張とかないみたい。靴は揃えるけど、我が家同然って感じ。

そんな彼の手を引いてリビングに入る。後々考えたら手を引く必要なんて全く無かつただけど、私はわだかまりを早く無くしてほしかつたからこうしちゃってる。私
が彼と手を繋いでるとお母さんは困つたような顔になつた。りみはどこか目を輝か

せてるような気がするし、お父さんは反対に眉間に皺を寄せてる。

「萩近玲音です。この手のことは娘さんに聞いてください。こつちも混乱してるんで」

「じゃあ後でそうさせてもらうわ。あなたもそれでいいわね？」

「う、うむ……。それでゆり、いつまで萩近くんとそうしてるつもりだ？」

「え？ ……あつ!!」

お父さんに聞かれてやっと私は自分がまだ手を繋いでるのだと分かった。この場にいるみんなにそれを見られてるし、勘違いされてる気がしてすぐに手を離れた。彼はたぬ息をついてたけど、なんでそうやって動じないんだろうね。

「娘さんに急にこの場をセッティングされたので、何て話をしたものがかって感じなんですけど。まずはこれ謝罪からですね」

「え……」

「!!」

彼はいつだってそうだ。話の切り出し方が強引というか、急すぎる。今回は私だって

急なことをしたわけだけど、それでも彼ほどじゃない。

萩近くんは、今お父さんとお母さんに頭を下げてる。軽くじゃなくて、深々と。これにはお父さんたちもびっくりしてるし、そういう私も自分の目を疑った。彼は傲慢なわけじゃないけど、ここまで深々と頭を下げてるところは初めて見たから。

「二人でいられるようにするためとはいえ、あなた方が娘さんを大切に思う気持ちを利出し、不快な思いをさせてしまいました。それだけじゃありません。人伝いに聞いたことではありますが、その当人も傷つけて振り回してしまいました。赦されなくても構いません。ただ謝らせてください」

「ちよ、ちよつと！ 何も君がそこまでしなくても……！」

「黙っててくれ。これはケジメをつけないといけないことなんだから」

「でも……」

「まさか先に君にそこまでやらせてしまうとは……。これでは大人の私たちの立つ瀬がないな。……こちらでも謝らせてほしい。感情に身を任せて君を殴ってしまった。全く思慮がなかった。本当に申し訳ない」

「私からも謝るわ。ごめんなさい」

「お父さん……お母さん……」

「これで仲直り？」

「ははっ、そう……なるのかな」

お互いに謝って一件落着なのかな。りみが純粋なままに切り込んでくれるから、この場の雰囲気も重くなり過ぎずに済んだ。萩近くんとお父さんたちが顔を見合わせて苦笑しながら握手をする。とりあえず悪印象はなくなってくれたってことだよ。……先に謝ったのって狙ってたのかな。そういう計算もしてそうなのが彼のやらしいとこだよね。

「ところでうちのゆりとはどういう関係だい？」

「さっきのを見た感じ仲が良さそうよね。たしか以前にゆりがお弁当を作ってなかったかしら？」

「なに!? どういうことか包み隠さずに話してくれないか！」

「ちよっ、お父さん!？」

「そうですね……。とりあえず娘さんにはストーキングされてます」

「変なこと言わないでくれるかな!? もういいよ私が話すから！」

「そうすると拡大解釈入るだろうが！」

どっちが話すかで言い合いしてたらりみに笑われちゃった。仲がいいってりみに言われて、萩近くんが間髪入れずに否定するから脇腹を小突く。何か言いたそうにしてるけど無視。

そんなことしてたら、マンシヨンの前に七菜たちが着いたみたい。三人は部屋の番号を知ってるから呼び出しボタンを操作して連絡を取ってくる。私がそれに応対してる間にお父さんと萩近くんが二人で話し始める。

（お父さん、娘はやらんって言わなくていいから。私も彼とくつつきたいわけじゃないもん）

七菜たちを家に迎え入れると、三人とも萩近くんがいることに驚く。その理由が出禁になってないことってのは苦笑いしか出ないね。たしかに出禁になってもおおしくなかったわけだけでも。

全員が揃ったから最初にご飯を食べる。その後に時間ギリギリまで遊ぶつてのが今日の大まかな段取り。育ち盛りの男の子が増えたとし、料理は足りるのかなって思ったけど、お母さんは初めから多めに作ってたから問題なさそう。

「それで、萩ぼんは両親への挨拶を済ませたってことでいいのかな？」

「何言ってるのひな!? そんなんじゃないから！」

「挨拶っちゃあ挨拶だな」

「君も話をややこしくしないで！ また私を揶揄おうとしてるでしょ！」

「うん」

「二人ともそのへんで止めなさい」

「そうだぞー。ゆりの家族が付いてこれてないんだから」

「理由はそこか？」

リイが止める側と見せかけてボケる側に回ったから彼がそれにツツコミを入れる。臨機応変に役割が代わったりするんだけど、ひなはずっとボケ側で、私はほとんどツツコミ側。みんなといるとほぼそうなる。

一旦置いてけぼりになったお父さんたちだったけど、私たちのノリが分かったところで話に付いてこられるようになる。良い友達ができたなって言ってもらえてすつごく嬉しかった。不服そうな顔をする彼の腕をこっそり抓ったけど。

思い思いに料理に手を伸ばして、クリスマスケーキも食べた。チョコフォンデュがあることにみんな驚いてたけど、無いものなのかな。一家に一台冷蔵庫があると似たよ

うなものだと思っただけ。

言葉に出さなかったのに考えを読まれて萩近くんにつッコまれる。片付けが終わったところで遊びが始まる。と言っても特別なことなんてほとんどない。女の子ばかりだから女子トークになっちゃうし。

「七菜ちゃん。お姉ちゃんと萩近さんって普段どんな感じ？」

「りみは何を聞いているのかなー？」

「え、だって気になるもん。お姉ちゃんってなんだかんだで萩近さんと一緒にいるの楽しそうだし」

「妹までめでたい頭してたか……。あー、姉を見て育つとそうなるのも仕方ないか」
「失礼なこと言わないでほしいな」

ジト目で文句を言っただけで彼は彼と軽い言い合いが始まる。そんなことをしているとクスクス笑ってる声が聞こえて、見てみるとりみが『やっぱり楽しそう』なんて言ってくる。楽しいのは認めるけど、何か違うニュアンスが含まれてそうだから公言はしない。

リイが一言で『こういう関係』って纏めちゃったわけだけでも、りみがそれに納得しちゃった。たしかに目の前で普段とあまり変わらないやり取りを見せられて、こういう

関係だって言われたら分かりやすいけどね。

「それじゃあそろそろプレゼント交換といきますかー!」

「いいよりイちゃん! 待ってたよー! 萩ぼんは用意してなさそうだけどね!!」
「聞いてないからな」

「ゆりの伝達ミスね。大方萩近くんを誘うことで頭がいつぱいだったのでしょう」

「……正解です」

だって萩近くんってば隙あらば参加しない口実を言い始めようとするんだもん。それを阻止することに手一杯になるのも仕方ないじゃん。ちゃんと呼べたことを評価してほしくらいだよ。

そんなこと言っても言い訳にしかないんだだけどね。現に萩近くんは何も用意してないわけだし、それに彼の事情を考えたらどのみち頼めなかつた気がする。

「ま、萩ぼんからは後日にでもお願いするってことでいいんじゃない? 特にこだわった物じゃなくてもいいわけだしさ」

「アタシもノリで決めたからそれで良さそうだよね。ゆりは真面目に用意してそうだけ

ど?」

「さ、さあどうだろうね。七菜は?」

「渡してからのお楽しみよ」

そんなわけでプレゼント交換が始まった。円になって、音楽がなってる間にプレゼントを回していく。手元に何も無い人は後日萩近くから貰うということになった。

りみは勉強の時に使える可愛らしい小物。私是不慣れながらも手織りのマフラー。どこで買ってきたのか、リイはお化け屋敷とかで使えそうな化粧や道具のセット。七菜はスコアとかを保管できるケース。ひなはくじ引きで当てた旅行券。

「ひなだけ用意したやつおかしくない?」

「え? 当たっちゃったはいいいけどその日に予定あるから行けないし、それなら誰かにプレゼントするのって普通じゃない?」

「あ、はい」

「それで? そんなこと言うゆりちゃんは、やっぱり愛しの萩ぼんから何か貰えることになったと」

「愛しじゃないし、やっぱりって何?」

「それはまあみんな予想してたし。というかそうなるように調整したし！」

「みんな何してくれてんの!？」

「萩近が阻止するのも面倒くさがって投げ出してくれたおかげでやりやすかったな〜」
「めっちゃ楽しかったね〜！」

りみまで丸め込められたなんて……。いや、りみは楽しめることなら結構遠慮ないところあるし、むしろ当然の結果だよ。ところで萩近くんのところは私のマフラーが渡ったのも仕込んでるんだらうね。座る位置とどっち回しかで妙に時間かけてたし。

「なんでそんなことするかな〜」

「ゆりちゃんの反応が楽しいから」

「萩近くんにも迷惑だと思っただけど……。ってあれ？」

「お姉ちゃん。萩近さんならペランダに出てるよ。ちよつと外眺めたいって」

「そうなんだ。……。合ってるけど、なんで当てられたんだらうね」

「今のお姉ちゃん分かりやすいもん」

りみって伏兵としてこんなに活躍するタイプだったっけ。グリグリメンバー相手

にここまで打ち解けられたって思えば嬉しいことではある。でもこうやって言われちゃうと複雑なんだよね。

彼を探してるってすぐに分かれちゃったわけだし、ここは大人しく私もベランダに出るしかないね。彼はベランダの端っこにいて、仕切りにもたれかかって視線を外に向けてた。

何を思つて外を眺めてるのか、考えを読まれないようにしてる普段の顔とは違う。でも今の彼の表情もまた読み取れないものだった。少し踏み込みにくいって言ったらいいのかな。

彼は私が来たことに気づいたらもたれかかるのを止めて、視線もこっちに向けてくれた。

「……なんだ来たのか。中で話してたらよかったのに」

「あはは……、なんとなく、かな」

「物好きだよな。ほんと」

「君ほどじゃないと思うんだけどなく」

どうしたんだろう。軽口なのは変わりないんだけど、それでもやっぱりどこか覇気が

ない。いつもの堂々とした雰囲気は少しなくなってる。哀愁が漂うってほどじゃないけど、似たような感じはする。

「……………気になるって顔してるな」

「……………うん」

「単純なことだ。俺からしたら今の光景が眩し過ぎるんだよ。家族も友達も、な」

「あ」

そっか…………。少し考えればすぐに分かることだったね。彼は独り暮らしで、肉親とは離れ離れ。それでいてお父さんとは絶縁状態で、妹さんとは連絡が取れない。

——彼は“孤独”なんだ

そんな彼に家族が揃ってるところを、仲良くしてるところを見せて、さらにそこに友達を交えてクリスマスパーティーをする。こんな何もしわないわけがない。

『あの子は孤独だ。支えてやってくれ』

オーナーにもそう言われてたのに。

「いめんね」

「なんで牛込が謝るんだよ。俺が勝手に黄昏れてるだけだ。気にすることじゃない」

「だって私が呼んだから……!」

「それに応じたのも俺だ。最終決定を自分でやってんだよ。だから……ってなにしているの?」

「こうしたいと思ったからこうしてるの。……温かいでしょ?」

「……そうだな」

何でも自分のせいにする。独りぼつちは寂しくてしんどいって誰よりも知ってるはずなのに、背負い込んで周りと距離を取ろうとする。

そんな彼を放っておけるわけがない。オーナーに頼まれたからってだけじゃない。私がそうしたいと思ったから。

彼の背に回した手を強める。独りなんかにさせたくないから。独りでいたいと思わせたくないから。彼も手を私の背に回してくれて、そっと力を加える。密着感が増えて、彼の胸に耳を押し当てることになったんだけど、心音のリズムは変わらない。女の子としては悔しいところだね。

「ありがとう。もう大丈夫だ」

「うん」

「それとこれ、クリスマスプレゼント」

「え？　用意してなかったんじゃない？」

「パーティー用のはな。あいつらがうまいことやってくれたおかげで二つ用意する必要もなくなつたし、今プレゼント渡すことにした」

つまり、彼は初めから私に渡すクリスマスプレゼントを用意してくれてたつてことだよ。私って彼にそんなことされるようなことしてないと思うんだけどな。迷惑ばかりかけてると思う。

「だいぶ振り回されてる一年になつたが、それなりに楽しめてるのも事実だ。だからそのお礼も兼ねて、な」

「……そつか。……ほんとズルい人だよ」

「なんか言つたか？」

「君はズルい人だなんて言つたんだよ。こんなことされたら嬉しいに決まつてるじゃん！」

「そこまでとはな」

「これ、つけてもらってもいい？　というか高くなかった？」
「気にするな。家にあったやつ取ってきただけだから」

後ろ髪を避けて彼がつけやすいようにする。私が貰ったのは三日月と蝶をモチーフとして彫られたネックレス。三日月は純白で、蝶は光沢が輝く赤。すごい綺麗で、本当に貰っちゃっていいのか戸惑っちゃう。それに私のプレゼントはマフラーで全然釣り合っていないし。

「ほら、つけたぞ」

「ありがとう。……これ本当にいいの？」

「使われないよりはいいだろ」

「そうだけど……」

「貰ってくれ。それと——よく似合ってる。綺麗だよ」

「ふえ!?　あ……や……その……うう……」

「褒めたらこれか」

「う、うるさい！　君が悪いんだからね！　でもありがとう！　メリークリスマス！」

「無茶苦茶だ……。こっちも貰ってくれてありがとう。メリークリスマス」

もうさつきみたいな雰囲気は一切なくなってる。本調子に戻った彼と一緒に中に戻って、お母さんが用意してくれたホットミルクで温まる。時間が来るまでまた雑談になって、クリスマスパーティーは終わった。もちろん私がつけてるネックレスのことはみんなに質問攻めされたんだけどね。

「お姉ちゃんって萩近さんのこと好きじゃないの?」

「え? 友達としては好きだけど、異性としては全然だよ? りみまでどうしたの?」

「だってお姉ちゃん。今日ずっと萩近さんの横にいたから」

——あれ? そうだっけ?

20話

クリスマスイヴから一週間経つと大晦日だ。この日までで大掃除を終わらせてる人が大半だろう。俺の家は必要最低限のものしかないから大掃除が楽だった。

アパートに元から付いてる台所や風呂場。ここに住むと決まった時に婆ちゃんを送ってくれた小さな洗濯機。炊飯器や調理器具一式。それ以外だとちゃぶ台と座布団。本がほしい50冊入る程度の本棚と服を入れる箆笥、アイロン、ぐらいか。

テレビはないしゲーム機とかも一切ない。本棚に漫画やラノベも一切ない。質素すぎるだろうが、別に誰も入れる気がないから問題ない。

そんなわけで気兼ねなくバイトをしている。大晦日なんかにはバーガー屋に来る物好きはいたりするが、それでも暇な方だろう。近くに神社がないから正月も特別忙しくなるわけでもないだろう。

そんなわけで気楽にバイトをしているのだが、どうしてこいつは俺が接客する時にピンポイントに来るのだろうか。

「帰れ」

「来たばつかですー。普通に注文もするしね」

「珍しいな」

「さも私が冷やかしかしただけする迷惑なお客さんみたいに言うのやめてくれない？ それで今日の年越しはどうするの？」

「どうもこうも寝るに決まってるだろ。明日もシフト入れてるし」

牛込が指差す料理を打ち込んで合計金を出す。その間に会話を続けていたわけだが、正直に予定を言っただけなのに牛込が不満な顔をする。混んでいるわけではないが、他にも客がいるわけだし早く料金を払ってほしい。

「つままない」

「知らんがな。お前はどうぞせ家族で過ごすだろ？ どのみち関係ない話だ」

「今日のバイトが終わったら君もうちに来ること！ いいね！」

「嫌だ。明日は朝からだから寝たい」

「年越ししたらすぐに寝ていいから。それとお参りは明後日行こうね」

「勝手に決めるな」

「どれだけ牛込が押しこようが俺にも予定はある。最近は余裕があつたから時間を割いてやっていただけで、今回はそうじゃない。もう予定が詰まっているんだ。睡眠時間を削りたくないし、頼みを聞いてやる義理もない。」

「それに明後日にお参りに行くって言ってるが、俺は別に明後日が暇だなんて言っていないだよな。思い込みはやめていただきたい。」

「明後日は休みだつて聞いたよ?」

「……誰に?」

「あの面白い先輩」

「ほう?」

「……何をする気なのかは知らないけど、荒事はやめてよ? それと明後日はお参りだから。ドタキャンしないでね」

「あ、フリか」

「フリじゃない!」

出来上がった料理をトレーに乗せる。牛込が注文した品が揃つたのを確認して支払

いを促す。話が終わったわけではないがタイムリミットだ。他にも客がいることは牛込も分かっているから大人しく支払い席に歩いていった。

「さて、どういうことか教えてくれませんかねえ？ 先輩よお」

「怖い怖い!! それとお前接客投げ出すなよ!」

「たしか上がる時間が一緒でしたよね。後でたつぷりと聞き出しますよ」

「やだ! 僕は悪くないもん!」

「え、キモ」

「素で言うなや!」

思わず本音が飛び出してしまったが、今のは先輩が悪い。ガラにもないことを突然言い出したからな。それに他のみんなもドン引きしてたから、今のをキモいと思ったのは俺だけではないということだ。

高校生は22時までには店を出ないといけない。それでうちの店は高校生を15分前には全員上げるようにしてる。それから帰って家に着くのがだいたい22時過ぎ。シャワーを浴びたら洗濯をする。洗濯物を干したらあとは寝るだけなのだが、諦めの悪

いいことで電話がかかってくる。

『もう帰ってる時間だよね?』

「そうだな。今洗濯機が止まるの待ってる」

『じゃあ洗濯物を干したらこっちに來れるんだ?』

「いやだから行かないって」

『來てよ!』

だからなんで俺がそこに行かないといけないのか。訳がわからない。そもそも誰が好んで家族団らんとしていいる年越しにお邪魔しに行くんだ。独り暮らししてる奴のところには友達が集まるとかならまだわかる。

だが牛込の家には家族全員が揃っている。親族でも何でもない俺がそこに混ざっていいわけがない。どうしてそれが分からないって言うんだ。

「行かないって言ってるだろ。いい加減分かれ」

『やだよ。君が来てくれるまでマンションの前で待つよ?』

「好きにしろ。そんなことされても俺は行かないからな。明日に備えて寝る」

電話を切つて数分したら洗濯機が止まり、中から取り出して洗濯物を干す。それを終わらせて飲み物を飲んだら布団を敷いて横になる。有名な神社があるわけじゃないから地元以外の人が来ることはないし、正月にハンバーガーを食べる人も少ないらしい。だから、少なくともうちの店は忙しくなることはないんだとか。

それならそれでどう時間を潰すかが問題になってくるが、メンバー的に暇になることはないだろう。よく喋る人が入ってるし、みんなそれなりに仲が良いからな。

「……せめてあの子は一人じゃなかったらいいんだが」

気になるのは妹の存在だ。あの人懐っこい妹が今どう過ごしてるか気になる。クソ野郎と同棲してるわけじゃないってのは聞いてるから、俺みたいに一人なのかあるいは誰かの家に転がり込んで年越しをしてるかだな。

まだ中学生だから学校には行ってるらしいし、それなら友達も作れてるはずだ。牛込みたいに誘ってくる奴も一人ぐらいはいるだろう。

そこまで考えたところで引つかかった。

——果たして牛込は本当に外で待っているのだろうか

考え事をする中々寝付けないのが俺の性分だ。そしてこういう時の時間経過は早く感じるもので、電話を切つてから既に1時間以上経っている。

「さすがにここまで経つてたらあの馬鹿でも諦めるだろ」

そう思つて目を閉じたが、本当にそうだろうか。あの頑固者はそこまで聞き分けがよかつただろうか。

「……チツ。あーメンドクセ」

ズボンだけ履き換えて上着を着て外に出る。どうせすぐ隣だ。いないことを確認して引き返すだけなのだ。それを済ませたら寝れるだろう。

アパートを出て歩いて10秒。確認するだけでいいし、いないわけなんだからチラッと目を向けて引き返す。

そのはずだった。

マンションの入り口は2段登るのだが、そこに腰掛けている女子がいた。厚着というほど着込んでるわけじゃない。寒そうに身を丸くしてるのも無理からぬことだ。寒いと頬が赤くなるが、もはやその段階すら通り越して顔色が悪く見える。俺は着ていた上着を脱ぎながら走って近づきその馬鹿の身を包む。

「この馬鹿が！　せめて厚着ぐらいしやがれ！」

「……あ、……きて、くれた……」

「俺が来なかつたらどうする気だったんだ！　冗談抜きで死ぬぞー！」

「君なら……きてくれるかなって……。ほら、こうして……きてくれたし」

「このっ……！　とりあえずさっさと家に帰れ！　年初めを風邪で過ごしたくなかつたらなー！」

「やだ……きみが、きてくれないと……いや」

「まだそんなことを……。……わーったよ行ってやるよ！　それでいいだろー！」

「えへへ……、ありがとう」

上着を着させてすぐに牛込を担ぎ上げる。いつもなら文句を言ってくるがそんな気力は今ないらしい。そこまで自分を追い込むなって話だが、俺の責任でもある。

鍵を借りてマンションの中に入り、エレベーターを待つのもどかしく階段を一気に駆け上がる。玄関を荒々しく開け、牛込の靴を脱がせて自分の靴も脱ぐ。そうしていると牛込の妹のりみが廊下に出てきた。

「え？ 萩近さん？ つてえええ!! お姉ちゃんお姫様だっこされてる!!」

「そんなの今はどうでもいい！ 風呂は沸いてんのか!？」

「え？ お風呂ですか？ 沸いてますけど……つてお姉ちゃんどうしたの!？」

「ならよかった。風呂場はどこだ?」

「こ、こつちです!」

りみに案内されて脱衣所へと牛込を運ぶ。これだけ騒いでると両親も当然気づき、二人も駆け込んでくる。すぐに状況を把握した母親がすぐさま父親を追い出し、俺も外に出される。これから風呂に入れてさせるんだから当然だな。

俺はリビングに案内され、席に座るように促された。何があつたのかを話す義務もあるし、ちゃんと謝罪しよう。また俺のせいなんだから。

「いめんなさん」

「何があつたかを聞いていいかい？ たぶんゆりが無茶なことをしてたのだと予想しているのだけど」

「俺が独り暮らししていることを気にかけてるらしくて、一緒に年越しをしようと言われてたんです。明日も朝からバイトがあるから断つてたんですけど、諦めなかつたみたいで、俺が来るまでマンシヨンの前で待つて言い出したんですよ。俺は来る気が無かつたので無視してて、まさかまだ待つてるなんてことはないだろうって思いながら確認しにきてみたら……」

「ゆりがずっと待つていて、体をあそこまで冷やしてしまった……と」

「はい。俺のせいです。ごめんなさい」

「いや、さすがにこれはゆりの方に非があるよ。……後で母さんにも話してからゆりに説教だな」

話を聞いても苦笑してそう言うあたり、信じてくれるのだろう。こんな状況になつて嘘をつくわけもないが、素直にそう信じてくれたのも先週和解できたからか。その点は牛込の功績だな。

すぐに体を温まらせるようにさせたが、それでも風邪を引くだろうな。年明け早々風邪になるのは幸先が悪い。俺がそれについてとやかく言う資格はないわけだが。

親父さんとテレビを見ながら今年を振り返るといふなんとも不思議なことをしていると、ドアが開けられて三人が出てきた。本当に温まったか疑いたいが、母親が許しているということはそういうことなのだろう。

「お父さん、萩近くん、迷惑かけてごめんなさい」

「……俺はそれに対して何も言えない立場だからな」

「ゆり、自分の我儘で周りを巻き込むんじゃない。プラスになるならまだ許されるが、今回みたいなのは何も良いことを生み出さないんだ。わかるな？」

「うん……」

「わかるならそれでいい。彼にも迷惑をかけすぎないように」

「はい……」

そうとう反省してるようだな。おそらくは母親にも説教されてるからだだろう。入ってきた時からしよぼくれてたし。

りみの方はそんな姉を心配そうに見ていた。落ち込んでいることよりも、風邪の心配のほうが大きいんだろうけどな。そんな姉想いのりみは、台所に行つて温かい飲み物を作つて渡していた。本当に仲がいいよな。

ソファに腰掛けている俺の隣に來た牛込は、りみから受け取ったコップをテーブルに置いて座り、もう一度謝ってきた。今までの不満はあるにはあるが、それはもう両親が代弁してるから特に言うこともない。だから言葉の代わりに乱雑に髪を撫でてやった。

「その調子じゃ明日は風邪だな」

「自業自得だよね」

「そうだな。……あ、そうだ」

「どうしたの？」

「明けましておめでどう」

「え？ あ、ほんとだ。……ふふつ、明けましておめでどうございます。今年もよろしくね」

「やだ」

「もう！」

恒例と言ってもいいやり取りをして、同時に笑い出す。俺と牛込はこういうしようもないやり取りをする方が合ってるんだよ。

——今年も面白いハブニングことがあるだろうな

あ、そうだ。今のうちに用事済ましとくか。

~~~~~

私はみんなの予想通り風邪を引いたみたい。ベッドで目が覚めたら頭が痛かったし、ボーツとしちやつてたから。幸いなことに喉の方は大丈夫で、咳もそこまでひどくない。

「おはよ〜」

「もう昼前だけだな。それと服をはだけさせたまま出てくるな」

ちよつと体がダルいけど、飲み物が欲しいし、何か食べないといけない。だからリビングに行って挨拶したんだけど、どうやらもう昼前みたい。結構眠ってたんだね。萩近くんに指摘されたから服を直して……………え、待つて。

「え……………なん、なつ……………なんで萩近くんがいるの!？」

「反応遅いな。それだけ声出せてたら座る元気もあるか。待つてろ飯を用意してやる」



「ありがとう。……って！ だからなんで家にいるの!？」

「そりゃ泊まってけって言われたからだけど？」

「そうだけどそうじゃなくて！ バイトは!?! げほっ、げほっ」

「そんな声出すからだ」

誰のせいでこうなってるのかって言いたかったけど、テーブルに私のご飯を置いた彼が背中を擦ってくれたから何も言えなくなつた。こういうところは本当にズルいところだよ。いきなり優しくなるんだもん。

私が落ち着くと彼も背中を擦るのをやめて、ご飯を目の前に移動させてくれた。病人食の定番のお粥。すぐに出てきたのは、お母さんが下準備を全部してたからみたい。そのお母さんだけじゃなくてお父さんとりみも家にいないけど。

「三人は朝から出て行つたぞ。親戚で集まるらしいな？ お前は風邪だから置いてかれ  
たってわけだ」

「君が看病してくれるからみんな家を出れた、の間違いでしょ?」

「……どうだかな」

「ふふっ、ありがとう。それでバイトはどうしたの?」

「休みになった。元々人数が多かったし、暇な日だからすぐに許可をもらえたぞ」

「そっか……。ごめんね、私のせいで」

「もういいから。食べ終わったなら薬も飲めよ」

「うん」

食器の片付けもやってくれて、私はその間にお薬を飲む。体がダルいから背もたれにもたれかかって体を休めると、彼に持ち上げられた。木の椅子よりソファの方が体が休まるからって。ベッドじゃないのは食後だからだね。

初めはソファにもたれかかってたけど、彼をすぐ横に呼んでからは彼にもたれかかった。ソファよりも温かさがある彼の方が落ち着いていられるから。

「……今日は優しいんだね」

「責任を感じてるからな。そうじゃなかったらこんなことしねえよ」

「ほんとかな？」

「……疑うのは好きにしたらいい」

「あはは、じゃあそうさせてもらうね」

彼の肩を枕に、腕を抱き枕代わりにしてリラックスする。点けられてるテレビは有名な神社に参拝してる人の多さを報じてる。違うチャンネルなら餅撒きとか駅伝とか、バラエティとかあるんだろうね。

今はどれかを見たいって気分でもないし、彼も暇つぶしのためにつけてるだけみたいだから、チャンネルは変わらない。でも、こうやって参拝してるのを見ると私も初詣に行きたいって思うようになってきた。日本人の血つてやつかな。

「ねえ……」

「駄目だ」

「むっ。まだなにも言っていないよ」

「初詣に行きたいんだろ？ 風邪を治してからにしろ。お前の両親にも外出させないよ  
うに言われてるしな」

「ううー」

私がこう思うのはみんなに読まれてた。心配されてるってことも分かるし、もう迷惑かけてるからこれ以上我儘を言えない。大人しく風邪を治すしかないね。

諦めて彼に寄りかかっていると、だんだんうとうとしてきた。それを見た彼が私をベッ

ドまで連れて行こうとしたんだけど、ここで一緒にいたいから毛布を取ってきてもらおうことにした。

「ベッドの方が寝やすいだろうに」

「二段ベッドで私のは上だからね。それにこっちなら君も近くにいてくれるから」

「何もしてやる気はないけどな」

「分かってる。側にいてくれるだけでいいから」

「そうかよ」

ソファのクッションを枕代わりにして寝転がる。そうしたら彼が毛布をかけてくれた。向かいのソファに座ろうとした彼を呼び止めてすぐ側にいてもらう。大きくて少しゴツゴツしてる彼の手を握って胸の上に置く。

何か言われるかなって思ったけど、彼は何も言わなかった。それどころか私を寝かしつけるためにそつと頭を撫でてくれる。それが心地良くて自然と瞼が閉じる。

「上手なんだね」

「自分でわかるわけないだろ」

「それもそつか。でも、私は上手だと思おうよ」

「あつそ」

「うん」

もつと何か話してたかもしれないし、会話はこれだけで終わったかもしれない。どちらにしても私はこの後睡魔に負けたから、記憶がここまでしかない。寝てる間もどこか安心できたのは、彼の手を握ってたからなのかな。

次に目が覚めたのは4時過ぎだった。寝る前と何も変わらず、彼はずっと私の手を握ってくれていた。聞いたらずっとこうしていてくれたらしい。本当に萩近くんなのか疑ったらデコピンされた。

「体温測れ」

「うん」

渡された体温計で今の体温を測る。少し時間がかかるんだけど、その間に彼が飲み物を用意してくれる。体温計が鳴って、見てみると37.1℃。だいぶ熱がひいてくれる。体もだいぶ楽になつてゐるしね。

「これなら今からでも初詣行けるよね」

「何言ってるんだ。今から気温が下がるから駄目に決まってるだろ」

「ケチ」

「ケチで結構。風邪をぶり返すなんて馬鹿なことをさせる気はないんでな」

「……優しいね。心配してくれてるんだ？」

彼はこういうことを言われることを嫌がる。自分を過小評価するし、大切にしてくれない。自己評価を事実より下げて自分をろくでなしって評価する。

私はそうは思わないからこうやって何回でも同じことを言う。ちよつとだけ彼をからかいたって気持ちもあるけどね。不機嫌そうになるくせに雰囲気は少しだけ柔らかくなるんだもん。

「ああ。牛込の体調が心配だ。だから我儘を言わないでくれ」

「ふえ!?! な……な……」

「正直に言ったらこれか……」

まさか彼からこんなストレートに言われるなんて思つてなかつた。熱がひいていったはずの体がまた熱くなつていく。私が彼に背を向けて毛布を被ると、彼は電話するためにリビングから出ていった。彼の方から電話する相手が誰か分からないけど、たぶんバイト関係だよな。

毛布から顔を出して窓の外に目を向けると、綺麗な夕焼けが見えた。赤いような朱色のような、夕焼け色の空。それを見て思い出すのは、彼に見させてもらったあの紅葉。夕焼けと相まつてさらに映えたあの景色。

——あの時のことは鮮明に覚えてる。彼との距離が縮まった日でもあるから。

「また行きたいな〜」

「どこに?」

「ひゃあ!? 耳元で声出さないでよ!」

「隙だらけだっから」

「自分の家だもん!」

バクバクと煩い心臓の音。早くなる呼吸のリズム。若干滲んでる視界。

急に耳元で声を出されただけでこうなるのは私が弱いからなのか、それとも彼だから

なのかな。真つ当に考えたら驚かされたからなんだけどね。

そんな私の反応をひとしきり楽しんだ彼は、自分のスマホの画面を私に見せてきた。そこに映し出されてるのは、お母さんとのやり取り。いったいいつ交換したんだろうね。それはこの後聞くとして、文字を追っていくと思つてもいなかったことが書かれてた。

——寄り道せずにすぐに帰ってくるなら初詣に行つてもいい

文面はもつと丁寧なやり取りだけど、要はこういう内容だった。目を丸くして彼の顔を見ると、彼は静かに頷いた。本当に行つていいつてことで、彼はさつき許可を取るために離席したんだね。

「ありがとう!」

「着替えてこい。ちゃんと暖かい服装にしろよ」

「うん!」

昨日用意していた晴れ着に着替える。晴れ着用の防寒具もちゃんとつけて準備完了。……つてなればよかつたんだけど、帯を綺麗に結べなかつた。帯の結び方は知ってる。でも慣れてないから上手くはできない。



そのことも予想したのか、ドア越しに声をかけられて結局彼に帯を結んでもらうことになった。なんでできるのか不思議だったが、それよりも晴れ着が崩れないようにすることに意識を割いてたから結局聞かなかつた。

外に出たらやっぱり寒かった。特に手が寒かった。手袋をしてないからね。だから彼にお願いで手を握ってもらった。男の子らしい手。でもたしかに温かくて、寒さなんて気にならなくなった。手を繋いでない反対の手も寒さが気にならなくなったのは本当に不思議。

「初詣なんていづぶりだろうな」

「え？」

「……なんでもない」

「そう？ ……君って素直じゃないよね」

「今さらだな」

素直じゃないことはもう十分わかつてる。凄い捻くれ者だもん。私が言いたいのはそのうちことじゃない。彼が優しさを出す時がいつものと少し違うってこと。うまく言えないけど、感覚的に違う。

私が伝えたいことが伝わっていないから、彼は呆れ顔になつてゐる。そういうことじゃないか。私に話してやらないか。今度こそは怪訝そうな顔になる。このまま黙つてもいいんだけど、今は話したい気分。

「わざわざ聞いてくれたじゃん」

「……そんなことか」

「うん。そんなこと。優しいのにその優しさを全然表に出そうとしない。……素直じゃないし、不器用だよ」

「言つてろ」

こういうところかも知れない。褒めても全然素直に受け入れてくれない。でも、こつちの気持ちが届いてないわけじゃない。それが分かるから彼が突き放すように言つても笑つていられる。

それが気に食わなかったんだろ。手を離して先に行こうと急に歩くペースを上げた。彼がそうするのは予想できてたから手を握る力を強めて、腕に抱きついた。こうすれば彼は諦めるから。

今回は私の勝ちだね。彼が諦めて歩くペースを元に戻してくれる。そしたら私も腕

に抱きつくのはやめて、手を繋ぐだけにする。そうして歩いてたら近所の神社に着いて、時間も夕方になってるから参拝者が少ない。本殿の前まで行って、お賽銭をしたら手を合わせる。

「何をお願いしたの？」

「言うと思うか？」

「言わないね。なら私も教えない」

「興味ないな」

「えー。まあいいけど、おみくじ引こうよ」

彼の手を引いておみくじを引きに行く。おみくじの結果は私が中吉で、彼が末吉。末吉って順番が分からない微妙なやつだね。神社によって変わるのはややこしい。統一してくれてもいいと思う。

そんな話をしながら家に帰って行って、お父さんたちが帰ってきたら入れ替わるように彼がいなくなった。昨日の夜からだから、だいぶ長い時間一緒だったんだね。そのほとんどは寝てたけど。

……あれ、私の寝顔つてもしかしなくても見られたよね。

そのことに気づいたら連鎖したのか、晴れ着を着た時に褒められたことも思い出しちやつた。彼って本当に私をどんどん振り回すよね。

でも、彼がぼそつと今年も面白い年になればいいって呟いてたのは聞き逃さなかつた。それってつまり、今年も一緒にいてくれるってことだよね。

——みんなともっと仲良くなれますように

そう願った私の思いとも重なつてるところがあるよね。

## 第2部 高校2年生

## 1話

高校生活2年目の春。去年は入学式があったから春休みが短め（に感じた）。今年は始業式から学校が始まるから、まだ少し余裕がある。

アパートの敷地内にある1本の桜の木を部屋から眺める。たった1本でも桜の木であれば花見をしている気分になれるから不思議だ。これも日本人の特徴なのだろうか。そんなことを思いながらコップに入っているジュースを飲む。

花見と酒はセットに思えるが、高校生だから酒は飲めない。少し花見感が減るし、日の強風のせいで桜の花びらが地面に広がっているのも少し残念だ。毎年このように思えるが、ゆつくりと散る桜を見たいとついつい願ってしまう。

「ダウトー！」

「なんでわかんだよ！」

「俺の第六感は常人を超えたのさ！」

「なつ、なにー!」

家に押しかけてきて騒ぎ立てるこの二人も風情を壊してしまっている要因だな。そもそも家から出ずに花見をしようとする時点で風情がないのも同然だがな。それと、二人でダウトをしていて嘘を見抜けない方がおかしいだろ。

この二人と一緒に夕方からバイトに向かうのだが、できれば会うのは夕方がよかった。今はもう午後なのだが、昼前からこの二人は来ている。そしてずっとこのテンションだ。こつちの体力が持たない。それに、この二人の妹達も今日入学式のはずだ。見に行かなくてよかったのだろうか。

「俺は妹に来るなって言われたっす」

「俺は起きたら家に誰もいなかったな。てか今日が入学式つてことも忘れてた」  
「どつちもどつちだなー」

行こうとするも妹に拒まれた兄とそもそも入学式の日を忘れていた兄。理由は違えど入学式に行っていないことに変わりはない。さすがに高校生ともなれば親はともかく、きょうだいに来てほしいと思う子の方が少ないのかもしれない。俺ならば必ず行つ

たが、連絡が取られないのだからどうしようもない。

「それでー？ ゆりちゃん達はどうしたんだよ。一緒にいなくてよかつたのか？」

「なんで俺がアイツラと一緒にいないといけないんすか」

「ここ数ヶ月の間わりと一緒にいることが増えてたからさー」

「増えてましたけどね。……牛込は部活の勧誘のために学校。鰐部も生徒会に入ってるから学校。鵜沢は用事があつて、二十騎は何を考えているかわからない」

「あーね」

「ご苦労様です！」

「いや意味わからん」

いったい何を思つて家に来たのか分からない二人だが、聞いても特に理由がないことは経験で分かつてる。先輩は追加の飲み物を人の家の冷蔵庫から勝手に取り出して、まるで自分が家主かのように飲み物を順に注いでいく。

家主は俺なのだが、飲み物を買つてきたのは先輩だ。俺が知らない間に冷蔵庫に入れていたのはいだけないが、漁られてるわけでもないから何も言わない。

テレビもなければゲームもない。ここに遊びに来るなら何かしら用意してこないと

いけない。それを知っている先輩は、来るときに必ずいくつか遊び道具を持ってくる。先程までやっていたトランプを片付け、代わりに取り出したのはジエンガだった。しかもお題付き。

「盛り上がること間違いなし！」

「女子もいればなおさらな！」

「そーいやあんたら二人が女子といるとこ見たことないな」

「爆ぜろリア充!!」

「彼女はいないんですけどー」

あまり騒ぎすぎると大家に怒られるので、騒ぐのも程々にしてジエンガを始める。ジエンガってちよつとしたパーティー用の遊びだった気がするんだがな。

負けたら罰ゲームとして性癖を言うっていう碌でもない展開になった。こういうのはたいてい言い出した人が負けるし、今回も例に漏れず言い出した張本人である先輩が負けた。

この人は脚フェチなんだとき。とてつもなくどうでもいい情報だったわ。しかも語り始めたからどっちが罰ゲーム受けてるのか分からなくなるし。いい加減鬱陶しく



なったから殴ってみたなら大人しくなってくれたけども。

バイトの時間が迫ってくると三人で家を出て、バイト先であるバーガー屋へと向かう。途中で牛込とスレ違い、その時に今日の部活勧誘の成果を話し出そうとしていたが、時間が無いと言つて速攻であしらつた。滅茶苦茶不満そうにしてたからバイトが終わる時間に合わせて出るまで電話をかけてくるだろうな。俺じゃなくて家族に話して満足しろよ。

「女心のわからん奴め」

「アレはそういうのじゃないでしょ」

「……そうだけどなあ」

牛込も俺もそういう気がない。それは一年を通して知人全員が理解したことだ。逃われることもなくなり、無駄に労力を割く必要もなくなった。男女間での友情。それを最高点にまで高めた関係。今ではそんな風に言われている。

年上二人が先の中に入り、俺が最後に替えて中に入る。先に入った二人のどつちかがタイムカードを押してくれる。それがいつものパターンだ。今日もそうなるはず

だった。

——コンコン

従業員の出入り口であるドアがノックされるまでそう思っていた。

このパターンがどういふことかは知っている。一つ目は中から鍵を閉めているせいで従業員が入れないパターン。二つ目はバイトの応募をして面接に来たパターンだ。採用された人がオリエンテーションに来る時もそうだが、これは二つ目に含めるとしよう。

そして今回ののは後者だ。ドアの鍵が開いているのにノックをしてきたし、自分からドアを開けていけないことがその理由としてあげられる。そんなことを考えながら、待たせるわけにもいかないと思つて中に入るように促す。それと同時に社員に電話だ。面接をするというのに社員がいなくては話にならない。

「し、失礼しまーす」

「そのの椅子に座つといて。今社員に電話してるから。あー、あと言われているであろう必要書類も出しといちやつて」

「あ、はい」

どこかまだ初々しさが残る女の子。おそらくは今年入学したばかりの1年生だろう。入学式の後にどこか家族と出かけていたのか、格好は制服のままだった。高校生の身分であればそれが正装ともなるし、そこを考えてのチョイスなのかもしれない。

そんなどうでもいいことを考えていると、社員に電話が繋がった。面接の子が来ていることを伝えると面白いぐらい慌てていたから、これは完全に忘れていたんだろうな。ソフト上では今日が休みになっているし、気が抜けていたようだ。

『私の家からだと遠いってというのは知ってるよね?』

「1時間はかかるんですけどっけ」

『そうなの。それで……その子を待たせるわけにもいかないし……』

——萩近くんが面接してくれる?』

「……………はっ」

『手当は付けるから! それに面接用のマニュアルもファイルに纏められてるから!』

マニュアルがあるのならできなくもないが、そういう問題ではないだろう。バイトの人間が面接の担当をするとはどういうことか。このことが広まれば会社全体の評判に支障が出かねない。出たところで潰れるような会社でもないのだが、それでも問題は問

題だ。

「あの一」

「どした？」

「もしかして私……日にち間違えてましたか？」

「そんなことはないぞ。社員が間違えてるだけだから」

「あの……でしたら日を改めた方がいいです……よね？」

『萩近くん。その子めっちゃ良い子やん！ 嫁に欲しいわー！』

「あんたよく今の状況でふざけられるな……。手当は今日の給料の5倍な」

『それはちよいキツ——』

こうやって気を回せる子に無駄足を踏ませるわけにはいかない。時期的に考えてバイトの面接は間違いなく初めてなわけで、堂々としようとしているが、緊張していることは容易く見て取れる。声も震えていたしな。

社員との通話を切ってその子をもう一度椅子に座らせる。それに向き合うように俺も座り、社員が言っていたマニュアルを確認する。俺も受ける側の経験はあるから、だいたいの流れはすぐに飲み込めた。ぶっちゃけ受け取った印象を後で伝えるだけで終

わる。なんせ人手不足なのだから。

「日にちを間違えてると思わせて悪かったな」

「い、いえ。私、よくおつちよこちよいって言われるので、また間違えたのかなって……」

「おつちよこちよいなのはさつき躓いてコケてたから分かる」

「み、見てたんですか!？」

「あれだけ音してたらなあ。まあ他の奴は見てないしいんじやね？　ピンク色を」

「そうですけど……え？　ピンク色？」

「今日の下着の色。どうやったらスカートが捲れるぐらいコケられるのか聞いてみたいもんだね」

「はうっ!!」

初心な子のようで、下着の色のことを言われただけで顔を真っ赤にしてそれを両手で覆った。もしかしなくても今の俺の発言はセクハラに当たるのだろうか、告発されなければ大丈夫だろう。

パステルピンクの髪の毛の印象を打ち消すほどに顔を赤くしているようだが、戻ってもらわないと面接ができない。しかし原因は俺にあるわけで、今は下手に話しかけないほう

がお互いのためだろうな。

「うう……。お嫁にいけないです……」

「おつちよこちよいの子は貫われないうから安心しろ」

「酷くないですか!?! わ、私だって結婚に憧れるんですよ!」

「憧れるだけか?」

「え?」

「憧れるだけでいいのか? それを掴みとる努力はしないのか?」

「それは……。あの……」

「……悪い、今は関係ない話だったな。さて、面接をするか。バイトなのに面接の担当をさせられることになった萩近玲音だ。よろしく」

「あ、……。丸山彩です。本日はよろしくお願ひします!」

話の展開が急過ぎる。よく牛込に言われることなのだが、今回はそれが功を奏した。バイトの面接が主目的である丸山が話についてきたのだから。まだ若干頬が染まつているが、初めてのバイトの面接が始まるとあつて丸山は頭を切り替えることができたらしい。

「んじやオーソドックスな質問から。……問題、丸山彩がこのバイトを選んだのは学校から近いから!」

「え、ええ!?! なんでクイズ形式なんですか!?!」

「ノリが悪いな。落とすぞ」

「ふええ!?! そ、そんなあ……」

「え、泣くの?」

この子涙脆過ぎだろ。いやいや、今そんなことツツコんでる場合じゃない。面接をふざけて相手を、しかも年下の子を泣かせたなんて笑い話にもならない。慌てて謝罪しながらできるだけ頭を優しく撫で、必死に慰める。可愛い子の味方をするあの社員に知られたら何をされるかわかったもんじゃない。

「ごめんな。真面目にやると堅苦しいかと思っただが、普段のノリでやるのは失敗だった」

「わ、私……落とされない、ですかあ?」

「今のところは。いやだって最終判断は俺じゃねえし」

「ううー」

「涙脆いなあ。ほらハンカチで拭けよ」

「……ありがとうございます」

男子ならたいてい手で拭うが、女子ってハンカチやらティッシュやらで涙を拭くよな。メイクが崩れないようにするためなんだろうか。さして興味もないが、チャラ男の妹に聞けば細かく答えてくれるだろう。仮にも芸能界に入ってる子だし。

なんとか涙を止めてくれた丸山からハンカチを回収し、今度は無茶振りをせずに質問していった。内容自体派マンニユアル通りにしたが、聞き方はフランクな姿勢で行った。俺が堅いのはそんな好きじゃないからな。そうやって面接をしていると、丸山の緊張も取れたようで自然に笑みが溢れるようになっていた。感情表現が豊かな子らしい。

「——ふふつ、萩近さんって面白い人ですね!」

「はははつ、そりやどうも。丸山は本番に弱いよな!」

「はうっ! や、やつぱりそうですよね……。強くないといけないのに」

「いけない……。ね。やりたいことあるんだ?」

「あ、はい! ……私アイドルに憧れてて、今は研修生で2年目なんですけどいつかみんな



なを励ませるアイドルになりたいって思ってます！」

「へえー。いいんじゃない？　気が向いたら応援するわー」

「一言余計です！」

この子初対面なのにわりとハッキリ言ってくるよなー。だからどうってわけでもないし、むしろ好印象なわけだけど。それに、目標を持ってそれを追いかけている奴に悪い奴はいない。純粹な目をしているこの子ならなおさらだ。俺からしたら眩しすぎるぐらいに目を輝かせている。

現実を知らないからそういう目をしていられるのだろうが、現実を知っても変わらないでいられるなら間違いない人気が出る。ドジっ子で本番に弱くても挫けずに前を見据えて全力で取り組む。そんなアイドルが生まれるかもしれない。そんな日が来るのかわからないし、調子に乗りそうなタイプだから何も言ってもあげないけどな。

「そーいやシフトは……、学校の予定と研修生としての予定次第ってことでいいんだよな？」

「はい……。そんなにいっぱい入られるわけじゃないんですけど……」

「ま、そうなるな。よし、採用で」

「ええ!? 勝手に決められないんじや……!」

「いつだって人手不足だからな。それに、丸山の笑顔は可愛いから接客で役に立つし、馬鹿共もやる気出す。メリツトしかない」

「か、かわ……!!」

「萩近てめえ! ゆりちゃんがいながら彩ちゃんまで狙いやがって!!」

「狙ってねえわ! 採用するように社員を説得してやつから先輩は仕事戻れや!」

いきなりドアが開いたと思ったたら大声でアホなこと叫ぶなよな。丸山がビツクリして涙目になってるし、これ絶対に悪印象抱いただろ。余計なことするからそんなことなるのに。それとあんた彼女がいるのにそんなこと言うなんてな。会ったらチクツとこ。

そんなこんなで本来のやり方からかけ離れた面接が終わった。暇な時間に面接が終わったことが良かったのか悪かったのか、帰っていく丸山を見て馬鹿共のテンションが跳ね上がった。そこにおばちゃんズが混ざってるからここも末期だよな。

店の外まで丸山を送り、一応フォローは入れておいた。あの子がいたら絶対バイトが面白くなるからな。

ちなみに、履歴書の写真をメールで社員に送ってみたら速攻で「採用」の2文字だけ

返ってきて、その3秒後に電話がかかってきた。内容は『私を呼んどいてよ!』『到着するまで話し繋げといてよ!』だった。ほんとバカしかいねえ。

「なんてことがあった」

『あはは! 君のとこ面白いよねー』

「……まあな」

『それでー? その子はそんなに可愛かったんだ?』

「ま、可愛い部類だな。話してて面白かったし」

『……ふーん。……そうなんだ』

「……機嫌悪くなってる?」

『なってますん! いいんじゃない別に? 私よりその子の方がタイプってだけでしょ?』

「彼女面するな。それにだな。俺は別に牛込……といるより楽しかった、なんて一言も言っていないだろう?」

『なっ!? そつ……あ……そ、そういうのってホントズルいと思うよ!』

「意味がわからん」

バイトから上がって店を出たら牛込から電話がかかってきた。タイミングが良すぎるが、1年もやってれば慣れるらしい。それよりも歌とギターを鍛えろって話なのだが、それを言ったら怒られた。理不尽だよな。

話は予想通り今日の部活勧誘の話で、何人入りそうなのか、有力候補がいたとかそんな話だった。それが終わったら俺の話を聞きたいとか言ってきて、それで今日の面接の話をしていたというわけだ。それも家に近づいたら終わるようにしてる。寄り道もしないから牛込も時間を見て判断してくれる。

通話を切って自分の部屋へと入ろうとして気づいた。

——玄関が開けられていることに

鍵はたしかに閉めて出た。それなら考えられるのは空き巣だが、盗まれて困るようなものは家に何も無い。荒らされてるかもしれないが、物も少ないからすぐに片付けられるだろう。

そう思っただけで家の中に入った。

「あら玲音くんおかえりなさい」

「……トク」

そこには祖母がいた。牛込と一緒に泊まりに行つた旅館の女将をしている祖母ではない。仕送りを途絶えさせた野郎の母親の方だ。

「ところで今日はどこまでお出かけ？」

そして、この祖母は脳に障害があるらしい。

## 2 話

脳に障害がある祖母がどうやってこの家にたどり着いたのか。特定の人物にヘイトが高い俺の頭では、そいつの差し金ということしか考えられない。そもそもこの祖母は施設に入っていたはずだ。施設の人もまた、外に出すことを許可したということか。真つ当に考えれば何かしらの力を働かせたか、金で黙らせたかだろう。

「( )飯は？」

「食つてきた。風呂入つて寝るよ」

「なんで食べてきたの！」

「は？」

「用意した意味がないじゃろ！」

知ったことではないが、用意してくれたのは善意であることに変わりない。どこかに置いてあるのだろうと思って探してみたが、どこにも晩飯は無かった。台所を覗いてみ

でもそこには何もなかった。どうやら祖母は自分がご飯を作っていると思いついていたらしい。これで怒られるのは理不尽だが、まともな相手できない状態である人物に何を言い返すというのか。

「バイトで汗かいてるから先に風呂行ってくる」

「勝手にせい！」

だから晩飯の話の有耶無耶にするために俺は風呂に入ることにした。祖母のアレは波があるらしくて、今みたいに不安定になる時とそうでない時がある。今は不安定な状態で、俺が帰ってくる前はそうではなかったらしい。だってお湯が溜まっているのだから。

こういうのがなければ愚痴の一つも出るといふもの。しかしこうやって準備してきているという事実があると言葉を飲み込んでしまう。出処を失った言葉の代わりに口から出たのはため息。自分の内に仕舞われたのが不満。ため息をつくとき幸せが逃げると言うが、幸せじゃないからため息が出るんじゃないだろうか。

「こんなの考えても仕方ない……か」

面白くないことを考えても仕方がない。あいにくと明るい話も持ち合わせてはいないが、つまらない現実であっても予定を立てること自体は好きだ。繰り返す日常にもちよつとした変化を加えよう。それが無ければ思考が止まりそうだ。

学校で面白いことなんて特にない。そもそも行事が少ないからな。着実に迫ってきているのは検定で、その前に学園祭があるぐらいか。検定は受かる自信がある。去年やっていた内容のほうに難しいからな。学園祭はクラスで何かしらの出し物をやるらしいが、女子たちが主導権を握った時点で興味が無い。あいつらは自分たちの思い描いた現実以外認めようとしなからな。他を人形程度に思っていそうだな。

「……………学校のこともあんま考えてもしやーないなこりゃ」

じゃあバイトか。今の俺の生活は、〈家〉〈学校〉〈バイト〉で構成されていると言っている。グリグリと接する時間は元より少ない。少ない分予定を合わせたときに毎度濃い内容が待っている。しかし検定が近づいてきていることと、中間テストも待っていることもあって、最近顔は合わせることがほとんどない。せいぜいバイト先に来た時だらうな。



それでそのバイトなわけだが、丸山が入ったらまた面白いことになりそうだなってぐらいか。メンバー同士の仲の良さは、周辺の店舗で1位だと言われているし、社員との関係も良好だ。忙しくても気を張らなくていいのはありがたい。気が休まる場所だと言える。

「そろそろ出るか」

考え事をする時間が結構経ってしまうものだ。のぼせてしまってもいい事はないから、湯船から出ることにする。体を拭いて寝間着になり、布団を敷いて寝るだけ——なのだが

「わう！」

「……なにしてんの」

筋力まで低下してしまっているのか、祖母は自分の体でさえ満足に動かせないらしい。今もバランスを崩してコケている。絶対そうなるってわけじゃなさそうだが、正直言っただけでも変わらない。気を使わないといけないなんてやってられない。

なぜ家の中で気を抜いてはいけないというのか

「……そつちの布団で寝て。俺はこつちで寝るから」

冷たく当たっていることは自覚してる。だが変える気はない。まともに会話する気もない。八つ当たりだということも分かっている。それでもあの男の産みの親だという事実が余計なフィルターをかける。原因を目の前にいる祖母に押し付けてしまう。

子は親の影響を受けても親の望み通りに育つわけではないのに。今のあの男を作り出したのはあの男自身だ。俺が責め立てる相手は祖母じゃない。それも理解している。だから込み上げて来る不満をため息に変えて、呼びかける声もシャットアウトする。寝ればこの気持ちもリセットできるだろうから。

家なのに気が休まらない生活が始まってどれぐらい時間が経ったかは忘れた。繰り返すだけの日常だから日数の経過もさして気にならない。変わったことも特になかったからな。今日までは。

「ふええ〜。ハハハ〜」

たしか去年の春も迷子になってる奴に会ったな。牛込のことだけど。まさか今年も迷子になってる奴と遭遇するのか。これは来年もそうなるということなのか。嬉しくないな。

今回遭遇した迷子は、水色の髪をした小動物系少女。驚くべきは迷子になってることを自覚しているだろうに足を止めないこと。道がわからないのに場所を確認せず歩き続けるとは。だから迷子になるということを理解するべきだろう。いや、そうならないから迷子なのか。

「なにしてんの?」

「ふえ? あの、えと……」

「迷子なのは見てわかった。どこに行く予定?」

「(こ、こ)……です」

「……案内する。こつちも予定あるからすぐ向かうぞ」

迷子の少女——松原花音の目的地を把握した俺は、時間に余裕があるわけでもない

めすぐに足を動かした。状況についていけなかったのか、少し遅れてから松原も俺を追いかけて隣に並んだ。幸いと言うべきか、目的地はそんなに遠いわけじゃない。むしろ近い。5分もかからない。だから軽い自己紹介をお互いにしたところで目的地に着いた。

「着いたぞ」

「わあー。ありがとうございます！ 今度またお礼を——」

「そんなのいらん」

「あ、萩近さんも行くところがあるんでしたね。すみません」

「気にするな。着いたから」

「へ？」

前に会った丸山と似た純粹さだな。面白いぐらい期待通りのリアクションを取ってくれる。俺がどこに向かうかを話していなかったのかは、こういうふうにしたら面白いかなと思ったから。

「……、俺のバイト先だから」

「ええ!？」

「面接かなんかだろ？ 案内する」

目を丸くして驚く松原の手を引いて店の中に入る。さつきと中に入らないと俺が遅刻しかねないからな。それと、ここに来るまでの短い間で分かった。こいつは油断したらいなくなるレベルの厄介な迷子だと。じゃないと、あの場所から5分もかからない距離を10分もかけて来ない。だから松原がいなくならないように手を取って中に入るのだ。

その様子を見たメンバー達から揶揄いどころか怒号が飛んできたが無視。そんなことをするから、女子たちから怖がられることに気づいてほしいものだ。その辺を学習しないというか、自分を曲げないことはこの一年で分かっているから口には出さないけども。半分ネタであれをやってるわけだし。

さつきので怖がってしまった松原に一応フォローを入れて、事務所のドアを開ける。たしか今日は丸山も同じ時間から出勤のはずだから、先に中にいるだろう。俺は今日時間ギリギリに着いたし。

「みんなのアイドル丸山彩でーす！」

「……」

「……」

「間違えました」

——バタン

おかしいな。俺はバイト先のハンバーガー屋に来ているはずなんだがな。さつき見えたのはなんだ。ピンク頭の少女が謎のポーズと共にウイंकをしていたぞ。もしかして俺は幻覚に囚われているのか。

後ろを振り返ってまず見えるのは、後ろにいる松原。その後ろにはよく見る光景こと店内。たしかにここは俺のバイト先のはずだ。ではさつきのはなんだったんだろうか。それと松原は今のを見たのだろうか。

「松原」

「は、はい」

「今の見た？」

「今の……ですか？」

「あー、わかんないならいいや。緊張してるのは見りやわかるが、少しは落ち着け。変な奴が多いが素行が悪い奴はいないし」

「はい……」

こう言われたからつてすぐにリラックスできるわけでもないか。一応俺とこうして会話しているが、それでも緊張してるわけだし。それはひとまず置いておくとして、緊張のおかげもあるのかさつきのは見ていないと。じゃあ被害者は俺だけか。

「閉めないでくださいよ！ 私の方が恥ずかしいじゃないですかー！」

「どつちにしろ恥ずかしいのは丸山だろ。そして居たたまれない気持ちになるこつちの気にもなれ」

「うっ！」

分かりやすく胸を抑える丸山を事務所の奥へと追いやり、俺と松原も事務所の中に入る。丸山の時のように松原を椅子に座らせ、俺は制服に着替えて丸山と共に出勤……のはずだけでも。

「あ、あの萩近先輩。社員さんからの伝言を頼まれてまして……」

「来ないとか言うならしぼくぞ」

「私に言われても！ ……うう」

「あの人正気の沙汰とは思えんな。今日は休みじゃないだろうに」

丸山が言いくくそうにしなければだけで内容を理解し、とりあえず制服に着替える。聞けば丸山の出勤は今日が初めてらしい。オリエンテーションは済ませてあるらしいが、初日なら誰かしら担当して見ておく必要がある。

出勤時間を合わせたということはその役目が俺になるってことだったんだろうが、それは松原の面接を社員がすること成り立つはずだ。せめて大学生組にやらせろよ。女子の先輩も今日入ってたはずだっていうのに。

予定通り俺が丸山を見守る役割を担うか、それともそれを誰かに任せて面接をするか。普通に考えりや前者だよな。

「青葉ー！！」

「二年ぶりに名前呼ばれたかと思ったらまさかの呼び捨て!?!」

「なんで呼んだらすぐに出てくるんすか……。まあいいや。丸山を見守る役か面接役、



どっちがいいですか？」

「なんて2択何だ！ 彩ちゃんのほうで」

「いきなり下の名前で呼ぶなんて下心丸出しじゃないですか。彼女に言いつけますよ」

「マジで殺されるからやめて!! 下心もないから！ 打ち解けやすい雰囲気を出せたらなってただけだから！」

弁明する先輩を事務所から追い出し、子犬のように困った顔をする丸山を笑顔で押し出す。もちろんそうした方が丸山の反応が面白いからだ。それに、このメンバー達は無駄に観察力が高い。どこまでが許されるのか、その線引きを早い段階からできる人たちだ。丸山も早ければ2時間程度で打ち解けるだろう。

「成り行きで分かったと思うが、俺が面接相手になったから」

「みたいですね。よ、よろしくお願いします！」

「そんな肩に力入れなくていいから。はい、リラックスリラックス」

「そ、そう言われましても……」

松原と向かい合うように座り、姿勢を少しだけ崩す。こうした方が松原も肩の力が抜

けると思つての行動だ。残念ながら狙い通りにはならなかったけどな。

でも考えたら当然か。15歳で初めてのアルバイトの面接に来ているんだ。緊張するなと言う方が無理な話。だが俺は固い雰囲気でもやりたいわけじゃない。面接の前に共通の話題でも入れるとしよう。

「松原つて疾斗の知り合いだろ？ 秋宮疾斗」

「ふえ!? 疾斗くんを知ってるんですか!？」

「中学生の時に知り合つてな。幼馴染がよく迷子になるつて聞いてたし、一回だけ写真も見たから分かつた」

「うう……そんなの知らなくていいです……」

「今日目の当たりにしたしな」

「あう」

掴みは上々つてところか。共通の話題つて便利だな。それとも名前一つで人の緊張を無くした疾斗が異常だと言うべきか。なんでもいいけどな。あいつとは今以上に荒れてる時期に何回か乱闘した仲つてだけだし。今じゃ気楽に話せる数少ない人間だな。

松原の緊張も無くなったところで面接を始め。前回と同様に聞いた内容と印象を社

員に伝える。結果に至るまで丸山と同じパターンだったのは、呆れを通りして感嘆したよ。わかりやすいというか、単純というか。

面接が終われば松原は帰るわけなのだが、果たしてちゃんと帰られるのだろうか。そんな心配は当然のことながらする。1分なくとも迷子になる少女なのだから。そんなわけで保険として疾斗に連絡だけ入れておいた。あいつの超人ぶりならどうとでもするだろう。

「丸山、調子はどうだ？」

「あ、萩近先輩！ 聞いてください！ レジ打ちできたんですよ！」

「普通だろ」

「ええー！ 私頑張ってやっとできるようになったのに……」

「あーもー分かった分かった。その調子で頑張ってくれ」

「はい！」

分かりやすく落ち込む丸山の頭を撫でて雑に褒める。褒めるといふほどのことでもないか。それでも丸山は上機嫌になったのだから結果オーライというやつだな。メンバー達からの視線が痛い。落ち込ませても睨まれて、機嫌を直しても睨まれるってど

ういうことだよ。それと丸山。お前は単純すぎだ。ほんとに子犬だな。

「うええーん。萩近先輩ー、株券つてどうやってやるんですか……」

そして感情の落差も激しい。ついさつきまで満面の笑みだったのに今じゃ半泣きて。そりゃいきなり株券なんて渡されても対処できないだろうけども。それといちいち俺のどこに来るな。今日俺は丸山の教育を担当してないんだからな。

忙しくもないのに丸山に振り回されたせいかな。いつもより疲労感がある。それでも楽しかったと思えたから、どこか気持ちは楽なただけだな。

「丸山は家どっち側だ？ 同じなら送って帰るが」

「え、そんなのいいですよ！ 私家こっち側ですし！」

「反対か。じゃあな」

「軽すぎますよー！」

「どうしろと……」

「……楽しそーだねー？ 萩近くん？」

「……なにしてんだお前」

バイトが終わり、丸山と一緒に裏口から出る。時間も遅いから方向が同じなら送つてやるところなんだけど、逆ならそんな気にもならない。ぜひとも気をつけて帰ってくれたまえ。

先輩がそつち側だから先輩が送つていくだろうし。その気が満々なのか、無駄に良い笑顔でサムズアップしてるぐらいだからな。

そんなわけでこの場で解散しようと思つたんだが、まさかの牛込が登場だ。食べに来るならともかく、そうじゃないなら来るなど言つてあるんだけどな。どういうつもりなんだか。

「えつとー、この方は？」

「牛込ゆりちゃん。学校は違うけど玲音と同じ年の子だよ。玲音のやつが軽口叩くようになつたのはゆりちゃんと、バンドメンバーの子たちのおかげかな」

「え？ え？」

「丸山が知る必要もない話だ。先輩も余計なこと言わないでください」

「おつとこりやあ悪かった。それじゃあ彩ちゃん。俺達は退散しようか」

「あ、はい。お疲れ様でした」

丸山たちと別れ、俺も帰路につく。歩き始めた俺の隣にすぐに牛込も並ぶ。こうして共に歩くのはいつぶりだろうか。新年に入ってからわりと会うこともなかったから、だいぶ久々な気がする。

そしてしばらく会わない間に牛込にも変化……いや成長があつたらしい。雰囲気が変わっている。去年あつたときよりも大人に近づいたつてとこか。落ち着きがあると、言う方が適してるかもな。

「それで？ 何を怒ってるのか知らないが、何しに来たんだよ」

「会いに来た、じゃあだめなの？」

「牛込はそういうキャラじゃないだろ。何かあつたのか？」

「あ、あははー。えつとね、クラスの子に合コンに誘われたんだ。数合わせでいいからつて」

「好きにしたらいいだろ」

「……そうだけだよ。でも……ううん。いいや。そうだよ。私たちは……仲じゃないもんね」

「ああ」

チラツと見た牛込の顔は、寂しそうな笑みだった。なぜそんな笑い方をするっていうんだ。自分で言っただろ。俺と牛込はそういう仲じゃない。そして俺もまたそれを望んでいない。だからそういう相談もいち俺にしてくるな。俺に全て任せようとするな。

「萩近くも来てくれたらいいんだけどね」

「なんか言ったか？」

「ううん。なんでもないよ。……少しでも会って話せてよかった。またね！」

「ああ。余裕ができたなら予定を合わせるよ」

「うん！」

たったこれだけの時間でも、俺としても心地がよかった。癒やされるといふほどではないが、心が和らいだ。久々すぎて新鮮に思えたからだろうか。牛込は未だに気づいてないが、お互いの家は近い。少しだけ会って話して一日を終えてもいいのかもしれない。

「なんで帰ってきた！ 出ていけ！」

……ああ、そうだった。俺の一日の始まりと終わりはコレなんだった。



## 3 話

高校の盛り上がらない学園祭があつた。盛り上がらないのは主に俺みたいな人間だな。テンション高い奴らを見ると逆に冷めるようなタイプ。そういう奴は総じて出店の手伝いもやらない。欠席すると無駄な反省文があるから質たちが悪い。

だから学校に行くだけ行つて休憩室で時間を潰す。やる気がある奴らは勝手に盛り上がつてるからこれで問題ない。最近気が休まる時が少ないからここいらで休ませてもらおう。休憩室は人がいなくて心が落ち着く。

「——そんなわけで電話をかけてくるな」

『いいじゃん別に。話し相手になるよ?』

たまには昼寝をするのもいいかもしれない。そんなふうにして机を並べてその上で寝ようとしたところで牛込から電話がかかってきた。今日は土曜日で、花咲川は普通に休みだ。だからこうして電話をかけてきたのだろう。俺が乗り気じゃないとわかっ

てて。当たっているから文句も出にくい。

ちなみに俺達の高校は5月の初旬、ゴールデンウィークの前に学園祭がある。花咲川も1学期にあるはずだが、たしかもう少し後だった。

「話し相手になつてほしいだけだろ。その役目は俺である必要がないだろ」

『君が忙しそうにしてるから会わないようにしてるわけだし、たまになら電話させてよ』  
「だから付き合つてない奴とこういうやり取りしたくねえんだよ。いい加減分かれ」

『はーい……。じゃあ電話も控えるようにするから、今は話しよ?』

こいつ駆け引きも上手くなつてきたな。めんどろな事を先に言つて、断られたらマジなことを条件に出す。相手が「それぐらいなら」と思い込む話術だ。

そんな勉強なんてしてないだろうから、自分で無意識のうちに身につけたことなんだろう。こういうのは何度もやると効果が薄れるから、無意識だとわりと有効だったりする。意識してやるなら頻度を考えないといけないからな。

「はあ。話すことは決めてるのか?」

『あ、話してくれるんだ』

「今後控えてくれるならな」

『えへへ、ありがとう。話はこの前言ったことについてなんだけど』

「この前? ……あー、合コンか」

『うん。それが今日の夕方からあるんだけど、どうしたらいいのかなって。行くには行くんだけど。数合わせだし』

なんだ。結局本当に合コンに行くのか。友達に数合わせとして頼まれたから、ね。他の三人も誘われてもおおかしくない気がするが、あいつらは即答で断るか。

二十騎だけはそもそも声をかけられてない可能性もあるしな。あいつルックスはともかく言動が理解し難いから。イメージと共にムードを壊しそうだ。壊すというかあいつの世界に引きずり込みそうだ。合コンが崩壊しかねない。

「数合わせ、ね」

『ん? どうしたの?』

「数合わせだろうと参加は参加だ。その誘った友達はともかく、参加する男達の方はそれは知らないだろ? お前も対象になるぞ」

『え……あーそっか。たしかにそうだね。どうしよ……』

「知るか。言い寄られても牛込にとつて無理なら断ればいいし。そうじゃないなら好きにしるよ。俺がどうこう言う問題じゃない」

『……うん。他に何か気をつけてた方がいいことってある?』

「……なんで声の雰囲気変わるんだよ。お前の問題だろ」そう言いたいところだが、そこはツツコまないでおこう。話が長くなりそうだ。

というか、俺に合コンのことを聞かれてもな。行ったことない人間だぞ。クラスの奴からたまに聞かされる内容と偏見を使ってしか話せない。

友達に聞けよって話なのだが、牛込を誘った友達もまた合コンが初めてなんだとか。なんでそれで呼びかけてるんだ。男の方と一人繋がりがある可能性もあるか。まあいいや。

並べていた仮設ベットもどきこと机の集まりの上に靴を脱いで腰掛ける。電話が終わったら速攻で寝たいからな。他に人が来ないからやりたい放題だし、来たら来たで真似させりゃいい。

「俺も合コンは未経験だが……、とりあえずすっぴんで行くなよ」

『それはもちろん。去年君に言われてから結構気をつけてるんだよ?』

「知ってる。二人でいる時はわりとメイクしてるもんな」

『う、うん。気づいてたんだね』

「そりやあな。たどたどしいメイクだったが、数こなせばやっぱ上手くできるようになるもんだな。綺麗になってたぞ」

『なっ!? あ……や……え……あ、りがとう』

「俺はすつぴんの方が好きだけど」

『あう……』

素直に言ってやっただけでこの狼狽か。俺みたいな奴相手に言われてこれだと合コンの時ヤバそうだな。他のメンツがどうかは知らないが一人ぐらいは牛込に言い寄るだろう。それが純粹な想いからなら頑張れって話だ。

だがあのクソツタレみたいな理由なら許容できない。そのへんのことも言っとくべきか。

「俺相手にそれだと合コンの時お持ち帰りされるぞ」

『これはたぶん君だからだもん……。つてお持ち帰りつて?』

「言葉の通り……とも言えないか。ともかく、合コンが終わった後にそいつの家かラブ

ホあたりに関連して話せるぞって話」

『ラブ!? そ、それって……つまり……』

「まあそういうことだな。絶対そうなるとは断言できないが、可能性はあるだろ。単純にデートの誘いで終わる可能性もあるが」

これに関してはその男の人間性というか、思考によるだろうな。速攻で狙うサルなのか。それとも計算高くやるのか。それとも純粹な好意か。

どうせなら三つ目であってほしいね。そうなれば俺がこうして牛込の相手をする時間が減るし、もしかしたら無くなるかもしれないのだから。自由時間が増えるのは嬉しい話だ。

『私はどうしたらいい?』

「それは自分で決めろ。俺の判断なんて気にするな。お前が良いって思う人がいなければ誰とも連絡先の交換とかしななければいいんだから。ただ——」

『ただ?』

「耳には気をつけろよ。粘着質な奴は言い寄ってくるだろうし、お前は弱すぎるんだから」

『あ、あははー。うん、気をつけるね。ありがとう心配してくれて』

「心配はしてない」

『ふふつ、素直じゃないね。それじゃあまたね。どうだったかは連絡するから』

俺が反論する暇もなく通話を切られる。随分と対応の仕方が上手くなったものだ。いじり甲斐が無くなった気もするが、今は長電話する気もなかったから丁度よかったな。

そこまで把握しての対応だとしたら些か面白くない。理解されることは良いことだと大衆は思うだろう。線引きを間違えず、踏み込んでほしくない所に踏み込んでこない。やってほしいことだけをやってくれる。不満を抱かずに済む。ああ、本当に……

——反吐が出る

こいつはそうだと決めつけられる。他者に理解されるということはそういうことだ。悲観的な見方ではあるがな。

だが、俺は理解されたいとは思わない。自分を本当に自分で理解できているか分からないというのに、なぜ他者が理解できるというのか。『自分』を決めていいのは『自分』だ。なぜなら——

”これは自分の人生なのだから”

『自分の人生は他者に影響されたとしても、決められてはいけないうてこと』……か。今思えば母さんつてわりと哲学的だったな。それなりに生きてから分かってくるよ」

無知な子どもに教える考え方でもなかったと思うが、こうなつてくると母さんは自分の死を予見でもしてたんじゃないかと思えてくる。そんなはずなのに。占いを見て楽しんで信じない人だったのに。

今度の休みには墓参りに行こう。そう決めて俺は遅れた予定を遂行した。なんてことはない。ただの睡眠だ。

「ふあくくあ。眠いな」

「働き過ぎだからだと思えますよ？」

「働きたいから働いてんだよ。丸山はさつきと仕事を覚えろ」

「ううつ、ちよつとずつ覚えてますよ。ね？ 花音ちゃん……あれ？」

「はあ。どうやったら店の中で迷子になるんだ」



入って何週間か経ったが、まだまだ新人の丸山とその少し後に入ってきた松原。どちらも高校1年生だ。そして容姿が優れている。うちのメンバー達が二人を見る度にテンションを上げるのはもはや定番ネタだ。

そしてそれにより松原には引かれてるところまでがセットな。丸山はアイドルを指しているからわりと喜んでる。これに慣れられて変に自信を持たれたら困るんだけどな。

夢を追いかけるなら温い環境に慣れるべきじゃない。それは時折俺から釘を差しとけばいいか。それより今は松原を探さねば。

「レジ担当しててなんでいなくなるんだか」

「若ー。松原ちゃんバックヤードにいましたよー」

「なんでそこにいるんだよ!？」

「ふええ〜。す、すみませ〜ん」

レジから結構離れてるバックヤードにどうやったたら迷い込むのやら。何やらレジ打ちしていて、客がいなくなつてから疑問に思ったことを大学生の先輩に聞きに行こうとしたら迷子になったとか。

あの人は今日一番大変な役回りしてるから、一箇所に留まって仕事してるわけじゃないしな。分からないことをちゃんと聞こうとしたわけだし、怒るようなことじゃないな。

「分からなかったことは解決したのか？」

「は、はい！ メモもしました！」

「ならいいや。毎回迷子になられたら困るけど、仕事を覚えるの自体はいい事だからな」

「はい。頑張ります！」

「萩近先輩が優しい……」

「丸山は後でしばらく」

「ええ!?!」

余計なことを言わなければなにもしないだけだな。丸山は無自覚に言ってくるんだよ。松原に泣きついて慰めてもらってる丸山を尻目に軽めの罰を考える。せいぜいちよつとしたイタズラ程度にしてやらないとな。あの子すぐに泣くし。丸山愛好者の馬鹿たちが騒ぐし。というか今でも煩い。

この後松原がまた迷子になるということもなく、例に漏れず丸山がトチったぐらいで

特に問題はなかった。松原と丸山を更衣室に向かわせ、二人が着替えてる間に俺も素早く着替えを済ませる。同じようにチャラ男も着替えを済ませてるけどな。早着替えが板についてきた。変なスキルだが。

「そういえば若。最近牛込ちゃん来ないですね。他の子はたまに食べに来ますけど」

「そうだな。どっちでもいいけど」

「牛込さんって前に萩近先輩を待ってた人ですか？」

丸山め、めんどくさいタイミングで出てきたな。髪の色と同じように脳内ピンクな思考をしてそうだし。松原も興味があるのか視線をチラチラとこちらに向けてくる。

男女で仲がよかつたら全部そっちに話を持っていこうとするのは、女子の嫌なところだよな。男だからからかい程度に終わるのに。それも鬱陶しいけども。これは事実だけ話してすぐに終わらせるのが吉だな。

「そうだな。Glitter\*Greenってバンドを組んでる。メンバー全員花咲川だからお前らの先輩だぞ」

「そうなんですか!? 今度学校で見かけたら話してみようかなー」

「ご自由に」

「むむっ。なんか余裕そう。お付き合いされてるんですか？」

「しばくぞ」

「ひいひい！ ごめんなさい！ 違うんですね！」

予想通りのことを言っけやがって。先に言っけ封じておくべきだったな。どうも思考が鈍っている気がする。

で、俺が丸山に優しいアイアンクローをしている間にあいつは松原と二人で何話してるんだろうな。話してる内容自体は面白くなさそうなんだが、チャラ男の反応は面白いな。顔色が悪くなってやがる。

「——へ、へー。花咲川に元子役の子がいて、松原ちゃんと友達になったんだー。凄いな」

「そんなことないですよ。千聖ちゃんは優しいですし、気が合うんです！」

「それはよかったねー」

「はい！ 白鷺先輩もそういうお友達いますか？ ……ってあれ？ 白鷺？」

あ、松原の奴気づきやがった。チャラ男であるあいつは天才子役と言われた白鷺千聖の兄だからな。妹の活躍を喜んでるし、なんだかんだで気にかけてるらしいが、親からは冷遇されてるらしい。

活躍する娘の方が大切なんだとか。親の風上にも置けないな。まあ本人なりに解決してることらしいから首を突つ込まないけどな。向こうの話もキリがいいし、丸山を解放して帰るとしよう。

「話を戻すと、若が牛込ちゃんと付き合っていないのは不思議なんだよ。眺めてたらただのカップルア!？」

「何度言わせるんだ。お互いにタイプじゃなくてその気じゃねんだよ。殴るぞ」

「もう手が出てます……」

「萩近くん。すぐにそうするのは良くないと思うよ」

「お前には関係ないだろ。……あー、なるほどな。合コンの結果そうだったか」

てつきり電話かメッセージかで合コンの顛末を聞くことになると思っていたが、直接来るとはな。この状況には他の三人はビックリしてるな。俺もある意味驚いてはいる。  
こいつが思ってたより馬鹿だったことに。

「仮って話にしたけど、彼氏カノコできました」

そう言うてはにかむ牛込。その手に持つスマホに映し出される男。どうやらこいつが牛込を落としたらしい。こういう奴がタイプということらしい。

なるほどな。どう見限にってでももいいかかなれ。

## 4 話

5月のある日。俺は花咲川学園に来ていた。女子校に男子が来るなんて逮捕案件か、二次元話の中でしかないだろう。ただし、日によっては入れてもおかしくないのだ。例えば今日——学園祭の日とかがそれに当てはまる。それ以外だと体育祭やら入学式やら卒業式だな。身内なら入れるから。

そしてこうやって一般開放するということは、サルが集まってもおかしくない。そのために警備員の数が増えている。不埒な真似は許さないということがヒシヒシと伝わってくる。この体制でも手を出そうとする奴がいるから救いのない話だ。それで、なんで俺がこんな場所にいるのかというと——

「お待たせしました萩近先輩！ 来てくださってありがとうございます！」

「ほんとめんどいんだがな」

「はうっ！ で、でもきつと楽しんでもらえます！」

「いや、丸山も今回が初めてだろ」

そう、このおつちよこちよいでよくトチるバイト先の後輩、丸山彩に呼ばれたからだ。走っては駆けそうになるドジっ子にな。

集合場所は分かりやすく正門付近。人がぞろぞろと通るから邪魔にならないように少し横に逸れてる。今日は母さんの墓参りに行きたかったが、電話が来たときのゴタゴタのせいでこつちに来ないといけなくなつたんだ。

—————

牛込があつさりと合コンで男を作り、中間テストが終わつたあたりで電話がかかってきた。相手はいつものことながら牛込だった。

バンドのことで連絡があるのなら電話じやないようにしている。話し相手なら男ができたんだからそつちにすればいいはず。何を考えているのやらと思つたが、一応出ることにした。出ないと煩いから。

『もしもし、今大丈夫？』

「手短に。雑談なら彼氏とやれ」



『……怒ってる？』

「別に。ただ他の男と長電話って人によつちや許容できないだろ。だから用件だけ言え」

『なるほど。たしかにそうだね。用件は、今度ある花咲川の学園祭に来ないかなって話  
なんだけど』

「断る。彼氏を誘え」

なんでそれで俺を呼ぼうって話になるんだよ。去年……のこの時期は大して交流も無かったか。ともかく今年は彼氏がいるんだ。彼氏を誘わないでどうする。こいつの場合馬鹿な案を考えてそうだが。

『もちろん誘うよ。というかも誘ってOKもらったし。良い人だから会わせてみたい  
し君もどう——』

「ふざけるな!!」

『っ!!』

「彼氏が来るなら彼氏と二人で遊べ！　そこに俺を混ぜようとするな！　俺をコケにしたいのか！」

『ごめ……そういうわけじゃ……!』

「じゃあどうしたらそういう発想になる! 人の気持ちつてもんを考えてみやがれ! 俺は学園祭行かないからな。……母さんの墓参りもあるし」

荒ぶる心に任せて言うだけ言つて通話を切る。ここが家の中だったらこつから祖母との喧嘩になってそうだったが、俺は寝る以外で家にいないようにしているからその心配はない。

今いるのは近くの公園だし、周りに人もいない。それで大声を出していい理由にはならないが、近所迷惑になるほどの音量ではないはずだ。……こんなに荒れるなんてらしくない。ストレスが溜まっているのだろうか。少し冷静にならないと――

「……電話? ……チツ、いい加減にしろ! 学園祭には行かないつて言つたらろ!」

電話がかかってくる。ただそれだけで俺は相手が牛込だと思い、苛つていることもあつて怒鳴り散らした。誰からかかってくるのかも確認しないで。

『ふええ!? ゴ、ごめんなさい! わ、私……!』

「……丸山？ ……やばっ！ ごめんごめん！ 丸山だと思ってなくて怒鳴っちゃった！ 本当にごめん」

『い、いえ……。その……何かあったんですか？ 先輩がそんなに荒れてるの珍しい気がするんですけど』

「ちよつとな……。それは別にいいだろ。どうしたんだ？ 丸山が電話をかけてくるなんて初めてだと思うんだが」

『は、はい。凄い緊張しちゃってます。えへへ』

声を聞いてるだけなのにな。不思議と丸山の今の様子が伝わってくる。分かりやすいということなのか。これも一種の個性だろうな。丸山の純粋な心が声だけでこっちにまで届くのだから。

芽が出ないのは残念だが、本人が諦めていないからチャンスも来るだろう。可能な限り話は聞いてやろう。そう思いながら公園から自宅へと足を向ける。話しながら落ちて着けるだろうし、そろそろ帰って風呂に入って寝るとしよう。

『あの、お願い……。というわけでもないんですけど』

「言ってみ？ 内容次第だ」

『ええー。そこは了承してくれるんじゃないんですか?』

「ははっ。冗談だよ。さっきトバッチリを食らわせちゃったし、お願いを聞いてやるよ」  
『いいんですか? やったー!』

いったい何をお願いする気なのかは知らないが、凄く喜びようだな。バイトで初めて褒めた時並みの喜びようだ。元々感情表現は豊かな子だから珍しいことでもないんだらうけどな。

たしか妹もいるんだっけな。妹まで似てたら親も大変だろうな。主に将来の心配で。

丸山がなんでこんなに喜ぶのか。それは勿論のことながら丸山がお願いする内容が内容だからだ。そしてその内容は、俺にとってはいろいろと面倒なことになりそうな内容だ。

『うちの学校で学園祭があるので、一緒に回らましょ!』

—————

牛込には絶対に行かないと拒絶したというのに、こうして丸山に呼ばれて花咲川に来てしまっている。一般開放だから人も多い。これなら人混みに紛れて遭遇することも

なく終えそうだが、一応周りは気にしておくか。

会ったら気まず過ぎる。俺のせいなんだが。しかも墓参り行くって言って電話切ってるのに、言った本人がこの場にいるんだからな。

「先輩どうかしました？」

「なんでもない。丸山は行きたいところあるか？俺パンフとか持ってないから何があるか分からないだよ」

「あ、私パンフレット持ってますよ！行きたいところはありますけど、先輩の行きたいところからでいいですよ！」

「変に遠慮するなよ。丸山の行きたいところがあるならそこから行こう。どうせ並ぶことになるだろうから、その間にパンフに目を通してく」

「分かりました！では行きましょう！」

丸山からパンフレットを預かり、表紙を軽く眺める。誰かが絵を書いたんだろうな。デジタルでもできるだろうに、手書きでやってるよ。でもこういうのは手書きの方が良いと思ってしまう。なんでだろうな。思い込みなんだろうが、その理由には皆目検討もつかない。

パンフレットから目を放して前を歩く丸山の後ろを付いて行く。どうやら今日は校内も土足でいいらしい。汚れは極力落としてから入るようによく注意書きがされたがな。

さつきも思ったが、人が多い。うちの学校は一般開放しないからここまでの人は集まらない。学校周辺の住民は来れるようになってるんだけどな。誰でもOKなところは規模が違う。

これは回るところを絞り込んで効率的に回らないと無理そうだな。そう考えながらついて行っているが、時折丸山が後ろを振り返って俺がついてきているか確認する。逸れたら合流にも一苦労だもんな。だから俺はそうならないように手を打つことにした。

「せ、先輩!？」

「手を繋いだらこうしたら逸れる心配もないだろ? それにチヨクチヨク後ろ向いてたら人にぶつかるし」

「そ、そうですね。びつくりしちやった」

手を繋いで歩くなら前後でいるとしんどいな。そんなわけで丸山の横に並ぶことにした。二人横に並んで歩くと邪魔になるだろうけど、見た感じ特に問題もなさそうだ。

他の奴もやってたらいよいよね精神でいることにしよう。

俺は牛込と手を繋いで歩くことがあったから、こうして丸山と手を繋いだところで特に思うことはない。でも丸山はそうでもないらしい。ほんのりと頬を赤く染めてるし、顔を伏せて歩いている。人にぶつかる心配を無くすために横に並ぶようにしたんだけどな。本末転倒だぞ。

「丸山。俺はどこに行くのか分からないし、教室の場所とかもさっぱり分からない。だからそうして顔を伏せて歩かれても困るぞ」

「ご、ごめんなさい。こういうの慣れてなくて」

「いや謝ることじゃないけどさ。俺も勝手に手を繋いで悪かったな」

「い、いえ！　なんかドキドキしちゃって楽しいです。付き合ったらこんな感じかなって。えへへ」

「……そうだな」

「否定してくださいよ。勘違いしますよ」

どうやら俺の返しに不満があるらしい。なんて言ったのかは聞こえなかったが、少し機嫌を損ねてしまったようだ。

そもそも俺はまともに返事をしていないのだろうか。いつも以上に思考していない気がする。それはそれで本心をさらけ出していることと同義だから悪いことでもないと思うんだがな。

「この教室です。すごい列ですけど」

「もつと早く来ておくべきだったか。ごめんな」

「いえいえ！ 先輩が来たのも早い方だと思えますよ？」

「開門から20分経ってたがな」

「ですから早い方ですって」

丸山が行きたがっていた所か確認して、列が間違っていないかも確認してから並ぶ。この列の長さだと間違えた場合の時間のロスが大きいからな。

列に並んでいる間にさっき言ってた通りパンフレットを見てこの後の予定を決めることにしよう。最初に目次があつて、何ページ目に何が書かれているかを記してくれる。最初は校内の構図を頭に叩き込むために地図を見ることにした。その地図の中のどのクラスがどこで店をしているかも書いてあるからな。何をしているかは後ろのページで紹介されているらしい。



俺が地図を頭に叩き込んでいると、隣に並んでいた丸山が首を伸ばして覗き込んだ。手を繋ぐのには抵抗あつたくせにこうやって、お互いの距離が縮まることには抵抗ないってどういうことだ。まあ無自覚なんだろうが。

「地図見ても分からないですよ？」

「どこでどのクラスがやつてるかを頭に入れてるんだよ。行く場所を決めた時に効率よく回れないと損だからな」

「なるほどー。私にはできません！」

「無い胸張つて言うことじゃないだろ」

「デリカシーないですよ！ それに私は成長途中です！」  
「希望ほど儂いものはないよな」

頬を膨らませて肩をバシバシ叩いてくる丸山に声を抑えながらも高笑いを返す。反応が面白いからついつい押揃つてしまうが、さっきの発言はノリに任せ過ぎたな。丸山はデリカシーがないと言うだけで済ませてくれたが、どう考えてもセクハラだ。摘み出されてもおかしくない。

痛くないがずっと叩かれても仕方ない。誠意を持って謝罪して、ここのを奢るとい

「ことで手を打ってもらおう。」

「物で釣ろうとしてみませんか？ 私そんな軽い女じゃないですよ？」

「え、実は太ってるのか？」

「そうじゃないです！ スタイルには気を使っていますから！ それとさつきからデリカシーなさ過ぎです！」

「ははは、ごめんごめん。なんか丸山相手だところなつちやうんだよ。なんでだろうな？」

「知りませんよ。……私にだけですか？」

そつぽを向かれてしまつて、取り付く島もなくなつてしまつたかと思つた。どうしたらいいかすぐに対策を考えねばと焦つたところで丸山から話を振つてくれた。

それにしても丸山にだけ……なんだろうか。揶揄う事自体はそれなりに打ち解けた相手によくするんだが、内容的にはどうだろう。

「……揶揄う事自体は丸山だけじゃないかな。発言にデリカシーが無くなるのは丸山だけな気がする」

「それって私を女の子として見てくれてないからですか？」

「それはないぞ？　そこまで落ちぶれてはいない。ただ丸山はなんでか思ったことをスツと言えちゃうんだよ」

「ゆりさんよりもですか？」

「なんでここで牛込？　まあいいけど。……あいつもわりとスツと言うかな。どつちが上とかは分かんない」

「同じくらいってことかな……。分かりました。それなら許します。でもデリカシー無いのはどうにかしてくださいよ？」

「大丈夫だ。さつきも言ったがデリカシー無くなるのは丸山だけだから」

「複雑です！」

複雑って……。いや、そうなるのも仕方ないか。本心で話しているということ伝えてられているのに、同時にデリカシーなく話されると宣言されてしまっているのだから。一応気をつけるようにするが、気づいたときには言葉が発されてるのだから無意味な気もする。

話が一区切りしたところでパンフレットに目を戻す。飲食だけじゃなくてアトラクションもあるようで、なかなか本格的な学園祭になっているようだ。うちのなんちゃっ

て学園祭とはワケが違う。目を通して何個か候補をピックアップしたから、後は丸山と照らし合わせてお互いに行きたいところを効率的に回れるようにしよう。

「ところで今並んでるやつは何やってるんだ？」

「クレープですよ」

「クレープ!? レベル高いなあおい! 3年生か?」

「2年生ですよ」

「2年生でクレープで……。ちなみにクラスは?」

クレープはやろうとしても簡単にできるものじゃない。ましてやこの前評判だ。これだけの客数に対してクオリティを下げることなく出せたら、本格的に店でも開いたらいいんじゃないだろうか。

しかも2年生がこれをやるって。女子校ってこんなレベルの奴がゴロゴロしてるのだろうか。なんて思ってた天井を仰ぎながら丸山にクラスを聞いてみた。

「A組ですね。ゆりさんのクラスですよ!」

——こいつ実は腹黒いんじゃないか？

## 5 話

丸山は俺と牛込が電話でどういやり取りをしたのかを当然知らない。だからこれは偶然なのだろう。牛込たちのクラスがクレープ屋をやり、丸山がそれを食べたがつている。ただそれだけのことだ。偶々起きた出来事なのだ。

だから丸山を責めることはできないし、そもそも責めてはいけない。俺が撒いた種なのだから。自業自得なのだから。

俺が無言になったからか、丸山が小さく首を傾げる。アイドル志望だけあつて丸山は可愛い部類だ。こういう仕草も狙っているのではなく、自然とそうなるだけ。それがあざとさもない。ちよろい奴ならイチコロだな。

「先輩どうかしました？」

「丸山つて動物に例えると犬だよなって思っただけ」

「え、犬ですか？」

「自覚はないだろうし、むしろしないでくれ。自覚した途端俺は見限るから」

「なんでですか!？」

なんでも何も、自覚して行動するようになるってことは、狙ってさつきみたいなのは、質を落としてことだろ。そんなのあざといを通り越してウザい。俺はぶりっ子とか嫌いなんだよ。

とはいえ、丸山はそうなることもなさそうだけだな。人間性というか、その人の本質って変わらないものだから。よっぽどのことがない限り変わらない。そして丸山はめげない女の子だ。自分を曲げることもない。自覚していないことでも無意識下で真っ直ぐに整える。

現実逃避をやめ  
そんなことより、

これからどうしたものか考えよう。牛込がいるクラスだからといって、学園祭はシフト制で店を回すはず。牛込が担当していない時間かもしれない。

むしろそうであってくれ。牛込がいたらどう話をするか、そもそもどの面を下げつつ話でもあるが。纏まらない思考に耽っていると丸山に手を引かれる。前が進んだらしく、俺達も進まないといけないようだ。そう、教室内へ。

「……ふう、牛込はいない、か」

「ゆりさんいないですねー。いたら二人がどんな感じで会話してるか見てみたかったん

ですけど」

「なんでそんなの見たがるんだよ」

「内緒です！」

「……今度あの二人しばくか」

「やめてあげてくださいね？」

「おろろー？ ゆりを袖に振つといて何してんのかなー？」

しくじった。グリグリメンバーのことを全く考慮してなかった。だがこいつならまだ救いはある。鰐部ならキツかった。二十騎は違う意味でキツイな。そして牛込本人だったら終わってた。

さて、目の前にいるこの鵜沢はどうしたものか。こいつはあのメンバーの中で一番柔軟思考というか、人のゴタゴタへの関わり方が巧い。放置するわけでもなく、踏み込みすぎない。そんな奴だ。ただ今回は身内でもある俺と牛込の問題だ。多少は踏み込んでくるだろう。

その前に、なんの話か分かっていない丸山が、俺達の会話を理解しないようにさせないとな。頬を引っ張ったりつついたりするでしょう。丸山はリアクションが良いから、こうしてたら話は耳に入らないだろうし。



「……ずいぶんと仲いいんだね」

「バイトが同じだからな」

「それだけでそうなるかなー。まあいいや。それよりゆりちゃんと何したの？ 正確には何を言ったの？」

「学祭なら彼氏と回れっただけだ。言い方が荒くなつたのは俺の失態だが」

「なるほどね。ま、黙つっというてあげるけど、もしゆりちゃんに会つたら話してよね。

真っ直ぐに」

「会つたらな」

いい加減頬で遊び過ぎたようで、丸山が隣で不機嫌になる。頬を膨らませて頑なに目を合わせようとしないあたり間違いないだろう。分かりやすい。本当にわかりやすい怒り方だ。

出来上がったクレープを俺が二つ持つ。丸山は俺に怒っている最中だから気づかない。クレープを両手に持ち、丸山に外に出ると声をかけて先に教室から出る。そこでようやく俺が丸山の分のクレープを持っていることに気づいたようで、声をかけながら急ぎ足で追いかけてくる。

「クレープいるのか？」

「いりますよ！ 私が食べたくてここに来たのに……」

「そうだな。それじゃあ中庭のベンチがまだ空いてるし、そこで食べるか」

「はい！」

「やつぱ犬つばいなあ。それはそうと丸山。怒るのはやめたのか？」

「あ」

自分のクレープを両手で大事そうに持ち、見ている側も和ませるほど純粋な笑みを浮かべる丸山を揶揄うように言ってみる。やはりさつき怒っていたのは演技のようだった。演技とはいえ、俺自身やり過ぎたと思っっているから謝罪はするんだけどな。

丸山に許してもらい、ベンチに腰掛けてクレープを齧る。高校生レベルのクレープのはずなのに普通に美味しい。誰が仕込みをやったのだろうか。そもそも仕込みをきちんとできていたところで、作る際にも出来が左右されるはずだ。どうやってここまでの物に仕上げたのやら。

食べたがっていた丸山の反応はどうなのか。女子はこういうスイーツには目がないし、わりと細かく検証するらしい。はたして丸山の判定は……、気にする必要はなかつ

たか。丸山はチョロいんだから。幸せそうに頬張っているのを見ればそれだけでどうなの分かる。そんな丸山の頬に手を伸ばす。今度はつつくわけでも、引っ張るわけでもない。

「クリームついてるぞ」

「ふえ？」

「ん、取れた。頬張るのはいいが、気をつけろよ」

「あう……」

「……なにを見せつけてるんですか？」

丸山の頬についたクリームを取ってやっただけだというのにこの言われよう。しかも見せつけてるわけでもないし、俺と丸山は先輩と後輩というだけの関係だ。聞こえた人に誤解されるような言い方はやめていただきたい。それと丸山。クリームがついていたことか、俺がそれを取ったことか、それとも今言われたことか、どれに反応して顔を伏せている。

俺からはその顔は見れないが、耳が赤いことから赤面していることはわかる。指摘しない方がいいんだろうな。

「今日はツツコミの気分じゃないからスルーさせてもらおうぞ」

「私には辛口じゃないですか?」

「そんなことはないぞ。松原のタイミングが悪いだけだ。それより一人なのか? 誰か友達と回ってないと迷子になるぞ?」

「心配ご無用です。友達と一緒にですから」

「その友達は?」

「……あれ?」

やっぱり駄目じゃないか。何が『心配ご無用です』だ。相変わらずの迷子になる速さと異様さだな。友達と一緒に行動しといて迷子になるってどういうことだよ。しかもここは中庭だぞ。人も少ないことだし、はぐれる方が難しいだろ。

周りを見渡す限り人はそれなりにいる。この中に松原の友達がいるのかと思っただ、松原が涙目になって心細そうにキョロキョロしてるなら友達はいないのだろう。せめて特徴を教えてくださいれたら俺も探しようがあるんだが……。

そう思いつつ松原を落ち着かせていると、こつちに駆けてくる少女を見つけた。きつとあの子が松原の友達なんだろう。

「花音！」

「ふえ？　ち……千聖ちゃん？　よかつた〜」

「よかつた〜、じゃないわよ。突然いなくなるから心配したじゃない」

「ご、ごめんね……」

「でも合流できてよかつたわ。ところでそちらの男性は？」

「あ、紹介するね。バイト先の先輩の萩近玲音さん。ちよつと意地悪だけど、良い人なんだよ」

「あなたが……。私は白鷺千聖です。いつも兄と花音がお世話になってます」

あー、もしかしたらと思ったけど、やっぱりそうなのか。どうりでなぜか既視感があったわけだ。それにしてもあの金髪って染めてるんじゃないやなくて地毛だったのな。普段の言動からして染髪だと思ってたんだが。まあそれはいいや。それよりもあいつ妹が元子役で。なるほどな。それならあなつてたのも納得だわ。

それは置いとくとして、差し出された彼女の手は握り返すべきだな。牛込の時と違って、わざわざ印象を悪くする必要もないし。そんなわけで、その柔らかく女性らしい手と握手を交わす。少しひんやりしているな。平温は低いのか、末端冷え性なのか。

「千聖ちゃんってお兄さんいたの?」

「はあー。花音が気づいていないとは……、あなたのバイト先にいる金髪の男性。それが私の兄よ」

「金髪の……あ……え、ええ!?! 名前が一緒だなんて思ってたけど、そうだったの!?!」  
「名前が同じなら真っ先にその可能性考えるだろ」

抜けてるよなあ。松原ってとことん抜けてるよな。さすが小動物系女子。そうやって男を釣るんだろな。無自覚で。なんて質の悪い。といっても松原がアイツ以外の男に靡くこともないんだろうけども。

「その話はいいとして、私達はそろそろ次の店に向かいますね」

「ああ。俺が言うのもなんだが、楽しめよ」

「ふふっ、ありがとうございます。花音、行くわよ」

「うん。でもちよつと待ってね」

松原が丸山に近づいて小声で何やら話しかける。何を話しているか分からないが、丸

山のリアクションが面白いから良しとしよう。ところで、せっかく赤面が収まっていたのに、またほんのりと頬を赤くしているように見えるんだが。松原つて実は畜生なんだろうか。ふんわり笑顔で畜生とか怖いな。

「それじゃあ彩ちゃんまたね」

「う、うん……」

手を振っていないくなる松原と白鷺をその場から見送り、姿が見えなくなったところで丸山に視線を向ける。どうやら丸山はこつちを見ていたらしく、バツタリと目があった。目があった途端丸山の目は泳ぎ始めたけどな。

「なんだよ」

「な、なんでもない……わけでもないです」

「どつちだ」

「頑張れ私……あ、あの！　お願いがあるんですけど！」

……またか。さてさて、今度はどんなお願いをしてくるのやら。まあ、それを聞いて

やるかは内容次第なんだけどな。

~~~~~

高校二回目の学園祭。今年が去年と違うのは、去年は七菜と回っていた学園祭を今年
は彼氏と回っていること。

数合わせでいいからって頼まれた合コンに参加してみても、そこで出会った人。見た目
だけじゃなくて、話してみた感じでも誠実さが伝わる人。いろいろと話題を持っていて
話をしてくれるし、話を聞いてくれる。萩近くんみたいに捻くれてないのも好感を持て
るところかな。

彼氏と言っても今は『仮』。今回の学園祭を一緒に過ごしてみても、それでどうするか決
める。今のところ有りかなーって感じ。私もクラスのとこに行って店番しないといけ
ないから、それが終わったらまた少し一緒に回る。私達グリグリはライブをするから、
その前には分かれないうちだけどね。

「萩近くんも会ってみたら友達になれるかもしれないのに」

「どうかした?」

「ううん。なーんでも。私そろそろクラスのところ行かないとだから、また後でね」

「うん。頑張ってきてね。終わったら連絡して」

「わかった！」

彼は私が店番してる間、展示とか見て回るんだって。できるだけいろんなところに行きたいんだとか。いつも通ってる私には分からない感覚だけど、反対の立場になったら分かるのかな。

彼の学校の学園祭はいつなんだろうか。ふと疑問に思ったけど、もう別れて姿も見えなくなっているから、あとで聞いてみるでしょう。萩近くんの学校はもう終わってるらしいけど。

中庭を通ったほうがスムーズにクラスのところに行ける。だから私は中庭を通ることにした。

でも——

「彩次はどこに行く？」

「玲音さんの希望の所に行きましょ！ さつき私が行きたい所に行きましたし」

「わかった」

——私の目に映ったのはいいはずの萩近くんが女の子と仲良くしてる光景

——私の耳に聞こえてきたのは萩近くんと女の子がお互いに呼ぶ下の名前

——私にはダメって言ってたのに

——全然許可をくれないのに

なんでだろうね。彼がどうしていようと彼の勝手に、私には彼氏がいるのに。

——なんでこんなに心が苦しいんだろう

6話

学園祭を丸山……じゃなかった。彩といろいろ回つてみたが、彩が行きたいところはまだあるらしい。体育館でライブがあるからそれに行きたいんだとか。誰がやるのかは予測できたが一応聞いてみた。そしてそれは当たっていた。

Glitter*Green。つまりは牛込たちのライブだ。結成以降学校を中心に知名度が上がっているらしく、今日のライブでは観客が多いことが予測されている。すし詰め状態だったらキツイが、どれだけ人が来るのやら。俺としては今回だけは人が多く来てほしい。バレずに終われそうだから。

「結構多いですねー。まだ20分はあるのに」

「さながら学園アイドルだな。もう少し増えてくれたら好都合だな」

「? 誰か探してるんですか?」

「いや……体育館広くなって」

「へ? 玲音さんの所は狭いんですか?」

「(っ)よりは少しな」

狭い、と言つても狭過ぎるわけでもない。バスケのオールコートが一面分つて程度だ。バレーなら一応二面使える。ここはバスケの試合を二試合同時にできるぐらいか。

なんて言つて誤魔化しているが、探している人がいないわけじゃない。人もまだ増えそうだから、彩と逸れないようにもう一度手を繋ぐ。今度は過剰に反応はしなかった。どこか嬉しそうにはしていたけどな。

体育館には椅子が並べられていて、先着順で前から詰めるように座らされるが、俺としては前すぎず、後ろ過ぎない真ん中あたりの少し横ぐらいがいい。そんなわけで座りに行くタイミングを見計らつていて、一人の男がこつちに近づいてきた。

「ごめん。ちよつといいかな」

「俺は係員じゃないからな。係員ならあつち」

「あーいや。君に用があるんだよ」

「は？」

何やら気に食わないことを言ってきたな、この見た目優男。……あー、どこかで見た

ことあると思つたら、こいつか。あの馬鹿がひよこひよこ釣られた。なるほどね。いい趣味してるじゃないか。

俺の雰囲気が変わつたことに気づいた彩が、心配そうに視線を送ってくる。余計な心配だと意味を込めて髪を少し乱雑に撫でる。髪が乱れたことに怒るくせに、少し笑顔なところが不思議だ。実はMなんじゃないだろうか。

そんなことを心配してしまつたが、彩といる時にこいつと話すのは良くない気がする。だから彩に一言断つて一旦距離を開ける。話し声が届かない程度に、されども見失わない程度の距離。

「まずお前誰よ」

「あはは、そうだね。自己紹介しないとイケないね。俺の名前は神木龍輝^{かみきりゆうき}。ゆりとは前の合コンで知り合つたよ」

「そこは知ってる。で、まあ一応俺も自己紹介すればいいのか。萩近玲音だ」
「ゆりからよく聞いているよ。よろしくね萩近くん」

「俺は逆に全く聞いてないなら。あとよろしくしたくねえよ」

「はは！ 聞いてたとおり捻くれてるね！」

差し出された手を俺が握り返さないと分かったようで、神木は軽快に笑い流した。なかなか爽やかというか、誠実というか。俺とは違う部類だな。それにしても牛込のやつ、いったい何を話してるんだか。それに彼氏という時に他の男の話するってどういう神経してるんだよ。

俺の知ったことではないからどうでもいいんだけどな。こいつらがそれで破局したら腹抱えて笑ってる気がするね。俺のせいでもないし。

「それで？ なんの用なんだよ。何か話があるんじゃないのか？」

「あると言えばある。ないと言えばないね」

「は？」

「君と会って話してみたかったというのがメインの目的だからね。他にあるとすれば、ゆりがどこか上の空になってたというか、調子が悪そうだったことに心あたりあるかなって。君のほうが付き合い長いんでしょ？」

「長いつつっても一年もねえよ。それに今日は会ってないからそんなこと言われてもさっぱりわかんねえな」

牛込が調子悪いつてどういことななんだろうな。こいつの話を聞く限り、牛込が店番

をするまでは普通だったらしい。それが終わって合流してみたら変わっていたのだとか。

それで考えられるのは、店で何かあったということなだけだな。それも違うとなるとお手上げだね。なんとかする気もないが。やるならそれはこいつの役割だ。頑張れよ彼氏。ラブコメ展開してこいよ。

「うーん。聞いてたのと少し違うね」

「何がだ。てかあいつ何をどんだけ喋ってんだよ……」

「聞いていたのは、君はなんだかんだでどうにかしようと思ってくること。でも今回はその素振りが全く無い」

「俺の役割じゃないからな。そもそも俺は牛込たちに合わせる時間を減らしたいってズツと言ってきたんだぞ？ 神木のおかげでそれが叶うんだ。俺が動く必要性はないね」

「なるほど。君は怒ってるんだね。ゆりが簡単に俺に靡いたことに。繋ぎ止められなかった自分に」

「お前頭大丈夫か？」

「いいよいいよ。そういうことにしといてあげるから」

うわ、超うざつたい。こいつも人の話を聞かないタイプだ。俺と相性が悪い部類の人間だ。ぜひとも今後は一切絡みがないようにしてもらいたいね。俺のストレスがまた溜まってしまいうから。

ところでこいつ、俺が話を聞く気失せたことにも気づいてくれないのな。何やらウザつたいことを言っているんだけど。別にお前が牛込とどこに行つて遊ぼうと知ったことじゃないんだけど。

でもまあとりあえずは聞き流しておいてやるか。そう思っていたんだけどな。一つだけ俺の琴線に触れるものがサラツと流れたぞ。それについては黙ってらんねえな。そう思つて口を開こうとした所で、俺の携帯に着信が来た。タイミング悪いな。

俺は神木に断つてから電話に出て、しばらく会話してから神木と別れた。こいつと離れられる理由をくれてありがとう。それだけは電話の主に感謝する。待つてくれた彩に謝つて、もう少しだけ待つていてもらうことになる。行く場所ができてしまったから。

くくくくく

「ゆり大丈夫？ どこか調子悪いの？」

「ううん。大丈夫だから」

「大丈夫そうに見えるけどねー。ゆりちゃんがこうなるのって大抵萩ぼんのことだけど、萩ぼん来てないはずだよね？ お墓参りがあるって」

「っ！」

ひなのいう萩ぼん、つまりは萩近くんのこと。その名前が出たことで私は反応してしまった。みんなそれで気づいた。私がこうなってしまうのは、萩近くんが原因だということ。

気づかれたくなかった。だってこれは私の問題なんだから。みんなを巻き込むようなことじゃないのだから。でも、そんな私の思いを誰も納得してくれない。メンバーの問題だからって。

「まさか萩近くんが来てるの？ ゆりは彼に会ったの？」

「それは……」

「もしそれでこうなったのなら萩ぼんには何かしらの罰が必要だね」

「か、彼は悪くないよ！ 会ったわけじゃないもん……。ただ見かけただけで、そしたら

なんか胸が苦しくて」

「はあー。とりあえず萩近呼んだから。来たら二人で好きなだけ話したらいいよ」

「リイ!? なんで勝手にそんな……!」

「だって二人ともめんどいから。何を怖がってるのか知らないけど、結局は会って話すしか解決しないからね」

リイが言ってることは間違ってる。自分たちの間で起きたことは、自分たちで解決するしかない。会って話すしかないんだ。

でも、どうしたらいいか分からない。だって怒らせたのは私なんだけど、彼が何に怒ったのかが分からない。考えたことがあってるのか、違ってたらまた怒るんじゃないか。そう思ってしまう。

そして今彼とまともに会話できるか分からない。彼が他の女の子といただけなのに。名前前で呼び合ってただけなのに。それだけなのにこんな苦しいんだから。会ったらどうかしちやいそう。

「リイちゃん。萩近って人が来たんだけど」

「来たね。入れて入れてー! じゃあゆりちゃん、あとは頑張ってるね」

萩近くんが来たことで、入れ替わるように七菜とリイとひなが出ていく。ライブが始まる前には戻ってくるだろうけどね。

「問答無用で呼び出されたんだが……」

「萩近くん……」

呼び出した張本人がいなくなったから、彼は頭を搔いて困り顔になってた。そんな顔をされても私もどうしたらいいか分からない。お互い顔を合わせられず、気まずい雰囲気が出る。何か切り出さないといけない。でも、口開いても声が出ない。どうしたらいいか分からないよ。

「ごめんな牛込」

「え？」

この空気を壊してくれたのは萩近くんだった。謝罪から始まった。でも、なんで彼が謝る必要があるんだろう。私のせいなんだ。私が自分で勝手にややこしい事にしただ

けなんだ。それなのに……。

「この前いきなり怒鳴ってごめん。言い訳はしない。傷つけたらもうし」

「そんな、こと……」

「それに、学祭には絶対来ないって言ったのに、こうしてノコノコと来ててごめんな。嘘ついた。来る気がなかったのは本当なんだが……」

「……あの子に誘われたんだ？」

「まあ、な。あの子が前に話したバイト先の後輩」

そっか。あの子が。だからあんなに仲がいいんだね。お客さんとしてそこそこ行つてたから、あの店の従業員同士の仲の良さは知ってる。

こうして誘われてもおかしくない。お義母さんのお墓参りに行かつて予定を無くしてまで来たのは、何か理由がありそうだけどね。そこまで聞くのは野暮だよね。

バイト先の子ならいいかなって思った。でも、中庭で仲良くしてたのを思い出したら、名前前で呼び合ってるのを思い出したら思いが逆転しちゃった。胸のモヤモヤが、苦しさが広がる。

——いやだいやだいやだ！

「なんで」

「牛込？」

「なんであの子なの！　なんで私は駄目なの！」

「何言つて……」

彼が混乱するのもおかしくない。いきなり怒ってるんだから。なんの脈絡もなかったんだから。でも、抑えられない。止まらないよ。こんなに苦しいんだから。

口調がどんどん強くなる。目が熱くなつて視界が歪む。彼の顔をまともに見ることができない。

「名前で呼び合つてた！　私には絶対ダメって言つてたのに！　一年経つても許可してくれないのに！　知り合つて二ヶ月くらいの子にはOK出してるの意味分かんないよ！　私には気持ちを考えろつて言うくせに！　君こそ私のこと考えてくれてないじゃん！」

「…………ごめん」

「謝られたつて——あ…………」

言葉が続かなかった。彼にギュッと抱きしめられたから。彼のことを側で感じられる。この温かさも、この匂いも、この存在感も、どれも懐かしく思える。

そもそも全然こうされることがないから。紅葉を見に行ったときとか、12月のドタバタの時ぐらいかな。約半年ぶり。半年ぶりにこうされたら、言葉も出なくて、涙の意味も変わって溢れてくる。

ズルい、ズルいんだよ。いつだって。君は。

「自分のことではいいいいいいになってる事は自覚してる。それで余裕が無くなってること、牛込にあたってること。本当にごめん。謝って許してもらえなんて思っていないけどさ」

「ズルい……ズルいよ……。怒れないじゃん」

「それは知らん。……牛込は牛込のやりたいようにやればいい。俺は自分のコントロールで手一杯だから、何かしてやれるとも思えない。だから、俺のことを気にせずに自分で決めていけばいい」

「なんの、ことなの……？」

「いろいろだよ。それこそ、いろいろ。ライブは最後まで見るからさ。SPACEの時

みたいに俺を魅せてくれよ」

「あ、はは……。ほんと、自分勝手なんだから」

自分勝手な人だ。いつだって念頭に自分のことを置いて考える。他人に左右されな
いとも言えるけど、自分勝手っていう方が彼には合ってる。

でも、これでこそ萩近くんなんだ。私が友達でいたいと思える人。彼のいたずらっ子
みたいに浮かべる笑顔。その唇に私の人差し指を押し当てる。

「楽しみにしててね♪」

そう言つて私も笑顔を返す。モヤモヤが全部無くなったわけじゃない。でも、私は大
丈夫だ。彼が望んでる音楽をみんなと奏でられる。私がこんな行動するとは思つてい
なくて、目を丸くしてる彼を見ながらそう思った。

~~~~~

「いやー凄かったね〜。あれを高校生でできるのか……。それに、調子を取り戻したみ

「ただけど、どうやったんだい？」

「これぐらい彼氏じゃなくてもできる」

「あはは、耳の痛い話だ」

「お前とこれ以上話す気もない。じゃあな」

ライブ中は離れていたのに、ライブが終わった途端絡みに来た神木と早々に別れて彩と外に出る。ライブが終わった時間だと特にやることも残っていない。ミニゲームとかならあるんだが、そういう気分でもないしな。

でも俺一人で行動してるわけじゃない。彩の希望も聞く必要がある。さつき待たせまくったわけだし。

「玲音さんって神木さんのこと嫌いなんですか？」

「別に。興味がないだけ。底も知れたしな」

「それって嫌いってことなんじゃ……」

「神木のことはいいだろ。それより、ほとんどやることない気もするが、彩はどうしたい？」

「えとー、一つだけ残ってるんですけど、それは時間が少し遅くなるんですよ」



「気にしないさ。今日一日開けてるからな。彩がそうしたいならそれをやろう」

「いいんですか！ やった！」

「それで、彩のやりたいことは？」

「1時間後に始まる最後のイベント。社交ダンスです！」

わーお。この子は相変わらずとんでもないことをぶち込んでくるな。この学校女子校のはずだよな。なんでイベントに社交ダンスなんて入れてるんだよ。普通に考えたら女子同士でやるだけじゃないか。

……これって、男女でやるほうが注目浴びる気がするな。彩にそのことを伝え……駄目だこいつ。楽しみ過ぎるのか超笑顔だ。

「なるようになるだろ」

「楽しみですね！」

「そうだな」

いざ始まってみれば、なんてことはない。予想通り彩が赤面してただけだ。ダンスをどうするか一応聞いてみると、ダンスをすと言い張ったのは驚いた。そんな状態で

きるのかと。

だが踊り始めると踊ることに集中できたのか、周りの目が気にならなかつたらしい。よく俺の足を踏んだり、転けそうになってたりはしてたけどな。

「玲音さん。今日一日どうでした？」

「ん？ ま、楽しめたよ。ありがとう彩。気遣ってくれてたんだろ？」

「あ、あはは、バレちゃってました？ 最近玲音さんが休憩の時に疲れた顔をされてたので、リフレッシュしてもらえたらなつて」

「まさか彩にバレるとはなー。どうせ本当は青葉先輩あたりに教えてもらったとかだろうけど？」

「さ、さあーどうでしょうー」

「はは！ 隠すの下手すぎだぞ」

「うう」

典型的な隠し事をできないタイプ。きつと嘘も下手くそだろうな。でも、それでいてくれた方がいい。その方が一緒にいる時気楽にいられるから。

今日は彩を送って帰ることにした。ちよつとしたお礼代わりだな。ちゃんとしたや

つは何かしら用意して、バイトの時に渡すとしよう。

人混みで逸れる心配もなくなったというのに、彩が一向に離そうとしないから繋がったままの手。女の子らしいけど、白鷺とはまた違う。もちろん牛込とも。家の前に着いたように、彩の足が止まる。表札を見ると、たしかに丸山と書かれている。ここが彩の家なのか。

「玲音さん、その……名前呼びのこと……なんですけど」

彩なりに勇気を振り絞っているのだろう。目を合わせようとしては逸らし、言葉は僅かに震えながらもしっかりと発せられる。繋がっている手を強く握られるのも、不安があるからだろう。それも仕方ないのかもしれない。

名前呼びは今日だけという話なのだから。

「あの……今後も続けていいですか!! 勝手なのは分かっています。言っていることがおかしいって。でも……!」

不安そうに瞳を揺らして、その瞳には涙が溜まっている。涙もろい彩らしいと言える

だろう。俺の返答がどうなるか分からない。きつと怖いだろうな。そして俺の答えは決まってる。だから俺は溢れ始めた彩の涙をそつと拭う。

「いいよ。彩がそうしたいなら。それに、彩が望むなら俺も名前前で呼ぶ」

「あ……ありがとう……ございましゆ」

「はは、かんでやんの」

「だ、だつてえー」

涙を流す彩を慰め、そつと頭を撫でる。しばらくしたらいつもの笑顔に戻り、それを見てから俺も家に帰ることにした。牛込にああやって言われたのにな。これが知られたらまた怒られそうだ。でも仕方ない。彩なら名前呼びはいいかなって思ったのだから。

牛込の家があるマンション前まで戻ると、ちょうど牛込も帰ってきている時だった。どうやら神木のやつはいないらしい。家族で飯なんだとき。忙しいやつ。

「それで、どうしたんだよ」

「どうつて……あー、うん。付き合うことにしたよ」

「へー。おめでとさん。……あーそうだ、ライブ良かったよ。前よりも断然。声も綺麗で」

「そう？ えへへ、君に褒められると嬉しいや」

「神木よりもか？」

「え？」

「……なんでもない。じゃあな」

「またね！」

あーらしくない。こんなの俺らしくない。最近俺のルーティンが崩れすぎてる。学年が変わって環境も変わるのだから、修正も必要なんだけどな。とりあえず帰ってシャワー浴びて寝るとしよう。

それで落ち着くはずだったのにな。

祖母が振り込め詐欺に引っかかりさえしなければ。しかも俺の金を使って。

——ああ、本当にこのババア。とつとと死ねばいいのにな。

## 回帰

少しだけ話すつもりだったけど、香澄ちゃんにどんどん促されて私もつついっつい細かく喋っちゃってる。……ううん。違うね。私は聞いてほしかったんだ。誰でもいい。彼と全然面識がない第三者に。それがたまたま香澄ちゃんだっただけ。ただそれだけのことなんだ。

「ええ!?! ゆり先輩なんで萩近さんと付き合わなかったんですか!?!」

「あはは、みんなによく言われるよ。あれだけ仲良いのにーって。……でも、私も彼もそういう考えがなくて」

「その感覚は全然分かんないです。私は誰か男の子を好きになった事もないからあんまり言えないと思いますけど。でも、やっぱり分らないです!」

香澄ちゃんは真っ直ぐだよ。目を輝かせて、自分の目標に、自分の決めた道に真っ直ぐ進んでる。迷うことも止まることもあるけど、それでもりみ達と一緒に真っ直ぐ進

めてる。

それに比べて私はどうなんだろうね。彼は真つ直ぐだって言ってくれた。『俺とは違つて芯が綺麗に真つ直ぐと伸びてる』なんてね。でも、本当にそうなのかな。彼に言われた時はそう思えてた。彼が側にいてくれてた時は、『私はそうでいられるんだ』つて。でも今はその自信がない。

だから私は香澄ちゃんのその言葉に何も返せなかつた。言葉を返さず、違う話に変えることしかできなかつた。

「そろそろお昼ご飯の時間になるけど、香澄ちゃんの予定は？」

「今日は特にはないです。何かキラキラドキドキすることがあるかなーって歩いてただけなので」

「そっか。それじゃあファミレスに行かない？ファミレスならゆつくり話しても問題ないし。香澄ちゃんが良ければだけどね」

「行きます！お話の続きを聞きたいです！」

「あはは、そんな大した話でもないんだけどね。というか、香澄ちゃんの言うキラキラドキドキな話は、だいぶ少なくなるかな」

「え……。でも聞きたいです！最後まで聞かないとモヤモヤします！」



「そ、そうなんだ」

香澄ちゃんが目をぱちくりさせた後に、急に詰め寄ってきたから言葉が詰まる。りみも言つてたつけ。香澄ちゃんは距離間がすごい近いって。りみとかポピパの子は慣れたみたいだけど、私はまだ慣れないかな。

距離が近くなつた香澄ちゃんに少し離れてもらつて、ベンチから立ち上がる。今からファミレスに向かつても順番待ちになるかな。順番待ちの間は過去話をしないでいいかな。私も休憩したいし。待つてる間はポピパの話を聞くことにしよう。彼女たちの話は聞いていていつも面白いから。話してる時がすごい笑顔だからかな。

数時間程度じゃあ葉の色も変わらない。まだ緑の方が多いね。私はまたあの辺り一面の紅葉を見たい。今年も彼と一緒に見に行きたい。見に行けたらいいんだけど、はたしてこの願いは叶うのかな。

——誰に聞けばその答えが分かるんだろう

——彼に聞くことができないう今この状況で、誰が答えてくれるんだろう

香澄ちゃんからポピパの話を聞く傍らでそんなことを思った。この疑問にさえ答えてくれる人はいない。駄目だ。気持ちが沈んでしまう。香澄ちゃんがせつかく明るい話をしてくれているのに。

ああ、情けない

本当に私は

我儘で

身勝手で

酷い女で

情けない女だ

## 7 話

中間テストやら学祭やら検定試験やらがあつた5月はすぐさま過ぎ去り、今や6月中旬だ。祖母によつて俺の貯金は消え去つた。不幸中の幸いとも言えるかはわからないが、給料が入る前だつたからまだマシだろう。祖母が家にいるせいで最近は取り組めない副業は別の口座にお金が入っている。厳しい生活であることに変わりはないが、なんとか食いつなげている。

世の中捨てたものでもなくて、学校に行くと事情を知っている数少ない人物の一人、売店のオバちゃんや俺の昼飯を提供してくれる。何もお礼できないのにな。礼はいらないつて言われるが、礼儀を守るべきだ。毎度必ずお礼を言っている。夜もバイトに行けばバーガーやらポテトやら、他にも店にあるものを食べさせてもらっている。実質食費は朝と祖母の分だけだ。

「……………ふうー」

「玲音さん大丈夫ですか？」

「ピークがエグかったからな。でもま、あとは落ち着くだろうし、大丈夫だろ」

「あ、私最近マツサージの練習してるんですよ！ よかったらしてあげますよ！」

「彩のマツサージで……大丈夫か？」

「なんでそこで心配になるんですか！ 妹にもお姉ちゃん上手って言われたんですよ！」

「……へー。ならお願いしようかな」

「はい！」

一緒にピークを回していたはずなのに、彩は全く疲れを感じさせない笑顔を浮かべていた。そんな彩の笑顔につられてこっちも自然と笑顔になる。心に安らぎを与えてくれる。なんの曲かは分からないが、鼻歌を付きで肩を揉んでくれる。彩はいつも妙に自信を持ってやるが、今回はそれに見合ったものだった。

「どうですか？」

「驚いた。彩上手いんだな」

「えへへ、練習しましたからね」

「練習の成果が出ることもあるんだな。……彩痛い」

「玲音さんが一言余計なのが悪いんです」

今は完全に主導権を握られているから、下手に彩をイジることもできないな。いつも彩をイジるのを楽しんでいるというのにな。でも、たまにはこういうのもいいかもしれない。彩という無言で過ごすなんてありえない。そんな考えもあったが、それも捨てないとな。無言でも居心地がいいのだから。

「彩もういいよ。ありがとう」

「え、もうですか？　せっかく練習してきたのに」

「これだと彩の休憩にならないだろ？　十分休めれたから、彩も椅子に座って」

「でも……」

「俺の気持ちが悪くない」

「うう、意地悪です」

「知ってる」

俺を休ませようとしてくれる彩にこの言葉はズルいよな。それぐらい分かっている。分かっているからこそ言わせてもらった。彩が気を使ってくれているように、俺もま

た彩に気を使うから。休憩は休憩なのだから、休んでほしい。

諦めて椅子に座った彩が不満そうに頬をふくらませる。それをついてみると彩の口の中に溜まったいた空気が漏れ出す。子供みたいなやり取りに、彩は頬を赤くして睨んでくる。でも全然怖くない。

「そんなんで睨まれてもな」

「玲音さんには罰を受けてもらいます」

「ええー」

「ええーじゃないですよ。それにそんなにしんどいやつじゃないですよ？」

「分からんぞ？ 基準は人によつて違うからな」

「またそんな屁理屈言つて……。今度の週末はお互い休みですから、一緒に遊びましょつてだけです。その時にわがまま聞いてもらうだけです」

「あーね。うん。いいよ」

「やった！」

罰を受けてもらうつて言っておきながら、俺が断つたらその予定をなくすつもりだったのだろうか。半端ない喜びようだ。金銭的には手痛いことになりそうだが、それでも

この笑顔を見られるのなら安いものなのかもな。

ところでさつきから聞き耳立てては狂ってる連中はどうしてやろうか。

それから時が経って週末。俺は集合場所である駅前に来ていた。正確には改札前。電車に乗って移動するらしいから、集合場所もここだ。女子と出かけるからといって特に着飾ったりするわけでもない。そもそも服のレパートリーは皆無だ。使い回しだ。

時計を確認すると集合時間の5分前。俺にしては珍しく時間より前に来ている。いつもなら時間ピッタリに来るのにな。彩は先に来ているのだろうか。それともまだだろわか。連絡を取ってみるのもいいかもしれない。そう思って携帯を取り出そうとポケットに手を入れたところで、見覚えのあるピンクの髪を見つけた。顔を見て確信した。あれが彩だ。

「あ、玲音さん！ お待たせしました！」

「そんなに待ってないぞ。俺も今着いたところだから」

「そうですか？ よかったー。誘ったのにお待たせしてたらどうしようって思ってたんですけど」

「気にしなくていいのにな」

眉を下げる彩にどこに向かうかを聞き、切符を買う。案内するために先を歩いてくれているが、場所を聞いてる以上俺にも分かる。ただまあ彩が張り切っているのだし、ここは任せてみるでしょう。トチリそうになったらフォローすればいいだろう。

「この電車に乗りますよ」

「おっけ」

電車に乗り込み、ドアの側に立つ。他に乗る人もいないから邪魔にならないし、二駅先が目的地だ。今日の目的は彩の買い物に付き合うこと。お互い昼飯は済ませているから、どこかで食べることもない。買い物が終わればカラオケに行くらしい。俺には無縁な場所だと思ってただけだな。人生何があるか分からないものだ。

「今日買いに行くのはアクセ類だったか」

「はい。ネックレスとか欲しいなーって」

「なるほどね。その服に合うやつとかか？」

「この服ですけど、他のにも合うようなのがないなーって。……そ、それより、服……」



似合ってます、か？」

「ん？」

「い、いえ！ なんでも……ないです」

これは俺が聞き取っていなかったと受け取られたということか。別に聞こえてたんだけどな。服のことを細かに見てたわけじゃないから、いきなり話を振られても答えられないってただけだ。まあ電車の中でジロジロ見てたら通報もんだし、パツと見て答えるとするか。

「……大丈夫。似合ってるよ」

「へ？」

「似合ってる。可愛いぞ」

「ふえ……ありがとう、ございます」

細かい評価はできないが、彩の質問には答えられただろう。似合っているか似合っていないかの質問だったしな。で、答えたら答えたで彩は顔を伏せるのか。もう少し自身を持ってもいいと思うんだけどな。彩はファッションのことも自分なりに研究してい

るのだから。でも他人の評価が気になるのも分からなくはない。彩が目指してるアイドルって他人にどう映るかだしな。

「駅についた。降りるぞ」

「は、はい」

立場が逆転して俺が彩を先導するようになる。彩は褒められ慣れていないんだろうな。嬉しいけども恥ずかしい。そんな反応をしているわけだし。

改札を出てしばらく歩き、彩が行きたがっているショッピングモールへと入る。どこか既視感があるなと思っていたが、ここは去年牛込と来たところだったな。遠い記憶に思えるが、まだ一年しか経っていないのか。

「店の場所は分かるか？」

「あ、はい。3階です」

さすがに復帰した彩がまた先導し始める。俺はそれについていき、二人でアクセサリーショップを目指す。休日ということもあって人も多いが、建物自体が大きい。逸れ

る心配はないだろうから、今回は学祭のときみたいに手を繋ぐ必要もないな。そう考えていたが、彩が明らかに挙動不審だ。何度もこつちを見ては前に視線を戻している。分かりやすいな。

「これでいいのか？」

「あ……ありがとうございます。……迷惑じゃないですか？」

「迷惑なら俺からはこうしてない。それに、やりたいことは言えばいい。それに応えられるかは別として、聞くだけ聞いてやるから」

「……はいー！」

やっぱり犬だ。子犬だ。感情表現が豊かで、ちよつとしたことでも心から嬉しそうにする。明るい雰囲気を出すワンピースタイプのその服も相まってか、その笑顔がより染えて見える。

上機嫌になった彩に腕を引っ張られて、急かされるように店に入る。男子でもワンピースのアクセ類はつけるらしいが、俺はその気がないからこういう店に来ない。店の雰囲気や置いてあるもの。それらを俺みたいにな奴が見ているのはどこか場違い感がある。どうにも落ち着かないから店内を見るのを止め、彩が見て回る物を一緒に見てい

く。こうする方が、まだ落ち着いていられるから。

「これ可愛いですよね！ あ、こっちのもいい！」

「いろいろあるな」

「それはそうですよ。あ！ こっち側のも可愛いですよ！」

「全部可愛いって言ってないか？」

「そ、そんなこと、ないですよ？」

「目をそらすな。疑問形になってるし」

これは店員にカモられる典型的なタイプだな。たぶん素人に毛が生えた程度の店員でも彩を丸め込めるぞ。今回は俺がどうこうしてるから、店員の思惑通りにはならないようにさせよう。彩が気に入ったやつなら見逃すけども。

「ううー。いいのがいっぱいあつて迷っちゃうな」

「彩は優柔不断だもんな」

「はい……。玲音さん、選んでもらっていいですか？」

「……俺が、彩のをか？」

「はい。玲音さんに選んでもらえたものなら何でもいいので!」

責任重大だな。彩なら間違いなく今日選んだやつを日常的に使うだろうからな。下手なやつを選んだら彩が恥をかいてしまう。難しいのは、彩がどんな系統の私服を持っているか全く知らないということだ。おそらく今日着てるものをベースに考えて選んでも問題ないはず。となると自然と色は決まってくる。……色が決まってもたいてい変えられるから意味ないんだっけか。ネットワークスタイルに絞るとして、目立ち過ぎず、それでも服に負けない程度の存在感があるもの。ほんと難しいものを頼んでくる奴だ。そこまでは言われてないけども。

「これ……とかはどうだ?」

「これですか? 私もこれいいかなーって悩んでたやつなんですよ!」

「悩んでるやつは総数が多そうだけどな」

「で、でもこれはすぐに候補に入れたやつですよ?」

「へー」

候補に入れても決められなければ仕方ないだろ。なんてツツコミを入れてもよかつ

たんだが、これ以上時間をかけていると店員が絡んできそうだ。めんどくさいことには関わりたくないし、さっそく会計をお願いするとしよう。

店員を呼び、会計をお願いする。選んだやつはさつき自分でハードルを上げたやつをクリアできてたと思う。それにありがたいことに値段もネットクレスの中では安い方だ。見た目が安物感ないし、わりと優良物件だったのかもな。会計は彩の自腹。俺が出してやりたいところだが、生憎とそんな余裕はない。彩の支払いが終わり、一緒に店を出る。この後の予定はカラオケだったな。

「玲音さん。ちよつといいですか？」

「どうした？」

「あの、玲音さんが良ければなんですけど……今つけてもらってもいいですか？」

「……ははっ。今日はお願いが多いな」

「ご、ごめんなさい……」

「いいさ。つけるからネットクレス貸して？」

そう言って彩からネットクレスを預かり、丁寧に箱を開ける。上品に仕舞われているネットクレスを取り出し、箱は彩に返す。こういうのって前からするもんじゃなかったは

ずなんだがな。彩がすでに目を瞑って待っているから四の五の言っていられない。慣れてもないが、彩の髪を巻き込まないように気をつけてつける。つけ終わったことを伝えると、彩がゆつくりと瞼を上げ、視線をネックレスへと向ける。

「ネックレスつけたらさらに可愛くなったな。というか、綺麗なったよ」

「！　そ、そうですか？　えへへ、ありがとうございます♪」

これ以上はないというほど弾ける笑顔を彩が浮かべる。何度も思うが、本当にこの子は感情表現が豊かだ。感受性も高い。アイドルデビューができれば自ずと好かれるようになるだろう。本番に弱いせいでオーディションの段階で潰れてしまっているのだろうけども。それさえ突破すれば可能性は広がっているはずだ。

そのうち踊りだすんじゃないかと思わせるほど機嫌がいい彩を連れてカラオケへと向かう。さすがにこの状態の彩を店員と話させると、店員が可愛そうだから手続きはすべて俺がした。初めてだから何も分からなかったが、とりあえず彩には頼らなかつた。それで少し機嫌も悪くなったようだが、それでもまだ上機嫌と言える状態だったからセーフだ。

「カラオケってこんな部屋でやるのか」

「今日は二人なので、部屋も狭めなんですよ」

「なるほど」

「これを操作して曲を入力するとカラオケスタートです。時間制ですから、さっそく歌いましょうー！」

「なら彩から歌ってくれ。俺は彩の歌を聞きながら曲を探しとくから」  
「分かりました！」

彩が端末を操作してすぐに曲を入力する。手慣れているからわりと来てるんだろうな。曲が流れ始めるのに少し時間がかかるらしいが、その時間も活用して曲を探すしよう。あればいいんだけどな、アレ。ところで、いくら部屋が狭いからって肩が触れ合うほど距離を詰めなくてもいいと思うんだけどな。

「聞いていてくださいね」

「入力が終わったら集中して聞く」

彩の可愛らしい歌声で歌い上げられているのは、明るいポップ調の歌。実に彩らしい



選曲だ。さて、聞くのに集中したいが、その前に俺も曲を選ばないと。カラオケには全部の曲が入ってるわけでもないから、あるのか不安だな。マイナーだし。なかったらなかったで別の曲すればいいんだけどな。見つけられたけども。

「玲音さんどうでした？」

「綺麗な歌声だったぞ。歌って踊るアイドルになれるんじゃないか？」

「やったー。褒めてもらえたー！」

「俺の評価は甘いけどな」

「それでもいいんです。玲音さんに褒められたのが嬉しいんですから」

「……そっか」

こうしてやり取りしてる間に俺が入力した曲が流れ始める。僅か数年の活動期間だった人の歌だが、俺はこの人の歌が好きだ。その中でも男でも歌いやすいものを選んだ。歌うことには慣れてないが、下手に見栄を張らずに歌えばいいだろう。

「ふうー。なんか緊張した」

「あはは、慣れてないと緊張しますよね。でも玲音さんの声カッコよかったですよ！」

「ありがとう」

どうにも妙な緊張が抜けなかったが、聞いている彩が不快に思わなかったのだから良しとしよう。また歌うのを交代して彩が歌い始める。その後はまた俺、と交互に歌い、たまにデュエットもする。

途中からは彩が練習している歌と振り付けを俺が評価するという訳のわからないことが始まった。狭い場所ですることでもないと思うが、彩もその辺りは弁えて、手振りや軽めに体を動かす程度にしていた。

そうしていたのだが、テンションが上がったらしい。やはり足も動かし始めた。そしてこれまた予想通り机に足をぶつけていた。その後は予想外だった。足をぶつけて痛がった彩がバランスを崩し、俺の方へと倒れる。

それが予想外だったから受け止めることもできず押し倒される。漫画とかでよくあるこれによる事故のキス、なんてことにはならずすんだ。頭突きは食らったけどな。

彩が今日みたいに俺を遊びに誘うのは、最近俺の調子が悪いからだ。働き過ぎ、というのもあるだろう。学校の課題も簡単とはいえ多い。そして家は心を休められる場所ではない。肉体的には問題なく生活している。

だが、精神的には疲労が抜けていないのだろう。困ったことに楽しかったことがあつ

たら、帰りに独りになってる時に病んでくることが増えてきている。

彩の存在は、たしかに俺にとって安らぎなのだ。それでも疲弊している心が完全に癒やされるわけでもない。

だから俺は最近らしくない言動を取るのだろう。花咲川の学祭の時もそうだった。そして今も。

「ご、ごめんなさい玲音さん！ 大丈夫です、か……玲音さん？」

「彩……ごめんな」

「え？ んっ……!？」

今の俺を支えててくれるのは、間違はなく目の前にいる彩だ。俺を慕ってくれて踏み込んでくることなく側にいてくれる。

そんな彩を利用してしまっているのか。さらなる安らぎを求めて、離れようとした彩の頭を抑えて引きつけた。きつと彩を裏切っている行為だ。

だが、そんなことまで頭が回らなかった。ただ求めて強引に唇を奪った。

## 8 話

玲音さんとのアレがあつてから二週間ぐらい経つたのかな。あの後はもちろんだけど、それから私はパニックだった。なんでキ……キス……されたのが分からなかったから。落ち着いてきた今ならなんとなくだけど分かる。玲音さんはもう心の余裕がないんだって。

でも、分からないことももちろんある。そもそも私は玲音さんのことを全然知らない。知ってるのは一つ上の先輩であるということと、ご家庭が複雑であるということ。詳しくは知らない。

だから私は玲音さんのことをもつと知らないといけないんだ。知らないとどうすることもできない。私のこれからを決められない。そう思うから。

「若のこと？ ……ごめん。さすがにこれは本人の許可無く話せないや」  
「玲音のやつのことか？ 知ってるが教えられないな。知らないほうがいいことつてもあるんだぜ？」

玲音さんと仲がいい白鷺先輩と青葉先輩に聞いても、こう言われて教えてもらえなかった。もちろん社員さんに聞いても駄目。プライベートのことは話せないって。社員としての立場があるということと、個人的にもおいそれと話せないって。

分かったのは、簡単に話してはいけないほど複雑な事情があるということ。そしてそれが玲音さんを追い詰めているということ。このことはたぶんゆりさん達も知ってるはず。知ってるはずだけど、誰も手を差し伸べられないんだ。

だって玲音さんはそういうことを嫌うから。そして玲音さんは人間関係をあまり広げたがらないし、深くもしたがらない。

「——彩ちゃん何か悩みごと?」

「あ、花音ちゃん。……うん。ちよつとね」

「萩近さんのことだよね?」

「へっ!?!」

「ふふっ。彩ちゃん分かりやすいよ?」

昼休みに教室から外を眺めていると、花音ちゃんに話しかけられた。簡単にバレ

ちやっただけど、それならそれで今まで話しかけてくれなかったんだろ。私が自分から動き回ってからかな。あの日以降の数日は上の空だったってこともあるのかな。

ふわりとお淑やかに微笑む花音ちゃんが私の隣に並んで同じように外を眺める。私は花音ちゃんから目を離せずにいた。花音ちゃんの雰囲気がいつもと少し違う気がしたから。

「花音ちゃんは……何か知ってるの？」

「……うん。知ってるよ。バイトで一番詳しいかな」

「え……」

少し悲しげに眉を下げてそう呟いた花音ちゃんの言葉は、きつと本当なんだよね。詳しいいからこそこんな表情になっちゃうだ。

もしかしたら、と思って聞いたのに。少しでも思ってた聞いたのに、花音ちゃんは一歩詳しいって言った。衝撃が強いよ。なんで花音ちゃんが誰よりも知ってるんだろ。

「私も人伝いに聞いたただだよ？ 仲のいい男の子が凄い情報通で、私はよくその子と話すから、教えてもらえたの。教えてもらえたのも最近だけだね」

「教えて花音ちゃん！ 玲音さんのこと！ 知ってること全部！」

「うん、いいよ。でも、覚悟してね？ 知ったらもう元の関係にはなれないと思うから。彩ちゃんは距離感が近くなりすぎてるから。それでもいい？」

花音ちゃんの目はいつになく真剣だった。内容を知っているから、それがどれだけ重たいことなのか分かっているからなんだよね。

花音ちゃんの言うとおり、たぶん私は距離感が近くなりすぎてる。青葉先輩にも謝られた。一人に任せ過ぎたって。先輩たちは受験勉強があるってことで私に任せてくれたけど、それが失敗だったって。

私が貶されたわけじゃないって分かっている。先輩たちの予想を超えるほど玲音さんが追い込まれちゃってるんだって。それでも私は悔しかった。私じゃ支え切れなかったことが。

でも、だからってこれで終われない。私は諦めたくない。だから私は花音ちゃん目を真っ直ぐ見返して頷いた。

——全部教えてほしいと

「もう昼休みが終わるから放課後でね」

「がくつ。花音ちゃん」

覚悟を決めたのに力が抜けちゃうよ。でもたしかに昼休みが終わるから、今からはでないよね。放課後まで我慢しよ。これでやっと私もどうしたらいいか分かる。もう何も知らない状態じゃなくなる。

H Rも終わって花音ちゃんと一緒に屋上に行く。誰かに聞かれるわけにはいかないから、他に人がいない場所じゃないとね。

「何から話したらいいんだろうね……」

「家庭事情だから……家族構成から？」

「あ、それがいいかな」

手をポンって叩いてなるほどってなってる。花音ちゃんはたぶんどう話したらいいか悩んでたと思う。内容が重たいことってわかってるから、解釈違いが無いように、言葉選びを慎重に。そこに気をつけてたから順番は決めてなかったんだね。

しつかりしてるところもあるけど、やっぱりこういふところもあるんだ。花音ちゃんらしい気もするけど。



「萩近さんはね、中学一年生の時にお母さんを亡くしてるの」

「え……」

最初からとてつもなく重たかった。私の身内はみんな元気にしてるから、その辛さが分からない。でも、想像してみただけで泣きそうになる。私は感受性が高いみたいなんだけど、それで絶対に泣く。悲しくて、どうしたらいいか分からなくなると思う。

「お母さんを亡くしてからは独り暮らしなんだよ」

「な、なんで……？ お父さんは？」

「お父さんはね、萩近さんと一緒に暮らしてないよ。お母さんがご存命の時からそうらしいけど」

「そんな……！」

「ここはとやかく言っちゃいけないから置いとくね。それで、萩近さんには妹さんもいたんだ。たしか私達と同一年だったかな？」

「そ、その妹さんは？」

「お母さんが亡くなった後すぐにお父さんに引き取られたんだって」

それはつまり、玲音さんはお父さんに見捨てられたということだよ。なんで、なんでそんなことができちゃうの。自分の息子をなんでそんなあっさり。分からない、分からないよ。理解できないよ！

「萩近さんが時間さえあればバイトしてるのは彩ちゃんも知ってるでしょ？　なんでかわかる？」

「なんでってそれは独り暮らしだから……え？　うそ……」

「うん。お父さんは萩近さんに仕送りしてないんだ。あの人は自分の力で生活するしかないんだよ」

おかしすぎるよ！　でも、それなら玲音さんがあれだけ働いてるのも分かる。分かるけど、それでもそれで生活できるほどじゃないはず。家賃だけあるはず、学校にかかるお金だって、生活費だって。……だからか。だから先輩たちは玲音さんによくご飯を奢るんだ。晩御飯に招待もするんだ。少しでも力になるために。玲音さん自身がそういうのを受け取ろうとしないから多少強引に。

「それでもやっぱり生活できないんじゃない？」

「できないね。だから何か副業してるらしいよ？　それが何かは私も知らないけど」

「副業……」

きつと家でもできることじゃないかな、って花音ちゃんが言ったけど、それって何があるんだろ。そういうことにはとことん疎い私じゃ全然想像もつかない。内容に想像がつかなくても、それもやってたら休める時が無いことは分かる。

「その副業を今満足にできてるかは怪しいけどね」

「え!？」

「これは先輩たちも知らないことで、たぶんゆりさんも知らないことだと思うけど、今萩近さんのところにおばあちゃんもいるんだって。それでね、そのおばあちゃん脳に障害があるって」

「……それ、じゃあ」

「うん。おばあちゃんの面倒も見ないといけない。介護がすつごく大変だって言われているのは彩ちゃんも知ってるでしょ?」

知ってる。あまりものしんどさで殺人が起きたりするほどなんだから。ニュースで取り上げられることだってある。つまり玲音さんは、それだけ大変なことをしながら学校に行つて、バイトにも勤しんでる。こんなの心が休まる時間が一瞬たりともない！

「私が話せるのはこれくらいかな」

「……ありがとう花音ちゃん」

「彩ちゃんの答えが出るかな？」

「うん。整理できたら」

花音ちゃんは私がどういふ答えを出すかを聞くみたい。ゆっくり待つてくれてる。ここで答えを出すためにも私はこの情報を整理しなきゃ。花音ちゃんが分かりやすく教えてくれたから、だいたいはすんなり入つてきた。

玲音さんのところにおばあちゃんがいることをゆりさん達が知らないのなら、おばあちゃんは今年度になつてから来たんだよね。

そしてあの二人の関係の深さからして、去年はゆりさんが玲音さんをいっぱい誘つてたんだ。グリグリの手紙でもあるから、それを理由に呼び出すことがあつたんだね。

でも、そのゆりさんは彼氏ができた。

それまで一番近くで支えていたのがゆりさんだったのに。そのゆりさんが玲音さんから距離を取った。あの二人はお互いを異性として意識しないから起きたこと。

ゆりさんはお付き合いしながら、玲音さんを支えようって考えたんだ。でもその時にはすでに、玲音さんには余裕が無くなつた。だから二人は溝ができた。玲音さんはゆりさんに冷たく当たってしまったんだ。

そしてそういう状況の中、何も知らない私が玲音さんにいっぱい話しかけるようになった。

今なら分かる。玲音さんが浮かべていた笑顔の意味が。

——あれはギリギリ自分を保てていた証だ

それでも玲音さんは沈んでいってしまった。私にできることは、取り返しがつかないように繋ぎ止めること。きつと玲音さんが自分の力で這い上がるから。そのためにはゆりさんの存在も関係するんだと思うけどね。とにかく、それまで私は繋ぎ止めるんだ。それが私の役割だ。

「花音ちゃん。私は——」

それを言ったら花音ちゃんは悲しそうな顔をした。分かっている。私もこれが私にとって残酷なことだって。でも、これしかないんだ。

「彩どうかしたか？」

「なんでもないですよ。バイト終わりに玲音さんに送ってもらうのが初めてで嬉しいだけです」

「単純な奴」

「えへへ」

私は恋をしちゃいけない。

私が求めたら玲音さんが沈んでしまうから。

私はこの気持ちを隠し続けたいといけない。

気づかれたら玲音さんが取り返しのつかないほど堕ちてしまうから。

「玲音さんはお兄ちゃんみたいですね！」

「……好きに思ってくれていいさ」

「はい！」

だから私は

玲音さんの逃げ道を塞ぐために兄を慕う妹を演じるんだ。

## 9 話

朝起きれば『なんで家にいる！』と怒鳴られる。

学校やバイトに行く時、あるいは遊びに行く時は『勝手にどこ行く！ 許してないじゃろ！』と怒鳴られる。

家に帰れば『出ていけ！ お前なんぞいらん！』と怒鳴られる。

飯を食って帰ることのほうが圧倒的に多く、飯が家で用意されてることもないのだが『作った飯を食わんか！』と怒鳴られる。

俺の家で

俺の金で生活していて

俺の居場所じゃない

何なんだろうな。いったい何がしたくてここに来たんだろうな。邪魔しかしないくせに。俺にストレスしか与えないくせに。居場所を奪って。金も奪って。疫病神もい



いとこだ。

そして今日もまた酷いもんだ。学校も休みで、バイトも社員に止められて入れることができなかった。休めと言われても休める場所などないし、そんな余裕がある生活でもない。だから最近できていなかった副業をすることにした。そのためにはパソコンが必要だった。カバンにパソコンを入れて家を出ていこうとした時、今日もまた祖母は発狂した。

罵詈雑言だけなら無視したら終わりだ。そしていつもそうだ。だが今日は物を投げられた。最初投げられたのは裁縫道具が入っている箱だった。それは狙いが逸れて家の中で散らばるのみ。針は危ない。怪我をする。

だが俺はそれを片付ける気は無かった。勝手に怪我でもしてろという気分だった。次に投げられた物はテーブルだった。筋力も衰えているはずなのに、どこにそんな力があるんだ。そう思ったが、それは危険過ぎる。俺はそれを咄嗟にカバンで防いだ。

——防いでしまった

カバンの中にはパソコンが入っていたというのに。嫌な音が響いた。カバンを開けて確認したら案の定だ。パソコンが壊れてしまった。データ自体はUSBメモリにバックアップを取ってあるが、パソコンが壊れてしまつては副業ができない。テーブルは上手いこと散らばっていた裁縫道具の上に落ちたから、針の心配は消えた。

だが、そんなことはどうでもよかった。俺は床に転げてるテーブルに足を思いつきり踏みつけその勢いに任せて怒鳴り返した。なんて言ったかは自分でも分からない。怒鳴り散らして壊れたパソコンが入ってるカバンを投げつける。勢いよく祖母の横をそれが通り過ぎ、大きな音を立てて壁にぶつかる。

怒りが収まらなかつた俺は、そのまま家を飛び出した。最後に見た祖母の顔は、当然のことながらこんな行動を取る俺にさらに逆上したもの。鬱陶しいことこの上ない。

「クソツタレが……！ あーウザつてえ。どこかで憂さ晴らしできねえもんかな。……あーアソコ行くか」

こんなに荒れてるのはいつぶりだろうか。なんて考えるのも馬鹿馬鹿しい。ああよく覚えているとも。母さんが亡くなって、クズが妹を連れ去った時以来だ。荒れに荒れた時期だ。何もできなくて、悲しみの処理をする時間も与えられなかった。ある意味今と似ているな。心を落ち着かせる時間が与えられないのだから。

牛込たちと過ごしていた時間は休まっていたさ。自覚している。あの時間に文句を言いながらも感謝していたから。彩と過ごしている時間も心が休まる。だが彩はアイドルの研修生だ。そもそも会う時間も少ないし、何より彩を縛りたくない。

あの子にそんなことをしてはいけない。すでに唇を奪ってしまったが、もうあんなこととはしないようにしなければいけない。あの華奢な少女に背負わせるような、負担をかけるようなことをしてはいけないんだ。夢の邪魔を俺がしてどうする。応援すると  
言つた俺が。

「は、萩近!? な、なんでテメエが今さらここに……! な、なな、何しに來やがつた!」  
「そんな怯えて言うなよお。寂しいじゃねえか。憂さ晴らしのための遊び<sup>喧嘩</sup>。付き合つてくれよ?」

「ふざけるな! 俺達はそんなために生きてんじゃねえ!」

「チンピラが随分とご立派に高説するじゃねえか。なんて言おうが同じ穴の貉だ。仲良く殺りあおうぜ?」

「く、くるな! 俺達はもうこんなのやめるんだ!」

「……チツ。じゃあまだ喧嘩大好きな馬鹿の居場所言え。それで見逃してやる」

胸ぐら掴んで強制的に喧嘩を始めようかと思つたが、脱却するといふのであれば仕方ない。見逃してやるしかない。俺だつて足を洗つて出ていった身だ。気持ちにはわからないでもない。ただまあ、こうして戻つてきているのだから、抜け出したとは言えない

んだろうな。

自分の甘さと弱さに苛立ちながら、目の前で声を震わせつつも場所を教えるチンピラからメモを受け取る。住所と簡易的な地図が書かれていたが、筆跡が震えていてまともに役に立たない。

言葉でも説明してもらって俺は路地裏を後にする。目指すは別の路地裏。この奴らはガラが悪い上に性格が腐ってる。今の俺にはちょうどいい相手になるだろう。

「何してるの？　なんでそんなところから出てきたの？」

「……牛込か」

俺がどこから出てこようと俺の勝手だし、俺はわりとこういう道を通る。いつもなら見かけられてもこんなことを言われないだろう。

ではなぜこんな質問をされているのか。簡単なことだ。ここは前に牛込が連れ込まれた場所だ。いい思い出ではない場所は人の記憶に残りやすい。牛込も覚えていたのだろう。

諫めるように厳しい目をする牛込は、俺が何をしようとしたのか察しているのだろう。無傷で服装も乱れていないから、ここでは何もなかったとわかって、これから何

かあるとわかつているんだろう。

——邪魔な奴だ

俺は牛込を無視して横を通り抜けようとした。だが牛込に腕を掴まれて通り抜けることができなかつた。強引に振り払つてもいいが、この位置はすでに人目に触れる場所。面倒事は避けたいところだ。

「離せよ。お前には関係ないだろ」

「あるよ。君はグリグリのサポーターで、今の君は普通じゃない。放っておけないよ！」

「お前が……何も知らないお前が首を突っ込んでくるな！ 迷惑なんだよ！」

「っ！ 私を君を心配して——」

「心配？ 馬鹿なこと言うなよ。お前は何もしてないだろうが。男ができたならそいつに夢中になつてただけだろ。普段何もしないで、たまたま見かけただけの今日は心配つか。ふざけるのも大概にしろよ」

「それは……でも、それは彼があんまり他の男の子と連絡取らないでほしいって！」

「はっ！ それをお前は忠実に守るってか？ 器の小せえ男に引つかかかっておきながらそれに気づかず素直にケツ振りやがって。ま、お前の勝手だがな」

——パシン!

さすがにここまで言えば温厚な牛込でも怒るか。当然だな。自分の彼氏を馬鹿にされた上に、自分まで馬鹿にされたんだから。いや、こいつの性格ならやっぱり彼氏を貶されたほうが許せないのか。睨んでくる牛込に視線を合わせる。言いたいことがあるば言えつてな。

「私のことはまだ許せる。彼のことを君がどう評価するのも勝手。でも、君が人をそうやって貶すことは許せない!」

「は?」

こいつはいったい何を言っている。俺を許せないことは分かる。だがその理由が理解できない。俺が人を貶すことが許せないってなんだ。こいつの思考はどうなってる。……牛込とこれ以上話すのはやめとくか。変なことに思考が割かれる。無駄に疲れる。だから、黙らせるとしよう。

「来い」

「へ？ え、ちよつと！」

牛込を連れて路地裏に引き返す。さつきの奴らはもういないようだ。都合がいい。ここは牛込にとつて嫌な記憶がある場所。黙らせるには持つてこいだ。

フラツシユバック、というほどではないが、顔色はさつきより悪くなってる。場の力が多少は働いてくれてるようだ。牛込を壁に押し付けて動きを封じる。

「な、なんで？」

「俺がこうしない保証があるのか？ お前さつき自分で言ったじゃないか。今の俺は普通じゃないつてよ」

「で、でも……君はこういうことが嫌いなんじや……！」

「ああ嫌いだね。だが、お前を黙らせるためなら我慢するさ。安心しろ。愉しませてやるから」

「やめ……あ……つ……」

相変わらず極端に弱いな。軽く耳を責めるだけでこれなんだから。ほんと、サル相手に引つかかかってたら初日で食われてるな。だがまあ、どうやらまだ手をだされてるわけ

でもないらしい。

アイツの底は見た時に理解したが、器が小さいだけのようだな。それはそれでよく牛込を彼女にできたものだ。

「俺なんかでこんなんになつてていいのか？ ゆり」

「やつあ……耳元で……いわないで」

「言つたろ？ 愉しませてやるからつて。それより答えろよ。彼氏じゃない男相手にこの調子でいいのか？」

「ふつ……う、これは……きみ、だから……だもん」

「チツ。興ざめだな」

「え？」

ほんとにこいつの頭がおかしいとしか思えない。俺だからつてどういうことだ。ほんのりと頬を上気させ、呼吸を乱れさせながら牛込が見つめてくる。黙らせるのは成功なんだが、これは何か違うな。

やりにくい。本当にやりにくい。もうどうでもいいか。とりあえずこいつは放置し

て――



「離せ」

「や……。きよねん、言ってくれた。……わたしの……側にいて、くれるって」

——ブチツ

「お前が……。お前がそれを口にするのか!!」

「きやつー!」

完全に頭に血が上った俺は、牛込の首に手を添えて再度壁に叩きつける。さつきとは違つて強くやつたから頭を打つたようだ。だがそんなこと全く気にならない。呼吸ができなくなる程は握らないが、多少は首を絞めている。

苦悶の表情を浮かべる牛込に俺は怒り言葉を叩きつける。制御なんてしない。理性なんて軽く飛んでいる。

「お前が言ってるのは紅葉見に連れて行つたときの事だろ？ 俺も覚えてるさ！ 覚えているからクリスマスも年が明けてからも予定を合わせてやつた！ それが約束約束だったからな！ それを先に反故にしたのはお前だろうが！ 彼氏を作るのはいい！ だがそれで俺の精神を削ってくるな！ 今さら側にいろだなんて調子のいいことを言う

な！」

「あ……ごめん」

「今頃謝って……クソがつ」

「ケホツケホ……！ ま、待って！」

「待たない。じゃあな」

その場に崩れ落ちた牛込を無視してここを後にする。影に隠れてた奴らも俺の機嫌が悪いことを察して逃走してたから、牛込が襲われることもないだろう。……いや、逃げた奴らは潰しに行くか。憂さ晴らしっていう目的がまだ達成できてないからな。いっそ教わった場所も行けばいいだろう。この際だ。知ってる限りの奴らを片っ端から殴り倒そう。

久々に暴れた。ここまで喧嘩するのも懐かしい。トータルの人数は多かったが、場所を転々としてたから一回一回は少数相手。強い奴らは軒並み足を洗ってるらしく、完全に不完全燃焼だ。不完全燃焼なんだが、どうやら目の前のこれは完全燃焼らしい。

——家のあるアパートが燃えて潰れてる

正確には半分で、俺の部屋は完全燃焼だな。

今の時間は既に日が沈んで二時間ほど経ってる。八時か九時つとこだな。そしてアパートの消火も終わってて、今じゃ警察やマスコミが多い。野次馬の馬鹿どももな。

「萩近くん！」

「……俺が言うのもなんだが、どの面さげて来た。それと何のようだ」

「そのことは後でいっぱい謝る。ううん。いっぱい謝らせてほしい！　けど、その前に……君の家が！」

「っ!?!」

なんでこいつが俺の家がここだと知っている。牛込にはバレないようにしていたはずだというのに。最近もそこだけは抜かりないようにしていた。そうだというのになぜだ。どうやってこいつは。

「りみが知ってたの。火事になった時に、りみがこのアパートに君が住んでるって」  
「あー、なるほどね」

りみは警戒してなかったな。というかあの子の活動時間がさっぱり分からないから、

警戒のしようもなかった。

それにしても家まで燃えたか。全く、俺はこれからどうしたらいいかっていうんだ。勉強道具類も燃えたな。バイトの制服とかはまた貸してもらえらるだろ。でも、家がなくなつたとなれば俺はどこで寝ればいいんだらうな。クソ親父のとはごめんだし、野宿か。

全く働いてくれない頭で考えても大したことを決められない。そうしてると警察がやつてきた。牛込が俺の名前を呼んだから、ここの住人の一人と分かつたとのことだ。

半分も働かない頭で警察の話を書く。どうやら出火場所は俺の部屋かららしい。その原因もわかつたのだとか。その部屋に焼死体があつたから。つまり祖母が燃えて死んだ。そしてその原因は料理を作つていて、火を消し忘れてる間に燃え広がつたらしい。脳の障害もあるし、何か発作でもあつたのか。それは分からないが。

で、警察から渡されたのは一つの日記と通帳だつた。祖母のものらしい。なんでこれが残つていたか。それは、俺が知らない間に買った金庫の中にあつたからなんだとか。俺はあんな祖母の日記を読む気などなく、破り捨てようとした。

しかしそれは牛込に止められた。だから牛込に渡した。俺には興味がないからな。だが、やっぱり牛込は声を出して俺に聞かせるように読み始める。

『脳に障害があると分かってから、こうして日記を書くことを心がけてます。脳を使って少しでも物事を忘れることを抑えていきたいから』

日記はそんな始まりだった。牛込の声で語られる日記の内容。祖母が俺の家に来たのは、俺の助けになりたかったかららしい。クソ親父が何をしているか知った祖母は、俺が孤独にならないようにしたかったらしい。

施設の人に頼み込んで、何度もお願ひして許可を得たのだとか。定期的に施設の人が検診に来ることが条件でそれが許されたのだとか。

『玲音くんの助けになりたかったのに、私の口からできることはなぜか正反対なことばかり。どれだけ傷つけてるのか分からない。許されなくても思ってる。玲音くん料理を作ってあげたかった。玲音くんにおかえりって言ってあげたかった。母親代わりにもなれないけど、それでも家族として接したい。玲音くんはよく一人でも遊びに来てくれてた。遠いのに一人で頑張って電車に乗って。小学3年生の時に来たときはびっぴりしたし、心配して怒っっちゃったのを覚えてる。でもそれ以上に、その何倍も嬉しかった。笑顔で遊びに来たって言ってくれて、私が作る料理に美味しいって言ってもらえて。だから、いつ死んでしまってもおかしくないような状態になったこの体でも、私が

生きている間に、あの馬鹿息子のせいで苦しんでいる玲音くんにも少しでも安らぎを与えたかった。もう一度だけいい。料理を作って、それで玲音くんに美味しいと言ってもらいたい。そうだ。今度は玲音くんによく作っていた肉じゃがを作ってみよう。これならできるはずだから。これなら玲音くんに食べてもらえるはずだから。きつと美味しいと言ってもらえる。頑張れ私。玲音くん。独りにならないで。お友達に頼ることを覚えて、支え合って生きて。そうすればきつとあの子とも再会できるはずだから――」

「うっ、ううー」

「………つたく。なんで牛込が泣くんだよ」

「ごめ、でも………だつてえ………」

「お前に泣かれたら俺泣けねえだろ………」

あと警察の兄さんや。あんたも貰い泣きしないでくれるかな。まるで俺に心が無いみたいなことになってるから。牛込の頭を抱えるように抱き寄せ、静かに泣かせてやる。その状態で涙ぐみながら他のことを話してくれる警察に耳を傾ける。一応後日また話を聞くことになるらしいけどな。

『おばあちゃん！ きたよ！』

『まあ玲音くん一人で来たの!? 大変だったでしょ？ ほら、中に入って。今日は玲音くんが来てくれたことだし、肉じゃがにしましょうか』

『ほんと？ やったー!』

『どう？ 口に合う?』

『うん！ 美味しいよ！ おばあちゃん!』

ああ、覚えてるよ。俺も覚えてるよ**おばあちゃん**。

俺も謝らないといけない。朝のことを。でも、もうそれはできないのか。

……なあ、おばあちゃん。肉じゃがが作ってくれるのは嬉しいけどさ、炭になってちや食えないよ。

## 10話

知らない天井だ。なんてテンプレなセリフを言ってみたい。などと思ったことは欠片もない。知らない場所で目が覚めたら普通混乱するからな。それにここは知っている場所だ。この天井は去年に一度だけ見た。どうにも記憶が曖昧だが、とりあえず部屋から出れば分かるだろう。

「あ、萩近さん……。よかったー。おはようございます」

「やつぱ牛込家この家だったか。おはようりみ。ところでよかったってなんだ？ 俺の記憶が正しければ死にかけてないはずだが」

「あ、はは、すみません。昨日のこともありますし、塞いじやってたらどうしようって心配して……。お姉ちゃんは今日朝から出ちやってますし」

「……そうか。心配かけたな。ごめんな」  
「い、いえ！」



この子は本当に牛込の妹なのだろうか。なんて疑いたくなるぐらいこの子が眩しく見える。まだ中学生つてのもあるだろうが、姉以上に汚れの知らない生活を送っているだろう。まあ姉がそういうのを知るようになったのは半分以上俺のせいなんだろうけどな。反省はしてない。

リビングへと案内されると、牛込たちの母親が朝食を用意して待っていてくれた。父親の方は休日出勤らしい。代わりに来週の平日のどこかが休みになるんだとか。一応代わりがあるならいい、のか。そこは本人次第でもあるか。

ところでりみってもっととおどおどするんじゃないかなかったっけ。なんで平然と隣座ってるんだろ。

「前より近くね？」

「あ、ごめんなさい。萩近さん、前となんか雰囲気が違う気がして」

「まあ、そうなんだろうな。でもま、そんな気にしないでいい」

「は……」

心配性なところは同じだな。りみの方が引き下がるのが早いから、俺としては楽だ。特に今はそんなに聞きこまれたくもないし。

てつきり冷めてるかと思つたが、まだ温かいな。ということは、起きる時間を予想してたのか。他人の子の起きる時間を予想できるってどういうことだよ。ハイスペック過ぎるだろ。しかも料理が超上手い。

さすがに親子なだけあつて味付けは似てるな。前も思つたが。牛込もそのうちこれぐらいできるようになるんだろな。俺がそれを食べることもないんだけどな。

「美味しいです。ありがとうございます」

「そう？ 褒められて嬉しいわ。でも、私よりゆりの料理のほうが食べたいんじゃない？」

「いえ別に」

「ほほー。彼氏の余裕つてどこかしら？」

「俺あいつの彼氏じゃないですよ？」

「え？」

「お姉ちゃんのお彼氏って萩近さんちゃうん!？」

「え、なにそれ」

思わず箸を動かしていた手を止める。目の前にいる二人の母……もうおばさんでい

いや。おばさんの顔を見ると目を丸くしてる。それから隣にいるりみに視線を移すと、やっぱりりみも目を丸くしていた。りみの方が驚いているな。

驚きたいのはこっちだ。いったいどういうことなんだ。彼氏ができたことは伝えているのか、伝えていない可能性もあるな。伝えていたとしたら名前は言ってなかったと。そうだとしてそれで相手が俺つてのは分からないけどな。去年に何回も牛込と一緒に否定しているというのに。

「えーっと。整理しましょうか。まず牛込………わかりました名前言います。ゆりさんが彼氏できたっていうことは、聞いてるんですか？」

「さん付けも外してほしいところだけど、それは今は置いとくわね。ゆりつてこういうこと恥ずかしかるから直接は聞いてないわよ。ただあの子つて分かりやすいでしょ？」  
「なるほど。理解しました。それで相手が俺つて勘違いされるのは理解できませんけどね」

「二つは単純にゆりの男友達を君しか知らないから。もう一つは、ゆりが君の話をする時楽しそうだったから。それで彼氏ができたつて分かった時に相手が君かなつて。………違ったみたいだけど」

牛込はなにも話していないのか。というか、付き合ってもいない俺の話はするのに、彼氏の話はしないって。どういう感覚でそうなるんだろうな。相変わらず訳のわからないやつだ。

ともかく、勘違いされてた理由もわかったところで食事を再開させてもらおう。よかった。まだ冷めてない。りみさんや、ぼそつと「面白くない」なんて言うな。付き合ってるほうが俺からすれば面白くないんだよ。

「はあー。私としてもゆりの相手は萩近くの方がよかったのだけど」

「あなたまで何を言ってるんですか……」

「だって知らない子よりも知ってる子の方が安心して娘を任せられるでしょ？ 今の子って手が早いって言うし、君なら信用できるけど、ゆりの彼氏がどうかは分からないし。あの子も疎いし」

「お母さん。手が早いってどういうこと？」

「りみはまだ知らなくていいことよ」

「え」

なるほどな。こうやって知識が乏しくなるのか。知らないままでいてほしいって想

いなんだろうな。学校でも教育自体はあるから、それを意味する言葉が乏しいってだけだな。

そのへんは乏しくてもいいわけだし、それに人の家の教育に首を突っ込むこともない。脳内でそう締めくくって食器を片付けるために席を立つ。おばさんに速攻で回収されたから俺はその場に立ち尽くす羽目になったけどな。

「萩近くん。昨日の話覚えてる？」

「昨日の話……ですか？ えーつと……」

「覚えてないのね。無理もないけども。……ゆりから聞いたわよ？ あなたの家庭のこと」

「っ!？」

話されたのか。……いや、話したことをとやかく言う気はない。牛込の性格から考えて、俺のことを何も話さずに一晩泊めさせるなんてことはしないだろうからな。りみの方を見ると気まずそうに目を逸らされる。

ということは、りみも含めて牛込家全員が知ったということか。俺が言葉に詰まっていると、おばさんが慎重に、それでいて優しく包み込むような口調で言葉を続ける。

昨日の話、というのはほんやりとは覚えてる。なにやら必死に牛込が頼み込んでいた。それから考えられたことと、おぼさんの口から出た内容が一致した。

——牛込家で世話になる

それが昨日の話の内容だ。親からの援助などなく、祖母も死んだ。片方は生きていますが、あちらは経営に手一杯。俺に力を貸す余裕などない。つまり俺は孤立している。オーナーにも頼めないしな。

そしてそれは牛込家だつて同じだ。この年の子供をいきなりもう一人養うなんて負担が大きい。だから断るしかない。俺にはそんな甘えなど許されない。のうのうと温かい家庭に混ざるなんて。妹を差し置いてそんなこと許されない。

「私も主人も許諾したわ。聞けば通つてる学校には特待生制度があつて、君は特待生でしかも主席。授業費が免除されるだけじゃなくて学費も半額以下。これなら大した負担じゃない」

「……………」

先に潰された。負担も大きいでしょうから、なんて尤もらしい理由をつけて断ろうとしたのに。牛込が必死に話していた内容の中には、親を説得させるに足るものまで含ま

れていたか。俺はどうやら牛込に対する評価が甘かったらしい。

「私も大丈夫ですよ？ お兄ちゃんができるみたいで嬉しいですから」

「……緩くね？」

「へ？ そうですか？」

俺はその許可の出し方は緩いと思うな。おばさんも苦笑してるし、絶対緩いんだよ。なんでそう言われるのか分からない、みたいな顔されてもな。こっちの方が分からないぞ。牛込の妹って考えたらどこか納得できてしまってる自分もいるのが怖いところだが、感覚がおかしくなってるやがる。

「……年頃の男を大事な娘さんが二人いる家庭に置くんですか？」

「あら、そういう目で見てないって去年に言ってたじゃない」

「はあ。大人はズルいですね」

「ゆりからは君もそうとうズルいって聞いてるけどね」

「……考える時間をください。さすがに納得できないまま流されていいことではないので」

「ふふつ。もちろんいいわよ。返事は直接聞かせてね」

言葉を返して牛込家を出た。どこに行くかなんて決まっている。携帯には大量の電話やメッセージが飛んできてるんだから、送った人たちに直接会いに行くだけだ。

件数の半分以上が彩なんだけどな。それにほとんどがバイト先の人達だ。なんの偶然か、全員今日シフト入ってるから店に行けば会える。社員もいるから制服のことかも話せるし。

「おはようございます。家が燃えた萩近でーうおっ!？」

「よかった……玲音さんが無事でほんとに……わたし、心配で……」

「……ごめんな彩。メッセージだけでも返したらよかったんだけど、落ち着いてきた時には店の近くだったし」

「いいんです……! 玲音さんが無事ならそれで……」

「彩……」

「おーいお二人さーん? 私も部屋にいるんだけどー」

社員に話しかけられた途端彩がバツと離れてその勢いで頭を打つ。彩が打った場所



を労るように撫でながら社員に話しかける。そもそもいたんだなって。なんか憤慨してるけど、それはスルーして要件を伝えないとな。

「あー制服？ それぐらい新しいの渡すから気にしないでいいよ。……それと、お婆さんのこと。お悔やみ申し上げます」

「……はい」

「これからいろいろと手続きというか、お葬式やらなんやらってドタバタするだろうけど、一人で背負い込まないで。私も力になるから」

「ありがとうございます」

「玲音さん！ 私にもできることがあれば遠慮なく言ってくださいね！」

「そうだな。何も頼まないでおく」

「ええー！ 何でですか！」

何でって言われてもな。彩は見ていて危なっかしい子だし、すぐにトチるし、頼んでも見守っておかないと不安で仕方ないんだよな。とまで言いたいところだが、分かりやすく頬を膨らませてバシバシ叩いてくるから、これは控えておこう。

しばらく彩の好きなようにさせて、叩くのをやめてくれたら頬を突いて空気を出させ

る。また叩かれたけどもこれは彩が悪い。まあでも程々にしないと。彩の休憩時間を削るわけにもいかないし。

「彩は側にいてくれるだけでいい。それだけで俺は助かるから」

「そ、そうですか？ それならできるだけ玲音さんのお隣にいますね！」

「自分の都合を優先してくれよ」

「えー」

「えーじゃない。そうじゃないならわざとシフトずらす」

「わーわー！ ちゃんと自分の生活優先しますから！ だからシフトズラさないでくだ

さいー」

「……君たちいつから付き合ってるの？」

「付き合ってますん」

牛込相手でも言われてたのに、今度は彩でも言われるようになったのか。まあ付き合っていないから付き合っていないって断言させてもらうんだけどな。

社員よ。疑いの目を向けてくるな。牛込の時と同じパターンだぞ。ワンパターンは飽きられるから気をつけるよ。そして盗み聞き民。彩がフリーであることに狂喜乱舞

するな。仕事しろ。

「付き合つてないにしても距離近すぎない？　手繋いでるのもびつくりなんだけど。最近の子の距離感つてそんな感じなの？」

「さあ？」

「私もよくわかんないです。女子校なので男の子いませんし」

「そっかー。私的には近いと思うなー。それなら付き合えばいいのにつてぐらい。それに丸山さん今日ずっと上の空だったし」

「おい玲音！　ゆりちゃんどうする気だ！　それと無事でよかった！　困ったことがあれば遠慮なく頼れ！　受験勉強なんぞ放り投げて助けてやる！」

「若！　俺にもできることがあればなんなりと！」

「牛込は関係ないでしょ。それと二人は受験勉強集中しろ」

そう言つてもらえることは嬉しいんだけどな。それで二人の進路に影響を出したくないし。それと青葉先輩よ。あんたそれで第一志望落ちたら彼女にブチのめされるぞ。完全に尻に敷かれてるんだからよ。

「萩近くーん。ご飯に困ったら家に来てくれていいからね」

「ありがとうございます。……彩はそろそろ休憩終わりか。俺もそろそろお暇するわ」

「え、でも……」

「他にも連絡返せてない人がいるしき。大丈夫だから、な？」

「……はい」

名残り惜しそうにする彩を送り出して俺も店から出る。グリグリメンバーはまあ後回しでいいだろ。それより先に行かないといけない場所がある。

母さんの墓に行ったら今日一日潰れちゃうし、もつと落ち着いて話す内容が決まっただから行くことにするとしよう。行かないといけない場所は、なにかと世話を焼いてくれる人物の場所だ。

「……なんだい。思ってたより早く来たんだね。まさかここが最初とは言わないだろうね？」

「それはないよ。ただまあ生存報告はいるかなって。それに最近SPACEに来てなかったし」

「あんたはここに来たがらない……というか、避けてるからね。あの子との約束を今も

気にしてるんだろ？」

「まあね。今日来たからって何か話を持ってきたわけでもないし。顔を出しに来ただけ」

「そうかい。……玲音、生きててくれて安心したよ」

「……まさか婆さんにそんなことを言われる日が来るとは」

「アタシにも人の心つてもんがあるんだよ。それとオーナーだ」

いつもの軽い調子にすぐさま戻る。オーナーはさすがに人付き合いが豊富だからな。やりやすい距離感でいてくれる。一度だけ飲み物を注文して、すぐにSPACEを出た。

俺がおいそれと来れる場所ではないというか、自分から来ないようにしてる場所だし。面倒な性格をしていることなんてとづくに自覚してる。でもこれが俺の性分だ。

この後は連絡をくれてたクラスの連中と落ち合った。ファミレスでひとまず話せることだけを話し、ニュースでどう報じられていたのかを教えてもらう。こいつらが俺の家が焼けたって知つたのもニュースで報じられていたかららしい。

それにしても、俺からすれば薄っぺらい関係だと思って接していたのに、こうして連絡してくれる奴がいたんだな。さすがに申し訳ない。態度を改めることを心に決めて、

クラスの奴らとゲーセンやらカラオケやらで馬鹿してから別れる。

わりと楽しんでいたようで、時間はすでに夕方。皮肉にも綺麗に赤く染まった空に舌打ちをして、牛込家へと向かっていると途中で牛込と合流した。

どうやらグリグリメンバーで練習してたらしい。チラチラと様子を伺うように見てくるのが鬱陶しいから、一言大丈夫だと告げて今日あったことを聞かせてもらう。彩だけじゃなくて牛込も集中できてなかったんだとか。途中から意識を切り替えられたらしいけども。さすがにこれは謝ろう。

「おかえり。ってあらあらー。仲良く帰ってきちやつて。待ち合わせでもしてたの？」

「してませんよ。たまたま会っただけです」

「お母さん。萩近くんのことなんだけど……」

「それは本人の答え次第ね。答えは決まったみたいだけど」

「……どこまで見抜いてるんだか。ご厚意に甘えさせていただきますよ。すみませんが、お世話になります」

「いいのよ。自分の家だと思ってくれたら」

「はい」

こうして俺が牛込家に厄介になることが決まった。ところでおばさん。部屋の模様替えが無駄にならなくて良かったってどういうことですかね。

## 11話

牛込家に世話になるようになってしばらくは警察とのやり取りがあつた。祖母の葬式は質素なものとなり、以前まで世話をしてくれていた施設の人たちと行つた。祖母の遺産は遺書に従つて俺が相続することとなり、そのために日記と共に通帳が金庫の中に仕舞われていたらしい。

そうしてドタバタとしていたらすぐに期末テストがあり、終業式が過ぎていった。夏休みに入ってようやく一息つけるようになり、気がついたらもう8月に入っていた。

「そしてまた連行されていると」

「萩ぼん連行とは人聞きの悪い。今年も合宿に行くつてだけじゃん」

「それが強制的だから連行つて言つてんだよ。起きたら俺の荷物纏められてるし、シフトも何故か変更されてたし」

「萩ぼんが例にもれずバイトを詰め込むからね」



そう言われてもな。居候の身で働かないわけにはいかないだろ。それにどのみち数年であの家は出るんだ。そのための資金集めも必要になる。だからバイトを詰め込んでいるというのに、おばさんの指示でおじさんが俺の荷物を纏めてるし。

携帯を見れば社員からメッセージが来てて、シフトを削ったと言われたし。おじさんは不服そうにしてたけどな。さすがに目の届かない所に年頃の男女を行かせるのは嫌らしい。俺も嫌だ。

「ところでなんでゆりちゃんあんなご機嫌斜めなの？ 着替えても覗いた？」  
「んなことするかアホ」

今年も去年と同じ場所に行くらしく、飛行機に乗っている。俺が一番左で横に二十騎、その横に鵜沢。通路を挟んで鰐部がいてその横に牛込がいる。元々の席順は違ったらしいのだが、牛込が土壇場で駄々をこねて変わったのだ。その理由は俺と鰐部しか知らないし、なんならすごい子供みたいな理由だ。

話すことでもないだろうと無視していたが、二十騎の追及がしつこい。鵜沢は鰐部に聞き始めるし。牛込と軽く目が合うとムスツとして顔を逸らされた。本当に子供だな。

「二十騎。視界のど真ん中に急に入ってくるな」

「えー。萩ぼんが私以外の女の子を見るから」

「付き合っていないやつにそんなこと言われてもな。それとお前との会話は終わってる」

「ひどいな。あんな激しい夜を——」

「ホラを吹くな。牛込が超機嫌悪くなったぞ」

「……あれはヤバイね。それとゆりちゃんが機嫌悪い理由が分かったよ」

鰐部が宥めてるが、はたして効果はあるのか。それに鰐部の反対に座ってる人が怯えてるし。牛込のあのキレ方どうなってるんだろうな。ビビリなやつ相手にしたら失神するんじゃないか。鵜沢と二十騎も冷や汗かいてるぞ。それを落ち着いて宥める鰐部は何者だろうか。

「てか理由分かったのかよ。このタイミングで」

「うん。ゆりちゃん分かりやすいから」

たしかに牛込は分かりやすい。彩ほどではないが分かりやすい。妹のりみ同様素直だからな。最近では余裕を持つようになってきてたんだが、俺が居候するようになってか

らはその印象も薄れてる。

どうやら二十騎は自分の考えに自身があるらしく、無駄に気取っている。そのままスルーしたらハリセンで叩かれた。どこから出したんだよ。カバンは上に仕舞ってたじゃないか。

「あれでしょ？ 萩ぼんがゆりちゃんを名前で呼ばないからでしょ？」

「……まあな」

「なんで呼ばないの？」

「慣れてる呼び名の方が呼びやすいだろ」

「分からなくはないね。それでも名前呼びし続けてたら慣れるんじゃない？」

「家ではそうしてる」

「あー。そういえば同棲してるんだっけ」

「言い方に悪意しか感じないな」

同棲してるんじゃないなくて、牛込家に居候してるんだよ。そこは間違えるな。意味合いが酷いぐらいに変わってくるだろ。

それよかよく当てられたな。たしかに俺が牛込のことを名前呼びしてないから機嫌

が悪くなってる。家では名字呼びだと誰のことか分からなくなるから名前呼び。外だと別にそうでもないから名字呼び。そう分けてるだけなのに、納得がいかないらしい。そもそも家で名前呼びになった流れも随分子供じみた流れだったし。

—————

俺に用意してもらった部屋は、以前の家とほぼ同様に取り揃えられていた。違いがあるとすれば、家具の彩りだろうな。ベッドと勉強机と本棚とタンス。一日で揃えるには無理がある気もするが、知り合いに協力してもらったのだとか。ただただ頭が下がるばかりだ。

「あの、萩近さん、お母さんが必要なものがあつたら言つてほしいって」

「いや、十分だよ。くだいと思うが、りみは本当に良かったのか?」

「はい。萩近さんのこともっと知りたいですし。……それで、あの……」

「ん?」

「下の名前で呼んでもいいですか? 一緒に生活するわけですし、名字は余所余所しいかな……つて」

「いいぞ。俺はもうりみって呼んじやってるし」

俺が快諾したらりみは笑顔を咲かせて喜んだ。これぐらいのことでそこまで喜ばれるのも珍しい気がする。もしかしたら俺は気難しい人間だと思われているのか。否定できない事実ではあるが。さすがに自覚してるさ。自分から距離を取ろうとする面倒くさい人間なんだから。

「えっと、それじゃあ呼んでみますね？」

「練習っているか？ 好きにしてくれていいけど」

「お兄ちゃん」

「名前どこいった!？」

「あ、間違えてもうた！ ちゃうねん！ 今のはそういうことやないねん！」

びっくりした。名前を呼ばれると思っただらまさかのお兄ちゃんて。名前を言い間違えるとかなら分かるが、一文字も掠つてないぞ。そしてやっぱりりみも関西弁が出るんだな。顔を真っ赤にしてあたふたしてるりみを少し揶揄してみるのもいいかもな。距離感はお掴んでおきたい。



「レオ……兄ちゃん……」

「……」

「……あかん、かな？」

「……いや、それでもいいぞ。予想の斜め上だったから驚いただけ」

「よかつた。ほなこれからよろしくな、レオ兄ちゃん！」

「こちらこそよろしく、りみ」

りみと握手してお互い笑いをこぼす。なんだか不思議なやり取りだからな。それにしては妹が増えたことになるんだよな。ということはりみは次女扱いか。この家でも次女だからそのへんの変化もないが、それはそれとしてこれが妹にバレたら何を言われるんだろう。

まず拗ねるだろうな。怒りもするだろうな。機嫌を治してくれるのに時間がかかりそうだ。でも、今はそういうやり取りをまたしたいと思ってる。

俺が少し思考に耽ったからか、りみが気を使つて声をかけてくる。なんでもないから気にしないでくれて言葉返していると、部屋がノックされた。開けるとそこには牛込がいて、おばさんがお茶の用意をしたから呼んでいるとのことだった。

「行くかりみ」

「うん」

「……随分仲良くなったんだね」

「そうか？」

牛込がどこか不服そうにするが、俺はそれを軽く流してリビングに向かう。後ろから牛込に服を掴まれても気にしない。話なんてお茶しながらでもできるからな。それとりにそんな姿見られてもいいのかよ。姉の威厳とか気にしてるって話してなかったっけ。

俺が今着ている服はおじさんの服だから、これが伸びるとおじさんに悪い。そんなわけ俺は一度立ち止まって後ろを振り返る。それにビクツと体を震わせた牛込が目を見送る。引つ張ってたくせに。

「服が伸びるだろ」

「ごめん。……へ？」

「さっさと行くぞ」



また服を引つ張られても仕方ないから、牛込の手を掴んでリビングへと入る。後ろで抗議してた牛込も、今の状態をおばさんに見られたからか黙りこむ。

無言で必死に手を離そうとするから大人しく離してやる。そんなやり取りのどこが面白いのか、おばさんとりみが楽しそうに微笑む。ぜひともその笑みはやめてほしいね。

おばさんに正面に座るように指示されたからそこに座る。牛込はさつきのこともあつてかおばさんの隣、つまり俺の斜め前に座ろうとしたが、りみがそこに素早く座る。牛込もその素早さに驚いてしばらく固まり、その後渋々といった様子で隣に座る。

「二人はそれが定位置よね〜」

「いつ決まったんですかね……」

「去年よ」

「だいぶ前ですね」

「お姉ちゃんがクリスマススの時とかずつとレオ兄ちゃんの隣に座ってたから」

「だからそれは偶然で……へ？　りみ今萩近くんのことなんて呼んだ？」

「レオ兄ちゃんだよ？　さつきそう呼ぶって決まったんだ〜」

嬉しそうに話すりみに対して、牛込は引き攣った顔でなんとか言葉を返す。呼び方にそんな反応しなくていいと思うが、たしかに妹がよその家の人間をいきなり兄ちゃんと呼んでいたらそうなるか。俺も妹がそんなことをしてたらその相手の首を締め上げに行く。姉なら許せそうだけど。

「りみが玲音くんと仲良くなって嬉しいわ。ね？ ゆり」

「そ、そうだね……」

「呼び方一つでそこまで動揺するか？」

「……じゃあ私のことゆりって呼んでよ」

「やだ」

「なんで？ 呼び方なんて大して気にすることじゃないって言ったくせに」

「牛込のほうが慣れてる」

慣れてる呼び方を急に変わると違和感しかないからな。その違和感を超えて呼び合うのは付き合ってる人とか、結婚した人とかだと思うんだよな。あとは親友とかがそうなるか。

ともかく、牛込はそれらに該当しない。だから呼び方を変えない。それで一蹴しようとしたが、おばさんが牛込側についてしまった。

「牛込だと私とかりみとか夫も反応しちゃうわよー？ 不便じゃないかしら？」

「……俺が牛込って呼ぶのはこの子だけですのぞ」

「それでも反応しちゃうものは反応しちゃうもの。私達のことも考えてくれないかしら？」

「楽しんでますよね？」

「なんのことかしら〜？」

楽しんでる。絶対にこのおばさんは楽しんでる。それを隠す気もさらさら無いように、思いつきり顔がにやけてる。

この人が言っていることは至極当然のことだ。そう言われてしまえばこちらも納得せざるを得ない。本当の目的が別にあるようにしか思えないから気が進まないけどな。

隣を見ると牛込は冷ややかな目をしている。親の援護をもらっておいでそうされると何か反撃したくなるんだがな。特に思いつかないし、諦めるとしよう。

「はあ。……ゆり。これでいいんだろ？」

「うん！ えへへ、やつと名前で呼んでもらえたよ」

「外では牛込って呼ぶから」

「なんで!? 統一して名前で呼んでくれたらいいじゃん！」

「外なら牛込って呼んで該当するのが、ゆりだけだから」

「むうー」

また不満そうな顔になる。彩みたいに頬を膨らませるから、これまた同じように頬をつつく。それで空気が漏れてやっぱり俺は叩かれた。やられたくなかったから初めからやらなければいいものを。

俺のこの言い分だっておかしいところはない。おばさんが言ったのは、他に牛込がいる時にゆりに牛込と言ったら他の人も反応するということ。だからゆりと呼べばいいという話だ。それならゆり以外に牛込にいなければ、俺はゆりと呼ぶ必要がないのだ。

「それは追々として、玲音くんのことをゆりも名前で呼んだらどうかしら？ それでお互い様でしょ？」

「あー」

「あ、そうだね」

「呼ばなくていいから」

「君が気にしなかったからいいだけでしょ」

俺がペースを握られているのが珍しいからか、ゆりが上機嫌にそんなことを言ってくる。たしかに俺は気にしないようにしているが、なんか癪だ。ちなみに二十騎に呼ばれてるあのあだ名は、やめさせるのをとづくに諦めた。あいつは制御できない。そしてゆりの制御を最近諦めてる。

そのゆりは目を閉じて二回深呼吸をしてから目を合わさってくる。名前を呼ぶだけだということに、大げさなことだ。

「レオ……くん……くっつ！」

「……」

「二人とも初々しいわね」

「お姉ちゃんは顔真つ赤だね」

自分で呼んで起きながら自滅して顔を真つ赤にしたゆりは、顔を両手で隠して俯く。

ゆりにそう呼ばれるとは思ってなかったのと、目の前で自分の名前を呼んだ相手が顔を赤くして自滅してるのもあって、俺も妙に気恥ずかしくなる。外野の二人が楽しんでいるようで何よりだよこんちくしょうめ。

だが、こつちがやられて終わりなのは面白くない。俺は顔隠すゆりの手を引き離して、顎を持ち上げる。強制的に顔を上げさせてお互いの鼻が当たりそうなくらい距離を縮める。この時点でゆりの目が泳ぎまくっているのが面白いな。

「ゆり。これからよろしく」

「ふあい……」

「お、お母さん。見てるこつちが恥ずかしいよお」

「玲音くんはやり手なのね」

意趣返しはできたが、やはり外野が邪魔だったな。

—————

そんなことがあって、牛込は外でも名前呼びしろと言ってくる。そしてもちろん俺の

答えはNOだ。そもそも牛込には彼氏がいて、他の男を名前呼びしてるという情報が入るだけでも拗れそうだな。あの男は面倒くさいからな。電話のことも言ってくるぐらいだし。

「そんなわけで名字呼びなんだよ」

「はあ。相変わらず面倒くさいね」

「面倒くさいか？」

「だって萩ぼんがゆりちゃんの名前呼ぶだけで解決なんだよ？」

「……まあな」

だが俺は外でゆりと呼びたくはない。本当なら家でも嫌なんだから。そう思いながら窓の外を眺める。雲しか見えないが、雲の上には青空が広がっている。その鮮やかな青空をしばらく眺めていると、飛行機が着陸に向けて高度を下げていくのだった。

## 1 2 話

合宿場となる鰐部の友人の別荘。去年借りたところでも十分の広さだった。部屋の数は余り、大浴場があつて、防音完備の練習場所もあつたのだから。今年もそこでの合宿になる。そう思つていたんだがな。

「……なにこれ」

「別荘らしいわよ」

「これが……大富豪つて怖いな」

「見てみて！ プールもあるよ！ 今年はここで海とプールの両方ができるね！」

「ひなは目的忘れてない？ 私たちは合宿に来たんだから」

「けど遊ぶでしょ？」

「まあね」

結局遊ぶんじゃないか。予想通りだけでも。そして二人がかりだろうと鰐部の監視



を抜けられるわけでもないし、予定が予想外に崩れるってこともないだろう。俺は今年も海の家でバイトさせてもらえらしいから、関係ないんだけどな。

それにしてもデカイ。二階建ての家だが、ここもやっぱり海を眺められるテラスがある。さつき二十騎が言つたみたいにプールもあるし、大浴場もあるんだとか。どんな大富豪なのか会つてみたいものだが、会つて何を話すわけでもないな。生活が違いすぎる。

鰐部が鍵を開けて中に入ると、玄関でも五人が横に並べる広さがあつた。一階はほとんど部屋がないらしい。脱衣所や大浴場、トイレと書斎ぐらいで、残りのスペースにキッチンもリビングもダイニングも纏められている。二階には部屋が多く、そこが寝室となるようだ。使わない部屋の方が多そうだな。

「食料も一通り用意されてるのか」

「これはまた萩ぼんの料理が食べられるパターンかな？」

「そうなるんじゃないか？ シンプルなもんしか作れないが」

「今年はチーズカレーで！」

「そうやって指定されてる方がやりやすいな」

自分で考えて作ってもいいんだが、リクエストに応えるほうがこちらとしても気が楽だ。こいつらが作られた料理を拒むことはないと分かっただけだが、気にかけるものは気にかける。チーズカレーを作るのは夜になるんだけどな。今年も昼に海に行くから、昼食もそっちになる。

さて、そうなるかと海に行く前にやるのが一つだけあるな。俺はそれをやってから海の家バイトに行くでしょう。

「あれ？ 萩近どつか出かけるの？」

「チーズがないから買ってくる。お前らは気にせず海に行きやいいよ」

「いやさすがにそれは悪いというか……」

「買うもん少ないのに何人かで行っても仕方ないだろ。それに、俺の役回りがこうなんだしよ」

鰐部にスペアキーを借りていくことを伝えて俺は一人で外に出た。鰐部も何か言いたげだったが、それでも何も言わなかった。それに甘えてしまっている気もするし、今度なんかお返しでもしよう。覚えていたら。

鵜沢はなんだかんだで全員が一つの輪になる状態を望んでる。距離感を間違えない

ように気を使いながらそう感じさせない言動。さっきのももつと強く言えばいいものを言葉を止めていたし。

二十騎のやつは未だに何考えてるか分からないから放っておくとして、今面倒なのは牛込だな。二十騎に言われたとおり俺が名前呼びしたらいいんだろが、俺が折れてやる必要性がない。拗ねてりゃこつちが折れると思わないでほしいね。

くくくく

私……何しちゃってるんだろ。なんでこんなに彼の前だとわがままになるんだろ。こんなに子供じみた言動とって、困らせて。

困らせてるぐらいならまだマシかもしれない。もしかしたら表に出してないだけで、怒ってるのかもしれない。だから一人で買い出しに行つたのかも。私がこんなで、みんな私の機嫌を治させようと彼に話しかけるから。

でも違う。彼は何も悪くないんだ。私がこんな面倒なことになつちやつてるのじゃないんだ。名前を呼んでもらえないからって。

彼が言ってることは間違つてない。呼び慣れてる呼び方がいいって言うのは分かるもん。それが家の中だとややこしいから、家の中だけ名前で呼ぶ。外なら今まで通り名

字にする。何もおかしなことじゃない。おかしなことじゃないんだ。

——なのになんでこんなに切ないんだろ

「ゆくりちゃん!」

「ひやあつ!?! ちよつ、ひな!?!」

「ほれほれ」

「ひな、やめつ……! 変なところ触らないで、よ!」

「変なところってどこ? くすぐってるだけじゃーん」

「それをつ、やめてつてば!」

リイと七葉がひなを引き離してくれて、それで私は解放された。私って敏感だからくすぐられたりしたら全然抵抗できないんだよね。だからこうして助けてもらわないといけない。

乱れた息を整えながらひなを軽く睨むけど、ひなはヘラヘラ笑ってるだけだった。そういう前に言われてたっけな。私が睨んでも怖くないって。普段はそれでいいやつて思うけど、こういう時は残念だね。それはともかくとして、ひながなんでこんなこと

してきたか聞かないとね。予想はつくよ。私のせいだよ。

「ゆりちゃんが暗いからさく。せつかくみんなで合宿来たんだから笑っていかないかね  
！」

ほら。やっぱりそうだった。

ひならしいよね。暗い顔してる人を笑わせるためにくすぐる。人によつてはもつと怒るだろうけど、ひなはこれでいて人を選ぶから。私がそこまで怒らないって分かつての行動。

「ひなには敵わないね。……うん、それじゃあみんなで行こうか」

「ゆり……」

「七菜も行く？」

「分かったわ。一回部屋に行つてくるから」

「私も着替えは部屋に置いてるから、一緒に行こ。リイとひなは……もういないね」

「あの二人はさすがね」

部屋で着替えて、必要なのも用意して七菜と一緒に海に行く。別荘からそんなに離れてないからすぐに海に着くし、先に行つたレイとひなともすぐに合流できた。ちゃんとして日焼け止めクリームも塗つて、海で遊ぶ。きれいな海で海水が透き通つてゐる。こういう所で彼とも遊べたらいいのにな。

みんなでしばらく遊んでから海の家に行つたら、その彼が絶賛バイト中だった。いつの間に来てたのか分らないけど、そんな遠くないところにスーパーがあるし、時間もかからなかつたんだろうね。歩くの速いもんね。

彼のバイトが終わつたら私達の遊びも終わり、一回お風呂に入つて体を洗つて、それからバンドの練習。練習時間の前半ぐらいはいてくれたんだけど、途中から彼は退室しちゃつた。

晩御飯の用意をしてくれるからんだけど、せつかくならやつぱりもつと練習を見てほしかったかな。普段の練習も来てくれる頻度が減つてたから余計にそう思った。

晩御飯はひなのリクエスト通りチーズカレー。簡単なものしかできないつて言うわりには、その作れる料理が美味しい。この晩御飯もそうだし、家で彼が母さんの手伝いをしたときもそうだった。晩御飯の片付けは私達がして、彼はリビングのソファでテレビを見ながら休憩。お風呂も後でいいんだとか。

——ああ、やっぱり駄目だ。今日彼とまともに会話できてないや。わがままばかり言つてたことを謝りたかつたのに。

「あゝ温泉気持ちいい〜」

「アタシの家のお風呂も源泉出るようにならないかな」

「リイ。だいぶ無茶苦茶なこと言つてるわよ」

「鰐ちゃんは真面目すぎるな〜」

みんなとお風呂に入つて疲れを癒やしてるけど、やっぱり頭の中が休まらない。ウジウジ考えるほうがいい案も出ないというのに。みんながいてくれるのに。

「ゆりちゃんは考え過ぎだと思ふなく。一回スタート地点に戻りなよ」

「スタート地点？」

「うん。まずは気持ちの確認。ゆりちゃんは萩ぼんのこと好きでしょ？」

「なあつ!!? そ、そんなことないってば!」

「あ、そのネタまだやるんだ」

「ネタつて何!!? そもそも私が彼のこと好きなら、神木さんと付き合つてないよ!」

ひなはいったい何を言っているの。私のそういう対象での好きな人は彼じゃないのに。もしそれならもうすでに告白……できてるとは思えないけども。でももつと力になろうとするはず。

それなのにひなはヤレヤレって感じで首を横に振るし、七菜とリイは無言で目を瞑ってる。わけわかんないよ。

「はあ。ゆりちゃんがそうだって言うならそれでいいよ。でも、それならなんでそんなに萩ほんのことで悩むの？ ゆりちゃんにとっての萩ほんって何？ どういう人？なんでゆりちゃんもゆりちゃんて萩ほんのことを名前で呼べないの？」

「そんなの……」

そんなのが分かっているなら苦労なんてしない。こんなに悩まない。でも、言われてみればたしかに、私にとって萩近玲音くんはどういう人なんだろう。分からない。何も分からないや。

「……ごめん。先上がるね」

「考え過ぎでのぼせたのかな？」



「そうさせたのはひなでじょうに……。ゆり、ちゃんと休んでね」

「うん。ありがとう七菜」

「あ、これだけは今言つとかないとね」

何か一つだけ言つとかないといけなことがあつた。話の流れからして分かる。彼に関係するものなんだ。七菜とリイも興味があるみたいで、私達の視線がひなに集まる。それを受けてひなの表情が引き締まった。重たい内容みたい。

「ゆりちゃんが気づいてないのもどうかと思うんだけどさ——」

頭の中を整理できたわけじゃない。でも、それでもわがままをいっばい言つてることが謝らなくちゃ。そう思つて、なんとか決心をつけて寝る時間になつてから彼の部屋に行つた。もしかしたら寝てるかもつて思つたけど、まだ電気が付いてた。

ノックして中に入つたら、彼は通話中だった。誰かなんて聞かなくても分かつた。スピーカーにして通話してたから。相手は丸山さん。邪魔になるからまた後にするつて言つたけど、今日の通話も終わる流れになつてたみたい。

……今日の通話……。

「どうしたんだ？ 明日の予定で変更でもあるのか？」

「ううん。そうじゃないけど、ねえレオくん」

「うん？」

「なんで丸山さんには許可出すの今日の通話ってどういうこと？」

「そう言われてもな……」

「私の時には鬱陶しいから頻度を減らせて言ったのに！ なんで丸山さんはそうじゃないの!? なんでいつもいつも丸山さんに甘いのだ!? なんで私にはずっと厳しいのだ!?」

——違う、こんなのを言いに来たんじゃない

「頭がグチャグチャだ。やろうとしてたことと今取ってる行動が一致しない。彼を押し倒して襟を掴んで叫んでる。こんなのをしたいわけじゃないのに。しちゃいけないのに。」

「それは——」

「面倒くさいからだよね？ そりゃそうだよね！ 私は私のことしか考えてないもんね

！鬱陶しいもんね！ もういいよ私は——

「——ゆり！」

「つ！ なんて……優しく……するの」

——拒んでよ。私を本気で拒んでくれたらお互いそれで楽になれるじゃん

バツと体を起こした彼に抱きしめられる。こうやって優しくされるから私はきつと離れられないんだ。彼に言われた通り軽い女だよ。でも、なんでそんな私にこうして優しくしてくれちゃうの。

「電話のことは謝る。あの時は余裕がなかったんだろうな。今もないが、今以上に。それと前にも言ったとおり、俺は外では名前呼びしない。お前の彼氏に知られると面倒だからな」

「……うん」

「でも、こうして二人だけの時なら外でも呼ぶことにする。知られる心配がない時だけだから、機会は少ないだろうけども。それでもいいか？ ゆり」

「あ……うん。……ありがとうレオくん」

「どういたしまして。わがままなお姫様」

「うう……ごめん」

「はは、いいき。ゆりなら別に」

ああ、そういうところだ。そういうところがあるから私は彼に甘えてしまうんだ。勝手に怒って不満をぶつけて、彼を困らせて妥協させる。きつと私は彼にとつて重荷になつてる。彼のストレスの原因になつてる。それなのに赦されてしまうから、彼に依存しちゃうんだ。

——これは駄目なことなのに

『ゆりちゃんが気づいてないのもどうかと思うんだけどさ』

——萩ぼんは今薄氷だよ。つまり、簡単なことで壊れる。ゆりちゃん、気をつけときなよ?』

——私が壊しちゃうかもしれないのに

## 13話

合宿初日の夜にゆりと話して、いつなら名前で呼ぶかを伝え説得した。不満が無くなったわけでもないようだが、俺の性格をゆりはちゃんと把握してくれてる。だからその不満を飲み込んで納得してくれた。

合宿中は名前で呼んでも彼氏に知られる心配はないと論破され、俺も不満を飲み込んで名前で呼んでたしな。

合宿二日目は海じゃなくてプールで遊んでいたな。そして今年も二日目は有給休暇として処理されて俺もその遊びに加えられることになった。俺とゆりがお互いに名前呼びしてはすぐには気づかれて、それで揶揄われるのも当然あったな。

俺が無視してもゆりが反応するから面倒くさいことこの上なかつた。ひとしきりプールで遊んだらバンドの練習をして帰宅。去年のようなトラブルも特にない合宿ですんだ。

「へー。じゃあお姉ちゃんとしてオ兄ちゃんとの関係も一歩前進だね」

「りみは何を聞いてそんなコメントをしてるんだよ……」

「違うの?」

「そもそも俺とゆりの関係に進むも何もないだろ」

「ええー」

家に帰って翌日、りみに合宿のことを俺なりに話したんだが、何をそんなに不満そうにするんだこの子は。俺とゆりの関係は今からどう変化するものでもないだろ。万が一にもりみが期待しているであろう展開にはならない。

りみは慣れてきたからか、いつの間に敬語を使わなくなった。俺としては居候の身としか考えてないし、りみがどう接してきても受け入れる。

だがりみは俺をただの居候としては見てないらしい。兄と呼称してる通り家族として見ているようだ。

「あれ? 二人とも何してるの?」

「あ、お姉ちゃん」

「何もしてねえよ。りみに合宿がどうだったか聞かれたから話してるだけ」

「ふーん? レ、レオくんはその……合宿楽しかった?」

「名前呼ぶときにいちいち詰まると恥ずかしがるのいい加減やめてくれね？ 慣れないなら名字呼びにしろよ」

「駄目だめ！ そうしたら君も名字呼びにするでしょ？」

「よく分かつてるな」

ゆりの予想通り俺は名字呼びになった瞬間にこっちもそうするつもりだ。外では別だな。俺が外ではゆりのことを牛込って呼ぶから、ゆりも名字になるし。

それにしても、ゆりはなんでこんなに名前呼びに拘るんだろうな。慣れないくせに。呼ぶ度に視線そらしたりモジモジしたりするくせに。

「もう少しで慣れるから！ だから名前呼び続行！」

「それは昨日もさんざん聞いた。何回もそう言うが、変化がないんだ。諦めろと言いたくもなるだろ」

「やだ。私はやめないから」

「なんでお姉ちゃんそんなに恥ずかしそうにするの？ 私全然レオ兄ちゃんって呼ぶの

恥ずかしくないよっ！」

「うぐっ！」

りみからトドメを刺されたな。ゆりとりみだとりみの方がなかなか自分を出せない。誰かの背に隠れがちだ。それなのにこれに関してはりみの方が平然としている。ゆりと同じように呼びたい呼び方だというのに。

ちなみにこの呼ばれ方を外でされると俺の方がむず痒い。何かのグレーゾーンな気がする。何かは分からないが。

りみの言葉が響いたのか、ゆりは覚束ない足取りで俺が座ってるソファに座ってきた。他のところに行けばいいものを。一番近いところをスルーしてたのも意味がわからん。

「もたれかかるなよ」

「休憩」

「なんでだよ。……りみヘルプ」

「写真撮ってお母さんに送っとくね」

「おいいら」

こんな状態を撮られておばさんに送り付けられたらまた揶揄われるだろ。俺はやられてる側だからいくらでも躲しようがあるんだけどな。もたれかかっているゆりは話を



聞いてないみたいだけでも。本当に写真撮られたらどうするんだろうな。俺は助けないぞ。

「送つといたよ」

「シャツター音無かったぞ？」

「無音カメラだもん」

「ええ……」

携帯の画面を見せられて、そこにはたしかに俺達の写真が映っていた。そしてその画面はトーク画面で、相手はおばさんだ。りみは揶揄ではなく本当に送ったらしい。打ち解けたら結構アグレッシブなんだな。驚きだわ。そしてまだりみに言われたことを気にしてるゆりにも驚きだわ。いい加減立ち直れ。

「そういえばレオ兄ちゃん。今度の土曜日予定ある？」

「土曜日？ あるにはあるけど、何時からとかある？」

「夕方から。ほら、お祭りあるじゃん」

「あるな。彩に誘われてるから彩と行くが」

「あー。じゃあレオ兄ちゃんとはまた今度かな。お姉ちゃんと三人で行きたかったけど」

「軽い調子で修羅場作ろうとするのはやめようか」

「え？」

なんで何言ってるの、みたいに首傾げてるのかねこの子は。三人で遊ぶだけなら別に問題ないさ。三人で祭りに行くのも別にいい。

だが今の人間関係でそれはない。俺とりみはともかく、ゆりは彼氏持ちだ。彼氏とは別の男といるだけで知ってる人から疑われる。そこに妹まで混ざったらとうとうカオスだ。それで彼氏に出会ってみろ。面倒くさいことこの上ない。

それを説明したところでやつとりみは理解してくれた。彼氏が邪魔だねなんて言ったのは俺の聞き間違いだろう。りみに限ってそんなことは言わないはずだ。そんな攻撃的な子じゃないはずだ。いや、全然知らないけどさ。

くくくく

土曜日の17時過ぎ。そろそろ家を出ようと支度を始める。支度と言っても大して

用意するものはない。携帯や財布といった持ち回り品ぐらいいだ。リビングに行つて出かけることを伝え、玄関へと向かう。その途中でゆりに呼ばれて部屋へと向かうと、そこには浴衣に身を包んだゆりがいた。

「どう、かな。変なところない？」

「鏡で見れるだろ」

「自分じゃわからないところあるじゃん」

「まあな」

黄緑……じゃないな。エメラルドグリーンってやつか。帯は蒼色かな。それをベアスにした浴衣に身を包んだゆりを見つめる。黙って近づき、ゆりの後ろに回ってこつちからも確認する。一人で着付けしたようだが、崩れてるところもないな。

「ちゃんと着れてるな。おかしなところないぞ」

「ありがとう。でもそういうことじゃなくて……」

「だろ。綺麗だぞゆり。不覚にも見惚れかけた」

「だから一言余計だつてば。それとわざと耳元で囁かないでよ」

「悪い悪い。だが綺麗なのは本当だぞ」

「……うん」

後ろから覗き込むようにゆりの目を見つめる。ゆりも軽く振り返り、目を真つ直ぐ見つめ返してくる。予想外にゆりに見惚れてしまったからか、雰囲気のせいなのか、ゆりの瞳に吸い込まれる。ゆつくりと顔を近づけ、ゆりも瞳を閉じる。

「——お姉ちゃんそろそろ出るんじゃないか？ 携帯に電話来てるよー」

「っ！ そ、そうだね！ りみ教えてくれてありがとう！」

「俺も出るか。彩を待たせるわけにもいかないし」

「……別のお祭りがあつたらさ。二人きりで行かない？」

「気が向いたらな。それとりみが拗ねるぞ」

ゆりは携帯をリビングに置いていたらしく、りみに呼ばれてリビングへと向かう。俺は支度が終わっているから玄関へ。ゆりの誘いを適当に流したらやつぱりゆりは拗ねたが、姉妹揃って速攻で修羅場を作るのはやめろ。対岸の火事として眺めるならいいが、俺がそこに混ざるのはごめんなんだよ。さつきは危なかったけどな。

「なにしてんだか」

真夏の暑さも夕方になれば少しはマシになってる。気休め程度でしかなくて、アスファルトは熱を持つてるんだけどな。

だが、これは今は丁度いい。さっきのことも暑さのせいにしてよう。涼しい家の中だったが、夏のせいなんだよ。

~~~~~

「変なところ……ないよね。忘れ物もないよね……。待ち合わせも間違えてないかな……」

「待ち合わせを間違えてないかを不安にさせたのは謝るが、その前の二つは今さらどうしようもないだろ」

「へ……？ あ、玲音さん！ つ、きやつ!?」

「危ないな……。慣れない浴衣で走ろうとするな。俺はどこにも逃げないから」

「え、えへへ。ごめんなさい。玲音さんに会えたのが嬉しくて」

見上げると呆れ顔だけでも、優しい顔してくれてる玲音さんが目に入る。転けそうになつた私を受け止めてくれたから、私は今玲音さんの胸に飛び込んでる状態。いつもな
らここが外つてもあつて恥ずかしいんだけど、今日は違う。玲音さんに会えるのが
一週間ぶりだから。正確にはもう少し多いんだけどね。

「俺も彩に会えて嬉しいよ。安らげるから」

「そうですか？ えへへ、そう言ってもらえると嬉しいです！」

「いつもありがとう彩。……俺も私服じゃないほうがよかつたか？」

「いいえいえ。私が勝手にこうしてるだけなので、玲音さんは気にしなくていいんですよ。
それより似合ってます？」

自分から聞くのは勇気がある。でもやつぱり気になつちやうから聞いちやう。玲音
さんは優しいけどはつきり言う人だから、楽しみでもあつて不安でもある。まだ玲音さ
んの胸の中にいたいけど、名残惜しさを捨てて離れる。ちゃんと見てもらいたくて、
ゆっくり一回転する。

薄い黄色の布にピンク、水色、黄色の傘が描かれてる浴衣。帯は濃いピンクで、髪を

後ろに纏めてる。お母さんたちに太鼓判押されてるけど、でも玲音さんのお目にかなうかな。グリグリって綺麗な人たちが揃ってるから、それに見慣れてたら私なんて全然って思われちゃうかも。

「似合ってるさ。可愛いよ彩」

「ほ、ほんとうですか？」

「こういう時に嘘つかねえって。俺は似合ってなかったらバツサリ言うだろ？」

「そうですけど……うう〜」

「褒めても泣くのか……。仕方ないやつだな」

玲音さんに褒められたのが嬉しくて、思わず涙が出てきちゃった。涙を拭かなきゃ玲音さんに迷惑だつて分かってるけど、思ってた以上に私は緊張してたみたいでその分涙が止まらない。そんな私の涙を玲音さんがハンカチでそつと拭いてくれる。迷惑そうになんて全然してない。

「玲音さん……行きましょう」

「ん？ 泣き止んでからじゃなくていいのか？」

「歩いてる方が涙も止まると、思うので」

「彩がそういうならそうするか。ほら」

ハンカチを手渡されて、その後手伸ばされる。歩きながらだと私が自分でやるしかないもんね。そして今から手を繋いでもいいみたい。それが嬉しくて私はすぐに玲音さんの手を握った。いつもは包み込まれるような手の繋ぎ方だけど、今日は私の甘えたい気持ちを前面に押し出す。

——恋人繋ぎ

今日くらい。こういう特別な日くらい許してほしい。私が望んではいけない関係の手の繋ぎ方を。今日くらいはさせてほしい。けど、こんな暗い気持ちを玲音さんに悟られちゃいけない。だから私は精一杯の笑顔を浮かべて玲音さんの腕に抱きついた。誤魔化すために。

腕に抱きついたら玲音さんも驚いてたけど、でも「甘えん坊め」と言うだけで許してくれた。私の秘めてる思いに気づいてるわけじゃなさそう。うまく誤魔化せてるみたいだね。

「さすがに人も多いが、どの屋台に行きたいとかあるか？」

「そうですね。んー、りんご飴食べたいですね」

「りんご飴ね。じゃあそれを探すか」

「探しながら他にも寄りませんか？」

「その方が手間も省けるしそうするか」

この屋台の数と人の数だと見つけるの難しいかなって思ったけど、神社へと続く道に沿って屋台が横並びになつてゐるから、そこまで難しくないのである。左側通行みたいになつてゐるから、右側の屋台に行くのは大変そう。りんご飴があつち側じゃなかったらいいな。

「遊び系のも寄るか？」

「せっかくなのでそうしましょう！」

射的やヨーヨー釣り。輪投げもやった。どれも玲音さんは上手で、屋台の人も周りにいた人も驚いてた。小学生とか幼稚園の子にやり方を聞かれて、それを教えてたらその子たちも上手にやつてた。屋台の人は苦笑いだったけど、子供が笑顔なのは良い事だつて言つてたな。

屋台じゃあかき氷とか焼きそばとか綿菓子とか。かき氷も焼きそばも一個しか買っていないのに、スプーンやお箸を二つ貰った。彼氏さんとどうぞって言われて恥ずかしくなったけど、玲音さんは彼氏じゃないんだよね。かき氷はお互いに食べさせ合いました。食べさせるのも食べさせられるのも恥ずかしくなかったけど、でも彼女気分を味わえた。

「りんご飴の屋台はあそこか」

「りんご飴買ったら移動しませんか？ 花火があるみたいなので見やすい所に行きましよう」

「調べてるのか？」

「バッチリです！」

ネットでバッチリ調べてあるから、見やすい場所に案内できる。たまには私も良いところを見せないとね。だから玲音さんにどの辺りか聞かれても教えないことにした。玲音さんはりんご飴を食べないみたいで、これも買ったのは一個だけ。それを味わいながら調べた場所へ移動……したんだけど。

「見事に人が多いな」

「ううー、なんでー？」

「ネットで調べりやそりやあみんなが来るとこになるだろ。さすが彩。トチつたな」
「はうっ！」

結局良いところを見せられなかった。そう落ち込む私の頭を撫でてくれた玲音さんに手を引かれる。ここから離れるみたい。もしかしたら気持ちが悪持ちが萎えてしまったのかも。私のせいだよ。最後の最後で……。私はいっつも肝心なところで……。

「着いたぞ」

「え、ここは……う？」

「隠れ名所。人もいないから二人で花火を楽しめる。こんなふうにな」

ちょうど花火が打ち上げられ始める。花火をしつかり見ることができて、人もいない。こんな場所があるのに知られない理由って、ここが暗いからだよね。私も玲音さんがいないとこんな所これないよ。友達とでも無理。

ベンチに二人で腰掛けて肩をくつつける。私は頭を預けて、玲音さんが私の腰に手を回す。こうして二人だけで花火を見ることができると、ロマンチックで好き。この

シチュエーションがとても私好み。

これはきつと夏のせい。だからかな……

「玲音さん……」

「彩？」

「んっ」

玲音さんに私の唇を押し付けちゃったのは。

こんなことしちゃいけないのに。

玲音さんの心の状態は安定してるように見えて、全然安定してないのに。

なんの拍子で壊れてもおかしくないのに。

私からこんなことしちゃいけない。玲音さんも自分のことを戒めようとしてた。それなのに私がそれを邪魔しちゃった。だからすぐに離れようとした私の首に玲音さんは手を回した。呼吸が苦しくなるくらい長く。

——ああ、なんでなんだろう

——なんで私はこんな……

14話

私はなんてことをしてしまったのだろう。してはいけないことだと自分で決めていたのに。望んではいけないことだとわかっていたのに。それなのにどうして私はあんなことをしてしまったのだろう。

玲音さんの心は弱っているのに。そんな時に逃げ道を作ったら、玲音さんが流れてしまふことなんて分かっていたのに。

回復傾向にあることも分かった。少しずつ玲音さんが出会った頃みたいに、強い人に戻りそうになっていったのも。だから大丈夫かなって思ってしまったのかもしれない。玲音さんなら自分を保っていられるって。そう思ってしまったのかも。

実際に玲音さんは、私が不安になってたほど後退はしなかった。普段の様子に変化なんてなくて、私との接し方にも変化はなかった。だから他の人に何かがあったと勘づかれることもなかった。

むしろ私の方が駄目だった。玲音さんとどう向き合えばいいか分からなくなって、しかもバイトも全然被らなくなった。どうしたらいいか分からなくて、電話もしてない。

いつも私の方から電話をしてたから、私から電話をしないと玲音さんと話すこともできない。玲音さんは私に気を使って電話をかけてこないから。

「はあ〜」

体の中の空気が全部抜けるんじゃないかってぐらい深いため息をつく。今日もバイトだけ玲音さんとはシフトが被ってない。花音ちゃんとは被ってるから、また花音ちゃんに相談しようかな。花音ちゃんにしか言えない弱音もあるから。そう決めただけ、まだ花音ちゃんは来てない。

話し相手がいらないと考えちゃうのは玲音さんのこと。そしてやつぱり駄目な方に思考がいつちやつて憂鬱になる。またため息をついて、机に突っ伏す。

昔から何をやっても駄目で、いつぱい努力しないとできない。努力してもできないことが多い。そんなの分かってるのに。分かりきってることなのに、なんとかしたいと思ってる。私がつかりしなきやつて。

でも——

「玲音さんに会いたい。またお話しして、遊びに行きたい」

腕で口元を隠しながらそんなことを呟いてしまう。私の方から駄目なことしちやつて、私から勝手に距離を取っているのね。理性ではしつかりしなきやつて言つて、心は玲音さんへの甘えを求めている。蓋をして隠してる本音は、玲音さんともつと関係を発展させたいつてことなのに。

——駄目だよ。それは私が望んじゃいけないことなんだから。だって私は……

「おはようございまーす。お届け物でーす……つて彩どうした？ 元気ないのか？」

「え……」

裏口のドアが開けられて、そこから聞こえてきたのは私が悩んでいた人で、そこに見える姿は紛れもなく本物で。

「玲音さん？ え、だって今日シフト入ってないんじゃない……」

「入ってないぞ。迷子になつてる松原を見つけてここまで送つてきただけだし。まあ、ついでに顔出すくらいはしようかなつて。それより彩大丈夫か？ 元気なさそうだが」

「あ」

私の隣の椅子に座った玲音さんが私の頬に手を添える。視線を合わせてちよつと心配そうに見つめてくる。私がこうなってるのはあなたのせいなんだけど、でもそんな文句なんて出てこない。本当は何も変わらず接してくれる玲音さんに甘えたい。飛び込みみたい。

だけどそれは駄目なんだと頭の中で警告が鳴る。我慢しないといけないのだと。胸が苦しい。もう耐えたくない。でも耐えないといけないから。

だから私は笑顔を作って話を逸らすことにした。アイドルになりたいんだから、笑顔の練習はいっぱいしてる。それに私はよく笑う子だって言われてるから気づかれない。

「大丈夫ですよ。ちよつとレッスン頑張り過ぎちゃって」

「そうなのかな？俺が言うのもなんだが、無理すんなよ？」

「あはは、本当に玲音さんには言われたくないことですね。それより玲音さん。花音ちゃんがいませんよ？」

「はあ!?! 店の前まで連れてきて迷子になるってどういうことだよ!?! ちよつと探してくるわ!」

「さ、さすが花音ちゃん……」

着替えの時間を考えたらすぐに見つけ出さないといけない。だから玲音さんは大慌てで裏口から出て行った。玲音さんが花音ちゃんの搜索をするのは偶にあること。それがどこか日常みたいに見える。私は自然と笑みを溢せた。気持ちも少し楽になる。

玲音さんが出て行って二分も経たずに裏口のドアが開かれる。玲音さんが花音ちゃんを連れてこれたのかな。そう思っておかえりなさいって言おうと思ったけど、予想の斜め上をいかれた。

「彩ちゃんおはよう。時間ないよね。すぐに着替えるね！」

「お、おはよう花音ちゃん。それより玲音さんは？ さつき花音ちゃん探しに出て行ったんだけど」

「ふえ？ そうなの？」

「そうなの。というか、最初玲音さんと来てたんじゃ……」

「う、うん。でも途中ではぐれちゃって。フラフラしてたらなんとかつけたんだけど……ど、どうしよう」

「じゃあ私の方から連絡しとくから花音ちゃんは着替えてて」

「う、うん。ごめんね彩ちゃん」

花音ちゃんが更衣室に入っていて、私は携帯を取り出して玲音さんに連絡する。今までなら電話するのに、今も通話ボタンを押そうとしてるのに、私はそのボタンを押えられずにいた。花音ちゃんには私から連絡すると言った手前、花音ちゃんが着替えている間に連絡を済ませないといけない。だからその葛藤から逃げて私は文章で伝えることにした。

20秒ぐらいで既読がついて、『ええー』という戸惑いが返ってきて、そのすぐ後に『安心した。俺は帰る』って短い文が返ってくる。その文に『わかりました。お疲れ様です』って私も短い文とスタンプを送り返す。

全然やらなくなってた文章でのやり取り。トーク画面には通話のマークがいっぱいだったのに、数ヶ月ぶりに送られた文章は呆気ないものだった。

通話だったらもう少し言葉が多かったはずなのに、文章にするとこれだけになってしまうなんて。その事実寂しさを感じてると花音ちゃんが着替え終わったみたいで、二人で一緒にタイムカードを打つ。

「彩ちゃん」

「なに？ 花音ちゃん」

「ピークが過ぎたらお話聞かせてね？ 何かあるんでしょ？」

「え……。あはは、花音ちゃんは何でもお見通しだね」

「結構鈍感って言われるんだけど、こういうのだけは気付けるんだ」

「そ、そうなんだ」

たしかに花音ちゃんはおっとりしていると、鈍感なところがある。でも悩んでる人にはすぐに気づくよ。しかも内容まで当ててきたりするし。

私に分かりやすいっていうのもあるのかもしれないけど。でもこれ話せるかな……。内容が内容だし、話したとしてもバイト中はちよつと話したくないかな。他の人に聞かれて嬉しいものでもないし。

「バイトが終わったらちよつと移動した方がいいのかな？」

「う、うん。そこまで分かっちゃうんだ……」

「えへへ、彩ちゃんは大切な友達だもん。結構見てるんだからね？」

「……！ ありがとう花音ちゃん！」

「どういたしまして」

私が思ってた以上に花音ちゃんが私のことを友達として大事に見ててくれた。そのことに反省しながら、私は花音ちゃんの手を取ってお礼を言う。ちよっぴり涙が出そうになってるけど、それも仕方ないよね。社員さんに仕事してって注意されたのも笑い話、かな。

私たち高校生組は10時までに出ないといけない。だから早めに退勤して、ささと着替えて店を出る。花音ちゃんに話を聞いてもらうけど、時間も時間だからお互いの家の間ぐらいにある公園に行った。ちよつと怖いから手短かに話さないかね。本当はいつぱい聞いてもらいたいけど。

「えっと……どう話そうかな……」

「うーん……。彩ちゃんは先輩のこと好きなんだよね？」

「ふえっ!? ……うん」

「じゃあ話は進展……とかじゃないか。何か躓いてるの？」

花音ちゃんの口調は優しく、表情も柔らかいんだけど確信をズバズバついてくる。予想で言ってるはずなのにその予想が的中して、私は口籠ってしまう。でも花音ちゃんは今先を促してこない。当たってるって確信を持ったからか、私が話し出すのを待つて

くれる。

話出せるのに数分かって、唇も震えちゃってるけど、私は言葉を発することができた。掻い摘んで話そうと思ってたのに、ほぼ全部話しちゃった。話し終わったら花音ちゃんに優しく頭を撫でられる。

「そっか……。彩ちゃんは抱え込んだんだね。ごめんね、そこまで気づいてあげられなくて」

「ううん。私が勝手にこうしてたから……」

「それでもだよ。……彩ちゃんはなんで彩ちゃんの気持ちを抑えるの？ 辛いでしょ？」

「だって……私が抑えなかったら……」

「先輩の逃げ道になっちゃうって？ たしかにそうかもしれないね」

花音ちゃんは「でもね」って一旦区切って、私の頬を挟んで顔を上げさせた。花音ちゃんの目はさつきまでと違って厳しいものになってる。ううん、厳しいと言うより、怒ってる目だね。初めて見たけど、でも花音ちゃんが怒ってるのはわかる。

「彩ちゃんは先輩のこと低く見過ぎだよ。たしかにあの火事まで凄く辛そうだった。彩ちゃんだけを頼りにしてた。でも、あれがあつた後玲音先輩は周りの人に目を向けるようになってたよ。彩ちゃんはそれに気づいてた？」

「……………」

「彩ちゃんが玲音先輩の心に敏感に気づけるから、だからそこにずっと意識が向いてたのかもしれないね。でももつと信じてあげて？ 回復傾向にあるのは彩ちゃんの言うとおりだと思うよ。だからこそ、彩ちゃんももつと信じてあげなくちゃ。大丈夫。あの人は彩ちゃんが思っている以上に強い人だから」

「かのおん……………ちゃん……………」

「だからね。彩ちゃんは彩ちゃんの好きにしていいいんだよ？ それでもまだ様子を見るって言うなら私は止めない。抑えないようにするなら私は応援する。何があっても私は彩ちゃんの味方だから」

「う、ううう……………うわあああん！」

私は花音ちゃんにしがみついて泣き叫んだ。私が一人で玲音さんを支えなきやつて思い込んで、誰にも助けを求めないでいたのがいけなかったんだ。玲音さんには周りを頼るようになってほしいって思いながら、私自身が頼らないでいた。

だから花音ちゃんの言葉が心に刺さって響いた。どれも凶星で、玲音さんを低く見ちやつてた。頼りにされることがないから、だからそんな自分に酔っちゃつて、余計に自分を追い込めてた。勝手に間違えて空回りして。でも花音ちゃんのおかげで気づけたから、私は私に正直になっていいんだって。

でも――

「でも……もう、遅いよ……！　いまさら……むりだよお！　……いまさら、気づいたつて……すすめてなくて！」

「そんなことないよ彩ちゃん。私もよく悩むことがあるけどね、私の大切な人がその度に教えてくれるの。『気づけたならその時点で一歩前に進んでるんだ』って。遅いなんてことないよ。彩ちゃんは前に進めてるんだから」

「気づいた……時点で……」

「うん。だから、彩ちゃんは諦めないで。頑張ってみよう？」

「……うん。ありがとう花音ちゃん」

（玲音先輩私にできることはしたからね？ 『彩のことを頼む』なんて言われたけど、あなたが解決しないといけないんだから）

頼りになる花音ちゃんだつて悩む。私みたいに弱いところがある。でもその花音ちゃんでも今笑つていられてるんだ。私だつてきつと諦めなければ。

——でも、それでもね花音ちゃん

——私はこの気持ちの真意が自分で分からないの

15話

三週間ぶりぐらいになるのかな。彩とシフトが重なるのは、電話も一切してなかったからわりと心配だったんだよな。この前松原に頼んだんだが、「最終的には先輩がどうにかしないといけないですよ」って言われたし。ひとまずは大丈夫とも聞いたが、俺が動かないとどうにも解決しないらしい。

そもその原因が俺だってことは分かっている。言い訳にはなるが、疲弊してて彩に甘えていたから。面接の時から知り合ってるってこともあつて、彩が俺に一番話しかけてきたってのを利用してな。

——ほんと、クズだな

「レオくん。今日もバイト？」

「まあな。飯はいらねえから」

「あー、通しなのね。お昼はともかく、夜は家で食べなよ」

「いいんだよ別に。四人分で済むならそれに超したことないだろ」

「変わらないと思うんだけど……」

晩飯を家で食べさせようとするゆりを躲して家を出る。嫌なパターンは、ご飯を用意したというメッセージが飛んでくることだが、それはされたことがない。居候だから、こつちが言うことを聞かないといけないのに、そのへんは流してくれてる。元々あまり強制しない教育方針らしい。

見放されてる俺は無論強制なんぞ受けたことがないのだが、ああやって愛されている家族で強制されずに生きているのは純粹に羨ましい。俺はともかくとして、妹の方はあまり自由がないだろうから余計にな。

「計画を練り直したほうがいいか」

今になって気づいた。俺が将来頼りにしていた資金が一度綺麗さっぱり無くなったということ。祖母の遺産があるにはあるが、あれはなんか使いたくない。使うのを申し訳なく思って躊躇う。

それはひとまず置くとして、最初の考えは頓挫してる。軌道修正どころか新しいのを作り出す必要があるんだ。俺が社会に出て妹を取り戻す計画を。

「どうしたものか……」

「どうかされたんですか？」

「ん？ ……彩？ どうしたんだ？ 家から店まででこの道は通らないだろ」

「えへへ、ちよつと寄り道したい気分だったので」

10月になり、夏の反動もあつてか肌寒く思えるようになってきた時期だ。そのためか彩の私服にももちろん変化が出てきてる。夏は腕を出すような袖が極端に短いものが多かったんだが、今は完全に長袖。セーターを着込んでる。反対に若干肩が見えるようになってるんだけどな。結局寒いんじゃないかと思つてみたり。

「まだそこまで気温は下がってませんからね。丁度いいですよ」

「考え読むのやめてくれね？」

「あはは、すみません。なんか分かっちゃいました」

なんかで分かるものなのだろうか。俺はそんな単純な人間じゃないと思うんだがな。ゆりによく捻くれ者って言われるし。……最近は言われてない気がしてきた。という

ことは捻くれ度合いがシヨボくなつたつてことか。どっちでもいいが。

彩が軽やかな足取りで隣りに来る。歩くペースを彩のペースに合わせて、肩を並べて店へと向かう。歩いている間は彩の話を聞いていた。最近の些細なことでも楽しそうに話すから、聞いているこつちも楽しめる。それに彩の感受性の高さに驚かされる。俺だとサツと流すようなことでも、彩には新鮮に見えるらしい。

「二人が一緒にいるの久しぶりに見たのだけど、相変わらず仲睦まじいわね」

「仲が良いの間違いでは？」

「あなた達のそれは仲睦まじいっていうのよ」

「あー、願望の現れですか」

「萩近くん。ちよーつとお話しましょうか」

地雷を踏み抜いたようだからさっさと中に入って回避。彩がまだだが、あの人も関係のない彩を巻き込むことなんてしない。あとから来た彩に呆れ顔で注意はされたんだけどな。

「丸山さんの笑顔があるとみんなイキイキするよなー。単純というかなんとというか」

「そうですね」

「お前はそうでもないみたいだけどな。にしても今日はまた一段と笑顔だな」

「そのうちまたトチるでしょうね」

「フォローは任せた」

俺に押し付けるのかよ。たしかに彩がトチったらいつも俺がフォローしてるけども。彩はレジ打ちで、俺は裏方だからな。フォロー行くのなかなかしんどいんだよ。みんなも慣れてるから滞りなく回せるようになってるけども。

「玲音ー！ 出番だぞー！」

「早いなおい！」

「ううー。玲音さんごめんなさい！」

早速やかした彩のフォローに駆り出される。なんだかんだで従業員の間では風物詩みたいなことになってるから、誰も怒ることなく笑い話で済まされる。これも彩がみんなに好かれてるからなんだろうな。

まだ世に出ていないアイドルの卵。でも、ここですでにアイドルだ。丸山彩という

少女が人に好かれやすい人間性であることは、もう証明されてる。
だから――

「彩。後で話がある」

「うっ、ごめんなさい……」

「あ、別に怒るわけじゃないから」

「へ？ そうなんですか？」

「ああ。帰りながら話すから」

「分かりました」

――彩の話は聞いてあげないといけない。いや、聞き出さないといけないんだ。

「お待たせしました」

「待つてない。それじゃ帰るぞ。送っていくから」

「ありがとうございます！」

着替えを済ませた彩と一緒に、すっかり暗くなった帰り道を歩いて行く。俺が送って

帰るのも久しぶりだし、そもそも珍しいことだ。だから彩は上機嫌になって、鼻歌交じりに足取りを軽くする。

ああ、上機嫌過ぎるな。

「彩ちよつといいか？」

「なんですかー？」

「何があつた？」

「っ！……何でもありませんよ？ どうしたんですか急に」

「隠せてると思つたのか？ 俺だつて彩の些細な変化に気づけるんだぞ」

俺に心配されなくなつたのか、彩はあくまで笑顔で言葉を返してきた。無理に作つた笑顔でな。だから俺はその仮面を剥ぐ。容赦なんてしない。彩が奥に仕舞い込んでるものを引き出させる。

俺が切り込んだことで、彩は諦めたのか表情を固めてすぐに俯いた。小さく肩を震わせ、しばらくしたら泣きそうになつてのを無理に笑顔で抑え込んでる状態で、また「なんでもない」と言い放つた。そう言われた俺は彩の肩を掴んで目線を合わせる。

「なんでもないわけだろ。そんな顔で言われて信じ込む奴がどこにいる」

怒鳴りそうになるのを抑えて、彩を諭すように口調を和らげる。あくまでも彩から話させないといけないんだ。心の奥底にあるものを他人が強引に引っ張りあげちゃいけない。そんなの何の解決にもならないんだから。

「少なくとも俺が原因になつてる案件だろ？ 教えてくれ。俺にも彩を支えさせてくれ。ずっと彩だけに負担をかけるわけにはいかないんだから」

「れおと……さん。……あはは……なんでも、お見通し……なんですね」

「彩のことだからな」

「ゆりさんでも同じなんだろうな」

「彩？」

「いえ……私の部屋でいいですか？ そこなら……話せるので」

「わかった」

たしかに自分の部屋の方が落ち着いて話せるよな。こんな夜道よりはリラックスできるはずだ。聞き出すことで思考が埋まってたな。

……ん？ 彩の部屋？

「えつとく。玲音さんが彩の責任を取るということでよろしいのでしょうか？」
「違います。手を出しておりませんので。そういうことは一切。本当に」

「やっぱこうなるよな！ そりやそうだわな！ 愛娘がバイト終わりだからとはいえ
22時過ぎに男連れて来ればなあ！」

玄関で出迎えてくれた彩のお母さんに落ち着いて弁明する。大丈夫だ。事実として
俺は彩に手を出していない。キスをしたことはあるが、それはきつと大丈夫。グレー
ゾーンだ。黙っていれば隠し通せる。

「ふふつ、冗談です。彩からお話は聞いてますので、優しい方だとは分かっています
し。この時間に来られるのは予想外でしたけど、主人は出張で留守にしているのでご安心
を」

「夜分遅くに申し訳ないです」

「お気になさらず。彩がお世話になってますし、一度お会いしたかったのも事実ですの
で。あ、泊まっていってくださいね。明日改めてお礼しますので」

「いえいえお構いなく。娘さんにはむしろ俺の方が助けられてますので。本当に」
「そうですか？ でもやつぱり泊まっていつてくください。次女も会ってみたいと言つていたので」

これはもしかしなくても断れないパターンだな。彩に妹がいることは聞いていたんだが、その子に会いたいと思われていることまで言われたんだ。ここで帰ると言い張つてしまうと妹さんに悪い。

結局俺が折れて一晩泊まらせてもらうことになった。口調は丁寧なのにわりとグイグイ来る人なんだな。落ち着きを身につけた彩つて感じか。なるほど、親子だな。となるとトチるのはどっち似なんだろうか。

なんてことを考えて軽く現実逃避しつつ、おばさんに『流れで友達の家に泊まることになりました』と連絡する。謝罪の一言も忘れずに送つといたが、速攻で返信が来て『若いうちに好き放題したらいいわよ』とのこと。

おばさんや、俺はヤンチャするわけではないんです。よくしてたけども。

「許可も貰えたので一晩お世話になります」

「どうぞどうぞ上がってくださいーい」

彩と話があつたから、店では何も食べてない。晩御飯もお世話になつて、風呂にも入らせてもらう。着替えは出張中の親父さんのものを借りることになった。半端なく申し訳ない。先に風呂に入っていた彩は、俺が入浴してる間に部屋の片付けをしてたらしい。

「あ、玲音さん」

「はい、なんででしょう」

「玲音さんが彩との付き合いをどうするかは口出ししません。それはもちろんあなたのような人に彩と共に生きて貰えると親としては嬉しいですけども、でもあなた達の道ですから」

「それは……」

「ふふっ。本当に周りの人や私たち親のことは気にしないでください。周りに理由をつけて決めるのが一番ひどいやり方だと思つたので。ですが、たとえどうなつても彩のことは支えてください。ご存知だから今日来たのでしようけど、あの子は頑張りすぎるところがあるので」

「……分かりました。できるだけ彩の力になります」

母親ってというのは、どこまでも見抜いてくるんだな。彩からしか俺の情報を得てないのに、会って1時間程度なのにここまでの確に言えるだなんて。しかも相手を縛り付けず、道を狭めさせるわけでもない。敵わないや、母親ってのは。

「あ、避妊はしてくださいね？」

「手を出すわけじゃないので！」

！
「こういうところは牛込家の母親とも一緒だな！ 娘のことを案じてるはずなのになあ

” あや” と可愛らしく書かれてるネームプレートがある部屋をノックする。これでも中から違う子が出てきたら詐欺だな。入っていいと許可をもらったところで扉を開ける。女の子らしい部屋という感じだな。彩が好きそうな蛍光色、特にピンクが多めの部屋に入った印象がそれだった。大切にされているのが分かる人形も何個か置かれてる。

「ちよつと狭いですけど」

「そんなことないだろ。俺が前いた家の居間ぐらいはあるぞ」

「……すみません」

「はは、意地悪な言い方だったな」

この部屋には椅子が一つしかない。俺は床に直接座ろうかと思っただが、彩にベッドに腰掛けるように言われたからお邪魔させてもらう。彩の隣りに少しだけ間を開けて座ると、彩が間を詰める。肩に頭を乗せられて、彩の髪の毛の香りが鼻をくすぐる。普段見ることがない風呂上りの状態ということもあり、いつもと同じ感覚で接するのに苦労する。無言でいることで己を律することに集中する。

「……何も聞かないんですね」

「彩から話した方がいい案件だろ？ 重たい内容だとはわかってるから」

「……玲音さん。……私、折れちゃいそうです」

「折れちゃいそうって……。そうか……。アイドルのこと諦めようか悩んでるのか」

これも言い当てることができたようで、彩は口を噤んで俺の腕を強く抱きしめる。彩は諦めずに努力を続けられる子だ。彩以上にひたむきに努力し続ける子を俺は知らない。そしてどれだけ“アイドルになる”ことを夢見てるのかをよく知ってる自信があ

る。

そんな彩がその夢を諦めそうになってる。それはなかなか芽が出ないからというものもあるのだろう。だが、それだけなら彩はまだ頑張れたはずだ。それなのに、彩が諦めそうになってる。それはつまりそれだけ彩の精神が弱ってしまっているってことだ。

——俺のことを気にかけて過ぎて

「彩はさ、まだアイドルになりたいって夢があるか？ その夢を叶えたいって思いはまだ彩の心に残ってるか？」

「……はい。ずっと目標にしてて、私の夢ですから。……でも、何をやってもダメで！ オーディションを頑張ろうとしてもトチっちゃって！ こんなじゃアイドルになんてなれないって思ったら……頑張れなくなってきた……！」

きつと彩はこれを誰にも言えなかったんだろう。彩のことを信じてずっと支えてくれている家族には特に。だから溜め込んでしまった。みんなの目には『挫折することなく目標にひたむきに努力する丸山彩』として映るから、周りに言える人間もいない。そして追い込んだ張本人の俺にも。

だから俺が彩の奥底にしまわれた感情を全て引き出させるんだ。彩に支えられた俺

だからこそ、彩を支えないといけない。それが俺の責任で、そして俺がやろうと思えることだ。

「ごめんな彩」

「なんで玲音さんが謝るんですか！ 玲音さんは何も……！」

俺の謝罪を受け取らない彩を抱きしめる。抱え込むように彩の頭にも手を回して。体を震わせる彩を見て今さら気づいた。俺はこれだけ華奢な女の子に背負わせすぎたのだと。遅すぎるが、気づいたからには変えないといけない。

「本来の彩ならまだ頑張れただろう。でも、俺のことを彩に背負わせてしまったから、彩の余裕を奪ってしまったから」

「そんなの関係ないですよ！ 私が駄目で！ 弱くて！」

「そんなことはない！ 彩は決して弱い人間じゃない！」

「それこそ違います！ 私は——」

「彩！ 自分を否定しないでくれ。少なくとも、彩は彩が思っている以上に強い子だから。だからみんな彩のこと好きなんだよ」

「……みんなのことはいいです。……玲音さんはどうなんですか？ 私のことをどう思ってくれてるんですか？」

溢れ落ちる涙を拭かずに、その瞳に不安の色を浮かべる。瞳を揺らしながらも俺の目を見つめてくる。その質問の意味を理解しないほど俺だって疎くない。彩が聞きたい答えがどういふものなのかも。だが――

『周りに理由をつけるのが一番ひどいやり方だと思うので』

そうだ。さつきそう言われたばっかだ。彩のお母さんが言ったことは正しい。そんなので答えるべき事柄じゃない。

「ごめん、彩。俺には分からないんだ。彩に向けてるこの気持ちは何なのか。だからその質問を今答えることはできない」

「……ズルい人ですね」

「よく言われるし、自分でも酷い人間だと思ってる。……なあ彩。自分だけじゃ夢を追い続けられないって言うならさ、俺が支えるよ」

「それは……お母さんに言われたからですか？」

この子、話聞いていたのだろうか。あまりにも的確すぎる質問だ。だが、その真意なんてどうでもいい。俺が彩に答えることは決まってる。伝えたいことはすでに定まってる。

「そんなの関係ない。俺が彩に諦めてほしくないだけだ。自分勝手な思いさ。でも、彩には夢を諦めてほしくない。だって彩は夢を追いかけてる時の方が笑ってた。自然な笑顔だった」

「ほんとうに……勝手にですよ。そんなの……。私はもう頑張れそうになくて……」

「彩。俺は彩がどれだけ自分を責めても、彩のことを護るから。彩が自分のことを素直に認められるまで。いや、認められた後も。ずっと彩を護るから」

「……本当に護ってくれますか？ 本番に弱くて、涙脆くて、すぐトチっちゃって、みんなに迷惑かけるような私でも、ずっと護ってくれますか？」

「ああ。約束する。俺が彩を護る。彩の道を支え続ける。なんせ丸山彩の最初のファンだからな」

「うっ、ううう……」

本当に俺は最低な男だ。彩の心を護り続けるなんて言い張ったのだから。分かって

ることなのに。俺の気持ちに答えを出した時、半分の確率で彩を泣かせることになる。彩を護れなくなると。

それなのに、道を閉ざされた俺とは違うようになってほしくて、ただ夢を掴み取る姿を見たいだけで彩を頑張らせるのだから。あのクソ親父とどう違うっていうんだろうか。このか弱い女の子に厳しい道を歩かせ続けるなんて。

「れおと……さん。……お願いしても、いいですか？　それがあつたら……頑張れると思うので……」

「いいぞ。彩の願いなら」

「今日は一緒に寝てください」

「……………ん？」

「お願いしますね？」

「……………はい」

内容を聞かずに何でもオツケーな雰囲気を出してしまった自分を殴ってやりたい。ベッドに寝転がって、俺が入れるスペースを作った彩が寂しそうな瞳でこつちを見てくる。

ただ寝るだけだ。もう時間も遅いから、明日に響かないように寝るだけだ。そう自分に言い聞かせ、意を決して彩のベッドに入る。腕枕を所望する彩に応え、体全体を密着させて速攻で寝た彩の髪を撫でながら俺も瞳閉じた。

寝れるまでに二時間はかかったけどな。

16話

一年の終わりも近づいてきた。来週には12月に入る。怒涛のように過ぎ去った一年という印象があるが、まだ今年が終わったわけじゃない。そして俺が抱えている問題も何も変わってない。

妹のことは、まだ進展どころか一步目も踏み出せていないし、そのタイミングでもないから仕方ない。準備は着々と進めておいて、始まれば一気に解決へと走り抜けるだけだ。

それに関連はしているが、俺の経済面の問題もある。婆ちゃんの残した資産があるが、それは緊急時用だ。最後の砦だ。だから俺の稼ぎがどこまで貯まるかだな。

そして人間関係……というか、彩への答えは未だに決まっていない。そういうことを気にして生きてきたわけじゃないから、さっぱり分からない。好きか嫌いかで言うところ、好きだと断言はできる。その好きがどういふものなのかが分からない。難しく考えなくてもいいのかもしれないが、俺は彩に真剣に向き合いたいから、明確な答えを見つきたいんだ。年内に。

「レオくんまだ起きてる？」

「ゆり？ 起きてるが何か用か？」

「うん。ちよつとね」

さつきりビングにいた時に話せばよかつただろつて思ったが、部屋で話をしたいってことは誰にも聞かれたくないつてことなんだろうな。そうなると俺も身構えておく必要がある。

俺はゆりに中に入るように伝え、寝間着姿のゆりが静かに中に入ってくる。何か重要な話だと踏んでいたが、ゆりの様子を見る限りそうでもないらしい。そんな雰囲気を一切感じられない。俺がベッドに腰掛け、その横にゆりも座る。定位置とも言うべきか、ゆりは自然と隣りに座るようになった。俺もそれを気にすることがなくなった。というか、その方が落ち着いている自分がいる。

「うてーん」

「はあ。そういうのは彼氏にやれつて何度も言ってるだろ」

「いいじゃん。落ち着くもん」

「横暴だな」

臉を閉じたゆりが、俺の肩に頭を預けてくる。彼氏でもない男にするもんでもないだろうにな。特に彼氏持ちの奴は。押し返さない俺も俺なんだろうけどな。ゆりつてわりと面倒なところあるから諦めてもいるんだけども。

こういうのがバレてないから未だに関係が続いてるんだろ。あの男がこんなのを許すわけがない。電話にさえ口出ししていたぐらいだからな。

今はほとんど電話なんてしてないから、何も言われることはないらしい。俺が居候してるのが知られてないし、同じ家について電話なんてする必要もないからな。

「そーいやゆりはどこまで進んだ？」

「どこまでって、学校の授業の話？」

「ちげーわ。馬鹿か」

「むっ。馬鹿って言わないでよ。成績良い方なんだから」

腕を強く握りながらゆりが頭を離して睨んでくる。ゆりに睨まれても全然怖くないし、ゆりが大して怒ってないのもわかる。それにしても今の話の流れで学校の授業を連

想するのは、やはり馬鹿だと言わせてもらいたい。黙っておくけども。

「はいはい。成績の良い馬鹿じゃないことを祈っとくよ」

「酷い言い草。それで、レオくんが言いたかったのは何の話？」

「彼氏との関係だよ。キスぐらいはしてるだろうけど」

「それは……あははー」

誤魔化そうとしているな。ということとは俺の最初の予想が珍しく綺麗に外れたということになる。驚きだな。付き合ってから半年ぐらいは経ってるはずなのに。

「マジか、キスすらしてないのか」

「うん……だって……」

だって何だよ。そこでチラチラ俺の方を見てくるな。俺は一切関係ないだろ。アイツとゆりの付き合いに俺が口出したことなんて一回ぐらいしかなかったはずだ。しかもその一回だってほぼアイツは関係ない。実質零回だ。

「それにしても、お互いにその素振りがいいのか、拒んでいるのか。それは知らないが――」

「あ、私がやんわり拒んでるかも」

「お前は……はあ」

「なんでそこでそんな目をして呆れるの!」

呆れるしかないだろ。彼氏とそういう展開になっても彼女が拒むて。それでいて関係は続いてるなんて聞いたことがねえわ。そしてやっぱりゆりは馬鹿だ。本物の馬鹿だ。面倒なことに発展しそうだな。知ったことではないから関わらないが。

「ゆりは酷い女だつてわかったからな」

「君ほどじゃないよ?」

「無自覚は質が悪いんだよ」

「ええ……」

ええ、じゃねえよ。彼氏を無自覚で生殺しにしてる彼女。これほど質が悪くて酷い女はいないだろ。言つたところでゆりが変わるとも思えないし、本人たちの問題だ。傍か

ら眺める程度でいさせてもらおう。

「それで？ ゆりの用はなんだよ」

「あ、そうだった。たしかレオくん今週末は予定空いてたよね？」

「まあな。練習に参加すればいいのか？」

「ううん。またあそこに連れて行ってほしいなつて。今ならまだ紅いはずでしょ？」

去年仕方なしで連れて行ったあの場所か。たしかにまだ紅葉が残ってるはずだが、また連れて行かないといけないのか。俺としてはあそこを独占したいぐらいに気に入っているんだが……。

「……他に誰か連れて行く気か？」

「ううん。だってあそこ秘密にしたい所なんですよ。二人で行こうかなつて。誰にも言わないし……駄目？」

「はあ。絶対に誰にも言うなよ」

「うん！ ありがとう！ 大好き！」

「それは彼氏に言つてやれ」

満開の笑顔を咲かせたゆりは、スキップでも始めそうな軽やかさで部屋から出ていった。俺もあの場所が好きだから承諾したが、知られたら修羅場だな。俺はまともに相手にする気もないが。

「ゆりのやつ、卑怯なのはどっちだよ……。上目遣いで頼み込みやがって」

~~~~~

断られるかなって思ってたけど、レオくんがオツケー出してくれた。去年連れて行ってもらって、私も好きになったからまた行きたかったんだ。行くのが今から楽しみなんだけど、彼はあの場所を知られたがらないからバレないようにしないとね。

ベッドに入って目を閉じる。思い出そうとすれば簡単にあの時の光景が思い出せる。辺り一面が紅葉でいっぱい、それだけでも凄かったのに海も見えた。まるで絵に描いたような光景だったけど、あれは紛れもない現実。大切な私達の想い出。……彼がそう思ってくれてるかは微妙だけど。

「楽しみだなあ」

土曜日を迎えるまでがいつもより長く感じられた。それだけ私が楽しみにしてたつてことなんだけど、誰にも気づかれてないかは不安かな。グリグリのみんなには何かあるって気づかれてそう。でも私が話さないから、みんなも聞かないでいてくれた。だからセーフ。

「ゆり。準備できたか？」

「ごめん。もうちょっと待って〜」

「……先に行つて切符買つとくから。ゆりは自分のペースで駅に来たらいい」

「えー。一緒に……つて行つちやつた」

彼が先に行つちやつた理由つて切符じゃないよね。切符が建前で、本音は別行動の方がリスクがないから。合宿の時みたいに、他にも人がいるなら一緒でもよかつたんだろうけど、今回は二人だけ。彼は警戒してくれてるんだろうね。私はそういう意識が薄いんだけど。

「これでよしっと」

「お姉ちゃん、レオ兄ちゃんとデート？」

「え？ ううん。小旅行かな」

「それってデートと変わらない気もするんだけど……」

「デートじゃないの。それじゃあ行つてきます」

りみは可愛いなく。すぐにデートつて考えちゃうなんて。私はレオくんと二人で紅葉を見に行くだけなのに。……あれ、これって周りから見たらやっぱりデートなのかな。そう思ったら急に恥ずかしくなってきた。

ダメダメ。意識を切り替えなきゃ。こんなの彼が知ったら心底シラケちゃうだろうから。彼もお気に入りの場所に行くつてことで楽しみにしてるはずなんだし。

「えーつと、どの辺りに……あ！ いたいた！」

「思つてたより早かつたな。ほら切符。すぐに電車乗るぞ」

「うん。ありがとう」

彼から切符を受け取つて改札口を通る。先々行くように見えて、私が見失わないよう

に止まってくれたりするから、素直じゃないな、なんて思っちゃう。本人に言ったら機嫌が悪くなっちゃうんだけどね。

「これに乗って、五駅先で乗り換えな」

「うん。あそこ席空いてるけど座る？」

「俺はいい。牛込が座りたかったら座ってきたらいいぞ」

「うーん。一人なら別にいいや。それより名前」

「向こうに着いたら変えてやる」

外だからって違和感なくサラツと呼び方を変えられちゃう彼に、私は頬を膨らませて指摘した。元々そういう話だったから仕方ないんだけど、やっぱり名字で呼ばれるのは寂しいや。でも、電車に乗ってる間だけの我慢。向こうに着いたら名前でもらえるんだから。

乗る電車だけじゃなくて、路線も変更だから降りたら改札を出て移動。今度は歩くペースを合わせてくれたけど、手は繋いでくれなかった。まだ知り合いの人がいるかもしれないからね。

特急券を買って次の電車へと乗車する。指定席だから、私達も決まってる席に座つ

た。私が窓側に座って、彼が通路側。私は景色を眺めるのが好きだから。

「40分くらいだっけ？」

「そうだな。寝ててもいいぞ」

「寝てる私にイタズラする？」

「置いていく」

「それはもつと酷いね」

彼なら置いていくわけもないし、イタズラなんてしない。彼の冗談に頬を緩ませて、こういうのいいなあって思う。私は景色を見ながら彼と話しようかなって思ったんだけど、彼が仮眠取るみたい。いつも忙しいからね。私は駅に着いたら起こせるように、起きとこうかな。

「寝るまで早いよね」

五分ぐらいしたら寝息が聞こえてきて、顔を見たらリラックスした表情だった。私はそんな彼の無防備な寝顔を覗き込む。この旅行で彼が少しは休めれたらいいかな。

「おやすみ、レオくん」

次が目的地の最寄り駅だとアナウンスで分かったら、私は彼を起こした。すぐに起きてくれた彼は、快眠できたみたいで寝る前よりも雰囲気明るくなった。一安心だね。

「それじゃあゆり、宿まで行くぞ」

「案内よろしくね」

駅に着いたらちやんと名前呼びしてくれて、手を繋ぐのも許してくれた。指を絡ませようと思ったんだけど、それは許してくれなかった。これは私が妥協しないとね。

のどかな場所。まずは海岸線を目指して歩いて、そこからは浜に沿って歩いていく。浜辺を歩いてるわけじゃないけど、喧騒とかもないから穏やかな波の音が聞こえてくる。それで心が休まっているのを実感して、そして彼と一緒にいるという事実で幸福感が胸を満たす。

「着いたな」

「あ、もう着いたんだ」

「……さては前見て歩いてなかったな？」

「え、えへへ、気持ちいい場所だからつい」

「まったく……」

旅館の中に入ると、去年も出会った女将さん——彼のお祖母ちゃんに迎えられて、部屋の間所を教えてもらう。去年と同じ場所を確保してくれたみたい。ということは、今年も彼と同じ部屋だね。

彼は鞆から一枚の写真を取り出して、お祖母ちゃんに渡していた。少し見えたけど、あの写真は今年亡くなったお祖母ちゃんのだね。お祖母ちゃんはそれをもって、静かに黙祷を捧げてた。お葬式に来られなかったことを気にしてたみたい。

「……玲音、持ってきてくれてありがとうね」

「ううん。これぐらいしか出来ないから」

「あなたって子は……。ふう、湿っぽいのはこれぐらいにしようかね。さ、上がってちよ  
うだい」



靴を棚にしまつて部屋に荷物を置く。お昼ご飯をご馳走になつて、部屋でしばらく休憩してから紅葉を見に行くつて流れに決まつた。味も変わらず美味しく、思わずどうやつて作つてるのか聞いちゃつた。

「歩きやすいが、滑り落ちるなよ」

「じゃあレオくん手を握つてよ」

「我儘な奴だな……つたく」

彼に手伝ってもらわなくても一人で歩けるんだけど、私は彼に甘えちゃつた。彼しか知らない道を抜けたらそこには私たちの目的の紅葉が視界いっぱい広がつてる。やつぱりまだ残つてたんだね。

「定位置にでも移動するか」

彼がこの場所が一番のお気に入りポイント。そこに一緒に移動する。そこからは海も見える。綺麗な青い海と真っ赤な紅葉。本当に鮮やかな景色を私たちは独占できてる。

私はこの景色が本当に好きになって、思わずうっとりしちゃう。彼の腕に両手を絡ませて抱きしめる。いつもなら何か言われるのに、この時は言われなかった。特別な場所だからかな。

私たちは本当に何時間でもそこにいれちゃいそうだった。夜になって山を下りるのは危険だから、日が落ちる前には戻ったけど、それまでずっとこの場にいられたし。日が傾き始めて、海も空も赤色に染まる瞬間を目に焼き付けてから下りたよ。

私たちは旅館に戻って、先にお風呂に入ってからご飯をいただくことにした。私は長風呂しちゃうんだけど、彼が待つてくれるって言ったから気兼ねなくお風呂に入れる。

「……露天風呂もあるんだっけ。ちょっと寒いかもだけど行こうかな」

タオルで体を隠しながら扉を開けて露天風呂の方へ。思ってたとおりにやっぱり寒くて、私は駆け足気味に湯船に近づいて、すぐに肩まで浸かった。温度もバッチリで、体の芯から温まる。

「レオくんも露天風呂入るのかな?」

「絶賛満喫中だな」

「そうなんだ。……へ？」

「よっ、ゆり」

「な、なななな……なん——むぐつ」

「予想通りのリアクションだな。ちなみに俺がここにいる理由は、この露天風呂が混浴だからだ」

頭を強く殴られたうな衝撃だった。私が大声で叫びそうになったのを、口を手で抑えることで防いだ彼に告げられたことは。私の確認不足だったのがいけないんだけどね。

私の混乱が落ち着いたところで彼が手を離れたんだけど、「ゆりの唇柔らかいな」なんて言われて、顔を真っ赤にして彼を叩いた私は悪くないと思う。

「ちなみに混浴だからタオルを湯船に浸けるのもオツケーだぞ」

「あ、そうなんだ」

「……だからタオルで体隠せよ。晒したいならそれでいいけど」

「え？ ……あ、~~~~っ!!」

さつきから彼がずっと目を逸らしてたのってそういう事だったんだね。私は恥ずか

しきでおかしくなっちゃいそうになりながら、急いでタオルで体を隠した。今日は今年で一番恥ずかしい思いをした日だね。これ以上恥ずかしい思いはもうしない気がする。

「レオくんは混浴でも露天風呂入るんだね。……それとも混浴だから？」

「そんなサル共と一緒にするな。ここは田舎だから、星がよく見えるんだよ」

「……ほんとだ」

地元じゃ全然見られない星々を、ここならいっぱい見ることが出来る。レオくんってロマンチックなところあるのかな、似合わないさそうなのにな。なんて思いながら距離を詰めて肩をくっつける。お互い肌同士が当たるなんて今回が始めてかな。海の時もなかったよね。

いつもと違う感覚にドキドキしながら彼の方を見てみる。驚いてたけど、すぐに呆れ顔になった。また「彼氏がいるだろ」って言うんだらうね。

「彼氏がいるのに何してんだゆり」

ほらやっぱり言った。彼の言葉を予想して当てられたことが嬉しくて思わず笑みを

浮かべる。ますます不審そうな顔されたけど、今はいいの。

「今だけは特別なの」

「なんだそりゃ」

彼にとって大切な場所で、私にとつても思い出ができた好きな場所。また訪れることができて嬉しい。混浴は予想外過ぎてパニックになったけど、この星空を見ることができたのが嬉しい。彼と一緒にいられることが本当に嬉しい。

私は引き寄せられるようにさらに彼との距離を詰めていって、彼の顔に自分の顔を近づけていく。鼻と鼻が当たりそうなくらい近づいてから瞳を閉じて、少し顔を傾けて最後の間を埋める。

——ことはできなかった

——レオくんにも肩を抑えられてそれ以上近づけられなかったから

「……なんで？　なんで駄目なの？」

「彼氏じゃないやつにすることじゃないだろ？」

彼の言ってることは正論だ。全然間違つてない。だけど私はその言葉の矛盾を知っている。レオくんの嘘を知っている。だからなのかな、カツとなつちやつたのは。それだけのなのにね。小さなことのはずなのにね。

「……嘘つき」

「嘘つきつて何がだよ」

「私が知らないと思つてた？ 私……知ってるんだよ？」

——丸山さんとキスしてたこと」

「っ!? ……な、にを……」

「カラオケでキスしてた！ 君が丸山さんを引き寄せてキスしてた！ 花火の時もそうだった！ 君は丸山さんが離れないように手を回してた！ 丸山さんと付き合つてないのに！ 彼氏じゃないのにキスしてたのに、なんで私は駄目なの!? いっつもそうだよ！ 私には駄目つて言つて、丸山さんにはすぐオツケー出してる！ ねえ、なんでなの!? 私の何がイケないの!?」

「ゆり……ひとまず落ち着いて——」

「落ち着いてられないよ！ 私は……っ！ ううっ……もう……丸山さんと付き合っちゃえばいいよ……」

おかしいよね。私なんでこんなヒステリックなことになっちゃったんだろうね。わからないよ。何もわからない。でも、

——私が最低な女だっただけはわかるよ

## 17話

今年も残り一週間ほどだ。また年内最後にして大忙しの時期がやってきた。忙しいのはそういう職に就いてる人なんだけどな。大半の人間はゆったりと思いきいに冬休みを満喫してる。忘年会をハシゴする人もいるらしいけど、それは知らん。

残り約一週間。

つまり、今日はクリスマスイブだ。

去年はゆりに半強制でクリスマスパーティーin牛込家に参加させられた。今思えば、あのクリスマスパーティーに行つて、両親と和解したからこそ俺は今の生活があるんだな。そこはゆりに感謝しとこう。

……あの日以降ゆりとはそこまで話してない。俺は自分がクズだと自覚してるからそこまで気にしてないのだが、ゆりが自分を責めてる節がある。俺の方に責任があるのにな。その話をしようにも避けられるから話せずにいる。

「レオ兄ちゃん今日もバイト？」



「ん？ まあな。夕方まで働いて、その後はちよつと用事。昼御飯と晩御飯はいらないから」

「えー。一緒にクリスマス過ごしたかったのに……」

「ははっ、ごめんなりみ。来年はそうしよう」

「ほんま？ 嘘やない？」

「ほんまや。約束な」

りみに小指を立てた手を伸ばす。それを見たりみも手を伸ばしてきて小指を絡め合う。約束をする時の定番である指切りだ。嘘ついたら針千本っていう恐ろしい拷問……ではなく大量のチョココネを要求された。肉体には何一つ被害がないが、俺の財布には大打撃だ。来年は必ずりみとクリスマススイブを過ごすことにしよう。

リビングから部屋へと戻り、バイトの用意を持って廊下に出る。今からバイトに向かうというところで、廊下でゆりとバツタリ会った。家の中だから会うのはいつも Nonetheless だけだな。

「……今日もバイトなんだ。せつかくなんだから丸山さんと過ごせば？」

「夕方まで働いてその後そうするさ。彩もシフト合わせてきたし」

「ふーん？ ラブラブだね」

「はいはい。ゆりは彼氏と過ごすんだろ？」

ゆりが挑発的な言い方をするようになったのもあの日から。だが大して苛つくこともない。ゆりが俺と話した後の方に言い方について悔やんでいるのをりみから聞いているからだ。何とも面倒なことをしているなど思うのだが、俺がどうこうできるわけでもない気がして特に行動してない。

だから適当に流して逆に切り替えした。ゆりの今日の予定を確認するために。俺にそれを聞かれたのが嫌だったのか、ゆりはそっぽを向いた。つまりそれが答えってわけだ。

「彼氏と過ごすのは当然だろうから別に反対とかしないが、気をつけとけよ」

「……何に」

「アイツの行動に。何かあるか分かったもんじゃないぞ」

「なんで君にそんなこと言われなさいといけないの!?! 神木くんのこと何も知らないくせに! 彼が変なことするわけない! それは私がよく知ってるよ!」

「……そうだな。じゃ、俺バイトあるから」

喧嘩別れつてわけでもないが、朝からあまりいい話し合いにもならなかったな。後味の悪いやり取りになってしまったが、気持ちを切り替えるとしよう。どうせそこまで忙しくないんだ。

すつかり寒くなった外を歩くこと数分。いつぞやのように彩と出会った。店に行くまでで合流するはずもないんだが、わざわざ遠回りしてきたんだな。

「わざわざ待たなくていいのに。寒かったら？」

「えへへ、玲音さんと一緒に行きたくて。それに、こうしたら寒くないですよ？」

「然程変わらんだろ……」

腕にしがみついてくる彩に雑にツツコミを入れ、彩の好きなようにさせて店へと歩いていく。午前中は大してカッパルの姿も見えない。クリスマススイブでのデートつて大抵日が沈む頃合いからが多いからかな。そんな決まりもないのにな。不思議なことだ。彩との距離はよく分らない。縮まったような気もするし、前からこんなだった気もする。ただ、横で嬉しそうに朗らかに笑つてるのを見ると、今日も元気をもらえる。

——この笑顔をいつまで守れるんだろうな

~~~~~

玲音さんから聞いてた通り、クリスマススイブはそんなに忙しくなかった。学生でバイトしてるのも私たちくらいで、パートのオバちゃんや社員さんと一緒にお店を回してた。花音ちゃんもおやすみ。花音ちゃんは今日家でクリスマスパーティーするんだって。

「それじゃあ丸山さんも萩近く人も上がっていいよ〜」

「分かりました。お疲れ様です！」

「おつかれ〜。二人はこの後デートでしょ？」

「えっ!? なんて知って……!! あ……」

「ふふふー。丸山さんは簡単に引つかかるから楽だわ〜。そっかそっかデートか〜。楽しんでらっしゃい」

社員さんにハメられたと知って、私は恥ずかしくなった。顔を俯かせながらタイムカードを打って事務所に入る。先に玲音さんがいて、私は戸を閉めたらすぐに抱きついた。赤くなった顔を隠すように玲音さんの背にギュツと張り付く。玲音さんが離れる

ようにと手をポンポンされるけど、私は力を強めた。

今度は後ろに手を回した玲音さんに頭をポンポンってされる。動けないから離れろって言われたけど、私はイヤイヤって首を振った。そしたら玲音さんがグルって回って、私と向き合う形になった。

「甘えん坊め」

「玲音さんにだけですよ？　玲音さんにだけこうしたいんです」

「……そっか。でもまずは着替えような？」

「ううー、分かりました」

玲音さんにもギュって抱きしめてもらった私は、着替えを持って更衣室に入る。サツと服を着替えて、髪も整えて更衣室を出る。今日は今までで一番早く着替えられたはずんだけど、玲音さんは着替えも済ませてのんびりしてた。今日は早かったなって言ってもらったのが何だか嬉しくて、私は玲音さんの手を取って勝手口へと急かす。

「外は寒いな」

「そうですね。でも、こうやって引っ付けるので寒いのもいいですね！」

「ポジティブだなー」

バイト前と同じように玲音さんの腕に自分の腕を絡めて抱きしめる。朝とは違ってこの時間になるとカップルも多い。私は玲音さんと付き合えてるわけじゃないけど、こうしてたらカップルに見えるのかな。それは嬉しくて心が暖かくなる。

「どの店も混んでそうだが、どこか空いてたらいいな」

「そうですね……。今からだと難しいんですけどかね？」

「かもな。……あ、あつこならすぐに入れるか」

「どこか知ってるんですか？」

「まあな。知り合いの爺さんがやってる店がある。そこに行こう」

玲音さんの提案にすぐに頷いて、そのお店を目指す。玲音さんはいつもそこまで口数が多いわけじゃない。私が話を振るほうが圧倒的に多い。玲音さんはそれでも楽しいつも以上に玲音さんの口数が少ない気がする。なんとなくだけどそう思う。きつと何かあったんだ。そしてそれはたぶん――

「ゆりさんと何かありました？」

「……どうしてそう思う？」

「女の勘です！」

「すげーな。彩にもそんなのできるのか」

「どういうことですか!? 私だって女の子ですよ！」

「それは分かっている。彩が可愛らしい女の子だなんて百も承知だ。ただ、彩ってよく卜
ちるから女の勘とかも全く働かないと思っててさ」

「すごく複雑です……」

玲音さんに褒められたことはとても嬉しかったんだけど、その後のことが凶星で納得
できたから複雑。たしかに私はよく卜ちる。全然できないことの方が多いいもんね。で
も、玲音さんのことなら分かってるつもり。そしてゆりさんのことで何かあったってい
うのも、直感だけどこか確信を持てた。

玲音さんがそんなに話したくなさそうだから、私も無理には聞き出さないんだけど
ね。適当にはぐらかす玲音さんに言葉を返していると、玲音さんが言っていたお店につ
いた。お店の外からでも落ちける店だって分かった。

「爺さん。二人だ」

「おおう？ 玲音か。久しぶりだな〜！ 可愛い子連れよつて。好きな席に座つてメニユーでも決めとれ。五分後に聞く」

「分かつた」

なんかこういうやり取り見ると新鮮な感じがする。顔見知りのお店だところどころとできるのかな。それにしてもあの何歳なんだろう。お爺さんつて言うわりにはすごい元気なんだけど。マラソンとか笑顔で走り抜けてそう。しかもいい記録で。

玲音さんにメニユーを手渡されて、それに目を通す。和食も洋食も載つてるし、どっちも種類が豊富。これを一人で作れるのつて凄いいよね。従業員さんは他にもいるけど、みんなホールだつて玲音さんが言つてたから、作つてるのはお爺さんだけ。

きつちり五分後に注文を聞かれて、私と玲音さんはそれぞれ注文して料理が来るまでこの店の話をする。雰囲気とか、従業員さんたちがユニークだとか。働いてる人のほとんどが似たファッションしてるんだけど、あの人達は中学生の頃に玲音さんと殴り合いしてたチンピラさんなんだとか。

「……何してたんですか玲音さん」

「荒れてた時期もあるんだよ。沈んでるのは違ってな」

お爺さんが作った料理はとても美味しくて、どうやったらこれだけ料理が上手になるのか聞きたかった。今回はそうするわけにもいかないから、また機会があれば。

家の方へと足を進めてたけど、途中に公園があつて玲音さんとその公園のベンチに座った。空は晴れてるけど、街が明るいからそんなに星は見えない。玲音さんに体を傾けて目を閉じる。玲音さんも腕を回してくれて、よりギュって固まれる。

本当に心地よくて好き。

でも、このままじゃいけないんだ。

私はこのままの関係でいいとは思わない。

怖いけどね。でも、ここは勇気を振り絞らないといけない。

「……玲音さん」

「彩？」

体を起こして玲音さんと向き合う。私が真剣な目をしてると、玲音さんの雰囲気も引

き締まった。こうやって合わせてくれるのも玲音さんの好きなどころかな。

言ってもいいのだろうか。自分で駄目だって禁じてきたことなのに。

——そんなの関係ないよ。私にはもう無理だから

震える体を、怯える心を勇気づけるために両手を胸に添えて、強く握りしめる。今だけは逸らしていたい、逃げそうになる目をなんとか玲音さんの目に合わせる。震える唇を重々しく開く。

「玲音さん。私は玲音さんのことが異性として、一人の男性として好きです」

「っ……」

もう言ってしまった。

そして、これを言ってしまったらもう止まらない。止めることなんてできない。私は今まで私の胸に仕舞い込んできた気持ちすべて晒し出し始める。

「駄目だと思ってたんです。初めて玲音さんとゆりさんが話してるのを見た時、この二人は……付き合ってるんだって思っていました。素敵な関係だって……思ってたんです。私も二人みたいな関係になれる人に出会いたいって、そう思って。でも、二人は付き

合つてなくて……。だから、チャンスだつて……。そう思つたんです。恋に恋してる状態で玲音さんに近づいて、ゆりさんに彼氏ができた時にはやつたつて喜んじやつて……。玲音さんの……。お婆ちゃんが亡くなつて……。それで玲音さんが危ない状態だったのも……。じつは……。どこか……。喜んじやつて。これで玲音さんを支え続けたら、玲音さんが振り向いてくれるつて！ 私を見てくれるつて！ そう……。思つたんです。あはは、汚い女の子……。ですよね。でも、気づいた時には恋に恋してる状態なんかじゃなくて、玲音さんのことが本当に好きだつて分かつて……。でも、玲音さんはまだ危ない状態だったからこの気持ちをずっと隠してて……。でも、でももう限界なんです！ 私はもうこの気持ちを抑えたくない！ 私だつて恋したい！ 玲音さんといっぱい過ごしたい！ 玲音さんの隣を、玲音さんの一番を私が独占したいんです！」

全部、全部を、何もかもを包み隠さずに話す。知らない間に私の頬をいっぱいの涙が伝つてた。でも今はそれを拭かない。玲音さんから目をそらしちゃいけない。だから、思いの丈を吐いてる間に下がっちゃつた視線を上げる。それと同時に私は玲音さんに抱きしめられてた。手を頭に乗せられて、反対の手は私の背中に回つてて。

「彩……。ごめんな、何度も何度も彩を傷つけて。彩にずっと苦しい思いをさせてきて。

それなのに、こんなクズな男をずっと支えてくれて……。本当にありがとう」
「れおと……。さん……。さん……」

私……。分かつちやった。

「こんな俺をそれだけ想ってくれて、本当に嬉しいよ。ありがとう」

私のこの恋は――

「でも俺は彩の気持ちに応えられない」

――実らないって。

玲音さんの胸に縋りついて涙を流す。悟れても、玲音さんの言葉を聞いても、綺麗さっぱり諦めがつくわけがないんだから。私は今やっと恋をできたのに。恋ができて失恋したんだから。

「彩のことが嫌いとか、彩に魅力がないとか、そんなことは決してない。彩がアイドルに

なるから、スキヤンダルが怖いから、なんて理由でもない。俺はそんなの関係ないってゴリ押しする人間だから」

「なら……なんで、ですか？　なんで私は駄目なんですか!？」

「俺が……俺が彩の気持ちにちゃんと応えられないからだ。真っ直ぐ向き合って受け止めることができない。そんなのを彩に味合わせるなんてできない！　だから……ごめん」

「そんなの……そんなの分からないじゃないですか！　だって、今だって玲音さんは逃げてます！　断る理由も！　だから……!」

「ほんとに、ごめん。……こんなクズで……酷い断り方で……でも、俺は人を好きになっちゃいけないか——ん」

玲音さんの言葉を遮るために唇を重ねる。肩に手を添えて優しく離そうとする玲音さんに抵抗するように、玲音さんの頭に回した手の力を強める。息が苦しくなっても関係ない。悟ってもそんなの受け入れられない。玲音さんと離れたくない。諦めないのが私だから。

息が続かなくなった私の力が弱まって、玲音さんにそつと離される。

「彩……」

「嫌です！ 嫌なんです……。玲音さんと一緒に……。玲音さんの隣りに……。いさせてください……」

「ごめん、彩……。ごめん」

玲音さんは何度も私に謝った。私がまた玲音さんに気持ち伝えようとしたら、着信音が鳴り始めた。私のじゃないから、これは玲音さんの。なんとなく分かる。ゆりさんからなんだろうって。

私は玲音さんに電話を取らせたくなかったけど、玲音さんが手に取るほうが早い。画面を見たらやっぱりゆりさんだ。玲音さんは冷たい目になって電話に出る。玲音さんがそんな目になるなんて何があったんだろ。

「何のようだ

——神木」

「……ええ？」

おかしい。今のこの電話は間違いなくゆりさんの携帯から。それなのになんで玲音

さんはその神木さんって人の名前を出したんだろ。私が混乱してる間に玲音さんと相手の電話が進んでいく。

『なんでゆりってそこで言わないのかな?』

「ゆりは彼氏とのデート中に電話をかけてくるような馬鹿じゃない。……お前、殺されたいのかゆりに何をした?」

『怖い怖い。ところでさ、これ普通の通話じゃないんだよ。画面を見てみなよ。ビデオ通話だから』

『だ、だめ! レオくん見ないで!』

「……っ!」

『はははは! いいのが撮れてるだろ?』

「お前いい趣味してるな。こんなの俺に見せてただで済むと思うなよ」
『とはいえ君は僕らの居場所を——』

玲音さんはたぶん電話の途中なんだろうけど電話を切った。今まで見たことがないほど玲音さんは怒ってる。私に向けられたものじゃないのに、すっごく怖い。玲音さんがベンチから立ち上がった。ゆりさんの所に行くために。

玲音さんは走って公園から出ていった。ゆりさんの所に行くために。でも、玲音さんが言うには理由は別にあるみたい。きつと、今の状況は玲音さんが全く許せないことになってるんだ。

私は玲音さんがくれたプレゼントを見てみた。中には前に一緒にショッピングモールに行った時に私が欲しがってたネックレスだ。

「うっ、うう……玲音さん、ズルい……ですよ。……こんなの……、私……プレゼント渡せてないのに……！」

そのネックレスを胸に抱きしめて、涙を流す。止められないし、止める気もない。私は一人公園で涙を流し続けた。

玲音さんが泊まりに来たあの日、

やっと玲音さんが私を私として見てくれたのに。

やっとスタートできたのに

——私の恋は短くて実ることもなかった

18話

レオくんは電話を切られたから、神木くんはため息をついて携帯を横に壊れない程度にほっぽり投げた。私はそれをどこか他所事のように呆然と見てる。今の状態をビデオ通話のせいでレオくんに見られたシヨックもある。でも、それだけじゃない。頭がずつとぼうつとしてるんだ。思考が纏まることもなくて、身体が熱い。

「通話中に切るんだな」

「んあつ、やあつ」

神木くんに与えられる刺激に耐えられなくて声が漏れる。耳が弱点だつてこともバテて、さつきから喋るときはわざと耳元で囁くようにされてる。息を吹きかけられたり、耳をなめられたりもしてる。それから逃れようとしてもせいぜい身をよじる程度。力も入らないから。

「萩近のやつ、場所言ってるのになんか来れんのかな。ま、来れなかったらゆりの全部身も心もが俺のものになるだけなんだけどな」

「あ………んんっ」

——なんでこんなことになってるんだろう

——レオくんの注意を私が聞かなかったからかな

—————

神木くとデートをして、神木くんが予約してくれてたお店で夕食も食べた。クリスマスツリーとか、イルミネーションで綺麗になってる所があるからそこに行こうって話になった。そこはもちろん人が多いんだけど、人の密集にはバンド活動で慣れてるからそんなに気にならなかった。

「綺麗だね」

「ゆりの方が綺麗だよ」

「あはは、ありがとう」

「あ、そうだ。ゆりにクリスマスプレゼントがあるんだった」

そう言つて彼が取り出したのは、紙で丁寧に包装された箱。中に何が入つてゐるのか氣になつて、人が密集してゐるここから離れて開けることにした。中に入つてたのはチョコレートで、神木くんが苦笑しながら説明してくれた。

「ゆりがチョコレート好きっていうのもあるんだけど、バレンタインだと貰う側だし、ホワイトデーのお返しでチョコレートは変だろ？ だから今チョコレートにしたんだよ」
「なるほどね。食べていい？」

「どうぞどうぞ。一応味見してゐるから、不味くはないはずだよ。……ゆりの口に合うかは分からないけど」

「あむっ……美味しいよー！」
「ならよかつた」

料理作りもできるつて聞いてたけど、お菓子も作れるんだね。これは知らなかつたな。私はもう一つだけ食べて、残りはカバンの中にした。美味しいから家でも食べたい。

異変が起きたのは、歩き始めてすぐのことだった。視界がぼやけ始めて意識が朦朧とし始める。なんだか頭がぼうつとして考えも纏まらない。それに、外は寒いはずなのに今は何故か熱い。

「ゆりどうした？　大丈夫か？」

「だい、じょうぶ……ありがとう……心配してくれて」

「……近くに休めるところあるから、そこでちよつと休もう。まだ遅い時間でもないし、休んでから帰っても心配されないだろ。むしろその状態で帰ったほうが心配されるだろうし」

「そう……だね」

自分じゃ碌に考えられない私は、神木くんの提案にそのまま従った。体を支えてもらいながらどこかの建物に入って、個室へと入っていく。着ていたコートを脱がしてもらった。

そこからが事の始まりだった。体を突き飛ばされた私は自分じゃ全然体を支えられないからそのまま部屋にあるベッドに飛び込む。

(なんでベッドが……あれ? もしか、して……ここって……!)

気づいた時には遅かった。私は上をシャツ一枚以外腕がされて、腕を後ろで縛られる。一切抵抗できない状態になって、神木くんは背を預けるように座らされる。神木くんは私を後ろから抱きしめるような状態で、その手が服の中に伸ばされて下着のホック外されて、服とまとめて鎖骨辺りまで捲し上げられる。肌が外気に晒されて寒い。

「ゆりが全然させてくれないし、キスもさせてくれないからさ。だからゆりからせがむようにさせるために今日仕上げてあげるよ」

「ひゃっ!」

「ん? ああー、^耳ここが弱いんだ。もっと早く知つとけばよかったよ。ま、もういいんだけどね」

耳を舐められながら、後ろから伸ばされる手に胸を揉まれる。途中で何か思いついたように、神木くんは私のポケットから携帯を取り出した。神木くんは私のパスワードを見て覚えたらしくて、操作されてトークアプリを開かれる。それを呆然と見ていると、相手がレオくんだと気づいた。私が止める前に電話をかけられる。ビデオ通話だと

知ったときにはすぐに叫んだけど、レオくんに見られちゃった。

—————

——レオくんは気づいてたのに

今日も私に忠告してくれたのに、ついカッとなって喧嘩して。結局私の方が何もわかってなかったんだ。知った気になってただけで、私が見えていたのは表面だけ。上っ面だけ。全く本性を見ることができてなかった。

こんなの、レオくんも呆れて当然だよ。私に怒って当たり前で。

私は見捨てられても当たり前なんだ。

「ゆりの心の準備を待つのもよかつたんだけどね。ゆりっていつまで経っても菘近のことが最優先だからさ。彼氏は俺なのに。だから、俺の方から塗り替えないと」

身体を弄られるのを耐えながらその言葉が脳裏に焼き付く。たしかに私はいつもレオくんのことを優先してた。けど、その時には何も思ってた。気づいてなかった。今それを言われてやつと気づいた。私は神木くんを見てなかった。

——本当に、最低な女だ

「ゆりが気づいてないようだから教えてあげるよ。ゆりは萩近のことが好きなんだよ。俺と出会う前から。いつから出会って、いつそうなったのかは知らないが、ゆりはずっと萩近のことが好きなのさ」

「わたしが……れおくんのこと……？」

「だからこそ奪ってやるよ。ゆりが俺無しじゃ生きられないようにしてやる。今日でな！」

相変わらず脳が働かない。抵抗する力も出ない。今の状況そんなことよりも私がれおくんのことを好きだつてことで頭がいっぱいになる。本当に、いつからなんだろうか。

でも、もうそんなの気づいたつて遅いよね。いくら私だつてこれから何をされるかわかる。

助けなんて来ないし。私は何もかも遅すぎる。神木くんのことを識るにも遅すぎて、自分の気持ちを理解するのも遅すぎた。れおくんの気遣いにも忠告にも気づくのが遅すぎた。

今さられおくんのことを想うなんて許されない。私が幸そんなのを望む資格なんてな

い。自分ではねのけて、否定して、離れたんだから。

——でも、レオくんは助けてもらいたって思ってしまう

——私を救ってほしいって

叶わない願いを望んでしまう。

『お客様ー。ルームサービスです』

「……チツ。今からつてところに。てかルームサービスなんて頼んだ覚えはないんだがな」

神木くんが私から離れてドアの方に行く。扉越しで会話できるようになってるみたいだし、なんかポストみたいなのもあのドアについてたかな。今そんなの関係ないはずなのに、そんなどうでもいいことを考えてる。支えがなくなつたから後ろに倒れて天井を見てるけど、動く気力がない。はだけた服装も正さない。助けなんて来ないから。

——助けて……レオくん……

『当店はクリスマス限定サブライズルームサービスを実施しておりますので、こちらを入れておきますね。どうぞお使いください。あ、無料ですので料金に変更はございません

んよ』

「……まあ、タダならもらつとくか。ありがとう、次の部屋にでも行つてくれ」
『かしこまりました。私はこれで失礼しますね』

「お疲れさま。さて、続きといこうか、ゆり——つて、何勝手にドアあけでえっ?!」
「店の人ならちゃんとフロントに戻つていったさ。俺は殴り込みに来たけどな」

望んでた人が来た。聞きたい人の声が聞こえた。体を起こしてそつちに目を向けると、殴られて床に倒れてる神木くんと、走つてきたのか暑そうに汗をかいてるレオくんがいた。

「レオ……くん……」

「……なんて格好してんだゆり。露出癖があるとは思つてなかつたぞ」

「へ? あ、くくくく!」

さつきまでどうでもいいって思つたのに、レオくんに見られたつて思つた途端急に恥ずかしくなった。慌てて服装を正していると、神木くんが目を鋭くさせてレオくんを睨みながら立ち上がった。

その手に小型のナイフを持って。

~~~~~

「菘近てめえ、なんでここがわかった。しかもこの短時間でよー！」

「運が良かっただけだな。さっきのルームサービスの人は受付の人。そしてその受付の人はバイトを掛け持ちしてる大学生の先輩。ゆりのことも知ってるから、ゆりの様子がおかしいことにも気づいて連絡くれてたってわけだ。仕事だからか電話じゃなかったけどな」

「なんだよそれ……!」

知らんがな。お前がたまたまそういう場所を選んだだけだろうに。とことん運が無かったというだけのことだ。哀れな奴だよ。同情なんてする気もないけどな。

「カツコよく駆けつけやがって……。そんなにゆりが大事なら手元に置いときやいいものをよお！ 他の男に叶わない恋させて楽しんでたつてののか、ああ!？」

「いや別に俺はゆりのこと好きじゃないしな。はつきり言つてやろう。お前が電話をし

てこなければ放つてた。後からこのことを知って殴り込みに行く、なんてことはしない。お前が選んだ男だろつて言つて終わりだ。嫌なら別れるよつてな」

「ならなんだ！」

「お前が引き金を引いた。それだけだ。俺はこういうクスなのを見たら許せないんだよ。あのクソツタレと同じことをする奴がな。ゆりが泣いてなかったら見せられても来なかった。だがゆりは泣いてた。つまり同意の上じゃない。だからお前を潰す」

「ふざけるなよ……余裕ぶっこきやがつて！ 結局お前もゆりを最優先で考えてやがるだけだろ！」

人の話聞かないのな。それは前会つた時もだつたか。ほんと、器の小さい男だ。底が浅すぎる。いかにも恋愛してましたよ感出しやがつて。初めから下心しかなかつたくせによ。それもなければますます俺は放置していたというのに。あー、面倒だ。クソツタレと同類の奴とこれ以上会話をする気もねえ。虫の居所が悪いわけだしな。

「お前さえいなければ……！ 死ね萩近！」

「ナイフ持つてるぐらいで強気になるなよ。弱さが丸見えだぞ？」

いかにも初心者だ。扱いに慣れてない。武器があれば強くなるなんてご都合主義な  
どないのに。

神木は真つ直ぐと小型ナイフを俺に突き立てて走ってくる。俺はそれを避けること  
もせず、わざと左手を小型ナイフへと食い込ませる。激痛で神経が焼ききれそうになる  
が、それを意地で耐えてナイフを食い止める。流れる血に動揺する神木の足を踏みつけ  
て逃げられないようにし、その怯える顔を睨みつける。

「どうしたよ。血が流れる程度のことです慌てやがって。これぐらい覚悟してたんじゃな  
いのか？ 自分の手で人を殺すつてのは、これ以上の血を流させないといけないんだぜ  
？」

「あ、ああ……」

「少年院に入らずに済んだらいいな。カス」

右手を握りしめて顔面に叩き込む。足を踏んでいるから大きく仰け反るだけになり、  
俺は胸ぐらを掴んでもう一度引き寄せる。この程度で怒りが収まるわけがない。八つ  
当たり込みではあるが、こうなる覚悟もなかったなどさらに俺を苛つかせるだけだ。

踏んでいた足をどけ、溝うちに膝蹴りを入れる。今度は頭の横を思いつきり拳で振り

抜いて壁に激突きさせる。それで気を失ったようだが、救急車を呼んでやる気はない。どうせ先輩が呼んでるからな。『殺人犯になるなよ』って言われたし、通報はしてるんだろ  
うな。

「レ、レオくん……血が……！」

「こんなのそのうち止まるだろ。それより帰るぞ」

「待って！　せめて今止血しなきゃ！」

服装を直したゆりが駆けつけてきてハンカチで俺の左手を包む。ナイフは証拠品としてその辺に転がしといたけど、どうでもいいか。なるようになるだろ。それよりも  
だ。

「ゆり」

「ごめん。後でいっぱい怒られるから、今だけは君の側にいることを許してほしい。せ  
めて止血できるまでは……」

「……好きにしろ」

フロントに下りたら先輩が救急箱を用意してくれてた。ゆりがそれを使って俺の応急処置をたどたどしく行い。手に大げさなぐらいに包帯を巻かれた俺は、左手をポケツトに入れながらゆりと家に帰った。足取りが覚束ないゆりを支えながら、だけどな。

ちなみに家に帰ったら速攻で病院送りにされました。警察の事情聴取にもやつぱり巻き添えくらったね。

そして――

――この日を境に俺とゆりの間に大きな溝ができた

## 19話

先週の一件をきっかけに、俺とゆりの間に溝ができた。具体的にはゆりが距離を取るようになり、俺はゆりに対して冷めた態度を取るようになった。

そこまであからさまにしてるわけでもないが、りみ曰く『分かりやすい』らしい。俺のゆりに対する態度は元からだろうと思っただが、そうでもないのだとか。ぶつきらぼうな優しさが消えたと言われた。そう言われるとたしかに変わったのだなと納得するしかない。

表面的には関係が壊れているってわけでもない。俺達の会話が減ったぐらいで、特にゆりの方から話しかけてくることなくなくなった。俺は元々必要な時しか話しかけに行かないしな。

そんな状態ではあるが、初詣には一緒に行くらしい。今年はグリグリメンバーで行こうと去年の時点から決めていたのだとか。そして例に漏れずそこに俺も組み込まれており、りみも一緒である。俺が把握しきってないだけで、りみはわりとグリグリと交流があるんだとか。



「レオ兄ちゃん。そろそろ時間だよ」

「わかった。すぐに出る」

「お姉ちゃんももう待ってるからね」

「そんな時間かからないって」

振り袖に身を包んだりみが部屋まで呼びに来てくれて、俺は厚着をし、手荷物を確認する。最低限のものを持っておけばいいし、忘れ物もない。りみに続いて家を出て、外で待っていたりと合流する。ゆりは去年と同じ振り袖。今年は自分で着られたらしい。

「悪い、待たせた」

「ううん。そんなに待ってないよ。それじゃあ行こっか」

「そうだな」

ゆりと交わす短い会話。今までならこれで終わることもなかったし、言葉ももう少しあっただろう。だが、今ではこの程度の会話しかない。最低限の会話だけ。りみが何か

言いたそうにしているが、生憎と俺達はこんなもんなんだ。俺はゆりの隣にいるように  
りみをお願いして、後ろを歩く。

あの二人は姉妹なのだから、これが本来の形だ。俺が混ざるなどおかしな話なのだ。  
俺はこうして少し離れた場所にいる。そうすれば元通りだろ。

~~~~~

私とレオくんの間が広がった。私の方から距離をとっているんだけど、レオくんの方
にも変化があった。むしろそれが当然だと思う。ずっとレオくんに迷惑をかけて、あ
んなことに巻き込んでしまったのだから。

レオくんの左手も怪我させてしまって、レオくんはほとんど右手だけで生活してる。
傷がそう簡単に塞がるわけがないから。左手に負担をかけると痛みが走ってしまうか
ら。だからレオくんはバイトもできない。つまり、レオくんの代わりに誰かが働くこと
になる。私はそこにも迷惑をかけてしまってるんだ。

——私が何もわかっていなかったから

「お姉ちゃん。七菜ちゃんがいるよ」

「え、あ、ほんとだ。七菜、明けておめでとう。相変わらず早いね」

「明けておめでとう。ゆり達も10分前でしょ。あんまり変わらないわよ」

「リイとひなは？」

「あと5分くらいしたら来るんじゃないかしら」

たしかにあの二人はいつもだいたい5分前に来る。それでも来なかった時は、ひながまた何かしてリイがその対応に追われてる時だね。今日はそうならなかったみたいで、リイがひなを引つ張りながら来た。この光景も慣れてくると平常運転だなんて思ったり。

「みんなあけおめー！ イエーイ！」

「あけおめー！」

「二人ともテンション高いね〜」

「振り袖なんだから控えめにしなさい。崩れるわよ」

「はーい」

「七菜ちゃんお母さんみたいだね」

「不本意ながらそういう役回りね」

そんなこと言ってるけど、本当に嫌ってわけじゃない。こういうやり取りが私達にとつての日常だから。それを変わらずにできることがみんな楽しくて嬉しいんだ。今年も私達は私達でいられるから。

全員が集まったところで神社へと歩いていく。初詣つてこともあつて、地元の人たちがいっぱい集まつてる。他の街から人が集まるほど有名で大きい神社じゃないけど、何かお祈りに来るなら絶対にこの神社。地元の人たちにとつては当たり前で大切な場所。

「去年はゆりちゃんが風邪引いちゃったからなー」

「ごめんってばー」

「けどゆりちゃんにとつては役得だったんでしょ？」

「なんのことかな？」

「だつてずっと萩ぼんといたつて言つてたじゃん」

「新年からお熱かつたんですねー。お二人さん！」

「あ、あはは。そういうのじゃなかったんだけどね」

今そういう話をされたくない。今は彼との話をどういふ話であれ振らないでほしい。

私が過敏なのかもしれない。考えすぎて、気にし過ぎなのかもしれない。だけど、私は今はそういう話をしたくない。

そんな暗い感情を隠して、笑顔を作って言葉を返す。私から話せることなんてほとんどないし、あの時だって彼に迷惑をかけたんだ。我儘なこととして、風邪引いて、彼に怒られて、でもやつぱりまた我儘言っちゃつて。

たくさん困らせて、愛想を尽かされてもおかしくなかった。関係を切られてもおかしくなかった。だけど彼は応えてくれた。だから私はずっと甘えちゃうんだろうね。気づいてなかった好意に従って甘えてたんだ。

「萩近はどうだったよ。役得だったんじゃない？」

「……別に」

「おろ？ そろ？」

「それよか前見て歩け。人も増えたし、余所見してるとぶつかるぞ」
「それもそうだねー」

レオくんの言ったとおり、人が増えてきた。神社に近づいてるんだからそれも当然なんだけどね。ひなや他のメンバーと話しているのを見る限り、彼は私と同じように溝が

できてるのを隠してるみたい。いや、彼の場合隠そうとしてるんじゃないやなくて、相手に合わせて完全に切り替えてる。だから彼からボロが出ることはない。出るとしたら私。それかりみだね。

どんどん人も増えてるし、はぐれないように気をつけようねって話になったんだけど、早々にはぐれた。びつくりするぐらい早かった。横並びに歩くのは迷惑だからって縦になってたんだけど、たぶんその前後で、つまりニグループに別れたっぽい。

「もの凄い早さではぐれたわね」

「そうだね……。せめて半々だといいいんだけど」

「ひなちゃん達大丈夫かな？」

「なんだかんだで全員しつかりしてるから問題ないでしょ。それより私達は、これ以上はぐれないように三人で固まって本殿を目指しましょう」

「うん。目的地が一緒なんだし、先に着いたら分かりやすい場所で待ってたらいいもんね」

こつちは私と七菜とりみの三人。だから、たぶん向こうはレオくん和リイとひな。そこからさらに分裂してたら怖いけど、七菜が言った通りみんなしつかりしてるから大丈夫

夫なはず。レオくんもここまで来て、帰るなんてことはしないだろうしね。

三人で話すことは、バンドのことや学校のこと。リみが春から私達の後輩になるって話もする。また一緒に学校に行けたりするのかな。毎日ってわけじゃないだろうけども。リみにだつてきつと高校でもお友達が増える。外部生もいるからきつと新鮮さを味わえるよ。

私達グリグリは来年ももちろん活動する。ただ、受験を控えているからいつまで活動するのかわからない。卒業までは必ず活動を続けるし、できれば大学に行くてからも一緒に活動したい。でも、どうなるかはわからない。全員が同じ大学に行くとも限らないから。

「お姉ちゃんと七菜ちゃんはどの大学にするか考えてるの?」

「私はまだかなー。オープンキャンパスとか行ってみようかと思ってるけど、七菜は?」
「候補は何個か絞っているわよ。その中のどれにするかは、私もオープンキャンパスで決めようかなって」

「七菜ちゃん凄いいね。そこまで決めてるんだ」

「それでもないわよ。早い人は去年の夏休みに動いてるし、決めてる人だっている」

そうやって七菜は一度後方に目線を向けた。釣られて私とりみも後ろを見たけど、見えるのは他人ばかり。七菜がいったい誰のことを言ってるかは分からない。はぐれた三人の誰かだろうし、要所要所を的確に抑えてる人で言えばひなだよね。

……違うね。私は目をそらして気づかないようにしてるだけ。七菜がいったい誰のことを言ってるかなんて本当はわかってる。彼の^{レオくん}ことだ。私は知らなかったけど、七菜は知ってるんだね。もしかしたら、私以外が知ってるのかもしれない。

「七菜——」

「ゆり。その事を知りたかったら本人から聞いてちょうだい。私だってそうしたんだから」

「……わかった」

「? なんのこと?」

「萩近くがどういいう進路を歩むのかについてよ。この話はひとまず置いて、そろそろ順番が来るわよ」

タイミングが良いのか悪いのか、七菜に迫及するタイミングがちょうど無くなった。私達は巾着袋から小銭入れを取り出して、賽銭箱に入れるお金の準備をする。混んでる

からすぐに終わらせられるように。

順番が来たら三人でお賽銭箱にお金を入れて、一緒に鈴緒を持つて鳴らす。二礼二拍一礼をして、静かに願い事を心の中で言う。こういうのつて口に出さないほうがいいんだっけな。だから、お互いにも何をお願いしたかも言わない。気になるのは気になるんだけどね。

きつと他の三人もいずれこの場所に来るはず。だから私達は邪魔にならない程度に、だけど見つかりやすい場所へと移動する。三人はどこかなつて列を見ていると、七菜に話を振られた。しかも重たいやつ。

「それで、ゆりは萩近くと何があつたのかしら？」

「へ？ 何つて……大したこともないけど、どうしたの？」

「そんな分かりやすい嘘をつかれても、誰も信じないわよ。というか分かりやす過ぎ。露骨にお互い離れてるし、顔も合わさないし」

「ええ……」

そんなに分かりやすいのかな。……でも、言われてみればたしかにそうなのかもしれない。みんなによくレオくんの隣にいるつて言われるし、何かある度にレオくんの方を

見てたわけだし。だから、今日みたいになつてると簡単に分かつちやうみたい。

あまり話したい話じゃないし、聞いてて気持ちいい話なんかでもない。だから話させないでほしかったんだけど、七菜は許してくれなかった。

「今回ののはどうやら今までの喧嘩とか拗れとも違うようだし。最悪なことにならないようにしないとダメじゃない。だから教えて？」

「……でも……これは私の問題で……」

「ゆりはそうやって抱え込む。今までは萩近くくんがなんとかしてくれてたし、ゆりも彼にしか吐き出さなかった。でも、今回はそうできないんですよ？ 私達はそんなに頼りない？」

「そんなことないよ！ 絶対にそんなことない……！ でも……」

「ゆり！ お願いだから頼って！ 友達の力になりたいの！」

「っ！」

「巻き込むことで迷惑をかける？ そんなの気にしないでよ！ 馬鹿にしないで！ 迷惑なんて思うわけがない！ それが友達でしょ？」

七菜の叫びに、私は負けた。いつも落ち着いてる七菜が、こんなに熱くなつて私のた

めを想ってくれてる。それが嬉しくて、そんなに想ってくれてるのに私は拒もうとして。

私は最低だ。友達の想いを受け取ろうとしないなんて。何度も何度も間違えて、全然学ばなくて……。でも、私は変わりたいから。もつと周りに目を向けられるようになって、気づかない間に迷惑をかけるなんてことにならないように。

これはその第一歩なのかもしれない。弱さを曝け出して、抱えてることも吐き出して。

「七菜……あのね——」

私は話した。内容が内容だし、周りには知らない人がたくさんいる。だから全部を話せるわけじゃない。具体的に話すことはできなくて、でも掻い摘んで大まかなことは七菜に全部話した。横にいるりみも当然全部を聞くことになる。りみには特に知られなかつたけど、それももういいの。見栄を張るだけのお姉ちゃんは今日でやめなきゃ。

話してるうち、だんだんと気持ち沈んでくる。沈んで、乱れて、荒れて。気づいたら涙も零れ落ちてる。だって、話しててわかるんだもん。嫌でも意識が強くなる。

——私はレオくんのが好きなんだって

どうしようもないぐらいに好きで、恋しくて、離れたくない。レオくんの側にいたい。私は今まで気づいてなかっただけで、ずっとずっとレオくん恋してたんだけだ。

——他の誰でもなくて、萩近玲音くんが好き

「でも……だけど、もう遅くて……。私のせいでレオくんは怪我して……。私はレオくんに迷惑をかけ過ぎて……。もうだめなの……。私にレオくんを好きでいる資格なんて——」

「そんなことないでしょう?」

「なな……?」

「たとえ何があっても、ゆりがどれだけそうしようとしても、その気持ちに嘘をついちや駄目。資格なんていらないじゃない。ゆりが好きでいる。それだけでいいの。ゆりは恋しているの」

「いい、の? ……ほんとうに?」

「もちろん。私だつて応援してあげるから」

「お姉ちゃん。私もお姉ちゃんの力になるから、だからレオ兄ちゃんから離れるのはもうやめよ? 私、二人が一緒にいるの見るの好きだよ」

七葉にそつと抱きしめられて、横からりみに頬を撫でられる。

私は、恋していいのかもしれない。二人にこう言われても、まだ割り切れるわけじゃない。でも、逃げるのはやめよう。怖くても、気まづくても向き合おう。

ひなに離れた所から声を張って呼ばれる。顔を上げてみればそつちにはやつぱり三人揃つてた。レオくんが不機嫌そうにしてるのは、二人のせいなのかな。何を話したのかは分からないし、聞いても教えてくれないと思う。だから、私は私のやり方でレオくんに歩みよう。レオくん私を見てもらうために。

20話

冬休みも終わり、三学期に入ったが三学期は体感的にすぐ終わる気がする。今はもう二月中旬となり、半分は終わっているのだから。そして来年はさらに早く感じるんだろ。うな。高校三年生となれば人生の中でも指折りの分岐点だ。就職を選ぶのか、進学を選ぶのか。大きく分ければこの二択になる。

俺は先のことを決めてはいるが、今はそのことが頭を占めているわけではない。今俺の頭に大きくのしかかっているのは、正月の時に鶴沢と二十騎に言われたことだ。あの二人、何があつたのかは知らないはずなのに的確に言ってくるんだからやりづらい。曰く、『分かりやすい』らしいのだが、詳細まで把握はできないはずだろ……。

「はいこれ。萩近くんにも渡しとくね〜」

「……………ん？ ああ……………何これ？」

「何ってチョコだよチョコ。今日はバレンタインだからね、大量に作ってみんなに配ってるんだよ」

「そういえばそんな日だったな。ありがとう」
「どういたしまして」

学年でもよく知られている女子。つまりは人気者の女子なんだが、今日はチョコを配布してゐるらしい。裏がありそうだよな。疑つてかかつてしまふ俺なのだが、クラスの男子たちが言うには裏はないらしい。

残念ながら俺はそれを信じられていない。でもチョコは貰う。渡してきた本人がすでにいなくなつてゐるのだから返しやうもないしな。溶けないように丁寧に保冷剤入り。教室は暖房がかかつてゐるし、寒いロッカーにでも入れておいたほうがよさそうだな。

そう思つて席を立ち、廊下に出たところでクラスの馬鹿代表に捕まる。こいつたしかチョコを配つてゐる子に貰いに行くつて言つてなかつた。こんなとこで何してんだらうな。

「どういふことだ萩近ア！」

「何がだよ」

「なぜプリンセスからチョコを貰つてゐる！」

「席でぼうつとしてたら貰つただけ。配つてゐるらしいから頼めば貰えるんじゃないか

「？」

「マジで!？」

「マジ」

「ヒヤツホウ!!」

態度が180度変わった馬鹿は、その場で急に踊りだした。喜びの最上級なのだとか。はつきりと言おう。こいつは馬鹿なのだ。

教室へと跳んで入っていった馬鹿を放置して俺はロッカーへと足を運ぶ。教室から女子たちの悲鳴が聞こえてきたということは、馬鹿がやらかしたらしい。あれは絶対にチヨコを貰えないな。購買に行けばオバちゃんが用意してるからくれるだろうけども。……あ、オバちゃんに受け取りに来てって言われてるんだった。それもロッカーに入れるべきかもしれないが、二度手間だ。オバちゃんのは受け取ってその場で食べよう。

「日直号令してー」

「センセー。キヨウハキブンジャナイノデゴジブンデオネガイシマス」

「……なんで燃え尽きてんの?」

昼休みにやらかして女子からチョコを貰えなかったからですよ先生。オバちゃんからの慈悲であるチョコを渡したら泣きながら食べてた。それをオバちゃんに見られてたらぶん殴られてたな。だいぶ美味いチョコだというのに。あれを手作りというのだからオバちゃんは何れない。

女子は全員が無視し、男子が「そつとしてあげてください」と頼み込んだところで先生は自分で合令してHRを始めた。男の先生だから察して同情したみたい。自慢気に嫁さんのチョコは美味いと言い出した時は鬼畜だと思つたが。

「萩近くんちよつといい?」

ロッカーに行き、カバンにチョコを入れて、教科書類も整理して靴を履き換えたところで人気者プリンセスに声をかけられた。早々と帰る俺に声をかける女子は何気にかの子が初めてかもしれない。男子はノリで絡んでくるからな。何の用かは考えてみてすぐに思い至つた。チョコの感想だろう。だが生憎と俺はまだ食べてないんだよな。

「チョコならまだ食べてないから感想は言えないぞ」

「あ、そうなんだ。それもあつたけど……、今からバイト?」

「まあな」

「ねえ、バイト先行くまで一緒にいい？ チョココ以外でも話したいしさ」

「それぐらいいなら」

「やった！ すぐ準備するからちよつと待ってて」

「急がなくていいぞ。まだ時間に余裕あるから」

その言葉は届かなかったようで、忙しく帰り支度を始めだした。そして案の定教科書やらノートやらを落としてる。急がなくていいと言ってるのにな。それを拾うのを手伝い、もう一度急がなくていいと伝える。帰り支度が終わったところで一緒に歩き、バイト先へと向かう。

俺は話すネタなど持っていないのだが、さすがは人気者。話のネタは何個も持っているらしい。しかもネタ一つで長く会話を繋げられている。コミュ力のバケモノかな。バイト先まであと半分くらいとなったところで話題が変わる。チョコの話へと。

「あのチョコなんだけど……」

「え、なんか混ぜたの？」

「そんなことはしてないよ!? そうじゃなくて……本命なの」

「ふーん。……は？ え、なぜに？ 関わり今までなかった気がするんだが」

「あはは、萩近くんにとっては大したことじゃなくても、私にとっては大きなことがあったんだよ？」

「……ごめん。覚えてなくて」

「ううん。いいの」

首を横に振って微笑む彼女だが、申し訳ないものは申し訳ない。彼女にとって大きな出来事を俺は全く覚えていないのだから。そもそも俺は学校での出来事をほとんど記憶に残していない。キザに言えば灰色の景色を見ていただけだ。学校にいる間に景色が色づくことなど滅多にない。

そして、だからこそ俺はその気持ちに伝えることなどできないのだ。

「やっぱり駄目だよね……」

「悪いな。それに、俺は最低な人間だからさ」

「そんなことないよ。どう受け取るかは受け手次第だもん。私は最低だと思えないから、だから好きになったの」

「……強いんだな」

「虚栄だよ。気を抜けば泣きそうで、体が震えそうでもん」
「そっか……。ありがとう、俺なんかを好きになつてくれて」

俺には彼女が眩しすぎる。”向き合う”つていうのは、きつと彼女みたいな行動をすることなのだろう。弱さを認めて、怖くても自分の心を見る。彼女は本当に強い人間だ。きつとこの先、もつといい出会いがあるだろう。

バイト先に着いたところで彼女とは別れた。彼女が見えなくなるまで見送ろうかと思つたが、彼女は俺が中に入るまで見送るらしい。だから俺は中に入った。入ったらそこには頬を膨らませてジト目で見てくる彩と、困り顔と呆れ顔を半々にしてる花音がいた。

「どうした？」

「ふんだ」

「……花音」

「ついさつきまでのことを思い出してください」

「……え？ 待つて、花音ちゃんいつの間に名前と呼ばれるようになったの？ 私それ知らないんだけど？」

「あ、彩ちゃん落ち着いて……」

俺が名前呼びに変わっていることに気づいた彩が花音に詰め寄る。俺はその間に着替えを済まし、花音に言われた通りさつきまでのことを思い返した。思い返すも何も女子と一緒にただだけなのだが、……なるほど。それが駄目だったのか。

更衣室から出た俺は荷物をロッカーに入れ、目を回してあたふたしてる花音に詰め寄る彩を止める。バイト先で自分だけが名前で呼ばれていることを特別に思っていたらしく、今度は俺が彩に詰め寄られることになった。隠すことでもなく、名前呼びでいつかってなったからだと教えたらさらに機嫌を悪くされた。

「私は頑張ってお願ひしたのに……」

「だからこそなんだけどな？」

「どういうことですか？」

「彩のことを彩って呼ぶようになったから、少しづつ抵抗が無くなったんだよ。彩が勇気をだしてくれたから。つまり彩のおかげってわけだ。ありがとう」

「……うう、ズルいですよ、玲音さんのばかあ」

彩に胸をポカポカ叩かれるが、本気で叩かれているわけじゃないから痛くない。むしろ可愛らしく思える。彩の髪をそつと撫でてると彩も叩くのをやめてそつと頭を預けてくる。そうしたところで花音がわざとらしく咳払いし、彩が慌てて離れる。ジト目でこつちを見てくる花音に二人で頭を下げながら反省。俺は彩の好意を断つたのにこんなことしちやつてるわけだし。

「そうだ玲音さん。さっきの方誰なんですか？ 私を振つたのにゆりさんでもなくあの人に靡いたんですか？」

「違います。あの子とも付き合ってません。そしてなぜそこで当然のようにゆりの名前を出す」

「だって仲いい女の子って他にいないじゃないですか」

「……たしかに」

「違うと分かればそれでいいんですけどね。玲音さんへ私からプレゼントです！」

彩が笑顔を弾けさせて渡してきたのは、可愛らしくラッピングされた袋に入っているチョコ。まさか振った相手からチョコを貰うとは思ってなかったが、受け取るべきだろう。俺は礼を言つて彩から受け取る。チョコの形がハートで、LOVEと書かれている

のは見なかったことにしよう。

~~~~~

「……なんで」

お正月の時に、七菜のおかげでレオくん少しは向き合えるようになった。好きだつてことを自覚してるのもあるし、気まずいのもあって、前ほど近づけないし話せない。でも、少しは会話が増えた。

だから、今回も会話のきっかけとして、レオくんとの関係を修復するためにも今日という日を活用しないわけにはいかない。私の気持ちを言えるわけじゃないけど、恥ずかしいし、怖いし。でも、せめてこれ<sup>チ</sup>だけ<sup>コ</sup>は渡したい。

——渡し……たかった……

一緒に家にいるんだから渡そうと思えば簡単に渡せる。だけど、家族がいる場所では渡したくなかった。お母さんに押揃われそうだし。だから外で渡すしかない。学校があるし、レオくんはその後バイトに行く。渡せるチャンスがあるのは放課後とバイトの後。でも、バイトの後だと時間も遅いし、レオくん怒られるかもしれない。

だから放課後しかなかった。

渡せるチャンスは放課後だけだった。

それなのに——レオくんは女の子と一緒にいた。

綺麗に顔が整ってて、笑顔が可愛くて、スタイルも良くて。私が勝てる要素なんてどこにもなくて、誰にでも好かれるような人なんだって見ただけで理解した。

いつもなら正門で待ってるのに、恥ずかしさもあつたから影に隠れてレオくんを待ってた。それでレオくんを見た時に声をかけようとしたら、そこにはその子がいて、シヨックで、声をかけられなくて。レオくんは楽しそうに話してたから余計に嫌で、でも目をそらせなくて。

他の人からしたら分からないだろうね。レオくんはぶつきらぼうだから。でも私は分かるもん。レオくんが楽しそうにしてたのが、分かっちゃったもん……。

「わたし……なんで……」

なんでこんなに遅すぎるんだろう。きつとこれは私への罰なんだ。報いなんだ。こんなに苦しいのも、胸が張り裂けそうになるのも、それを処理できないのも、全部全部全部！全部が私への罰なんだ……。



「ゆり？ どうしたんだ俺の部屋で」

「っ！」

直接渡せないから、怖いから。だからレオくんの部屋にチョコを置いてくだけにしよ  
うって思つて部屋に来てたら、レオくんが帰つてきてた。時間はまだ22時を回つてい  
ないのに。いつもならまだ帰つてこない時間で、バイトしてるはずなのに。

「暇すぎたから早上がりすることになつてな。それで帰つてきたんだが、ゆりは何か用  
があるのか？」

「あ……………う……………」

言葉がうまく発せない。レオくんの顔をまともに見れない。だつて怖いんだもん。  
レオくんの瞳にはきつとあの子が映つてて、私は見られてなくて。

——いやだいやだいやだいやだ！

そんなの嫌。レオくんに見られてないなんて嫌。それは確かめたら分かるけど、それ  
も嫌。だつて怖いから。だから、渡すだけでいいや。言葉も聞きたくない。押し付ける

ように渡してすぐに自分の部屋に駆け込もう。

そう思ってから手に隠してたチョコを、レオくん押し付けるように渡そうとする。全然そんなふうにはできなかった。手が震えて、そつと押し当てるぐらいになっちゃって。レオくんには私の手ごとそつと包まれる。

「ゆりもくれるのか。ありがとう」

「っー」

「つと、ゆり？」

その言葉が胸に突き刺さって、息ができなくなつた私はレオくんに抱きついた。両手をレオくんの胸に当てて縋りつくように服を握る。チョコは足下に落ちちやつたけど、今それを気にしてる余裕なんてない。

苦しくて、辛くて、悔しくて、情けなくなつて。胸に渦巻いて締め付けてくる感情に耐えられない。ぽっかり空いちゃつたような胸にはそれ以外何も無い。これを片付けるには、もうこの気持ちと別れないといけなんだ。私は諦めるしかないんだ。

スタート地点に立つたときにはもう試合は終わつた。滑稽だよな。

「彼女……できたんだね。……今日一緒に……歩いてた子、なんだよね？」

確かめるように言葉を絞り出す。自分の言葉で胸がさらに締め付けられる。気が狂いそうになる。

「何言ってるんだゆり。そんなわけないだろ」

「……え？」

だからレオくんのその言葉が意外すぎて私は耳を疑った。見上げてレオくんの視線と合わせると、レオくんが嘘ついてないことがわかった。つまり、私の勘違い？

「で、でも楽しそうにしてて……！ あの子すっごい綺麗で、可愛くて！ だからレオくんも……！」

「違うってば。たしかに話すのは楽しかったし、可愛いけども」

「なら——」

「でも断った。だから彼女じゃない」

わけがわからなくなる。パニック状態で、何か言葉を発しようとしても発せなくて。そんな私にレオくんがそつと腕を回す。そのまま頭も撫でてくれる。二か月ぶりぐらいで、温かくて胸が満たされるのがわかる。自然と涙がこぼれてきて、それを隠すようにレオくんの胸に頭を押し当てる。

「……馬鹿だな」

「れお……くんの……せい」

「あゝ違う違う。俺が馬鹿だなんて」

「え……？」

「ゆりはゆりの好きにしてたらしい。迷惑なんて考えずにさ。俺は俺の好きにする。今まで通り、な？」

「うん……うん……！」

倒れ込むようにレオくんを傾ける。レオくんはそれを受け止めてくれて、ギョウとしてくれる。私は、まだ頑張れるんだ。チャンスがあるんだ。

落ち着いたらレオくんはチョコを食べてもらって、美味しいって言ってもらえた。レオくんは他の子にも貰ってきて、丸山さんから渡されてるやつにLOVEって書かれ

てるのには詰め寄った。そしてこの時に初めて丸山さんも断ったって知ってビックリした。

## 第3部 高校三年生

## 1 話

春になって学年が上がる。私たち二年生は三年生へと。進路を確定させてそのためにひたすら努力する年だ。でも、私たちはバンド活動を中断させる気はない。受験が近づいたらもちろん一旦休止するけど、それでも卒業ライブとかはしたいしね。

「お姉ちゃん。どこかおかしくないかな？」

「大丈夫。似合ってるよしみ」

「そうかな？　ありがとう、お姉ちゃん」

3月まで中学三年生だったりみも、学年が上がって今年度から高校一年生。学校は私と同じ花咲川女子高校。また一緒に登校できたりするのかな。もちろん友達同士で行ったりするだろうから、そんなに頻度はないだろうけども。うちの高校はエスカレーター方式で中学から高校に上がれるけど、外から入ってくる子もいる。そんな子とも友

達になるのかな。りみは少し不安そうにしてるけどね。

そんなりみは今日が入学式。そこまで大きな変化もないだろうけど、こういうのは気持ちが大変。中学と高校で制服が違うのもきつとそういうことだろうね。意識を変えましょうってことで。

「入学式みんなで行くからね」

「え、恥ずかしいよ」

「いいじゃん。りみの晴れ舞台なんだから」

「大げさだつてば」

大袈裟じゃないと思うんだけどな。だつて私の時だつて……私の時は私が迷子になつてたね。先に家を出てみんなより後に学校に行つたんだつた。懐かしいな。もうあれから二年経つんだ……。

あの日にレオくんに出会つて、それから本当に、本当の本当にいろんなことがあつて、今は同じ家にいる。……うん、おかしいね。仕方ないし、私がレオくんを家に入れたんだけど、冷静に考えたらとんでもないことしてるね。

無自覚つて怖いなー。今じゃ意識し過ぎて絶対そんなことできないよ。バレンタイ

ン以降、少しずつレオくんとの会話も戻ってきてるけど、私がまともにレオくと話せないからまだ戻りきってない。あれに戻るのって無理なんじゃないかと思うぐらい、無意識の私は積極的過ぎた。よくレオくに嫌われなかったよね。めんどくさがられてたけども。

「レオくと一緒にりみの入学式……私大丈夫かな？」

「あ、お姉ちゃん。レオ兄ちゃんって今日バイトじゃなかった？」

「へ？」

「さっき準備してたよ？」

「なにしてんのレオくん!？」

私は部屋を飛び出してレオくんの部屋のドアをノックと同時に入った。ノックの意味がないけど、一応したのはしたんだからいいよね。

「なにしてんだゆり……」

部屋の中には呆れ顔のレオくん。たしかにバイトの用意を持ってる。ということは



りみが言った通りなんだろうけど、なんでりみの入学式の日にはバイトを入れてるんだろう。せめて入学式の後からとかでしょ。

「今日はりみの入学式だよ？」

「知ってる。みんな出席するんだろ？俺はバイトしとく。おじさんとおばさんには話したぞ」

「……止められなかったの？」

「『ゆりに話したら止められるでしょうからゆりには黙つときなさい』とだけ」

なんでそのへんレオくんのを優先しちゃうかな。そりやあれオくんとは血が繋がってるわけじゃないんだけど。でも、同じ家に住んでるんだから、こういうのは一緒にやりたいじゃん。

「誰かに代わってもらおう？」

「こんな直前にそんなの迷惑だろ。それに代わりなんぞ見つからん」

「わかんないよ？」

私はスマホを操作して、ある人に連絡を取る。『妹の入学式に萩近くんも連れて行きたいので、彼の代わりにバイトしてくれませんか?』と。いきなり過ぎて迷惑なことだとは思う。体のいいパシリみたいなものだって分かっている。断られたら素直に謝って諦めればいい。代わってもらえたらお礼を持っていこう。

「誰に連絡したんだよ……って、電話来たし」

『若! 事情は聞きましたよ! 入学式にご出席してください!』

「お前パシラされてることに気づけよ!」

『もしものためと予定を空けておいて正解でした! では俺は店に向かいますので!』  
「待ておい! ……切りやがった」

深くため息をつくレオくんにドヤってすると頬を抓られた。あの人に連絡したのは私だけど、二つ返事で了承してくれたのはあくまであの人の意思なんだけどね。でも、レオくんからしたらあの人を使うのは反則みたい。

私の頬を抓ってくるレオくんの手をペチペチ叩いて離すように促す。でもレオくんは離してくれなくて、反対の手でも抓られる。強くは抓られてないから痛くはないんだけどね。でもちよっぴり跡ができそう。それはやめてほしい。

「どうやって連絡先を手に入れた」

「ほひへへふへふあ」

「何言ってるか分からないぞ馬鹿」

「ららふあはひへ！」

「なんて？」

絶対伝わってる。私が何を言いたいのかは絶対レオくん<sup>に</sup>伝わってる。だってすごいニヤニヤしてるんだもん。

私はレオくんの足を踏んづけた。それで怯んだレオくんの手を自力で振りほどいて少し離れる。跡がついてないか気になって頬を触ってみるけど、鏡見ないと分からないね。

「いきなり踏むなよな。ビックリするだろ」

「レオくんが悪いんでしょ？」

「はあ。で？ どうやって連絡先を手に入れた？」

「教えてくれたの。向こうから」

私が正直に話すとレオくんが額に手を当てて項垂れた。呆れて何も言えないっていうのと、なんでそんなことしてるんだろうなって思ってるのかな。私もいきなり教えられた時はビックリしたよ。

「過ぎたことは仕方ないか……」

「そんなわけで入学式行くこうね？」

「はいはい」

諦めたレオくんがだらけて返事をする。制服で出席しても落ち着かないし、正装はお父さん達だけ。私とレオくんは、目立たない程度の私服を着て出席。レオくんがりに喜びられた瞬間グーサインしたから頭叩いた。

くくくく

りみの入学式に強制出席になり、ゆり達と一緒に保護者席から見えた。花女に入るのはこれで二度目になるわけだが、なにせよ落ち着かなかった。まず女子校に入るとい

う時点で、多少なりとも気遅れするし、俺は誰かの保護者でも家族でもなく来てるのだから。ゆりは家族だって言うかもしれないが、養子縁組してるわけでもなし、血の繋がりがあある親族でもなし。つまり赤の他人である。

そんな若干居心地の悪い入学式だったのだが、特に何かあったわけでもなく無事に終了した。強いて上げるとすれば入学式に欠席者がいたくらいだが、さしたる問題でもないだろう。うちの高校の入学式は欠席者が二桁いかなかったただけで教師陣が「快挙です！」なんてはしゃぐのだから。

「じゃ、俺ここで別れるから」

「なんで？ りみと一緒に帰ろうよ」

「バイト」

「それは代わってもらったでしょ！」

「一日潰させるわけにはいかないだろ！」

当日に急に代わってもらっただけでも悪いのに、一日全部潰させるなんて申し訳ない。嬉々として働いているのは容易に想像つくのだが、だからって甘えていいわけじゃない。だから俺はバイトに行くんだ。それにそれ以外にも理由があるしな。

「また痴話喧嘩してるの？ 他の人に迷惑よ」

「鰐部。何を見ればそう見える？ 迷惑なのは認めるが」

「あなた達のは基本的に痴話喧嘩にしか見えないわよ。そうじゃない時は拗れてる時ね」

「ちわげんか……えへへ……」

たしかに拗れてた時もあるけども。拗れてる時は周りに多大に迷惑をかけているけども。そのせいで泣かせた相手もいるぐらいだし。だが、そうじゃない時は痴話喧嘩にしか見えないというのは遺憾である。これには抗議したいところだが、それよりもゆり。痴話喧嘩で喜ぶな。

「……あれ？ 今のうちに行つとけばいいのか」

「あなたも大概酷い人よね」

「鰐部。あとは任せた」

「はいはい。フォローはしないから家に戻った時の言い訳考えときなさいよ」

「わかった」

変に照れてるゆりを鰐部に任せて俺はバイト先へと向かう。家に帰ってからゆりにどう言い訳したのかと考えたが、よくよく考えれば俺が言い訳する必要もないな。俺は元々バイトの予定を入れていたのだから。

バイト先の裏口から入ると、困り顔をしている女子と不機嫌そうにしている女子がいる。予想通りだし、これがあるってわかっていたからこそ、俺は途中からでもバイトに来ようと判断したのだ。そして言い訳が必要なのはこつちである。

「おはよう花音、彩」

「おはようございませす」

「説明を要求します」

「だろうな」

花音は助かったと言わんばかりに安堵の表情を浮かべ、彩は頬を膨らませて説明を求めてくる。俺は膨らんだ彩の頬を突いて空気を吐き出させ、顔を赤くして叩いてくる彩を落ち着かせる。

「今日は花女の入学式だろ？ ゆりの妹が今年入学でな。式に出させられた」

「それは聞きましたけど……、玲音さんバイト入れてたじゃないですか」

「俺もこつちに来るつもりだったんだがな。……いつも通りのパターンだよ」

「なるほど。では玲音さんは私のお願いを一つ聞いてくださいね？」

「なんでそうなる……」

いつも通りのパターンと言えば、ゆり関連だと彩も理解してくれるようになった。というかこのバイトの人たちは、みんなそれで理解するようになってしまった。甚だ不本意なのだが、そうなってしまったのだからもういいや。

それで、なんで彩のお願いを聞くことになるんだろうな。急に代わってしまったのは俺の落ち度ではあるのだが、それで彩のお願いを聞くことには繋がらない。だから花音に助けを求めようとしたのだが、花音はふわっとした笑顔を浮かべて首を横に振った。諦めろということらしい。

「はあ。それでお願いは？」

「いいんですか!?!」

「彩が頼んできたんだろ。無くていいなら無しにするぞ」



「いえいえ！ それは駄目です！」

彩のお願いを聞くと言ったら、彩は笑顔を弾けさせて喜び始めた。さつきまでの不機嫌さは何だったのかと言いたくなるぐらいだ。だがまあ、彩が喜んでくれてるならそれでいいか。彩を振ったことを後悔してるわけじゃないし、引け目を感じてるわけじゃない。そんなの彩に失礼過ぎるし、俺もズルズルと引きずりたくはない。

それでも、彩に甘くなるのは俺の性分なのかもしれない。

「えっとですね。今日うちに泊まりに来てください！」

「頭冷やそうか」

この子に甘くなるのも注意しないとイケないな。そう思った瞬間だった。

学年が上がって高校三年生になった。人生の分岐点の一つだ。そして、予想してなかったが、この年度で俺の身の回りの問題が全て片付くことになる。

## 2 話

バイトから上がり、彩の家に泊まりに行くために着替えを取りに帰る。22時過ぎに家に着いたんだが、ゆりはまだ帰ってきてないらしい。次のライブが近いから練習してらんだろうが、この時間ともなれば補導されてもおかしくない。その辺りのことは鰐部が弁えていると思うんだがな。

「あれ？ レオ兄ちゃんもどこか行くの？」

「ちよつと友達の家泊まりに行くことになつてな。……も？ もつてことはゆりもなのか？」

「うん。晩御飯食べ終わつたら七ちゃんの家泊まりに行つたよ。ライブのことでみんなが集まるんだって」

「なるほど」

通話とかでもできるんだろうが、たしかに顔を合わせての方がやりやすいか。時期的

に最終確認というか、最後の打ち合わせになるんだろうな。練習を詰め込むことになるだろうし。俺は一応サポーターという立場だが、こういうの参加したことないな。断るからなんだけども。

着替えを鞆に入れて、忘れ物がないかを確認してから家を出る。俺とゆりの両方がいなくなるからか、りみがだいぶしよんぼりしてた。今度ゆりに予定を合わせることで手を打ってもらおう。ゆりに。それに、今度修学旅行でまた俺とゆりは家を空けることになるわけだしな。日程の一部が被ってるから。

「そーいや前もこんな時間に彩の家に行っただっけな。……非常識にも程があるよな」

前回は彩の父親がいなかったし、母親のほうがわりと受け入れてくれたからまだ良かったものの。二連続でそんなことするとさすがに申し訳ないんだよな。行くことになっちゃったし、彩から『親の許可は取れました！』って連絡入ってるし。あれってたぶん母親のだろうな。俺が仕向けたこととはいえ、二年前の牛込家での一件があるから、わりと父親相手は気まずい。

彩の家に近づくとつれてだんだんと気が進まなくなるが、ドタキャンするなんて論外

だ。腹を括るしかない。そうして見えてきた彩の家なんだが、家の前に人がいる。よく知っている子だ。特徴的なふわふわしたピンクの髪の子。本番に弱くてよくトチる。誰かしら見守っていないと不安になる子。そして、誰よりも平凡という言葉が適してて、誰よりもひたむきに努力する子。

「わざわざこんなところで待たなくてもよかつたのに」

「えへへ、なんだか落ち着かなくて」

頬を搔きながらはにかむ彩の髪を雑に撫でる。本人は髪が乱れるって文句を言いつつ、その頬は緩みまくってた。楽しそうにしてるからこれでもいいんだろうし、それに不意打ちをくらった仕返しもできたからこれでいいだろう。誤魔化しって言った方が適切だろうけども。

彩が俺の手を止めるまでそれを続け、それから彩の家へと入る。人の家にお邪魔するのに何も親に言わないわけにもいかず、俺は彩の後ろについて行く形でリビングへと向かった。そこには前にもあった母親と初対面の父親がいて、当然のように腕組みをしていた。これはまず父親と話すところから始まるやつだな。母親に促されて父親の正面に座り、俺の隣に彩が座る。

「夜分遅くに申し訳ありません」

「彩の我侭なんだろう？　むしろよく付き合ってくれたね」

「わりと普段助けられてるので、少しでも応えようと思つていまして」

「……なるほど。彩や妻の言つた通りの人物のようだ」

なんか納得されたんだが、この二人いつたい何を話したんだろうな。いや、彩の方はだいたい予想がつく。彩つてその日にあつたことをわりと事細かに話すタイプだから。その積み重ねでたぶんイメージはすでにあつたんだろう。

だがお母様や。あなたいつたい何を話したんですかね。全く読めないから怖いんですけど。

横を見ると彩は嬉しそうに笑つてるし、斜め前に視線を変えると母親がピースしながら笑つてるし。むしろそれが怖さを助長させているんですけどね。気になるけど聞きたくないつてこういうことなのか。でも、少なくとも父親に悪印象を抱かれてはいないらしい。そこは一安心だな。

「だが彩はやらん！」

「あらあら。お父さん必死ね〜」

「そりやもちろん彩には幸せになつてもらいたいさ。娘の幸せを望まない親などいないからな。彩に誰も言い寄つてこなかったのには『見る目がない男子め!』ぐらいに思つていただけども!」

「女子校ですからむしろ当然でしょう」

「バイトを始めると聞いて、良からぬ虫が言い寄つたときには叩き潰してくれ!と意気込んでみれば、君のような子と仲がいいときた。そこに文句はない。会つてみて納得したさ。だがしかし! 彩に彼氏はまだ早い! しかも彩はアイドルを目指しているんだ! ……俺はこの矛盾した気持ちはどうすればいいんだ?」

「父親ではない俺には分かりかねます」

分かるわけがない。愛娘の将来を危惧する父親の気持ちなんて。俺の父親はただのクズだしな。好き勝手に奪い去るだけの男。だからこそ俺には父親の気持ちなどさっぱり分からない。

ただ、共感できることもある。彩に幸せになつてほしい。それはたしかに俺だつて思う。俺にはそれができないんだけどな。彩のためにしてやれることなんて大してない。彩が一番望むものを俺は与えてやれないから。

「アイドルは恋愛禁止。その固定観念が無くなれば芸能人たちはもつと生きやすい世界を生きられるのだろうが、残念ながらその風潮はなかなか変わらない。『誰のものではない』という点にも価値があるらしいからな。……本当のファンとはそういうものなのか？ 本人の幸せを望むのがファンではないかね？」

「俺もそう思いますよ。ただ、厄介なファンというのは『誰のものではない』を『みんなのもの』と捉えてるとは思えないですね。全員がそうではないと分かっています。『誰のものではない』、『自分のもの』と無意識下に思っているのでしょうか。だからこそ交際や結婚に過敏に反応するんだと思いますよ」

「なるほど。……君はどうなんだい？」

「……俺は彩のことを応援してますが……自分のものとは思いませんね」

「……そうか」

どの口が言っているんだろうな。彩を独占していた人間が。彩の心を傷つけている人間が。なんでこんなことを言っているんだろうな。彩を応援しているのは本音だ。たしかに本音なんだ。ただ、後半は自分に言い聞かせてるだけのようにはしか聞こえない。

話はこれで終わりとなり、俺は彩に連れられて彩の部屋へと行く。前に来た時と大して変化もない、彩らしく可愛らしい部屋だ。部屋に着いた途端俺は彩に腕を強く引つ張られ、ベッドに横並びで座らさせられる。

「彩？」

「……玲音さんは……やっぱり応えてくれませんか？」

「……そうだな。俺は彩に応えられない。これだけは……。彩のことが嫌いってわけじゃないんだがな……」

「分かってます。分かってる……つもりです……」

無言になったところで、重ねられてる手が震えてることに気づいた。俺はその手を黙って握る。きっとこれが駄目なんだろうな。こうして彩に応えてしまうから。だが、俺はこれを綺麗さっぱりやめることなんてできない。彩には笑っていてほしいから。泣いてほしくないから。最低な行為だとはい覚している。気持ちを知っていて、それには応えずに優しくするのだから。

「玲音さん。……これから、あんまりバイト入れないかもです」



「……今年が最後のチャンスだもんな」

「はい……。もう今年しかないから、だから……」

「こつちのことは気にせず集中したらいい。彩の夢を今年で掴みとれ」

彩の目を見て話す。申し訳なさそうにする彩に気にしなくていいと伝えるために。彩がそうするのは、俺のことを気にかけてくれるから。去年のことがあるからなんだ。だが、それはもう大丈夫だ。彩にこれ以上重荷を背負わせるわけにはいかない。自分の足で立てるさ。

「アイドルに、なれたら……。もつと会えなくなりますよね。……バレたら波風立ちやつて、事務所にも玲音さんにも迷惑かけちゃつて」

「それはどうだろうな？」

「え……」

「だって俺と彩は同じバイトの人間だろ？ それで否定しきれるわけじゃないけど、会っていてもおかしくはない人物だ。こうして二人きりつてのは難しいかもしれないがな」

彩が望んでいるのはその難しいことなんだろう。だが、それが一番いけないと彩だつて分かつてる。俺としては事務所の方なんて知ったことではないのだが、彩にバツシングがいくのは困る。俺の存在で彩の夢を壊しちやいけないから。

こつちに持たれてくる彩を受け止め、彩の髪を今度はそつと撫でる。改めてこれからのことを考えたら、今日が最後だろうから。最後だからつて甘やかしていいのかは分からないが。

「何かあつたら遠慮なく電話をしてきたらいい。二人で会うなら、俺達と一緒にいてもおかしくない場所で落ち合えばいい。俺にできることは少ないが、それでもできるだけ彩の力になるから」

「……玲音さんは、やつぱりズルい人です。私、諦められなくなるじゃないですか」  
「……ごめん」

「えへへ。ちよつと揶揄つちやいましたね。でも、私が困つた時はお願いしますね？」  
玲音さんから元気もらうのが私には一番効果があるんですから」

この子は俺にズルいつて言ってくるけど、ブーメランな気がするんだよな。たしかに諦められないつて言ってるけどさ。遠慮なくこつち落とそうとしてるよね。落とされ

たら落とされたで俺は彩に向き合えないことで後悔するんだけども。ゆりもゆりだが、彩も彩で俺からしたら眩しすぎるんだよ。

笑顔で腕にしがみついてくる彩のデコを指先で突きながら、俺はふと疑問に思ったことを聞くことにした。前回と同じ流れはゴメンだからな。

「ところで彩。俺はどこで寝ればいい？」

「ここにです♪」

「駄目だろ」

「それこそ駄目ですよ」

彩が全体重をかけて俺の腕を引っ張り、俺の体勢が崩れた途端俺の頭に腕を回してくる。本当に彩なのか疑いたくなる早業と力業に負けて俺もベッドに寝転ぶことになった。

そこから力業で抜け出そうとした途端涙目になるという反則コンボに負け、俺は結局ここで寝ることになった。女の子って怖いな。彩にも警戒力上げないと。

次の日の朝にはゆりから連絡が来ていて『丸山さんと寝た件について』とだけ書かれていた。なんでそこまで知ってるんだろうな。彩の家泊まることも言っていないのに。

## 3 話

りみの入学式が終わり、始業式も終わり、俺たち三年生は嫌でも進路と見向きしなければいけないようになった。うちの学校は生徒の半数が就職。残りの半数が進学。毎年ほぼ同じ数だけ別れるらしい。当然勉学に励む者と、企業研究に励む者に別れる。企業研究の方はどれだけやるかが本人次第だし、学校側もどちらかといえば面接対策の方に力を入れてる。

そんな学校生活へと一変した中で、最後のイベントとも言える修学旅行が早々にあ  
る。日程は三泊四日。場所は沖縄だそうだ。馬鹿たちが地元警察の世話にならなければいいな。

「用意はだいたいこんなところか」

『レオくん起きてる?』

「起きてるぞ。まだ寝る時間でもないしな。……入ってこいよ」

『うん』

まだ夜の10時にもなっていない。いくら睡眠時間を必ず確保する俺でも寝る時間ではない。それはゆりも知ってるのだが、夜に部屋に訪れる時は必ず起きてるかを聞かれる。

しおりを見ながら荷物を小分けし、忘れ物がないかを確認しながらトランクに入れていく。ふと目線を上げればゆりがドアのすぐそばで立ち尽くしていた。いつもなら中に入ってくるのにな。

「どうした？」

「今は邪魔かなって……」

「用意はほぼ終わってる。邪魔にならないから気にするな」

手でベッドに座るように指示すると、ゆりはそれに大人しく従ってベッドに腰掛け、俺の用意が終わるのを見守る。もう全員風呂を済ませているから、ゆりも部屋着になっている。珍しく落ち着かないのか、自分の髪を手櫛で梳いたりいじったりしてるけど。

「今日は何の用事だ？」

「……その言い方だと私がいつつも用事を持ちかけてるみたいじゃん」

「事実だろ。それ以外で部屋に来たことないくせに」

「うっ……」

荷物をトランクに入れ終わり、俺は立ち上がってゆりを冷めた目で見る。ゆりは気まぐすそうに視線を逸らすだけで言葉を返さない。凶星だからなんだろうな。俺はそれに溜息をつけてゆりの隣に腰掛けた。時間があるとはいえ明日はいつもより早く家を出る。だから話があるなら遅くならないうちに終わらせたい。

「それで？ 話ってなんだよ」

「えっとね……」

「……聞くだけ聞いてやるから遠慮するな。どうするかはそれから決める」

「けち。……修学旅行の日程でさ、自由行動の日が一緒でしょ？」

「諦めろ」

「まだ何も言っていないじゃん」

「これはもう言ってるようなものだろ。その後が続く言葉なんて手に取るように分か

るぞ。そしてその前日のお互いの予定からして合流するのが面倒だ。それで時間を潰したくはない。そのことをゆりに伝えたら、ゆりは分かりやすく機嫌を悪くした。わりかし子供なんだよな。こういうところ成長してほしいね。

「いいじゃん。一緒に過ごそうよ」

「グリグリメンバーで過ごせよ。四人で過ごせる時間があとどれくらいなのか、分かりきってるだろう？」

「……でも……それならレオくんと五人で……」

「俺はメンバーじゃない。名義上のサポーターだ。諦めろ」

「……レオくんのバカ」

~~~~~

結局レオくんと約束は取り付けられなかった。五人みんなで思い出を作れる機会になると思ったのに……。もちろんレオくんと一緒にいたいって気持ちも強かったんだけどね。でも今回は、それ以上に五人での思い出を作りたいかった。私たちの進路を考えたら、この最後の一年でいっぱい思い出を作りたいんだもん。

「ゆりちゃん仕方ないぞー？ 萩近は頭が固いからなー」

「そうそう。萩ぼんはカツチカチー。だから、四人でいっばい楽しんで『勿体無いことした』って思わせるのだ！」

「……レオくんはそう思わない人だよ」

「んがっ。ここに来て萩ぼん検定一級のゆりちゃんの実力が……」

そんな検定ないけどね。ひなに一回もレオくんのことと採点されたことないもん。それに、レオくんのことを理解してるなんて口が裂けても言えない。私は未だにレオくんのことを知らないんだから。まだ、レオくんの家族のことを知らない。レオくんの進路のことも聞いてない。何も……。

「おっ、鰐ちゃん戻ってきた」

「みんなお待たせ。班長会議が思ったより長くて」

「待つてないぜー。今萩ぼんのことを諦めきれないゆりちゃんを、どう諦めさせるかで悩んでたところ」

「……そう。ひとまずお風呂に行かないかしら？ 大浴場みたいだし、気分転換になる

と思うわよ」

「行く行くー！　ゆりちゃんは？」

「……行く」

レッツゴー！　と意気揚々とするひなに手を引つ張られて部屋から駆け出す。ひなはお風呂の用意と着替えも持つてるけど、私はいきなり引つ張られたせいで着替えも用意も持つてない。それを言ってもひなは止まってくれないし。というか、たぶん聞こえてない。大浴場つてことで弾けてるから、誰の声も届かない状態っぽい。

「とうちゃーくー！」

「なんで……お風呂の前に……こんなに、走らないと……いけないの？」

「いい運動でしょ？」

「そうだけど……いきなりだったから、私用意持ってきてないよ？」

「……ゆりちゃんつて露出癖あるの？」

「ないよ！　ひなのせいだよ！」

笑顔でなんてことを言うんだろ。近くにいたクラスの人が目を見開いてちよつと距

離取ったじゃん。まったくのでまかせなのに。これ最悪の場合誤解のまま広まっちゃうやつじゃん。学年中に広がったりしたら明日からの修学旅行が辛いんだけど……。

「そんなゆりちゃんでもひなちゃんは好きだよ?」

「私今否定したよね!?!」

「あー、急いで追いかけてきたけど、案の定なことになってる……」

「はいこれ。ゆりの用意と着替え」

「あ、ありがとう」

遅れてきたリイと七菜のおかげで私の変な噂が立つ前に落ち着いた。一件落着だつて楽しそうに言うひなには、あとで何か罰ゲームを用意しないとね。リイに任せるのが適任って気もするけど。

大浴場はすごく広かった。温泉じゃないらしいんだけど、50人は余裕で入れるんじゃないかってくらい浴槽が広いし、何種類かに分かれてる。私達はさっそく体を洗ってからお湯に浸かることにした。

「リイちゃん見てみてー!」

「んー？」

「トリプルアクセル!!」

「するな馬鹿！ 他の人が危ない！」

「ひな。お風呂では静かにね」

「はーい」

いきなりひなが浴槽から出てトリプルアクセルするなんて……。誰も予想できないよそんなこと。まさか成功させるとも思わないし、着地もしっかりできて綺麗だったけど。裸ですることじゃないよね。

七葉に注意されたひなは、大人しくなって今度は浴槽内を肩まで浸かりながら動き回ってた。泳いでるわけじゃないから、誰も何も言わないんだけど、この子はジツとはできないのかな。

「温泉じゃないはずなのに、温泉みたいに安らげるわね」

「そうだね。広いからかな？」

「かもしれないわね」

『ここだー！ ここからなら覗けるー！』

「分かりやすい覗き犯だね」

「……? このホテルって花女以外の学校は来ないって聞いてただけど」

七葉が首を傾げながら悩んでる。それを聞いて私達も首を傾げた。だって、ホテルの入り口のところに団体の名前が書かれてて、そこには花女しかなかったはずだから。一般の人の可能性もあるんだけど、向こうの騒がしさからして多分違う。それに、こつちも知らない女の子たちが増えたし。

「お隣いいですか?」

「あ、はい」

「失礼します」

丁寧な口調の人。たぶん同い年なんだろうけど、とてもそう思えない。七葉に近いタイプだけど、七葉ともまた違う感じ。……って、この人たしかバレンタインの時にレオくんといった人なんじゃ!

私がマジマジ見ちゃったからだね。彼女は恥ずかしそうに照れ笑いしちゃった。私は慌てて謝って、視線を逸した。なんだろう。フツたって聞いたのに、なんでか胸がざ

わざわする。私じゃ勝てない感じって言えばいいのかな。なんでレオくんがフツたのか全く分からないよ。

「たしか……萩近くんとよく一緒にいる花女の方ですよね？」

「うえっ!!? なっ、え？」

「ふふっ、すみません。少しだけ有名なんですよ? 波風立てないようにしてる萩近くんを慌てさせることをする人って」

「あ、あはは……」

「ゆりちゃん有名人だね」

有名になったのって、私が正門前に行ったことがあるからだよね。その時にレオくんがいつも大変そうにしてるし、よくその後走る羽目になってる。私のせいだけど。

それはともかくとして、この人がここにいるってことは、レオくんの高校がこのホテルに来たわけで、向こうで騒いでるのもその高校の人たちだよ。レオくんは覗きなんてしないだろうし、あれだけ騒いでたらすぐにお風呂出てそう。

「……何? ひな」

「ゆりちゃん今萩ぼんのこと考えてたでしょ？」

「へ!？」

「会いたいのなら会ってきたら？」

「それは……」

ひなはなんてことを言ってくるのだろう。たしかにレオくんがいるって分かったら落ち着けなくなっただけ。今すぐに出て連絡取りたいんだけど。でも、今隣にはレオくんがフツた相手がいるわけで。すごく気まずいんだよね。

「私のことなら気にしないでください。あなたに会ってみて分かりましたから。萩近くにいられた理由が」

「え!？　なんで……。私はますます分からなくなっただけですけど……」

「ふふっ、それなら教えない方が良さそうですね」

『……あつ！　マドンナがいる！　しかもその横に何回かうちに来てたあの可愛い子も！』

『なに！　その場所代われ！　萩近は部屋風呂で済ませるつつつてたからチャンスだ！』

あ、レオくんは部屋にいるんだ。そもそも大浴場には来なかったんだね。騒がしくなるのを予想して最初から避けてたのかな。レオくんらしいと言えばレオくんらしい。とにかく、レオくんの居場所が分かってよかったよ。でも今は出られない。見られてるってわかってて浴槽から出るなんて無理。見られたくない。

「うちの男子たちがすみません」

「大変そうですね」

「萩近くんがいればこうならなかったんだと思いますけど、彼はめんどくさがるので」

「ですよ。巻き込むなって言って距離を取りますよね」

「そうなんです。昨日の団体行動の時も——」

まさかここからレオくんの話で盛り上がるとは思わなかった。しかも相手は恋敵みたいな相手なのに。それに、聞く限りレオくんって彼女のこと気に入ってるよね。間違いない気に入ってるよね。丸山さんほどじゃないにしても、普段から気にかけて手伝ってるよね。

羨ましい。レオくんと同じ学校で、同じクラスで、今回は班も一緒だなんて羨ましい。

「ゆりも良い思いしてるでしょうに……」

知らない知らない。七菜が横で何か言ってるけどそんなこと知らない。私はレオくと学校生活を過ごしてみたかったんだもん。出会ったのが高校からだから無理なんだけどさ。でも、好きになったんだもん。ずっと一緒にいたいって思うんだもん。

『クソっ！ 湯船から出ねえ！ 萩近に自慢してやりてえのに——お、萩近良いところに……って、は!? なんてお前がここに……しかも部屋着で！ たんま！ 頼むから慈悲を……ぎやああ!!』

「んー？ 萩近来たのか。部屋着で」

「これは愛かなー？ ゆりちゃんへの愛が成せる技かなー？」

「揶揄わないでよ。……レオくんはそういうのじゃないだろうから……」

「……明日私たち自由行動なんですよ。たしか花女さんもそうでしたよね？」

リイとひなが私を揶揄ってくるのをしよんぼりしながら躲していると、彼女が私たちの確認を取ってきた。なんで知られてるんだろって思ったけど、学校外での友人関係も当

たり前だし、知ってても不思議じゃないか。

「萩近くん一人だけ別行動させますね」

「え？ それはそれで問題あるんじゃない？」

私が言えたことじゃないんだけどね。だって私は修学旅行に来る前にレオくんにそうさせようとしてたんだから。でも、やっぱり班の人からそう言われると躊躇っちゃう。しかも、レオくんを想う相手から。彼女は気にしないようで、華のような笑顔で首を振った。自由行動は本当に自由みたい。班の形を崩しても問題ないって。

「萩近くんを誘うのはご自分でしてください。この後の班内連絡で各々自由行動と通達しておきますので」

「ありがとうございます」

「よかったわね。ゆり」

レオくと過ごせる……。私が諦めたことを、彼女のおかげで実現できる。レオくんは捻くれてて、頑固なところもあるけど譲らない。思い出を作るんだ。

お風呂から上がって、一旦部屋に手荷物を置きに行ったら、財布とスマホだけを持って部屋を出た。七菜たちは部屋で待つてゐるみたい。みんなでお願いに行つた方がレオくんを説得できると思つたんだけど。

仕方ないから私はレオくんに電話して、エントランスに来てもらった。ホテルの人ぐらしいか他にいないし、バレないで済むよね。

「電話の時点でバレたけど？」

「あれ？」

「まあいいけどさ。……諦め悪いんだな。まさか協力者が出るとは思わなかつたぞ」

「お風呂でたまたま会つたの。……ね、明日一緒に……グリグリメンバーで過ごそう？」

「いいぞ」

「すぐには納得してくれないとは思……え？　なんて？」

私がキョトンとしてると、レオくんがムスツとしてため息をついた。レオくんこのうういう瞬間は子供っぽいんだけど、すぐにそれもなくなる。レオくんにそつと髪を撫でられてから頬に手を添えられる。レオくんの表情も優しい表情に変わつてた。そんなレオくんにドキツてしちゃうけど、今は抑えなきや。私はレオくんが好きだけど、資格

なんてないんだから。

「明日はゆりたちと一緒に過ごす。そう言ったんだよ。嫌か？」

「そんなこと……ないけど……。でも、なんで？　ずっと断つてたのに……！」

「思い出を作りたいつてゆりの考えに共感できたからかな。俺の進路からして、時間も限られてるわけだしさ」

レオくんが微笑むのが嫌だった。だって、もう会えなくなりそうな気がして。レオくんが遠くに行つちやいそうで。来年の春からは側にいられなくなりそうで。

——嫌……そんなの嫌……！

「ゆり？」

私の頭が認識した時にはすでにレオくんを抱きしめてた。レオくんの腕の中にいて、力いっぱいしがみついてて。

「とおくに……いつちやうの？　あえなくなるの？」

「まあ……会える機会は激的に減るだろうな」

「いや！ そんなのいや！」

我儘だ。自己中だ。レオくんの進路なのに。レオくんがずっとしてた人生設計がそういう道だっただけなのに。私に口出しする権利なんてないのに。

でも私は我慢できない。レオくんと離れたくない。付き合っていないけど、想いも伝えてないけど。答えを突きつけられるのを先延ばしにして、今の甘えられる状態に甘えているだけ。そんな私なのに、グリグリメンバーとも進路は別れるのに。

「分かってくれとは言わない。納得できなくていい。けど、俺は俺の道に行く」

「……ばか……！」

「ああ。馬鹿だよ。俺はこういう奴だ。それはやりがよく知ってるだろう？」

知ってる。嫌というほど知ってる。自分にとって重要なことだけは、誰になんて言われても曲げない人だっただけ。お願いしても止まってくれない。私と同じ場所にはいてくれない。

私は、こういうところを知らない。レオくんがどこ見てるのか。本当に同じ場所に立

てているのか。私は把握できてない。

「一緒に……いてよ……!」

「期限付きなんだよ……!」

レオくんの腕が背中に回されて、優しく抱きしめられた。そつと髪も撫でてくれる。レオくんにごうされるのは好きで、ずつとごうしていたい。だけど、これももう回数に限られてるんだね。

~~~~~

「とうとう萩ぼんはゆりちゃんに籠絡されたか!」

「されてねえわ」

「えー? ……ま、いや。だいたい予想つくし」

「萩近も殊勝になったか」

「鵜沢も分かるのかよ……!」

レオくんが一緒に来てくれる。それが分かった途端二人がニヤニヤしてたのって、こういうことだったんだね。レオくんをイジれるチャンスだから。

「二人なりに楽しんでるんでしょね。こうして五人でつていうのは両手で数えられる程度だったから」

「そういえばそうだね。……今年はいっぱい五人で過ごしたいね」

「……彼がSPACEに来れば増えるのでしょけど、そこは強要できないものね」  
「うん」

私達はライブをする時は必ずSPACEでやる。学校の文化祭でつていうのもあるけど、それ以外は全部SPACE。そしてレオくんはSPACEに来ない。妹さんへの後ろめたさがあるから。その事情を聞いた私達もそこは弁えてる。その結果五人で何かをする。どこかへ行くつて回数が減っちゃつてる。

揶揄いをやめない二人の対応に追われてるレオくんは、それでも私からすれば楽しめるように思えた。本人はたぶん否定するけど、息抜きにはなつてはるはず。明るさがあるからね。

「ヒヤッホー!! これ楽しい!!」

「ちよつと目を離れたらこれか!」

「ひな! ハウス!」

「しよぼーん……」

なんでひなはいつの間にかセグウェイに乗ってたんだろ。たしかにどこかに行ってるなーとは思ったけど、まさかセグウェイに乗って帰ってくるなんて思わなかった。あれって安くはないと思うんだけど、しかもぶついたりして壊したら請求高そう。ひなはそんな失敗しないだろうけどさ。

私達は沖縄のいろんな文化が紹介されてる施設に来てる。テーマパークとも言えそうなお店だけね。そこに着いてちよつとしたら、ひながあんなことしちゃって。でも時間制だからって降りずにゆっくり移動してる。初めてのはずなのに、なんで使いこなせるんだろ。

「鍾乳洞行くんだっただな?」

「うん。入り口は向こうみたいだね」

「ひながあれを終えるまで入れないのだけどね」

回転しながら移動するっていう、セグウェイでやるもんじゃないようなことをして遊んでるひなに目を向ける。あそこまでやってると圧巻としか言えないんだけども、他の人の目が集まっててこっちはヒヤヒヤしてるよ。

ひなが無事にセグウェイを傷つけずに帰ってきたところで、やっと鍾乳洞に入るわけなんだけど。

「ひな何してんの？」

「レオぼんに引っ付いてるー！」

「なんで？ ひながそんなことする理由ないよね？」

「そうだね！ ゆりちゃんなら理由あるよね！」

「うん……じゃなくて！」

「ゆり……抑えられてないわよ……」

鍾乳洞へと入っていったから、私たちの話し声も大きくなるとそれだけ反響しちゃう。今のやりとも他の人に聞こえてるかもしれない。つい条件反射で言っちゃったけど、恥ずかしくて顔が熱くなる。リイとひながニヤニヤしてるのがちよつと追い打ちに



なるし、七菜の何とも言えない表情も軽く追い打ちだ。唯一の救い……とも言えないけど、先頭を歩いてるレオくんが振り向かないのはある意味助かってる。

「……あれ？ ひなはいつの間にレオくんのこと違う呼び方になったの？」

「今だけど？」

「レオくんはそれでいいの？」

「何言っても二十騎は聞かないだろ」

「……ばか」

「なんでだよ」

レオくんの馬鹿。やっぱり私以外の子だと簡単に許すんだから。ひなが意見を一番曲げないのはみんな知ってるけど、レオくんもレオくんで大抵だよ。そのはずなのに簡単に許すなんてズルい。私だけ損してる気分になる。

「まあまあゆりちゃん。玲音のこれは今に始まったことじゃないじゃん？」

「そうよゆり。玲音くんなんだから」

「そうだけど……。ねえ、なんで二人も今呼び方変えるの？ 私への当てつけ？」

「ゆりちゃんが怒ったー！ 玲音後は任せたー！」

「お前らまじか……」

七菜まで悪乗りするし。三人は奥に先に行っちゃった。だから、取り残されたレオくんの腕を思いつきり掴んで逃さないようにする。私ぐらいの力じゃ全然抑えられないけど、レオくんは振りほどこうとしないから効果はある。できるだけ落ち着いてレオくんに話を聞かないとね。

「ゆり。顔が笑ってないぞ」

「そう？ そんなのは今はどうでもいいの。さっきのことについて詳しく教えてほしいんだけどな〜？」

「本人たちが言ってた通りだ。今日勝手に呼び方を変えられた。それだけだよ」

「ふーん？ けど私の時は全然許してくれなかったじゃん？」

「前にも言ったろ。ゆりのおかげでちよつとは思考が柔らかくなったって。それより俺達も行こうぜ。時間は限られてるんだからな」

「あ……」

腕を掴んでた私の手は振りほどかれた。けど、その代わりにレオくんの手が私の手と繋がれた。レオくんは何も言わずに歩き始めて、私は手を引かれる。だんだん今の状況を飲み込めたら、レオくんの方からこうしてくれたのが嬉しくって歩くペースを上げた。隣並んだところで歩くペースを合わせて、レオくんの肩に頭を預ける。

「……歩きにくい」

「慣れて」

「無茶苦茶だな」

「これも思い出作りだから」

「そう言えば何でも許されると思うなよ？」

「えへへ」

口では離れるように言うけど、振りほどこうとはしなかった。レオくんの中で、このレベルはギリギリ許容できるってことなんだろうね。それはつまり、今日一緒にいる間はこうしていいってこと。たぶん帰ってからはさせてくれないから、今日一日時間いっぱいしようって。

「ヒューヒュー。熱いねお二人さーん」

「二十騎。お前後で覚えてろよ」

「いいじゃないじゃない。写真撮ってあげるからそこに立って〜」

「ほんと話聞かないのな……」

ひな相手にペースを掴めるわけもなく、レオくんは諦めてひなに言われた通りの場所に立った。当然一緒にいる私もその横に立つわけんだけど、なんでここで写真撮るんだろう。しかも三人は写らないみたいだし。そんな疑問をよそに、ひなはいつも以上に笑顔を弾けさせてシャッターを押した。あそこまでだと絶対何か企んでるよね。もう遅いけどさ。

「ひな。ここって何なの？」

「初恋広場だよ〜」

「ふえっ!?!」

「……小学生かよ」

私だけ顔が赤くなって恥ずかしくなってるのが納得いかないけど、でもレオくんだけか

ら仕方ないか。私が勝手に好きになっただけなんだから。レオくんの反応が薄かったせいで、ひなはちよつとつまらなさそうに頬を膨らませる。私まで巻き込まないでよね。

この後は出口まで途中のを眺めて楽しみながら歩いた。一番気に入ったのは青の泉つて所かな。本当に青色でびっくりしたよ。青色らしい青色というか、例えての青じゃない綺麗な青色。あの紅葉とはある意味正反対かな。

鍾乳洞の端まで行ったら出口に繋がってて、そこから出た後はガラス工房に行つて、ガラス作りを体験させてもらった。私達はガラスのコップを作ったんだけど、レオくんだけは別のを作った。レオくんが作ったのは一輪挿し。時期的に誰かへのプレゼント用かな。

「今から美ら海水族館行こうよ！」

「時間厳しいんだがな……」

「とか言つて。玲音くん準備してるんでしょ？」

「したのは俺じゃないけどな？」

「この感じだと、もしかしくなくても私だけが知らないことだよ。仲間外れみたいな感

じがして寂しいんだけど。リイは全然教えてくれないし。七菜も微笑んでるだけで教えてくれない。若干拗ねちゃった私をレオくんが手を引いてくれて、私はそれに従って大人しく歩いた。向かった先はまさかの駐車場で、私達は一台の車の所に移動した。

「……まさか……車乗るの？ 誰が運転するの？」

「え？ レオぼんだけど？」

「ええ!!? 免許持つてるの!?! いつ取ったの!?!」

「この前」

いやいや本当にいつの間にとったの。私そんなの全然聞いてないし、気づかなかったんだけど。だっていつも家を空けるといいうか、学校行ってそのままバイトに行ってるし。休みの日だって朝から夜までいないし。

「ゆり。乗らないなら置いてくぞ」

「乗るからそれはやめて」

レオくんが運転席に座って、私は助手席に座った。後部座席は三人に先に抑えられて

たからね。露骨というか、隠す気がサラサラないよね。助手席だからどうってわけでもないけどさ。

「んじや行くか。時間も無いし、高速を飛ばして行くから全員シートベルトしとけよ」

「もちろんよ」

「あれ？ この車家にあるのとなんか違うね」

「家にあるのはATで、これはMTだからな」

「なにそれ？」

「免許取るときに学べ」

レオくんは本当に初心者なのかなってぐらいスムーズに運転してた。家にあるのと違って運転中に何回もレバー動かしてたね。レオくんが言うには、それが最大の違いなんだって。それと自分で調整できるから楽しいんだとか。珍しく生き生きしてたけど、程々にさせないと危ないやつだよな。

「美ら海だ〜！ 可愛い子探してくるー！」

「駄目よひな。みんなで回るって決めたでしょ？」

「んー……そうだね！ その方が大事だね！」

「さっさと回るぞ」

高速道路で飛ばしてくれたとはいえ、安全面も考慮しての速度だったから、1時間は移動で使っちゃった。レオくんは今日が帰りだから時間はそんなに多くない。すぐに入場券を買って、館内マップ片手に見て回った。自分たちの希望を出し合って、七菜が最適ルートを作る。七菜に先導してもらって私達は水族館を堪能した。魚の種類が多かったし、ドーム状になってる所とか凄かったな。360度どこを見ても魚が泳いでるんだもん。海の中にいるみたいだった。

「で、案の定こうなるわけか」

「あはは……、みんな露骨だよね」

「そろそろ出ないといけないんだがな……。連絡は入れとくか」

スマホを取り出して駐車場に集まるようにレオくんが連絡を入れる。レオくんは一応グリグリของกลุ่มプチャットに入ってるから、それでみんなに連絡ができる。私もなんとなく自分のスマホでそれを確認して、……寂しさを覚えた。私だって明日には帰



る。一日ズレてるだけ。またすぐに会えるのに、それなのに離れたくないって思う。

「レオくん……」

レオくんに手を伸ばす。服を掴んだら、レオくんも見てくれるから。

「ん？ ……はあ。仕方ないやつだな」

「ごめん……」

「いい。慣れたから」

スマホをポケットにしまったレオくんが、一旦私の手をどけて体を引き寄せてくれる。私はそれに甘えてレオくんを預ける。私がこうするだけだったら、レオくんは支えるために強く抱きしめてくれるから。

「誰かに見られても知らないぞ？」

「その時は責任取って」

「無茶苦茶なこと言うなよ」

別に見られたって私は困らないもん。恥ずかしいのは恥ずかしいけど、でも嘘はつきたくないから。資格なんてなくなつて好きな人は好きなんだ。むしろ日に日にこの気持ちが大きくなつてゐるぐらいだよ。

でも、甘えられる期間は決まつてるから、だから、レオくんのことを少しは知らないといけない。家族関係のことは全然教えてくれないし、妹さんのことは絶対無理。だから、進路のことを教えてもらおつかな。レオくんが目指してる場所を知りたいから。

「……レオくんはさ、高校出たら……どうするの？」

自分でも驚くことに、声が全然スムーズに出ない。震えちゃつて、詰まっちゃつて、胸も苦しくて……。それはきつと、知ったらレオくんが遠のいてしまうのを予感してるから。

「言つてなかつたな。俺は

——日本を出るよ」

「……………え」

——君はいつだつてそうだ

——唐突で、何考えてるか分からなくて

——そして

——私が見えてない景色を見てる

## 4 話

俺が通ってる学校と花女の修学旅行先は同じで沖縄だったが、日程は若干ずれている。だから、俺が帰ってきた次の日にゆりたちも帰ってくる。そのはずだったのだが、天候が荒れたらしく飛行機が飛べないんだとか。それにより、ゆりたちの帰宅はさらにズレ込むこととなった。そのズレ込んだ日がSPACEでのライブの日なんだけどな。

「お姉ちゃんたち……間に合うかな？」

「さあな。順当に考えれば間に合うんだろうが、一日経ったって飛行機が跳べてないとなると厳しいだろうな」

「そんな……！」

りみは本当にゆりが好きだよな。ゆりに憧れて、ステージで輝いてるゆりを見るのが好きだ。だからこそ、ゆりたちがライブに間に合わない可能性が出てきたことに、不安を覚えている。かと言って俺達でどうにかできるわけでもない。飛行機を運転できる

わけがないからな。

「まだ間に合わない」と決まったわけじゃない。飛行機もまだ飛んでないってだけで、今日には飛ぶはずだしな」

「……うん」

どうにも駄目だな。りみからは一応慕われているわけだけど、俺じやりみの不安を取り除き切ることができない。引っ込み思案なこの子にいつも光を当て続けていたのは他でもない。姉であるゆりだ。詳しくは知らないが、ずっとそうだったんだろう。りみがゆりを慕い、ゆりはりみの期待に応えるために努力してきた。二人の絆も信頼も強い。その代わりに俺がなれるわけがない。

「ライブ会場には行くんだろ？」

「行く」

「学校から直接……は、時間が余るのか」

「うん。だから帰ってきて着替えていくかな。レオ兄ちゃんは？」

「……俺はSPACEには行かない。ライブハウスの前までは送るから」

「……………うん」

見るからに気を落としてるな。考えてみればりみと一緒にゆりのライブを見たことはないか。りみは一緒に見に行きたいんだろうが、俺はSPACEに入るわけにはいかない。オーナーから出禁をくらってるわけじゃないし、他の誰かに止められてるわけでもない。ただ、俺が行こうと思わないだけ。ちっぽけなプライドだ。

りみとの会話をここで区切って家を出る。途中までは道が一緒だから、それまでは学校の話をして歩く。話題を変えないとりみの気が沈んじやうからな。それに、最近りみが知り合った子がどうやら面白い子らしいし。いろんな子に話しかけて、自分を偽らないうで活発に行動する子。振り回されたら大変なんだろうが、気を許せる相手なら一緒にいて楽しいだろうな。

「この前はいろんな部活の体験してたんだっけ？」

「うん。でも今はバンドメンバー探してるみたい」

「バンドね。りみは参加しないのか？」

「私は……………」

「りみに足りないのはあとちよつとの勇気だな。悩んでる時点で向き合えてはいるんだ

から」

りみがそれを聞いて目を見開く。どうやら逃げてるだけだと思っただけだと思っただけだ。たしかにそういう見方だつてできる。強い人、厳しい人からしたらりみの今の状態は逃げてるだけなんだろう。答えを出せていないのだから。

だが、それは初めからできる人間の意見だ。そうではない人間だつて当然いる。りみもそうだ。そして、りみはバンドをやるかで悩んでいる。一度その子には断つたらしいが、断つておいて悩んでいるのだから、本音は見えてるようなもの。

だからこそ足りないのが”あとちよつとの勇気”なんだ。引つ込み思案な自分を奮い立たせる心。それを得るきつかけがあればバンドを始めるだろう。

分かれ道に着いたためにりみと手を振って別れる。学校まではあと10分程度だな。周りにはチラホラ同じ制服を着ている男女がいる。うちの学校は始業時間が遅めだから、この時間でも早い方だ。俺が早めに出てるのは、単純に人が少ないからだ。途中で歩道が狭くなる所もあるし、大人数だと窮屈すぎる。

「………」

修学旅行明けの学校ってやる気が出ないな、なんてことを考えていたら電話がかかってきた。携帯を持ってきてることが教師にバレたら面倒なのだが、この辺はまだバレない。

『あ、レオくん。飛行機の出発の目処がついたから連絡したんだけど……』

「その様子だとギリギリそうだな？」

『うん……。それで、もしものためなんだけど』

——S P A C Eで演奏してほしい  
時間を稼いでくれないかな』

「お前は知っててそれを言うんだな」

俺がなぜSPACEに行くことを避けているのか。観客として行くことさえ避けているのか。それを知らないゆりじゃない。オーナーから話を聞いているのだから。それなのにゆりはそんな頼みごとをしてきた。これにはさすがの俺も思うところがある。だからつい声が低くなってしまった。

『ごめん。でもSPACEで演奏したいから。ライブを諦めたくないから！ ……お願い……！』



「お前は本当に自分勝手な女だよ」

『わかっている。何言われてもいい。何でも言うこと聞くから!』

「馬鹿が。そう簡単に”何でも”なんて言うなよ。また間違えるぞ」

俺はそこで電話を切った。もうそろそろ教師たちの目が届く場所だから。電源を切ってカバンの中にしまいこむ。カバンの中までは探られることはないからこれで大丈夫だ。

~~~~~

学校から帰る時に「やまぶきベーカリー」に寄って、私が大好きなチョココロネを買った。その時に香澄ちゃんたちに会ったんだけど、二人も今日のライブを見に行くみたい。私はレオ兄ちゃんと一緒にライブハウスまでは行くから、その後二人と合流するつもり。

「それじゃありみ。ライブ終わったらまた連絡して」

「うん。……レオ兄ちゃんはやっぱり入らないの?」

「……………めんな」

レオ兄ちゃんが視線を反らして謝る。珍しいことだけど、だからこそレオ兄ちゃんがそれだけ気にしていることがわかる。詳しくは聞いてないんだけど、いつもレオ兄ちゃんを引つ張るお姉ちゃんでもSPACEだけは遠慮してるから、私も強くは言えない。

お姉ちゃんたちのライブを見たくないわけじゃない。最近だと時間を作るようにして、お姉ちゃんたちの練習を手伝ってるみたいだし。

「ううん。私こそ我儘言つてごめんね。また連絡するね」

「……………ああ」

無理に笑つてレオ兄ちゃんと別れる。私が演技できないのもバレバレみたいで苦笑いされちゃったけど、でも手を振り返してくれた。

SPACEの中に入って入場料をオーナーに支払う。オーナーにお姉ちゃんたちのことを聞かれて、順番が最後まで間に合うか怪しいってことを正直に答えた。嘘ついたり、願望を言ったりしてもオーナーや出演者のみんなに迷惑だから。

「二応他のバンドの子に時間を稼ぐようには頼むけど、それもやり過ぎるわけにはいかない。ライブ全体のバランスが悪くなるからね」

「……はい」

「……玲音の奴は今日も入ってこなかったか」

「入るわけにはいかないって言っていました」

「そうかい。ま、仕方ないね」

オーナーも事情を知ってるみたいで、気にかけてはいても踏み込まないようにしてる。その線引きはきつと私もできるようにならないといけないこと。大人になるのに必要なことの一つだと思うから。

オーナーとの話が終わったら中に進んで、先に来てた香澄ちゃんたちと合流する。香澄ちゃんはお姉ちゃんたちのバンドを見てキラキラドキを感じたんだって。キラキラドキドキが何かは分からないけど、ニュアンスでなんとなくだけど伝わってくるものもある。

「二人とも。ライブが始まるみたいだぞ」

「あれ？ もうそんなに時間経ったの？」

香澄ちゃんと話していると体感時間が短くなるね。私もまだそんなに時間が経ってないって思ってたんだけど、結構話してたみたい。

お姉ちゃんたちが間に合うかは分からない。でも、私がそわそわしてちやいけくない。私から香澄ちゃん達に伝わっちゃったら、そこからさらにいろんな人に伝わっちゃうかもしれないから。お姉ちゃんたちのバンド「Glitter*Green」は人気があるから、それを知ったらガツカリする人が大勢いる。

私にできることは、お姉ちゃんたちが間に合うと信じて、今演奏してる人たちのライブを見て、周りの人と同じように楽しむこと。

でも、それにも限界がある。だって、お姉ちゃんたちの出番がまだかまだかと待つ人たちが増えるんだから。それは香澄ちゃんと有咲ちゃんも同じみたい。

「あれ？ グリグリの出番遅くない？」

「何かトラブルでも起きてんのか？」

「りみりんは何か知ってる？」

「え、えつと……」

私が返答に困っていると、香澄ちゃんに質問攻めされたんだけど、有咲ちゃんが香澄ちゃんを止めてくれた。だけどそうすると今度は香澄ちゃんが控え室の方に行っちゃった。

私と有咲ちゃんは急いでその後を追いかけたんだけど、追いついた時には香澄ちゃんはオーナーと話をしていた。しかも、お姉ちゃんたちが間に合わないかもしれないってことを聞いてちゃったみたい。

「他の子が頑張ってくれてはいるが、ずっとそうさせるわけにはいかない。ゆりたちが来るのが遅すぎたら、今日のライブでのG l i t t e r * G r e e nの演奏はなしだ。そして、どんな事情があればライブができなかった場合、もう二度とSPACEでライブはさせない」

「そんな!」

「……なんとかしなくちゃ……!」

「おい香澄!」

香澄ちゃんは一人でステージに飛び出しちゃって、それを追いかけた有咲ちゃんもステージに飛び出しちゃった。さすがにもうステージに出ちゃった二人をオーナーも戻

せないらしくて、ため息をついて二人の様子を見た。香澄ちゃんは、一度深呼吸してから「きらきら星」を歌い始めて、有咲ちゃんもその巻き添えにあつた。

それでも私は凄いと思った。たとえ歌ってる曲が「きらきら星」でも、巻き添えにあつたとしても、それでもあれだけの人の前で歌えるのだから。

「私には無理だよ」

「りみはそれでいいのか？」

「え？」

突然男の人に声をかけられて、私はバツと後ろに振り返った。そこには来ないと言っていたはずのレオ兄ちゃんが立っていて。両手に楽器を持っていた。一つは私がお姉ちゃんから譲ってもらったベース。もう一つは、私の知らないギター。

「……玲音。いいのかい？」

「仕方ないさ。ゆりの馬鹿には後で文句を言う。だから婆さん。やり切るから俺がステージに立つ許可をくれ」

「ふん。その目親と同じ目をしてる今のお前にいちいち許可なんて出さないよ。好きにしな」

「ありがとう。……りみはどうする？」

レオ兄ちゃんは私にベースを渡しながら聞いてきた。ベースを渡したつてことは、ステージに立ってつて言ってるようにも思えるけど、優しい目をしてるから本当に私次第みたい。私はベースをギュツて握りながら顔を伏せた。

「私は……」

——ずっと憧れてた

みんなの前で演奏できて、みんなを笑顔にできるお姉ちゃんに

——ずっと目標にしてる

いつか私もそういう人になりたいって。お姉ちゃんに追いつきたいって。

手も足も震える。さつき観客席にいたから分かる。人の多さが。あれだけの人の前で、今最高潮に盛り上がってる人たちの前で演奏するなんて。そんなの私にはできない。怖い。

「りみ。俺たちも一緒だからな一人じゃないんだぞ」

「っー！」

「今りみの友達が二人で頑張ってくれてる。先に飛び出した子は一人でもできちゃう子なんだろうが、二人でやってるからこそあれだけ楽しそうにできるんだろう」

「香澄ちゃん……」

「二人ではできないことをみんなでやるんだ。それがバンドつてもんだろ？ りみは一人じゃない。あそこにいる友達と、今回だけだが俺と一緒に演奏しよう」

「レオ兄ちゃん……」

ずっと無理だと諦めてきてた。私にはどれだけ望んでも叶いつこないって。でも、レオ兄ちゃんが言うことだって間違ってるじゃない。お姉ちゃんも『みんなとやるともつと楽しいよ！』って言ってたから。お姉ちゃんでも一人じゃ厳しいのかもしれない。

だから……！

「いく。私……みんなと演奏する！」

「よく言った。ほら、行くぞ」

ギターを片手に笑うレオ兄ちゃんの手を取って私はステージへと歩いていく。歌つ

てた香澄ちゃんと有咲ちゃんもこっち気づいた。二人の視線がこっちに向いたから、お客さん達の視線もこっちに向く。それがちよつと怖くて、足が竦みそうになるけど、レオ兄ちゃんが隣りに居てくれるから私は香澄ちゃんの隣に行けた。

「りみりん……」

「私も、頑張るよ……!」

「っ! うん! そっちのお兄さんは?」

「今は自己紹介してる場合じゃないだろ。さっそくだが、この歌歌えるか?」

「はい! これも好きな歌です!」

「ならこれをやるぞ」

レオ兄ちゃんがスマホを操作してある曲を香澄ちゃんに見せた。香澄ちゃんは知ってるやつみたいで、有咲ちゃんも知ってる曲みたい。最後に私も見せてもらって、それが私も知ってるやつだって分かった。しかも、それは私が家でベースを触ってる時に弾く曲の一つ。

偶然ってわけじゃないんだよね。レオ兄ちゃんは私が練習してる曲だと知っててこれを香澄ちゃんと有咲ちゃんにも見せたんだ。

「グリグリの演奏前の前座だ。お前ら、あいつらが演奏する前にここの空気を白けさすなよ？」

レオ兄ちゃんがマイクを使ってお客さんたちにもう一度火をつけた。お姉ちゃんたちの人気を利用しての言葉。さつきまでの盛り上がりも把握しての言葉。レオ兄ちゃんはライブをしたことがないはずなのに、お客さんの心理を理解してる。

お客さんの盛り上がりを楽しんでるレオ兄ちゃんが私の方に視線を向ける。本当はキーボードもドラムも必要なんだけど、今はギターとベースしかない。リズムを作って全体を支えるのは私のベースの仕事。

プレッシャーが凄いけど、この曲はベースとギターが同時に弾き始めるから。だからレオ兄ちゃんもこっちに視線を向けてるんだ。香澄ちゃんも有咲ちゃんも見てる。でも、みんなの視線はプレッシャーにならなかつた。背中を押されてるように思えた。

——大丈夫だよ！

言葉にせず、ただ一度だけ頷いた。三人もそれに頷き返してくれた。さつきまでマイクがある場所に行くために、香澄ちゃんの横に立っていたレオ兄ちゃんが、私の隣に来てくれる。言葉もなく、アイコンタクトもなかつたけど、私達は同時に弾き始めること

ができた。

レオ兄ちゃんの演奏は凄かった。ペースを保っているのに、演奏が引つ張られる。胸が熱くなつて、気になってたお客さんの視線も全然気にならなくなる。そこに香澄ちゃんと有咲ちゃんの歌声も乗って、私達はこの一曲を無事に最後までやり切ることができた。お客さんも盛り上がってくれて、成功したことがわかる。

「いい演奏を聞かせてもらったよ」

「あ……お姉ちゃん！」

「ただいまりみ。レオくんもありがとう。それと……ごめんね」

「それは後でいい。今はやることがあるだろ」

「……うん。SPACE！ 遊ぶ準備はできてますか？」

お姉ちゃんたちの決まり文句。それに答えるようにお客さんたちから歓声上がる。やつぱりお姉ちゃんたちはすごいバンドなんだ。当たり前だけど、私よりずっとずっと遠いところに立ってる。

「ねえ、レオくん」

「どした？」

「君と歌いたい曲があるんだけど、いいかな？」

「……何歌う気だよ」

”あかほし明星”。それと”Emotional Daybreak”」

「っ！ ……調べたか」

『明星』。たしかお姉ちゃんがレオ兄ちゃんに一回だけ歌ってもらって、その時に初めて知った曲。それ以降お姉ちゃんはその曲が好きで、グリグリでも練習してたんだよね。

でも、レオ兄ちゃんが一回だけ披露したってことから分かるように、レオ兄ちゃんにとつて特別な曲。大切な曲。もう一つの曲はお姉ちゃんが練習してるのでしか聞いたことがない。だけど、これはレオ兄ちゃんも教えてなかったやつ。きつと一番この曲が好きなんだ。

「……俺が拒む権利なんてない。歌いたいなら歌え」

「うん」

楽譜や歌詞が書かれてる紙をお姉ちゃんたちが取り出した。香澄ちゃんと有咲ちゃんと私が曲を知らないから。私はリイちゃんと一緒にベースを弾く。香澄ちゃんと有咲ちゃんが一緒に歌詞カードを見て歌う。お姉ちゃんとレオ兄ちゃんが一緒にギターボーカルをする。

「呑まれるなよ？」

「レオくんこそ聞き惚れないでね？」

ひなちゃんがステイックでカウントを取り始める。私はリイちゃんのベースについていくことに必死になるけど、でもすごく楽しめてる。明星は激しくする曲じゃない。だからお客さんたちも聴き入ってる。そんな中で目を引くのは、やっぱり真ん中でギターボーカルしてるお姉ちゃんとレオ兄ちゃんだった。

曲を壊さないように、大切に。でもそれぞれの個性を出してる。二人とも引つ張るような演奏なのに、ちよつと違う。若干レオ兄ちゃんの方が強引というか、熱い感じ。

間奏に入ると、お姉ちゃんとレオ兄ちゃんは同時に左右へと体の向きを変えて背中を合わせる。打ち合わせなんてしてない。合図なんて一切ない。だけど、二人とも同時に動いて全く同じ動作をした。きつとこの二人だからできること。

Emotional Daybreakの時にはレオ兄ちゃんはギターをどけて、片手をお姉ちゃんの肩に回して引き寄せた。反対の手で握ってるマイクを二人の間に持っていく。一つのマイクに二人の歌声が注がれて、それがライブハウスに響き渡る。この二人は間違いなくこの場で一番輝いてて、みんなを引き付けてる。この瞬間は間違いなく二人は同じ景色を見られてる。

この二人は早く付き合っちゃえばいいのにね。
でも

——この光景はもう見られないのかな……

5 話

高校三年生となり、文化祭もこれで最後だ。最後だからどうするってわけでもないし、逆に無碍にするわけでもない。ただ、去年まではなあなあで過ごしていた文化祭だが、今年はグリグリメンバーとの思い出を作るっていう目的がある。文化祭をどう過ごすかを前もって意識するだけでも、不思議と変わってくるものだ。

「ゆりちゃんとデートすればいいんじゃない?」

「人の心を読むな。それとゆりとはそういう関係じゃない」

「意固地だね。見方を変えるんじゃない?」

「そう言った覚えはないぞ」

背に飛び乗ってくる二十騎を振り払う。すでに花女の中にいるから、周りの視線が痛い。男からは嫉妬の視線。女からは温かい目と何してるんだという冷たい目。

女の方は仕方ない。そうなるのも分からなくはない。だが男ども。お前らは騙され

てるぞ。二十騎は超面倒なんだからな。こいつは黙っていれば美少女なだけで、その化けの皮を剥がせば面倒なやつだ。

引き剥がしたところでまた飛びついてこようとすると二十騎を抑えていると、一際冷たい視線を感じた。凍傷でもさせられるんじゃないかと思うほど冷たい視線を。さらに面倒な事態になったことに落胆しつつ、片手で二十騎にアイアンクローをしながら後ろを振り向く。

「こんなとこで何してるのかな？」

「見ての通りだ」

「ふーん？ 文化祭を私と回ってくれるって言ってたのにね？」

「それも言ったが、一応グリグリメンバーとも回るって話になったろ」
「ばか」

理不尽だ。今の状況からして俺はどちらかと言えば被害者である。ゆりとの集合場所に立っていたら、二十騎に絡まれただけだというのに。まあ、ゆりのこれは今に始まったことでもないか。頻度が増えただけで。

ゆりが来たから二十騎も俺から離れ、今度はゆりの手を取って校舎へと歩き始めた。

二十騎も二十騎で思い出づくりをしたらしい。ゆりもそれには何も言えないし、ゆり自身もそれを望んでいる。俺はその後ろをついていくだけ。ゆりが手を差し出してくるけど、三人が横並びは迷惑だし、縦一列だと間の人間が歩きにくい。という建て前をつけて断った。

残念そうに、寂しそうに笑って「そうだよ」と諦めたゆりの姿が脳裏に焼き付く。

「どこに行くかは決めてるのか？」

「まずはりみのクラスかな」

「マイシスターに会いに行くぜー！」

「お前の妹じゃないだろ」

二十騎がりみのことをマイシスターと呼んで、それを本人か周りの人間が否定する。このやり取りは定番で、単純なことなのに妙に飽きることがない。二十騎の人柄なのか、俺も打ち解けられてきたのか。あるいはその両方か。

”最後だから”ということにかこつけて意識を変えた。それだけでも今まで見えていたものの受け止め方が変わるもんなんだな。

~~~~~

私達のクラスの出し物はお化け屋敷。レオくんがお昼頃に来たのは、私がそれぐらいにとお願いしたから。私とひなの担当時間が最初で、それが終わる時間だったから。今は七菜とリイがお化け屋敷の方にいるかな。七菜ってこういう時は遠慮なく楽しむから、さつきから聞こえてくる悲鳴はそういう事なんだろうね。……今ならレオくんを怖がらせることつてできるのかな。

「ゆりちゃん。それは無理だよ？」

「やっぱり？」

「うん。レオぼんは驚いたとしても怖がらないよ。全部を想定しちゃうから」

「お前らなんの話してんだよ」

「レオぼんがお化け屋敷で怖がるのかって話」

「あー、そういう話か。ゆり、諦めろ」

淡々と答えるレオくんには私はため息をついた。いつも見られない一面だっただけからね。でも、そういうことならまたの機会にしよう。もっと本格的な所か、レオくん

が怖がるものを聞いて、それで怖がらせよう。

なんでひながレオくんのことを把握してるのかは、小学校の修学旅行でお化け屋敷にも行つたからなんだって。仕掛け人が出てくる度に『お疲れ様です』って挨拶したんだとか。これ、まず驚いてすらいらないよね。驚かすためにはレオくんの想定を超えないといけないって、ハードル高過ぎるよ。

妙に行列ができてるのを横目にりみのクラスである1年A組に行つただけけど……。

「あの列つてここのだったの!?!」

「お〜! マイシスターのクラスは人気が高いね〜!」

「……あー、やまぶきベーカリーのパンを使ってるのか。とりあえず並ぶぞ」

驚いてる私とはしゃいでるひなの手をレオくんが引つ張る。列が長いせいで隣のクラスの列と重なつちやうけど、看板を持つてる子がいてくれたおかげで間違わずに済んだ。

列に並んでる間はこの後の予定を話し合つた。ここで時間がそこそこ使われそうだから、もしかしたらこの後にでも七菜たちと合流して5人で回るかも。七菜たちの担当時間が終わつたら連絡をくれるし、それ次第ではあるんだけどね。

楽しい時間を過ごしていると、待ち時間もあつという間に感じる。お客さんの数が数だから、りみたちも早めの退席をお願いしてるのかもね。でも、やっぱり仲がいい人といふからつても大きいよね。メンバーといふ時は本当に時間を忘れちゃう。レオくんといふ時はまた少し違う理由で時間を忘れる。その少し違う感覚を同時に今味わえている。贅沢なのかな。

「何を感傷に浸ってるんだか」

「レオぼんは乙女心が分かってないね」

「悪かったな。……ゆり。順番が来たぞ」

「あ、うん」

肩をポンポンってされて私は意識を切り替える。りみたちのクラスは、喫茶店みたいになつてて、可愛らしい装飾が教室を彩つてた。さっそく席に案内されて、私とレオくんは隣。ひなが向かい側に座る。そのひなの両隣にりみのクラスメイト。

「なに自然な流れで後輩引つ掛けてんだよ」

「お持ち帰りです！」

「先輩。ここはそういう店じゃないです」

「えー！　じゃあドンペリ！」

「そういう店でもないんです」

「あんま後輩困らせるなよ。頭かち割るぞ」

「暴力はんたーい」

「ひな。大人しくしてね？」

レオくんの言葉が酷かったのはあるけど、ひなもひなではしやぎ過ぎ。後輩ちゃんはどこか楽しそうにしてるけど、お客さんが多いのにそんなことしてたらお店が回らなくなる。二人を解放させたらひなが口を尖らせて拗ねる。そして、そんなタイミングでのみが来ちやった。

「マイシスター！」

「違うよ」

「ガーン！　……これは誰が入れたやつ？」

「全部私がやったやつだよ」

「おおー！」

りみが入れた飲み物と聞いて、ひなが目を輝かせて写真を撮り始める。りみが恥ずかしいからって止めてる間に私も写真をこっそり撮っとく。記念になるからね。レオくんは写真を撮らずにゆっくり喉を潤してる。なんだろう。この前のライブの時もだったけど、雰囲気が柔らかくなつた気がする。

この前のライブと言えば、背中合わせで演奏して……その後も……。

「なんで顔赤くしてんだよ。そんな熱くないだろう？」

「そもそもゆりちゃん飲んでなくなーい？」

「お姉ちゃん大丈夫？」

「だ、大丈夫だから。気にしないで」

「当てちゃうね！ この前のライブでしょ？」

「なっ！」

顔をニヤつかせてひなが言い当ててくる。私は思わずそれに反応しちゃうって、それが正解であると示しちゃった。りみは変に温かい目で見てくるし、レオくんは反対に冷めた感じで見えてくる。悪いのはレオくんなのに。

「レオぽんがゆりちゃんの肩抱いてたもんね。夢心地だったんでしょ？」

「……ノーコメント」

「ゆりちゃんは分かりやすいな。レオぽんがああした理由は何ー？」

「特に意味はない。場の雰囲気に当てられただけだ」

素つ気なく答えるレオくんにムツてなるけど、ひなはそれを聞いてますます楽しそうに顔をニヤつかせる。りみも口元を隠しながら小さく笑ってるんだけど、私にはその理由がさっぱりわからなかった。

レオくんは嘘をついてない。私はそれがなんとなくだけ分かる。けども、ひなとりみが勘違いするとも思えない。特にひながこの手のことで間違えることなんてない。だから余計に脳内が混乱する。

「レオぽんがそう言うならそれでいいよ」

「嘘ついてるわけじゃないんだがな」

「そうだね。……そろそろ出なきゃかな」

「だな」

お客さんはまだまだ入ってくる。私達だけ長居するわけにもいかないから、飲み物とパンに手を伸ばす。りみがラテアートしてくれたりやつを私は狸だと思ったんだけど、リミ曰くパンダだったみたい。私に分からなくてレオくんが分かったのはわりとシヨックだったな。

この後は、やっぱり七菜たちと合流することになって、五人でいろいろと回った。飲食系も遊び系も、それぞれの感性に任せて選んだ。ライブがあるから、それもある程度したら終わらないといけなくなる。私達のライブは最後なんだけど、りみたち「Pop Pin, Party」の結成ライブがあるからね。見ないわけにはいかないよ。

「私達は舞台袖から見るけど、レオくんは？」

「観客席しかないだろ。ちゃんと両方見るから」

「絶対だよ？ あとでどうだったか聞くからね？」

「分かってる。楽しんでこい」

~~~~~


座席に座って始まるまで待つ。その間に隣にも人が座っていく。当然のことだし、ほとんど人が増えてきているのだが、隣に座ったのは俺がよく知る人物だった。よく知る、だけで片付けていい相手じゃないな。大切な後輩だ。

「ふふっ、やっぱり見に来てたんですね。予想が当たってよかったです」
「とうとう当てられるようになったのか」

俺の隣に座ったのは、バイト先の後輩で俺がそこで一番気にかけてる子。特徴的なピンク色の髪をふわりとさせて、人懐っこい雰囲気滲み出てるアイドル。新アイドルユニット「Pastel*Palettes」のボーカルでリーダーの丸山彩。
念願のアイドルになれたが、そのデビューイベントでの事件があり、その後のライブでなんとか盛り返すという中々に波乱万丈なスタートをしてる。

「アイドルの方は少しは落ち着いたか？」

「はい。まだ目の前のことにしか取り組めてないんですけど、とりあえずは落ち着けました。本当にありがとうございます」

「俺は何もしてないだろ」

「そんなことないですよ。Augenblickのみんなにももちろん助けられましたけど、玲音さんにも私は助けられたんです」

「大げさだつての」

実際に俺は何もできてない。あのデビューライブを知って、彩から話をすべて聞き出して、俺の意見を言っただけだ。

Augenblickってことは、雄弥たちがいろいろとやったんだろ。彩から聞いてるのは、デビューライブでのフォローとリベンジライブの用意。そのためにはおそらくだが、前々から準備してたんだろう。その辺は疾斗あたりがやったか。本当に同年代なのかと疑うほどに疾斗はできることが多い。厄介なやつだよ。

りみたちのライブが始まる。ドラムだけ誰もいないが、それでも用意されてる。誰かが間に合っていないってことなんだろうか。それにしてもどこか自然体な気もするが、深くは詮索しない方がいいんだろうな。

一曲目が終わり、二曲目が始まるうとしたところでドアが勢い良く開けられた。後方を見れば、息を切らしてる花女の子が立っていた。どうやらあの子がドラムの子のようだ。というか沙綾じゃん。ドラムできたのかよ。

「なんか、こういうのも青春って感じがしますよね」

「そうだな。なんにせよ、揃ったようでは何よりだ」

待ち人が来たことでさつきまで演奏していた四人の表情がさらに明るくなる。曲合わせもしてなかつたようで、沙綾は好き勝手に演奏していたが、それでも演奏が成り立つ範囲には留めていた。さつきチラツと見えた音楽プレイヤーに今演奏してる曲が入ってるんだらうな。

五人の演奏は、お世辞にも上手いとは言えない。始めたばかりのメンバーもいるのだから当然だ。だが、それを気にさせない程に演奏してる五人が楽しめていた。それができていなのだから上出来だろう。音楽はまず弾いてる人たちが楽しむのだから。

りみたちのライブが終わると一旦幕が下りる。この間にゆりたちの機材へと入れ替えるようだ。待つてる時間を退屈そうにしている生徒たちはいない。それはグリグリの人気が高いこともあるが、さつきの演奏でも盛り上がったからだろう。

「成功してよかつたですね」

「そうだな。りみもしっかり弾けてたようだし、楽しめてた」

「ふふつ、本当にお兄さんみたいですね」

言われてみて気づく。たしかにどこか兄目線で見ていたことに。引っ込み思案なりみが、友達と一緒にバンドを組んで人前で演奏できてる。それがこうも嬉しく思えるとはな。

俺がそのことของการ思考に耽っていると、彩が腕を絡ませてくる。どう考えてもスキヤンダルものになるが、俺は彩を拒めないから受け入れるしかない。度が過ぎればやめさせればいいし、ひとまずは釘を差すとしとくか。

「アイドルがそんなことしていいのか？」

「今は花女の丸山彩ですから」

「強かになったな……」

「玲音さんのおかげです♪」

周りまで笑顔にさせるような柔らかい笑顔。それを向けられた俺は何も言葉を返せず視線を反らした。これを知り合いに見られたら面倒だなと思っていたらかん高いギター音が響いた。わざと音を外したようので、目線をステージに向けるとゆりが笑顔で睨んできてた。これは後で追求されるやつだな。

最近ゆりたちが練習してるのを見て、こうしてライブしてるのを見て思う。
一つの空間を自分たちが支配し、観客を引っ張って完成させる”ライブ”。
それを演者という名の特等席で見られている。

——ゆりたちは俺が見ることがない景色を見てる

6話

時間が経つのも早いような遅いような。体感的には早いんだが、実際にはまだ6月だから遅いような気がする。6月となつて毎年意識するのは妹の誕生日だ。今年の誕生日プレゼントとして送る物はもう用意してある。あとはまたお願いして間接的に渡してもらうだけだ。

「なんですかこれは？」

「見ての通りライブのチケットだよ。行くつもりだったんだが都合が悪くなつてな。だから玲音にやる。ゆりちゃんで行つてこい」

「なんで相手を指定されてるんですかね」

「え、どうせ最初に話振る相手がゆりちゃんだろ？」

「……はあ。分かりましたよ」

頭が上がらないってわけでもないが、どうにもペースを持っていかれる。それは相手

が先輩だからってだけじゃない。俺は普通にこの人の人柄というか、人格を尊敬してるから。ムードメーカーでありながらも周りを見ていて、誰よりも敏感に場の空気を感じ取るこの人を。

自分が持つていないものを持つている人間を敬うのはよくある話だ。俺はわりと「知ったことか」と無視するのだが、この人はそうならなかった。

初めは絡みが鬱陶しいだけだと感じていたが、それも俺を軟化させるため。他のバイトメンバーが話しやすくなるように雰囲気壊すためだった。『みんな楽しんでる方がいいだろ！』って少年のように目を輝かせながら言っていたっけな。俺のように濁ることのない目だ。だからこそ尊敬できる。

「ゆりちゃんにもよろしくな〜」

「はいはい」

先輩からチケットを受け取り、それを鞆の中に入れる。ライブの日程はまさかの今日だ。当日に渡されると予定が崩れるし、ゆりの予定も崩れるのだが、そのへんも先輩は折り込み済みだ。俺のシフトを短めに変更されてるし、ゆりが今日特に予定がないのも知っててゆりで行けって言ってきたるのだから。

先輩にお礼を言って店を出る。広く晴れ渡る空を見上げてふと思い出す。雄弥や疾斗といった Augenglick の一部のメンバーとは、個人的な繋がりがある。だが、こいつらのライブを見に行ったことがない。たしか前のライブでメインボーカルが決まったんだっけな。一人加入したと聞いている。どんなライブをするのか、楽しみにしてもいいんだろうな。

若手としては頂点に立ったあの化物集団のライブとあって、柄にもなく心が踊っている。ま、他にも理由はあるけどな。

「ただいま」

「レオ兄ちゃんおかえり〜。早かったね」

「早めにあげられたからな。ゆりは？」

「部屋にいるよ」

「わかった」

わざわざ玄関に出迎えに来てくれたりみの頭を撫で、まずは自室に戻る。鞆を置いて制服を洗濯機に放り込む。また自室に戻ってチケットを取り出したらゆりがいる部屋に入る。ゆりとりみは二人で一部屋だ。居候の俺が一人部屋つても考えものだが、牛

込家が気にしてないのだから俺も何も言わない。

部屋のドアをノックすると入室の許可が出る。緊張する、わけでもなく静かにドアを開ける。どうやらさつきまではギターの練習をしていたらしい。俺が帰ってきた時から音は聴こえなかったから、ちょうど休憩してるようだ。タイミングが良くて助かる。

「珍しいね。どうしたの？」

ゆりは付けていたヘッドホンを下げ、それを肩に乗せる。まるでヘッドホンに首を巻かれてるようだ。珍しいのはお互い様で、今日一日家を出る予定がないからか、ゆりは寝間着のまま。ゆりは基本的に外に出なくても着替えるのだが、今日は外に一切出る気がないらしい。

そんなゆり相手に今日のライブの言っても、はたして出てくる気になるのだろうか。俺はどっちでもいいのだが、先輩にはゆりと行くように言われている。もしゆりが来なかったら行こう。

「先輩に今日のライブのチケット渡されてな。よかつたらゆりもどうだ？」

「ライブ？ 誰の？」

「Augenblickの」

「行く」

「即決だったな。急に渡されたから時間に余裕があるってわけでもないし、今から着替えて準備してくれ」

「うん！」

ちよろかった。超ちよろかった。まさかここまで簡単に誘い出せるとはな。ある意味教え子である雄弥がいるからなのか、それともこのバンド自体の人気なのか。どっちもありそうだな。たしかチケット倍率がエゲツいんだよな。加入した子が女子ってこともあって、さらに人気が高まったんだとか。

ゆりが着替えて準備してる間に、俺も準備する。準備らしい準備でもないけどな。小さめの鞆に財布とチケットを入れるぐらいだ。ペンライトなんて持ってないし。

リビングに行つて、これからライブを見に行つてくることをおぼさんとりに話す。二人に羨ましがられたが、こればかりは俺もお手上げだ。偶然手に入ったんだし、半ば押し付けられてる感じもあった。

あの人は転売とか嫌ってるから、自分がそうならないようにしたかつたんだろう。そしてチケットを有効的にも使いたいと。……あ、金を払ってない。次会うときに返さな

いとな。

「……高いな」

いったい何円するのだろうとチケットを確認したら一万を超えていた。よく見たらプレミアシートだし、もはや二万円だ。あの人なんてもん当てるんだよ。これは一学生が払う金額じゃない気がするぞ。

「レオくんお待ちせ。準備できたよ」

「なら行くか」

俺とゆりが家を出るまでずっとおばさんとりみが羨ましいと言ってきた。それにゆりと苦笑いを浮かべながら外に出る。学校がある平日なら毎朝一緒に家を出ることが多いが、それ以外でゆりと外に出るのは数えられる程度だ。それは当然ゆりも分かっていることで、どこか落ち着かなさそうにしている。

「なんでそわそわしてんだよ」

「なんか、新鮮だなくって。レオくんと一緒にライブを見るのってこれが初めてだしさ」
「まあ、そうだな」

「でしょ？ それが Augemblick のライブだもん。楽しみだけど落ち着けないよ」

落ち着けないと言いながらも上機嫌になっているゆりの腕を引っ張る。それは、道路に出そうになっていたからで、車も相当スピードを出していたからだ。ゆりは今視野が狭まっているらしい。今ので冷静になったようではあるんだが。

「あ、ありがとう」

「どういたしまして」

「レオくん。……このままじゃ駄目？」

「は？」

このままってのは、俺がゆりの腕を掴んでいることの話だろうか。ずっとこれは痛い奴でしかないと当然お断りだ。お断りなのだが、ゆりが言いたいのとは別なんだろうな。正確にはこの距離のままがいいらしい。どのみちお断りだけだな。

「彼氏作つてそうさせてもらえ」

「……ばか」

「はあ。結局強引にするのな」

「乙女心をレオくんが分かつてないからだよ」

男に乙女心など分からん。どこぞの哲学者も言っていたぞ。この世の全ての仕組みを解き明かしても、女心だけは解けないとかなんとか。乙女心と女心はたぶん少し違うんだろうが、その違いも俺には分からん。

だが、ゆりが強情なのは知ってる。俺の手を引き離れたかと思いきや、指を絡めるようにして手を繋いだのだから。そして強めに握ってくる。離すなどということらしい。

「子どもだな」

「成人してないからね」

返しも上手くなってきたな。なんてどこかズレたことを思いながら俺はゆりに握られている手を動かす。正確には指を。俺の方からもゆりが離れないようにしてやった。

「あはは、レオくんは優しいね」

「我儘な女に捕まったから諦めただけだ」

「やっぱり捻くれてるよ」

「知ってる」

会場に行くには電車を利用する。改札を通るときには当然お互い手を離すのだが、改札を通り終えた途端すぐさまゆりに捕まる。そこまで頑張らなくてもいいだろうに。人だつて多いとはいえ逸れる心配もないんだから。

会場の最寄り駅に着き、そこからしばらく歩く。近づくにつれ人も増えていくのだが、入場はもう開始されてるらしい。こっちでもタイミングが良かったのだが、俺はここで少し私用がある。連絡を取ったら、会場の中に入っておけとのことだったので、俺はゆりを連れて入場の列に並ぶ。

「さつき誰に連絡してたの?」

「知り合い」

「それはそうだろうけど……」

「ゆりには関係ないことだ」

「……わかった」

言葉選びを間違えてしまったか。ゆりは少し気を落とした。フォローしたほうがいいんだろうが、生憎と俺はこういうの得意じゃない。謝罪したところでその後の言葉が続かなければそれは形式上の謝罪だけ。薄っぺらいものになる。だからといって、自分に非があると思いつながら謝らないのも違う。

「大丈夫だよレオくん。察しはついたから」

「っ!? ……そうか。ごめんな」

「ううん。いいよ」

まさかゆりに察せられるとは思わなかった。もしかしたらゆりの思い違いなのかもしれないが、ゆりの様子を見ればそれが当たっていることが伝わってくる。ここまできると、これからゆりに隠し事できなくなる気がするな。対策とるか。

入場してゆりを座席に残らせ、俺はもう一度連絡を取る。電話で指示された場所へ向かうと電話の相手がわかりやすく立っていた。他に人もいないのだからわかりやすい

のは当たり前か。

「顔を合わせるのは久しぶりだね」

「そうですね。毎年ありがとうございます」

「なに。君のために力になれることがこれぐらいしかないからね。先の一件で私も動きやすくなったけども」

「先の一件？」

「おや。ニュースは見ておかないといけないぞ？ 後で自分で調べるといい。ヒントは

” Augenblick のリーダーがまた頑張っちゃった ” っていうところかな」

「分かりやすいヒントですね。ライブが終わったら調べますよ」

「そうしたまえ。ライブ前でもいいんだが、あまり時間もないしね」

Augenblick のリーダーということは、疾斗のやつがまた何かしたということ。あいつは単純な喧嘩ぐらいでしか相手にしたくない。完全に敵に回したら生きて心地をしなくなるからな。

そんな奴が『頑張った』だ。トンデモナイことはしてるだろうし、ニュースになるのだから尚更だな。この時点である程度候補を絞れるが、後でいいだろう。今はそれより

も優先することがある。ゆりを待たせ過ぎるわけにもいかないし。

「今年もこれお願いします」

「たしかに。……君から直接でもできるようなと思うけどね。今年から」

「……どの面下げてって感じが強いですけどね」

今さら何を言うって感じだが、ずっと引つかかっていることなんだ。被害者面しているが、クソツタレに引き離される前から俺は妹から奪って生きているのだから。

これも再会すれば話さないといけない。ちゃんと目を見て話さないといけない。拒絶されるだろう。恨まれるだろう。憎まれるだろう。絶縁されても文句は言えない。それほど大切なモノをすでに奪っている。

「……あの子は君を拒絶しないと思うけどね」

「どうでしょうね……。では、俺は席に戻りますので、それは妹と会える時に渡してください」

「もちろん。ライブを楽しんでいきたまえ。今まで君が間接的にしか関わってこなかったバンドが新たなスタートを切ったんだ」

「あなたがそこまで言うなら俺でも楽しめるんでしょね。期待してますよ」

その人と別れて誰もいない廊下を歩く。どうやらほぼ全員席についているようで、中に戻ると超満員だ。所々席は空いているが、それも気にならなくほど人が多い。俺は自分の席へと戻り、流れているBGMに耳を傾けながら目を瞑る。海外に行くことは決めた。それなら妹の件も今年でどうにかするしかない。日本を離れる前の期間で。残り一年を既に切っているこの短い時間で。

「レオくん。どうしたの?」

隣に座っているゆりが心配そうな声色で声をかけてきた。目を開けてそつちを見るのと、少し眉を下げているゆりが俺の頬へと手を伸ばしてきた。それを拒むことなく受け入れ、ゆりにどういうことかを聞く。

「なんか難しい顔してた。レオくんにとって大切なことで悩んでるってことだね?」

「……よく見てるんだな」

「そんなことないよ。見えてないことの方が多い」

かぶりを振るゆりに眉をひそめる。俺の様子だけで考えを見抜けるようになってきたのに、未だに見えてないことの方が多くとはどういう意味なんだろうか。ゆりはいつたどこまで見えるようになれば満足なんだろうか。俺より見えてるくせに。

頬に添えられたゆりの手に自分の手をそっと重ねる。そして柔らかく包み込むように手を握って退けさせる。燃えるような情熱と包み込むような優しさを同時に灯すその赤い瞳が若干揺れる。拒否したわけじゃないから、そのことを伝えるために大丈夫だと言ひ、手を握ったままステージの方へと視線を向ける。ちようどライブが始まるから。

登場に合わせてメンバーが紹介されていく。リーダーでギター担当の秋宮疾斗。キーボード担当の毛利愁^{しゆう}。ドラム担当の梶大輝。ベース担当で、ゆりの弟子とも言える湊雄弥。そして、新たに加わったボーカル担当の藤森結花。この五人が今の Augen blick。さらに加速して駆けているバンド。

どこまで突き進むのだろうか。間接的にしか関わりのない俺はもう不要かもしれない。

なににせよ

—— 楽しそうならそれでいい

7 話

梅雨も終わって気温が日に日に高まり始める。毎年のことなんだけど、暑さも年々少
しずつ高まるからあまり好きになれない。夏にできるイベント事は好きなんだけどね。
暑いと当然汗をかく。汗をかいたら着ている服が肌に張り付いちやう。学校行くまで
の間にそうなることはないんだけど、休日とかで出掛ける時にはたまにある。

8月とかになるともつと大変だろうね。ライブハウスに行くまでの間に汗いっぱい
かきそう。そうになると男の人の視線が気になるよね。そうならず済む服を着るよう
にはしてるけども。制服はそうはいかないから。

今見てるテレビ番組でも、ちやうど今年の夏の暑さの予想をしていて、女性の芸能人
が似たようなことを言ってる。あの人は露出が若干多い気がするから、「あなたが言う
の？」ってツッコまれてる。男性はそれは男の性って言うけど、そうじゃない人もいる。
隣でつまらなさそうにテレビを見てる彼の視界に入り込むと、ちゃんと反応してくれ
た。

「どうした？」

「レオくんはそんなことないよね〜」

「いきなりなんの話だよ」

「やらしい目はしないよねって話」

「欲がなくて悪かったな」

「そういうことじゃないんだけど……」

氷が入ったグラスを口に運ぶレオくん思わず苦笑する。素直に受け取ってくれたらいいのに、レオくんは私が褒めようとすると曲解する。捻くれているところは直ってくれないかも。でも、知り合った時からそうだし、それが彼らしさでもある。

一緒にリビングでテレビを見ながら休憩。レオくんが何の勉強をしているかは分からないけど、私は大学に向けての受験勉強。今は一緒にソファに座ってる。知り合ってからだいたいぶ態度が柔らかくなったレオくんが傍にいと、なんだか甘えたくなっちゃう。気分次第じゃそれを許してくれるし、そうじゃない時はそもそも体が触れるほど近くにいさせてくれない。そして今日は前者。甘えさせてくれるみたいで、肩に頭を乗せても何も言わない。

「今日の予定空けてくれた？」

「一日空けといたぞ。ポピパのオーデイションを見に行くんだろ？」

「うん。今日が最後のチャンスだから。……次のライブでSPACEは閉まるから」

「……そうだな」

文化祭があつたあの日、オーナーは店を畳むことを決意した。それを私たちがどうこう言える立場じゃないのは分かつてる。

元々オーナーがガールズバンドの居場所を作りたくて開いた店。今じゃガールズバンドは増えていて、いろんな店でライブできるようになってる。オーナーはきつと『やりきつた』と判断した。

だから、私たちができるのは、今までお世話になったお礼としてオーナーに最高のライブを参加者全員で届けることだけ。それに参加するために、りみたちは最後のオーデイションに今日挑む。

一度りみたちはオーデイションに落ちた。香澄ちゃんは歌えなくなっちゃつた。自信を無くしてしまつた香澄ちゃんに、私はちゃんとアドバイスできたのかな。ヒントぐらいしか出せなかつたけど、それが力になってくれたかな。分からなくて不安で、だからレオくんはその時を一緒にいてほしい。

「はあ。出かけるぞ」

「え？」

「気が重くなってるんだろ？ 朝からそんなじゃ保たないだろうから、気分転換に出かけよう」

「……これってデートのお誘い？」

「好みに解釈しろ」

「っ!？」

え、なんでそんな風に返してくるの。いつもそんなこと言わないくせに。たまにはレオくんをちよっと揶揄おうと思っただけなのに、そんな風に言われたら期待しちゃうじゃん。

レオくんは立ち上がってリビングから出ていった。出かける準備をしに行っただろうね。私は大きく煩く鳴る心音を落ち着かせてから準備しに部屋に行っただけで、それまでに結構時間をかけちゃった。仕方ないよね。だって好きな人が、全く素振りないのに期待しちゃうようなこと言ってくるんだから。

「ごめん、お待たせ」

「そんなに待ってない。なんだ、メイクしたのか」

「うん。軽くでもメイクしろって言ったのレオくんだよ？」

「そーいやそーうだったな」

家を出て向かう先は今年できたショッピングモール。映画館も入ってる大型のショッピングモールで、もう電車に乗る必要がなくなった。あつちのショッピングモールもある意味いい出の場所かな。

午前中とはいえず少し暑い。これからもう少し暑くなるんだろうね。アスファルトの地面が熱を吸収しちゃうから、体感温度はさらに高くなっちゃう。本格的な暑さになると体感で40度超えるんだよね。

「暑いから引つつくなよ」

「わかってるよ。夏が過ぎたら外でも引つついていいんだよね？」

「そういう話でもなくてだな……」

「そういう受け取り方をできるように言ったのは、レオくんだからね？」

私がニコニコしながらレオくんにそう言うと、レオくんは表情を歪ませた。私がレオくんの上手を取ったからじゃない。自分の発言がそう取られてもおかしくないものだったことに腹を立ててるんだらうね。

ショッピングモールの中に入ると、冷房が効いてて涼しかった。冷房も店内を冷やし過ぎない程度に設定されてるし、快適でいいよね。

「ショッピングモールとだけ聞いてるけど、この後の予定は？」

「特に考えてないな。気分転換が目的だから」

「じゃあ服見に行こうよ」

「また新しいの買うのか？」

「いいのがあったらね。ウインドウショッピングでも楽しいし」

「なるほど。俺には分からんな」

レオくんはファッションに興味が無いからね。そもそもそれだけの余裕もなかったんだから仕方ないか。今だってお父さんとお母さんに極力お世話にならないように、自分のことは自分で済ませようとしてるんだから。

2階にエスカレーターで上がって、ちよつと右に歩いたところでさっそく服屋さんが

あった。たしかこういう施設って1階とか2階に女性向けのが多いんだよね。女性の方が買い物率が高いから。自分たちを当て嵌めてみても、たしかにそうだなって思う。

「そーいやゆりって夏でもそこまでラフなの着ないよな」

「んー、私としては冬よりラフな服なんだけど、夏は夏で気をつけないといけないことあるし」

「紫外線か」

「うん。それと家でも言った視線ね」

「その辺も思考が緩いと思ってたら、結構考えてるんだな」

「誰かさんの影響かな？」

肩をすくめて違うだろってレオくんは言うけど、実際レオくんに言われたことを気にして変えることが多い。メイクもそうだし、服装も多少は影響を受けてる。去年のことがあったから今年は尚更って感じ。だけど、やっぱり私だって女の子だから、可愛いのを着たくなる。条件が多いとなかなか見つけられないんだけどね。

「あ、レオくんが選んでくれる？」

「なんでだよ」

「いいじゃんいいじゃん。気分転換が目的なんだからさ」

「はいはい。選ばばいいんだろ」

どこかヤケクソ気味、だけどちやんと考えてくれるのつてレオくんらしいよね。服を見て回ってはこれでもないって眩きながら頭を悩ませてる。私としては、「これどう?」みたいなやり取りをしたかったんだけど、そこまで強制するのも何か違う。きつとこの状態がレオくんらしいんだ。それに、好きな人が真面目に自分に似合う服を考えてくれるのは、見てるだけでも嬉しいもの。

「ゆり。これは?」

「へっ? ……うーん、こういうのも好きだけど、私に着こなせるかな?」

「試着してみろよ。着る前から決めても仕方ないし」

「それもそうだね」

レオくんが選んでくれた服を持って試着室に移動する。レオくんは試着室の前で待つてくれて、私はカーテンを閉めて着替え開始。カーテン越してなんかドキドキ

するとか、緊張しちゃうね。少し顔が赤くなってる自分を鏡で見ちゃって、さらに顔が赤くなる。

「着替えなきゃ」

たぶんこの赤くなってる自分をすぐに直すことはできない。だからこのまま着替えることにしよう。レオくんに何か言われそうだけど、着替えてからだったら違う理由で赤くなってるって思われるかもだし。

今着てる服を脱いで、レオくんが選んでくれた服を着る。暗めの赤っぽい色で、大人びてる感じがする服。鏡で確認してみたけど、やっぱり私には早いとか、着こなせてない気がするんだけどな。

「レオくん。着替えた」

「ん。……なるほど？」

「やっぱり私には無理かな、なんて……」

「そうか？」

「へ？」

「印象が変わるっただけで、着こなせてないわけじゃないぞ。一気に大人びた感じするし、俺はアリだと思うな。ま、どうするかはゆりが決めたらいいわけだが」

あれ……もしかしてこれって私褒められてるのかな。レオくんに今の私を褒められてるのかな。無理だと思った私をレオくんが肯定してくれる。ヤバイ。顔がにやけちゃう。

「ゆり?」

「き、着替える!」

急いでカーテンを閉めて試着室の中で蹲る。鏡を見なくたって分かる。ヤバイくらい顔がニヤけちゃってる。でも、ヤバイって思っても今は気持ち落ち着かせたくない。レオくんに褒めてもらえたことで心が高まっている今の状態をもう少し感じていたい。

「ほんつと……レオくんはズルいんだから」

文句を言ったつもりでも、私の声色は全然そうならなかった。声も明らかに弾んじやつてる。心音もまた煩くなっちゃつてる。

「好き……。~~~~つ!!」

もしレオくん私の気持ちを伝えたら。なんてことを考えて眩してみたけど、すつごい恥ずかしい。顔も熱くなる。でも、それ以上に胸が苦しい。締め付けられるようにキユツてなる。

私はこの気持ちを伝えちゃいけない。

——なんで？

だって、私にはその資格がないから。

——抑えられないの？ 壊れちゃうよ？

大丈夫。きつと大丈夫。レオくんがまだ傍にいてくれるから。

——春にはいなくなるの？

……わたしは……。

「いい買い物になったか？」

「うん。レオくんが選んでくれたから」

「どんな理由なんだか」

服が入った買い物袋を手に下げて、反対の手はレオくんの手と重なってる。レオくんもそれなりに有意義な時間だったのかな。今でも手を握るのを許してくれてる。

「レオくんは、さ……」

「ん？」

私が声を詰まらせながら話しかけると、レオくんが足を止めて私と向き合ってくれ
る。最近たまに見るようになった穏やかな目を向けてくれる。

——怖い

——遠くに行くのが分かっているけど、それをもっと聞くのが怖い

——でも、レオくんが見てる景色を私も見たいから

「レオくんはどいの——」

聞こうと思って、勇気を振り絞って言葉を発したのに、私の声はレオくんのスマホの着信音に邪魔された。レオくんが私に断りを入れて電話に出る。バイトの方かなくて思ったけど、そうじゃないみたい。レオくんは少し話したらすぐに視線が鋭くなって、電話を切った時には怖いレオくんになってた。

「ごめんゆり。急用ができた。話は後でもいいか？」

「……時間かけたくないんだよね？」

「……ああ」

「うん。ならいいよ。けど約束してね？ すぐに帰ってくるって。オーディションもレオくんにいてほしいし。……できればSPACEでのラストライブはまたレオくんを出たいし」

「最後の以外は当然そうする。最後のは……考えとくよ」

「あはは、だよね。……行つてらっしゃい」

「行つてきます」

どこかへと走り出したレオくんを見送る。全力で走ってるみたいだから、すぐにその

背が小さくなって、やがて姿が見えなくなる。

——これが

——レオくんと最後の会話だった

「……ゆり先輩」

「ごめんね香澄ちゃん。ちよつと、思い出したら辛くて」

「いえ……。話していただいてありがとうございます」

ファミレスに移動して話してただけけど、途中からファミレスからも移動した。バスに乗って10分弱ほどで行けるある場所に来てた。そのすぐ近くにあるベンチに座って香澄ちゃんに話をしてただけけど、気づいたら涙が出ちゃってた。気が重くならないように笑うんだけど、あんまり上手く笑えてないかな。

「……香澄ちゃん。もう少し付き合ってくれろ？」

「はい。もちろんです」

「ありがとう」

香澄ちゃんに同行してもらって、あまり来られてなかった場所にどんどん近づいていく。『萩近玲音』って書かれてるネームプレートがある扉を開けて、真っ白な空間に入る。アルコールの匂いが少しするね。

「っ！ この人……。あの日の……。！」

「うん。香澄ちゃんも一度だけ会ってるよね。……。寝てる時はほんと無垢な感じなのに

さ。起きてる時は捻くれ者なんだよね」

点滴と酸素マスクをされてるレオくんは、あの日以降一度も目を覚ましてない。具体的なこととは私も教えてもらえてないけど、重篤な状態だったみたい。主に出血が酷すぎて。

私はレオくんの髪をそつと撫でる。レオくんは身じろぎ一つしない。香澄ちゃんは何も言わずに待つてくれる。

「ねえ。SPACE閉まっちゃったよ？ レオくん、約束……破っちゃって。……そろそろ起きてくれないかな。もうすぐ……秋なんだよ？ またあの紅葉見に行こうよ……！」 このままじゃ進路だつて……！」

撫でてる手が次第に震え始める。すぐに手を動かせなくなつて、枕に手をつく。ギョツと握る枕のシート。視界が歪んでいく。

やつぱり駄目だった。話しかけるだけでも気持ちを抑えられない。もつと言いたいことはある。だけどこれ以上は何も言えない。うまく言葉を発せられないから。

寝てるレオくんの頬に雫が溢れ落ちる。それは重力に従つて頬を伝い、シートを少し湿らせる。けど、それは一つだけじゃない。雨のようにほとほと溢れ落ちては、同じよ

うに伝ってシーツを濡らす。

レオくんはまだ起きない。

レオくんが卒業後どうするか聞いてない。だから私もどう進もうか確定させられない。レオくんと同じ場所に行けるのか。それとも別々になるのか。

——ねえ……私……いつまで……

8 話

夏に全力疾走で言われた場所まで走る。下手すりやぶつ倒れるな。だが、そんなこと気にしてられない。電話の内容が内容だったのだから。

『初めまして。Augenblickのキーボード担当、毛利愁です。いつもお世話になってます』

『そりやこつちのセリフだが、何のようだ。そもそもなんで俺の番号知ってるやがる』
『すみません。いろいろと裏事情があります。そして、今起きてることはあなたにお伝えするべきかと思ひまして』

『は？』

『妹さんのことなんですよ』

思わずスマホを握る力が強くなる。そう簡単に壊れるものでもないが、画面にヒビとが入ったらわりとショックなんだよな。だから冷静にならないといけない。冷静に全

て聞いて行動を決めなくては。

『どこまで知ってやがる』

『あなたと妹さんのことだけです。それ以上は知るべきではありませんので。……妹さん
の知るべきではなかったんでしようけど』

『そこはもういい。さっさと用件を言え』

『妹さんがあなたの父親の悪企みに協力を強いられています。場所は——』

聞いたことを全て脳内に叩き込む。場所は幸いにも知っているとところだった。荒れて
た中学時代に何度か行ったことがある場所だ。不良の抗争に首を突っ込むのに最適
だったからな。

ゆりに用ができたことを伝え、すぐに戻ることを約束して俺は一心不乱に走り出
した。約束を破る気なんてない。ゆりもさっし何か聞こうとしていたし、オーデイション
は地味に俺も気になるからな。

——どこまでも堕ちるんだな、クソ親父

くくくく

「はあ、はあ、げほつ……あー、マラソンする距離を……走り続けると、げほつ、キツツいな……」

なんとか目的地まで走り切ることができた。いかにも悪事をする時に扱いそうな倉庫だ。テンプレにも程がある。さつき隠すように置かれていたバイクもあったし、疾斗あたりも先行してるのか。というか、今全部終わってそうなんだよな。あの多重面相の化物が本気出してたら。

「……ふうー。呼吸整えてる時間もねえな」

走り続けたことで速く脈打つようになった鼓動が煩い。普段ならそれを落ち着かせたいところだが、今はむしろ落ち着ききる前に中に入るべきだろう。悪事に手を染めていたのであれば、物騒なことがあっても不思議じゃない。それに、普通に銃声が聞こえてくる。

「これって警察動いてんのか？」

情報があるのなら警察に回すべきだと思うんだがな。あーでも警察が全部信じてくれるかが怪しいか。

そのへんで思考をやめて五感を集中させる。倉庫の扉が開いているから、そこからそつと中を覗き込むと、そこでは超人的な動きをしている馬鹿とそれに翻弄されてるヤクザたちがいた。予想通りつちや予想通りだが、そこにいるのはそれだけだ。黒幕がない。おそらくは安全なところで高みの見物でもしているのだろう。腹立たしい。

——ほんつとに、アイツは……ドン底に叩き落としてやる

意識を切り替えていく。中学時代でも一番酷かった頃に戻る。警察の世話にもなつた頃に。そこからさらに意識を底へと落とし込んでいく。良心も感情もいらぬ。高校で出会った人たちのことも一旦忘れる。彩のこともゆりのことも。記憶を封じ込める。壁で隔てる。

——今必要なのは効率よく潰すための思考だけだ

意識のすり替えを終えたところでもう一度中を確認する。最初は包囲してたんだろ
うが、すでに円が壊れている。倒れてるヤクザの方が多い。立ってるのは10人もいな
いな。

俺は足音を立てないように気をつけながら中に入り込み、倒れてるヤクザの手に握られてる銃を確認する。弾はまだあるようだ。使わないけど。素人が使ったら肩壊すだけだからな。鈍器代わりにするだけだ。

「まずは近いやつといこうか」

「っ！ なんだおまつ……がっ」

「一人目」

一発で気を失わせられるとも思ってたが、結果オーライだな。銃のグリップ部分で顎を振りぬいただけなんだが、脳が揺れて気を失ったか。つまり、残りの奴も脳に衝撃を与えればいい。

だが、不意打ちはもう無理だ。他のヤクザの視線もこっちに向いた。その間に疾斗が二人気絶させたけど。早すぎるわ。だが、これであと6人つてとこか。動きを見てて思ったが、こいつらヤクザの中でも下っ端中の下っ端だな。銃に頼り過ぎだ。素の力が弱い。

「玲音……愁のやつか？」

「そういうこつた。あいつ腹黒いな？」

「あとで説教入れるか」

「好きにしろ。……っ！ 疾斗」

「分かつてる」

「なら任せろ」

疾斗と会話しながら左側にいるヤクザの懐に忍び込む。横腹を殴打してすぐに頭を掴み、膝蹴りを顔面に入れる。怯んだところでそいつを俺の背中側に回して盾にする。下っ端らしく動揺してる馬鹿が発砲して俺の盾代わりなつたそのヤクザが撃たれる。味方同士で潰すなんてアホらしいな。

「死ぬなよ玲音」

「お前もな」

お互いに一人ずつ減らして残り4人。これならなんとかなるだろう。弾を避けられる気はしないが、さつき味方を撃つたときの反応を見るからに仲間意識は強い。そこを利用して盾にしとけがいい。……大人一人担いで走り回るのは無理だし、結局蜂の巣

コースになるかもだが。

疾斗を離脱させたのは、別のとこに化物クラスの奴がいるから。気配を察知するなんてバトル漫画チックな方法で分かったわけじゃない。いなかっただけは、人間の人間が突然その場に現れるという違和。それを感じただけだ。

そしてもう二度とこれを感じることもないだろう。ここまで自分を落とし込んで感覚を研ぎ澄ませられているのも、親へのヘイトと妹絡みという2条件が整ったからだからな。

「余所見できるほどお前ら強くないだろ」

疾斗がこの場から消えた。そのことに少しの間とはいえ目を奪われた馬鹿たちの隙をつく。右に二人、前方に二人。近いのは右だから、そっちに行つて近い方を狙う。今度は銃のグリップをちゃんと握り、発砲しないようにセーフティをつける。銃口を突き刺すように耳の後ろにある骨、乳様突起へと突き出す。人体の急所の一つだ。上手くできたように、そいつは前方へと倒れ込む。俺はその間に銃を持ち替えてまたグリップで殴る。今度は頸椎。神経が集まってるからな。

「こいつ……！」

「だから遅いんだよ」

すぐ横にいるヤクザが銃を向けるが、この近距離で銃を向けるのは得策ではない。銃は離れてる相手を撃つものだからな。

銃を構えることで晒される急所がある。脇の下も神経が集まる場所だ。そこに銃を殴りつけて膀胱に蹴りを入れる。そこまでしたところでそいつを盾にする。少し離れたところにいる二人が狙ってきてるから。盾にした奴から銃を奪い取り、俺もそっちへと銃を構える。脅しにもならないけどな。

「ガキ。そこまですておけ。この距離でこちらは二人だ。お前が銃を撃たないことも分かってる。死にたくなければ大人しく両手を上げる」

そう。俺はさつきから一度も発泡しようとしてない。そこを冷静につくだけの落ち着きを取り戻されてしまったらしい。素人の限界ってやつだな。

——だからこそ付け入る隙がある

盾にしてる奴の腕をそいつの背中側で捻っている。それでそいつは身動きが取れなくなっているし、2箇所の急所を強打されているからそもそも抵抗もされない。その腕の拘束を一旦緩めて脇の下から通すように銃を持つ手を突き出す。拘束をまた強めることで俺の腕をも固定する。

これならブレない。衝撃云々はどうでもいい。脱臼しようと嵌めるだけだ。慣れる。

銃の扱いに慣れてる人からすれば滑稽な光景だろう。馬鹿ならそれすら隙を生むための演出だとも気づかない。そしてそいつらは馬鹿だった。だから俺は落ち着いて狙いを定めてさつき話しかけてきた奴とは違う方を撃った。

響く乾いた銃声。強い反動が生まれる。俺の腕を一直線に衝撃が駆け抜け、肩をも走り抜ける。脱臼はしないですんだが、逆にしんどい。若干ズレてる。

[……トク……]

余裕ぶつてた表情が消える。撃たれた方は驚愕したまま視線を下げる。そいつの腹に当たったから。服を赤く染める。溢れだす血はそいつが立っている床さえ染めてい

く。ぐらりと崩れ落ちるそいつを俺は見向きもせず、肩の痛みも耐えながら駆け抜ける。残りは一人なんだから。

「このガキ……!」

「だから遅いつてんだよ」

仲間の傷を気にしていたそいつは反応が遅れる。俺はそいつにズレてる方の肩でタックルをかました。正面からじゃない。ズレを直すためには反対から衝撃を与えないといけないからな。

「ぐっ!」

「チツ、完全には治ってないか」

違和感が残っているが、少しの間ならこのままでいいな。完全に治すなら疾斗に協力してもらおう。あいつも慣れてるから。

起き上がろうとしたそいつに俺はすかさず蹴りを入れる。鼻つ柱をへし折るべく全力で蹴ろうとしたが、威力が軽減された。防がれたんじゃない。カウンターを入れられ

た。

「は……ははっ！ 銃だけだと思うなよ！」

「……ダボが」

少しは頭が回るんだな。防ぐんじやなくて俺にダメージを入れるとは。他の奴と同じ馬鹿だと思っていたが、訂正しておく必要があるな。

足元を見やる。左足に突き刺されてるナイフを。これじゃあ左足でろくに踏ん張ることができない。そして人間は二本の足でバランスを取るもの。片足でも取れるが、今の状況では致命的だ。

出血箇所である足が熱い。痛い。耐えられるものじゃない。

そういう思考が薄れていく。

目の前のこいつを潰せと脳が叫ぶ。こんなところで止まっていられない。親父を叩きのめすまでとは。もう理性と呼べるものはないかもしれない。脳の叫びを心が否定しないのだから。ゴーサインを出している。そして思考する間もなく体は動いている。

笑ってるそいつの顔面に拳を叩きつける。仰け反ったそいつを押し倒すべく軽く

ジャンプして乗りかかる。肘を肋骨に突き立ててな。

「がっああああ!!」

倒れた音以外にも鈍異音がした。肘越しに嫌な感触が伝わってきた。間違ひなくこいつは肋骨が折れたな。俺はそいつの上から退いて、疾斗が向かっていった方向に足を引きずりながら向かう。雑魚相手に時間がかかったし、達成感もあるっちゃあるが、ただ何も終わっちゃいない。

唯一音がする方向に向かう。俺が歩いた跡は血のりでしつかりと残っている。人間違ってたしか3分の1を出血すれば死ぬんだっけな。なんて他人事のように考えながら重くなり始めた体を動かす。

だいぶ時間を費やした気がする。音が止んでからもそこそこ経ってたせいで、途中から闇雲に探さないといけなくなったしな。だが、ようやくたどり着けた。

「よう、ゴミクズ」

「玲音か! さっさとそこにいる秋宮を潰して儂を助ける!」

「お前……その血大丈夫か?」

すでに誰かに殴られたか蹴られたかをされた後らしい。妹の姿が見当たらないが、まずは目の前にいるこのクズだ。馬鹿につける薬はなければ、クズにかける慈悲もない。何か喚んでいるし、疾斗も何か話しかけているようだが、今は認識できない。意識がそこまではつきりしてない。

「なんじゃ、先に儂の拘束を解くのか？ それでもいいがはっ!？」

「お前が殺した」

「何すぶべあつ!」

「お前が奪った」

目の前にいるこの醜い人間を殴る。本気で。拳を握りしめて。募裏切られた哀しみをつた怒りを、溜助けてくれなかった嘆きをめ込んだ復讐心を込めて。

——最初に捨裏切られたてられた

——次に引き離奪われたされた

——そして見捨全て壊されたてられた

母さんも。妹も。ばあちゃんも。夢も。人生も。人間関係も。

何もかも引つ掻き回されて奪われて潰されて邪魔されて！ 神木のボケまで利用して、ゆりまで巻き込んで！！

「お前は消えてくれ」

眼球を殴りつける。それと同時に部屋に一つの音が響いた。眼球を殴った音じゃない。乾いていて、まるで破裂したかのような音だ。

腹が熱い。熱い箇所から下がだんだん濡れていつて気持ち悪い。

見なくたってわかる。片目から血を流しながらも勝ち誇ったように顔を歪めて喜んでいるクズが目の前にいて、そいつの手に小さな金属物があり、その先から硝煙が立ち上っているのだから。

「濃の勝ちだな」

「そう思ってた死ね」

ヤクザから奪った拳銃で同じように腹を撃ち抜く。表情が正反対に変わったのを見

て、内心でほくそ笑んだところで俺の意識は途切れた。

9 話

11月下旬。バンドメンバーたちに口を割らせることに成功した私は、お兄ちゃんに会うためにお兄ちゃんがいる場所へと足を運んだ。部屋にある花瓶に入ってる花は、定期的に看護師さんが変えるらしいんだけど、お見舞いに来た人がいたら、しばらくその花になるみたい。病院側が用意する花とは違うから、誰かがお兄ちゃんのお見舞いに来てたんだろうね。今お昼だから、たぶん今日じゃない。昨日か一昨日あたりかな。

「お兄ちゃんって結構無茶するんだね。それとも男の子ってたいいそうなのかな？」

ベッドの横にある椅子に座って、お兄ちゃんの寝顔を見ながら話しかける。お兄ちゃんがこうして寝てるのはあの日から。まさかお兄ちゃんにまで迷惑をかけるなんて思ってたなかった。今さら悔やんでも遅いつてわかってるけど、でも後悔の念は耐えない。

お兄ちゃんって呼んでるけど、お兄ちゃんと出会ったのは私が小学校5年生の時。約

一年間だけ一緒に過ごしてた。お兄ちゃんのお母さんと三人で。短かったけど、幸せだった。今思い出しても、温かい家庭だったと思う。私を引き取ってくれた今の家も幸せ。大好きなお姉ちゃんができて、構いたくなる弟もできた。新しい家族。

「お兄ちゃん。私今幸せみたい」

寝てるお兄ちゃんの手をギュって握る。ずっと会いたいって思ってた、大好きなお兄ちゃん。こういう形での再会はやっぱ寂しくて哀しくて虚しい。

——私がこうした

——私のせいでお兄ちゃんは……

「っ！ お兄ちゃん!?!」

お兄ちゃんの手が動いた。握ってる私の手を確かめるように指を動かして。顔を覗きこんだら、ゆつくりとお兄ちゃんの瞼が上がっていく。よく知ってる優しい目。変わらない。お兄ちゃんはやっぱりお兄ちゃんだ。

「い、こは……?」

「お兄ちゃん大丈夫!? 私が分かる!」

お兄ちゃんは焦点が定まってなかったけど、だんだん焦点が合うようになってきた。お兄ちゃんと目が合うと、目だけじゃなくて、顔も動かして私の方を見てくれる。

「……こ、病院か」

「う、うん。そうだよ。って! まだ寝てなきや! 起き上がっちゃ駄目!」

起き上がっちゃったお兄ちゃんを寝かせようとするけど、お兄ちゃんはそれを拒んだ。マスクも外しちやつて「寝すぎた」なんて言っちゃつて。

さすがに数カ月寝ただけあつてフラついてるけど、お兄ちゃんは寝ようとしなかった。勝手にマスクを外したことでブザーが鳴ってる。すぐに看護師さんが来るんだらうね。

私がお口お口していると、お兄ちゃんにそつと体を引き寄せられて抱きしめられた。お兄ちゃんにこんなことされるなんて、それこそ小学生ぶり。がっしりしてる体で、で

も不思議と柔らかい感じ。たぶん包容力とかそんなやつの子のせい。

「会うのが遅くなりすぎた。ごめん、結花^{ゆか}」

「うう、ん……。また会えて……。ほんとに嬉しいよ。私こそ、巻き込んだじやつて……。ごめんなさい……」

「結花のせいじゃない。俺が勝手に首を突っ込んだだけだ。……。それより結花」

「なあに？ お兄ちゃん」

「すっげえ可愛くなったな」

「！ えへへ、ありがとう☆ お兄ちゃんもカツコイイよー！」

大好きなお兄ちゃんの腕の中に包まれてる。やつと会えて、話せて、体温を感じられる。今までは思い出でしか会えなくて、昔の写真でしか見られなくて、ずっと寂しかった。

声を聞きたくて、今みたいにギュってしてほしくて、でもそんなことできなくて。

それがやつと叶った。嬉しいのに泣いちゃって、もつともつと謝らないといけないのに笑っちゃってる。もう無茶苦茶だよ。

「結花もこつち来いよ。今の体勢わりとキツイだろ」

「えへへ、実はそうなんだ。そんなわけでお邪魔しまゝす」

お兄ちゃんの気遣いに感謝して、遠慮なくベッドに入る。横じゃなくてお兄ちゃんの膝の上。お兄ちゃんはいっぱい寝てたから、傷自体はもう完治してるんだよね。ベッドを操作して背もたれを作る。お兄ちゃんがそれにもたれて、私がお兄ちゃんにもたれる。これでお兄ちゃんの腕の中にスポって収まるから幸せ。

「萩近くん無事ですか!? って、結花ちゃん何してるの!？」

「あ、宮井さんお久しぶりです。お兄ちゃんが起きたので甘えさせてもらってます」

「一応初めまして宮井さん。萩近玲音です。結花もお世話になったんですか？」

「これは丁寧にありがとうございます。結花ちゃんは入院されたことはありませんよ。以前知り合いの子が入院されて、そのお見舞に何度か来ていて、それで知り合ったんですよ」

「そうなんですか」

「つてそうじゃなくてですね! なんでマスク勝手に外してるんですか!」

「邪魔だったのよ」

お兄ちゃんの返事に宮井さんが頭を抱える。宮井さんって担当する患者さんがいつも大変な人だよ。雄弥とか雄弥とかお兄ちゃんとか。そのうちそういう系の患者さん担当とかになりそう。過労とストレスで倒れないといいね。あ、今度宮井さんとお出かけしようかな。

「目を覚まされたわけですし、これから検査をすることになるんですけど」

「明日でいいですか？　結花とはいろいろと話すことが多いので。あと連絡を入れないといけない相手がいますし」

「仕方ありませんね。先生の方には私から言っておきますので」

「すみません。ありがとうございます」

「特例中の特例ですからね。それと萩近くんが目を覚ましたことは、私の方から連絡を入れておきます。ひとまずはお見舞いに来てくださった方たちに入れますので」

念を押すように言った宮井さんが部屋から出ていく。雄弥の時もそうだったけど、わりと患者側の要求を聞いてくれるよね。この病院の方針なのかな。人気ある病院とも聞いたことあるし。雄弥の影響があるのも否定できないけども。

ドアが閉まったら私は後ろにいるお兄ちゃんの顔を見上げた。お兄ちゃんはドアの方を見ていたけど、私の視線に気づいて目を合わせてくれた。柔らかく微笑んでくれて、髪を梳いてくれる。これも久しぶりで心地いい。自然と目を細めて体をお兄ちゃんに預ける。

でも、お兄ちゃんといろいろと話があるみたい。だから、これも程々にしてお兄ちゃんに話を促した。お兄ちゃんの周りの人には、宮井さんが連絡を入れてくれるから、話をすることに集中できる。

「……何から話したものか」

「いっぱいある?」

「整理できてないからいっぱいかもわかんないな。……やつば身内のことからかな」

「……うん」

「それを話すにあたって、先に謝らせてくれ。ごめん結花。俺はお前から母を奪った」

「……え……どう、いう……こと……?」

お母さんを奪ったってどういうことなの? だって私のお母さんは売春婦で、いろいろあって小学生の時に死んじゃって……。お兄ちゃんと出会ったのはその後の話で。

だからお兄ちゃんが奪うなんてことはありえなくて……！

「細かいことは俺も把握できてない。けど、分かっていることは俺と結花の親は入れ替わってる」

「……。え、待つて……分かんない。意味分かんないよ！」

「結花が俺と一緒に過ごした時にいた母さん。あの人が結花の本当の母親だ。結花がそれまで過ごしていた母親が、俺の本当の母親なんだよ。ちなみに父親も違う。あのクズが俺の父親で、結花の父親は別にいる。その人ももう亡くなってるけどな。ちなみに名字だけは今のであってるよ」

お兄ちゃんの話聞いて、お兄ちゃんと一緒にいたあの頃を思い出す。あの頃は既にシングルマザーしてて、だからあんまり話す時間も無くて……。でも、母親の温もりは少しだけ感じられてた。忘れちゃった感覚だけど、優しくて温かくて満たされる。そんな当たり前で大切な感覚。

正直言つてまだ飲み込めない。納得できないとかじゃなくて、理解が追いつかない。衝撃が強過ぎるから。だつてお母さんだと思つてた人が、実はお母さんじゃなくて、本当のお母さんとは一年しか過ごせなかつたんだから。しかもその時はそうだと知らな

くて……。

混乱してるのが少しだけ落ち着いてきて、それでようやくお兄ちゃんの状態に気がついた。体が震えてて、目も珍しく怯えてる感じ。

「ごめん結花……。本当にごめん……！」

「お兄ちゃん……」

あー、そっか。奪ったってそういうことか。本当の母親と過ごせなかった私への罪悪感が強いんだ。お兄ちゃんは優しいから、きつと自分を責めまくってる。お兄ちゃんが奪ったわけじゃないのに。しかも、それを言ったら私だってお兄ちゃんからお母さんを奪ったようなものなのに。

だから、私はお兄ちゃんと向き合うように体の向きを変えて、お兄ちゃんの両頬に手を添えて目を覗きこんだ。

「私はそれを知つても恨まないよ？ 嫌わないし、離れたりなんてしない。お兄ちゃん
は私のたった一人のお兄ちゃん、大切な人なんだから」

「……結花……」

「だから、自分を責めないで。お兄ちゃんが自分を赦せなくても、私が赦すから」

「ははっ……、これだどどつちが上かわかんないな……」

「今じゃ一応私もお姉ちゃんしてるし」

「それについて詳しく」

切り替え早すぎないかな。さつきまでの可愛いモードのお兄ちゃんが一瞬でいなくなつたよ。別にどんなお兄ちゃんでも好きなんだけどさ。他にも話があつたんだろうけど、ひとまずはそれを置いとくって感じかな。

私はお兄ちゃんの頬から手を離して、どこから話すかを考えた。考えたところで氣づいた。あの日からの話をすればそれでいいんだって。私が協力させられたあの事件の顛末というか、お兄ちゃんが知らないであろう話からだね。というか、お兄ちゃんはその事件の内容ほとんど知らないよね。そこも話さなきゃ。

そんなわけで私はあの事件のことを改めて話した。その結果お兄ちゃん以外にも重傷者が出ていたことを。その事件の後に、私は引き取られたんだってことを。その長女をお姉ちゃんとして慕って、長男を弟と呼んでいることも。年齢は同じだけどね。三つ子だね。

海外ライブをしたこと、文化祭に行ったこと、羽丘に通うようになったこと、姉弟で

旅行もしたし、復活ライブもした。結婚式に出席したし、ハワイにも行った。

「文化祭で……一学期にもしただろうに」

「そうなの？ 私はそのへん知らないんだけど。秋にやったやつは羽丘と花女の合同だったよ」

「規模デケエ……。今聞いた話どれもマジで規模デケエな」

「あはは、そうなんだよね。……大変だけど、それでもやりがいがあつて楽しいよ！」
「結花が楽しめてるならそれでいいけどさ」

頭を撫でてくれるお兄ちゃんに抱きついて甘える。今すつごい幸せだけど、まだまだ足りない。空いた年月を埋めるにはこんな短時間じゃ全く足りない。お兄ちゃんも甘えさせてくれるから、際限なく心からの欲求が溢れちゃう。でも、今は止めなくていい。もう我慢しなくていいんだから。

「そういえば、SPACEについてなんだが……」

「うん。聞いたよ。店畳んじやつたんだよね……」

「それについても謝らないといけなくてさ、SPACEで一回だけライブしちゃった」

「ええ！ズルいよお兄ちゃん！ 約束守れてないことも怒るけど、SPACEでライブできたことがズルい！」

理不尽な怒りだとは我ながら思う。お兄ちゃんだって約束を進んで破るわけがない。そうしないといけなくなっちゃったんだろね。どういう状況でそうなったのかは全然分かんないけど。

それに、私は私でいろいろと大きなステージでライブさせてもらえちゃってるしね。お兄ちゃんを責められないか。

SPACEでのライブ。お兄ちゃんと私で立とうって言ってたのにね。仕方ないことなのかもしれないけど、やっぱり悔しいかな。きつと雄弥たちに言えばSPACEでライブはできた。けどそれは「お兄ちゃん」とって約束を破るから。だから控えてた。本当のお母さんが立ったっていうあの場所。思い出の場所。

「……お兄ちゃんとライブしたいなー」

「結花は有名人だからなー。小規模とかでならできなくもないのか？ 打ち合わせして先輩からも動かせば……」

「ま、そのへんは退院してからね」

「それもそうだな」

今考えたって動けないんだから仕方ないよね。私の方でなんとかできたらいんだけど、こういう細かいのは私さっぱりだから。今のお父さんに聞けば教えてくれるかな。メンバーに聞いても分かるだろうけどね。

お兄ちゃんからも話をいっぱい聞いた。高校に入ってからのこと。何個かはぐらかされたのもあるけど、私だって話してないこともあるんだからお互い様だね。話さないといけないってわけじゃない。家族にだって隠し事はあるし、私達はきつと話さないでいた方がいい。特に私は。

お兄ちゃんは優しいから、話したらきつと私のことをいっぱい甘やかしてくれる。厳しいところもあるだろうけど、それでもね。そして私はそんなお兄ちゃんに依存しちゃう。今だって少しずつ依存していつている。我慢も効かない。

「……お兄ちゃん」

「分かってる」

「んっ」

向かい合ってる状態でまたギュって抱きしめてもらう。けど今回はここから少し増えちやう。お兄ちゃんとはもう離れたくないから。だから私も腕に力を込める。より密着度が増す。

それでも足りない^{まだ欲しい}。私は顔を上げてお兄ちゃんの目を見る。優しく、強い目。でも奥には弱さもある。そんなお兄ちゃんに私は近づいて、唇を重ねた。

——ああ、少しずつ心に温か^{愛情}さが注がれていく

——ずっとお兄ちゃんといたい

「レオくん目が醒めたって！ ……何してんの？」

「レオ兄ちゃんと……結花さん？」

「わーお、レオぼんこれは修羅場だね。それと結花ちゃんお久々」

「ライブ以来かな。デベ子も久しぶりーって」

「二人とも話逸れてるわよ。……玲音くん、自分で何とかしなさい」

グリグリメンバーとりみりんが部屋に駆け込んできた。りみりんがお兄ちゃんのことを兄呼びしてるのは後で聞いたですとして、グリグリメンバーと仲がいいのってサポートしてたからだよね。私達だけじゃなかったんだ……。寂しいけど、お兄ちゃんだ

から仕方ないか。

それよりもゆりさんのあの視線の冷たさだよ。一番動揺して入ってきて、この状況を見てあななったってことは、そういうことなんだよね。お兄ちゃんとそういう関係か
なって思ったけど、お兄ちゃんを見た感じそれでもなさそう。

それはどうでもいいんだけどね。
だつて

——お兄ちゃんは譲らないから

離していた唇をもう一度お兄ちゃんと重ねる。さつきよりも深く、強く。さすがのお兄ちゃんも抵抗しようと肩をタップしてるけど知らない。起きたばかりのお兄ちゃんに力負けしないから私が主導権握ってる。

「ちよつ！ 結花ちゃん何してんの！ レオくんから離れて！」
「やだ！ お兄ちゃんはあげません！」

たとえゆりさんでも駄目。譲れないものだつてある。

——もう誰も私から奪わないでよ

10話

11月ともなると上着がないと寒い。病院の屋上ともなれば風も強いから尚更寒く感じる。私はともかくとして、患者服の上に着る羽織つただけのレオくんは余計に寒いよね。

「悪いなゆり。妹が迷惑をかけた」

「ううん。数年ぶりの再会だもんね。家族水入らずのところに入っちゃったのは私達だし。……いろいろ凄かったけど」

「結花も結花で見ない間に変わったところもあつたつてことかな」

苦笑して屋上の扉に目を向けるレオくんは、誰にも見せたことないような穏やかな表情をしていた。私も知らないし、あんな目で見えてくれたことなんてない。嫉妬しちゃうと同時に、二人の関係の強さには敵わないんだって嫌でも理解させられる。

つい感情的になって、二人を引き離そうとした時の結花ちゃん怯えのあの顔方。あれを見

ちやつたら強く出られない。私が待つてた数カ月とは比べ物にならない年月。長い月日を耐えて耐えて耐えて、やっと出会えた兄から離れたくないというあの想いを知ら、きつと私が身を引くべきなんだ。

そう思つてたのにね。

『結花。少しここで待つててくれるか？ ゆりと二人で話して来るから』

『え……』

『そんな顔するな。話が終わつたら戻つてくるから。しばらくは入院も続くだろうし、何回でも来たらいい。なんなら今日泊まつていけばいいから』

『……うん。あのねお兄ちゃん、いつも誕生日プレゼントありがとう♪』

『!? 気づいてたのか』

『最初はそうだったらしいなく、だったけどね。今年ので気づいちやつた。プレゼント託してるの見ちやつたし』

『……そつか』

『嬉しかったよ。考えて選んでくれてたのが分かつたもん。それとね——』

結花ちゃんがレオくんは何を言ったのかは誰も聞こえなかった。耳打ちしてたから

ね。でも、それがレオくんの力になることなんだってことは分かった。『最高の妹だよ』って笑顔で言つて頭を撫でてたから。

結花ちゃんはそのだけでも幸せそうにニコニコしてた。なんとなく近い気持ちなら分かるけどね。レオくんに褒められたら嬉しいもん。

起きたばかりのレオくんが外に出るのは、七菜が真っ先に止めてたけど、知つての通りレオくんは自分を曲げない。気分転換をしたいから、なんて言い訳にもならない理由でベッドから出て、私の手を引いて病室を出た。

きつと私は止めるべきだった。だけど、レオくんと話をしたいという私の我儘が勝ちやうった。だからこうして屋上に来てる。

「みんなには謝らないといけないことばっかだな」

「そりやそうだよ。五ヶ月弱は寝てたんだから。……本当に心配した」

「ゆり……ごめん……」

「っ！ そんな……こと……！ ……っ、わたし……こわかったんだよ？ ポピパのオーデイションのときもレオくんがなくて……、いえにかえつたらレオくんがびよういんにつて！」

ずっと我慢してた。弱音を吐いてられない時期だったから。みんなの進路の邪魔をしたくなくて、七菜たちといっぱい喧嘩もした。弱音を吐いてつてお正月の時に言われてたから。でも、私は……それを言ったら私が壊れそうって思つて、「大丈夫」としか言えなくて。

手術が無事に終わったつて聞いても、その後がどうなるかは分からないつて言われて。レオくんは目を覚まさなくて。呼びかけても駄目で、抓ったら起きるかな、なんて考えてもそれも駄目で。どうしたらいいか分からなくて。

「もしかしたらずっとねてるんじゃないかって！　もうはなせないんじゃないかって！　こわくて……、そんないやなことばかりかんがえちゃつて……！　SPACEのラストライブだつていやだった！　レオくんがいなかったから！」

思い返しては胸が締め付けられる。SPACEは私達の始まりの場所だった。あの場所があつたから、私はレオくんとの繋がりを保てた。そのラストライブが怖かった。何もかも終わつてしまいそうで、全てが過去のことになりそうで。

——その中に君の存在もそこに混ざつてしまいそうで

「Augenblickの復活ライブもいやだった！　なんでレオくんがおきてないのにつて！　二人の幸せをねたむじぶんがいやだった!!」

本当はもつとちゃんと祝つてあげたかった。私達の弟子とも言える雄弥くんの復帰を。リサちゃんとの結婚を。心からちゃんと祝福してあげたかった。

けどそんなことできなかった。彼らが復活してもレオくんは起きない。リサちゃんも幸せそうなあの姿を見ても、自分がそうなれないことが嫌で、悔しくて。そんな自分にこそ嫌気が差した。

「こんならしくなくて！　私がわたしじゃなくなつて……！！　こんな私なんていなくなつちやつたほうがつて、なんかいもかんがえて！」

いつの間にかレオくんの腕の中に包まれて、私はそこでずっと思いの丈を吐き出してた。レオくんの胸を私の涙が濡らす。でも寒くない。心だつてもう寒くない。レオくんの手が私の背に回つてるから。包まれて、やっとこの温かさを感じられてる。狂おしいほど好きで、愛おしい。

「俺は起きた今日にゆりを見られてよかったよ」

「え……」

「結花と再会できたのも嬉しいし、ゆりが来てくれたのも本当に嬉しい」

「レオ……くん……」

初めて向けられるレオくんの優しい表情。その声に私の心の氷が溶かされる。溜め込んでた感情が全て放出される。声にならない声が出る。感情がグシャグシャで、頭の中もグチャグチャ。今の自分の状態なんてもう分かんない。ただ心に従ってるだけ。

「レオくん……落ち着けた」

「そうか？ 本当に大丈夫か？」

「うん。……あはは、レオくんって心配性なんだね」

「うっせ。大切な奴だけだよ」

「ふえっ!!」

ボソツと呟かれた内容が耳に入って、私は一瞬で顔が赤くなる。捻くれ者のはずのレオくんが、ストレートに言ってくるんだから。早まる心音を落ち着かせようという思い

よりも、もつとこれを感じていたいって思う自分がいた。だってこれも久しぶりなんだから。

この感覚すら愛おしいと思えてきた。隣りでそっぽ向いてるレオくんの肩に頭を乗せる。腕を絡ませて手を握って。たしかにここにレオくんがいるんだって。そう認識できる。

「ねえレオくん。話がまだあつてね？」

「どれだけでも聞くぞ」

「ありがとう」

レオくんから一旦離れて正面に立つ。真っ直ぐレオくんを見られるように。

早い鼓動を抑えられない。深呼吸しても煩いまま。

でも、これでいいや。抑えられないのは分かりきってたし。

「私ね？」

——言うの？ ずっと逃げてたのに

うん。もう逃げないって決めたから

「レオくんのこと……」

——怖がってたのに？

怖くてもだよ

私は欲張りだからさ

『やりたいこともやらなれないといけないことも全部やる』から
欲しいものも掴み取りたいんだ

自分を自分で振るい立たせる。唇だつて震えてるし、手足も怖さで震えてる。怖さはもちろん、駄目だったときのを考えちゃつてのこと。自信満々に、なんて無理だよ。無理だけど、伝えなきゃ。

——居場所君の隣を求めて痛いくらいに心が叫んでる

「好き……です」

この後にも言葉を続けたい。この先をどうしたいとか、レオくんといったらどうか、

いっぱい言いたいけど言えない。気持ちを伝えた恥ずかしさもあるし、これ以上言葉が口から出てくれない。

思わず目を瞑っちゃってる。顔が熱いからまた顔が赤くなってるのも自覚できる。

——怖い……こわい……

出会った時からずっと迷惑をかけてきた。私と距離を置こうとするレオくんの邪魔をして、逆に距離を縮めた。生活が苦しいと知っておきながら連れ回した。

二年生の時もいっぱい迷惑かけて、怪我だってさせて。そんな迷惑な私がレオくんを好きになるなんて烏澁がましいにも程がある。だから、フラレたって納得できちゃう。でも、もし……。

(ゆりの気持ちには当然気づいてはいたんだが……これ——って言ったら……どんな反応するんだろうな)

「ゆり。……ありがとう」

「っ！ あ、はは……うん、そう……だよ。迷惑……だもんね。ごめんね！」

「ちよい待ておい！」

「なんでだって——んっ」

レオくんから離れようと、走り出そうとしたところで腕を掴まれて引き寄せられる。反対の手で腰に手を回されて、腕を引つ張った手で今度は顎を持ち上げられた。レオくんの顔が目の前にあつて、口には温もりを感じて……。

私の力が抜けたところでレオくんが離れた。レオくんもちよつと顔が赤くなつてるけど、それ以上にきつと私の方が赤い。

人生で初めてのキス。好きな人にとっていう淡い願いも今叶った。でも、以前はレオくんに拒まれたのに……。

「なん、で……?」

「俺がゆりのことを好きだからだよ」

「っ!? え、うそ……いつから……? だって全然そんな素振りなかった!」

「初めてゆりに紅葉を見せた時から。好きじゃなかったらあの場所は教えてない」
「っ!?!」

そんなに前から……。気づけないよ。全然分かるわけないじゃん。レオくんは全くそんな素振りなかったし、それどころか私のせいではあるけど、疎遠気味にもなったし。分かんない。ほんとに全然わかんないよ。

私を優しく包んでくれるレオくんが、独白するように語ってくれる。レオくんの当時の心境を。

(こうしてゆりに伝えられるのも結花のおかげだけだな。『自分のために涙を流してくれる人は貴重。そういう人こそ大切にしないといけない』って、お母さんがそう言っていたの、私も覚えてるよ。お兄ちゃんも幸せにならなきゃ』って背中押されたし、二十騎には『正直になって向き合いなよ』って言われてた)

「……怖かったんだ。俺は大切な人を失ってばかりだからさ。もしゆりと交際を始めたら、また失うんじゃないかって。ゆりまで消えたらって」

「あ……」

レオくんはお父さんの方とは全然絆が無くて、お母さんの方は亡くなられてる。妹さんとは引き離されて、お祖母さんも事故で亡くなられた。

だから……、だからレオくんはみんなと距離を取ろうとしてたんだ。仲良くなったらって、親密になっちゃったらまた失うかもしれないから。

今になって初めて知ることができたレオくんの弱さ。私はいつも遅いね。でも、これからはもう大丈夫。私がレオくんを支えるから。

私はレオくんの首に腕を回して背伸びする。そしたらちようどレオくと唇を重ねられるから。背伸びしながら倒れ込むように体重をかけるけど、レオくんは受け止めてくれる。さつきよりも長くて深いキスをする。離れたら私達の口を繋ぐ橋がかかった。

「大丈夫だよ。結花ちゃんとも再会できたんだし、私はいなくならないから。ずっとずっとレオくんの側にいるから」

「苦労するぞ。ある意味疫病神なんだから」

「レオくと一緒に平気だよ」

「……改めて聞くが、こんな奴でいいのか？ 捻くれてて、ガキで、弱いやつだぞ？」

「そんなのどうでもいいよ。私はレオくんに、いつまでも冷めない恋をしてるんだから。」

二人の未来図を描こうよ」

「俺には勿体無いぐらいの女の子だよ」

三度目の口付け。今度はどちらからともなく近づけあつて唇を重ねた。お互いに腕の力を強める。今日の前にいる恋人ともう離れないですむように。誰にも奪われないように。存在を刻みつける。

「つふう……。あ、レオくんって海外はどこに行くの？ それ聞いてなかったから進路決めなくて」

「あー、そういうや言ってなかったな。ゆりが行きたい場所だよ。いろんな世界を見たいて思ってるだろ？ そのための貯蓄だけは死守してるし」

「……まさかレオくんに最初に気づかれるなんてね。でも、そっか……。それなら私の方で決めるね！」

「任せた」

レオくんが見てる景色、見ようとしてる景色。それと同じのを見ようとしても、そりやあ見えるわけじゃないよね。お互いに相手の見たい景色を見ようとしてたんだから。

でも、こうしてそれが分かったのは本当に良かった。私達はようやく望んだ景色を見られるようになるんだから。

病室に戻るためにレオくんと手を繋いで歩く。付き合う前からたまにしてたことだけど、やっぱりカップルってなったら少し違う感じがするね。

「今年も紅葉見たいし、卒業旅行も行きたいかな」

「全部行くぞ。紅葉は退院したらすぐって感じになるが」
「レオくんが無理しなかつたらそれでいいよ」

できなかったこともある。それでもこれからできることだっというっぱいあるんだ。またこうして隣同士歩けること、それがとても嬉しくて心がはしゃいじやう。

部屋に戻ってみんなに報告したら結花ちゃん和喧嘩した。やつぱり駄目だったみたい。でも、卒業するまでの間はレオくんとの時間を優先的に譲るってことで落ち着いたもらった。私が彼女なんだけどね。でも同じ家で生活できてるからいいんだよ。

私は気づいておくべきだった。

レオくんの心音が弱まったことに。

「ママー。パパのお話ー」

「^{とお}璃は。パパの話好きだね。うん、いいよ。こっちにおいで」

「やったー！ 続きね続き！ こーこー！ 年生の夏休みからだよ！」

「うん、分かってる。高校1年生の夏休みはね、バンドメンバーとパパとで海に行ったんだよ。それでね——」

君との時間は短過ぎたね。でも、私の人生を最高に彩ってくれてたよ。

——ありがとう

「つて夢を見たんだけど」

「おいこら俺を勝手に殺すな」

今日が出立日。前日はレオくんと同じベッドで寝させてもらった。そしたらあんな怖い夢見たんだけどね。起きたらレオくんがちゃんと隣りに居てくれて安心できた。

レオくんが目を覚ました日から交際は続いている。レオくんが退院したら報告していったけど、みんな『今さら?』って反応だった。オーナーは普通に祝ってくれたのですね。

ラストライブは盛り上がった。レオくんが作ってくれた曲も披露できたし、りみや香澄ちゃんたちも見えてくれたしね。レオくんはステージに立ってくれなかつたけど、舞台袖で見ててくれた。終わったらすぐに駆け寄って抱きしめちゃったよ。あと結花ちゃんとはステージに立ったことには嫉妬した。

帰国してライブする時には意地でも一緒に立つてもらおうからね。他にもいろいろ思いつきがある。それを胸にしまって、隣にいるレオくんの手を取りながら確認するように話しかける。

「レオくんはずっと側にいてくれるもんね?」

「当たり前だろ。ゆりを残して死ねるかかっての」

「……レオくんが起きたあの日。すっごいびつくりしたんだけど。部屋に戻ったらいつの間にか寝てて、てっきり……」

「あれなー。あれは疲れがドツと来たからな。やっぱ起きてすぐに寒い屋上は無理があつたな」

レオくんは、あの日私と結花ちゃんが話をつけてる間に眠ってしまっていた。てつきりそれで……つて慌てただけど、ひなとリイがレオくんの脈とか呼吸を確認してくれて、ただ寝てるだけって分かった。人騒がせにも程があるけど、無理させたのは私だから何も言えないよね。

「まあでも、お互いの気持ちを伝えあえてよかった」

「ふふつ、それもそうかな。レオくん。——大好きだよ」

「ああ俺もだよ」

春風が吹いて、桜も道に咲いてる花もみんな踊ってる。今はまだこうして触れていた。

——心地よくて大切な関係

そんな朝焼けの中で君と手をつないで歩く。

——ずっとずっと君と生きていくよ

彩ルート

もう一つの可能性

『ごめん彩』

その短い一言だけを告げて玲音さんはいなくなつた。向かう先は分かつてる。ゆりさんがいる場所に行ったんだ。ゆりさんの彼氏さんとのトラブルを解決するために。ゆりさんを助けるために。

——優先されるのはゆりさん。

分かつてるつもりだった。理解してるつもりだった。それでも、そんな関係ないのがこの感情で、奪いさりたいと思つてしまう。私を優先してほしいつて思う。私だけを見ていてほしいつて。

私だけが愛したい。私だけが愛したい。独占したいし独占されたい。お互いにお互いの一番つていう関係になりたい。それだけを望んでいて、そうありたいと願つてる。

「はあ〜……寒いや……」

玲音さんに想い^{告白}を告^{した}げ^たた^{かつ}た。望みなんて全然ないのが分かつていても、それでも少ない希望に縋りたかった。それなのに、現実を突きつけられるのが怖くて、今のままでもいいんじゃないかって頭によぎってしまった。そのせいで言葉にできなくて、その間に玲音さんの携帯に電話がかかってくる。そして玲音さんはゆりさんを助けるためにすぐにいなくなつた。

——告白できずにフラれた

それがクリスマスイブ^{今日と}の出来事だった。それがどれだけ辛いことか。後からジワジワと私の心を締め付けて、痛めつけてることか。

一人家に帰る途中の公園に寄つて、冷えた指先に吐息をかけて温める。指先が温まっても、私の心は温まらない。舞い落ちる純白の淡雪。積もることなく溶けてしまう雪。まるで私の恋愛みたい。

どれだけ悲しんでも、どれだけ彩ろうとしても、ゆりさんという大きな存在の前ではかき消されてしまう。玲音さんの心のキャンバスには、丸山彩の色が残らない。

だって私の色がこの雪のように純白なんだから

「彩」という名前に反して、私には色なんてない。いっぱい抱え込んで、ストレスも疲労も闇も背負う。そんな玲音さんの黒いキャンバスを元の状態^{白色}に戻すだけの存在。

だから私の心だつて元に戻るんだ。どれだけ頑張つても結果という色を得られない私へと。玲音さんと過ごした9ヶ月で彩られた私が消える。現実を思い知らされる。この結果こそがお前にふさわしいと。分相応なのだ。

「夢……くらい……見させてよ……。一回くらい……願いを叶えさせてよ……！」

誰に向かって言つてるわけでもない。ここには私一人しかいないのだから。もし神様がいるのなら、その神様に言つてるのかもしれない。だつて人は神様に願うのだから。

玲音さんと過ごした時間を思い出す度に涙が溢れてくる。目に溜まった涙はすぐに溢れて頬を伝つていく。溢れ落ちる涙が淡雪に当たつて、白色すら消していく。それを目にして、嫌な思考になつちやつてる私は自分をさらに否定する。丸山彩には、白色すら烏澁がましいと。無色こそが私なんだと。

「いやだ……いやだよお……寒いよ……助けてよ……あたためてよ」

自分の体を抱きしめるように体を丸める。それでも寒さは変らない。だつて私の心

が一切温まらないんだから。雪の中でこうしてるから体も冷えていく。温もりを感じられるのは、頬を伝う自分の涙だけ。自分で慰めるしかないんだ。

どれだけ泣いたのか分からない。時間なんてわからない。涙がいっぱい溢れた。これ以上は涙も溢れないんじゃないかな。これだけ泣いたのはいつぶりだろう。もしかしたら一番泣いたのかもしれない。

冷えきった心と冷えきった体を動かして家へと変える。たぶん目も赤くて涙の跡は消えてないはずだから、お母さんたちにバレちゃうね。妹にまた泣き虫って言われちゃうかな。でも、今日のだけは許してほしいな。お姉ちゃんすっごい頑張っても駄目だったんだから。

暖かい家に帰ろう。暖かいご飯を食べて、暖かいお風呂に入って、暖かいベッドに包まって寝よう。そうしたらきつとこの冷たい私も温かくなるはずだから。きつと明日からまた“丸山彩”になれるはずだから。笑顔いっぱい私の私に。

「なんか入りにくいな……」

自分の家なのに入りにくい。おかしいよね。だけど、私はこの理由がなんとなく分

かっちゃってる。家に入ったら今日がもう終わりだからだ。今日が終わるといふことは、玲音さんとの日常ももう終わりということ。明日から私達の関係はきつと変わる。言葉にできるほどの変化でもない。だけど、その変化は大きな変化。もう今まで通りにはできないのだから。

踏ん切りがつかない。いつものくよくよする私だ。家の敷地に入るための小さな門。それを開けるためのドアノブに伸ばした手が震えてる。力が入らない。重さを感じないほど軽いはずなのに、開けることができない。

——私は……

未練も何もかも全て振るい落とすように私は思いつきりドアノブを下げた。勢いをつけすぎたせいでカシヤン！ って大きな音がした。門を開けた音だけど、その音は私の心に鍵をかけた音でもある。忘れ去るために、この感情を深く落としてこんで閉じ込めるための鍵。一度失敗してることだけど、今回は大丈夫。失敗なんてしない。綻びなんてない。

「彩!!」

「っ!?! なん……で……」

壊れないように頑丈にしたはずの心の壁に、その声だけでヒビを入れられる。声に反応して振り返った視線の先には、もちろんその人がいて、その姿を見るだけでヒビが大きくなる。

どれだけ走ったんだろう。玉のような汗が溢れてる。息が乱れてて、肩も大きく上下してる。その中でも目に入ったのは玲音さんの手。血が溢れてる。

「その手は」

「ただの刺傷だ」

「……なんで来たんですか？ ゆりさんは？」

「ゆりは家に送り届けた。そこから急いでこっち来たんだ。彩に連絡入れても反応なかったからさ、もしものことがあったらって不安になって来たんだよ」

玲音さんに言われて携帯を確認する。そこにはたしかに玲音さんからメッセージが入ってて、電話も来てた。全然気づけなかった……。

「……気づけなくてごめんなさい。来ていただいてありがとうございます。私は大丈夫ですから」

「みたいだな。表面は」

「っ！」

「彩。寒いだろうが、もう少しだけ時間くれるか？」

私の肩に自分の上着をかけた玲音さんが、真剣な眼差しでそう言ってきた。真剣だけで、優しさもあつて、私は玲音さんのそういうところが好きで……。

腕をクロスさせるようにしながら、かけてもらった上着を引つ張る。玲音さんのお願いに頷きながら顔を伏せる。この気持ちはもう終わりにするんだ。短くても彩つてくれたけどの時間をもう望んじゃいけないんだ。私の心が壊れる。

「んー、考えが纏まらないから直球でいくな？」

「どうぞ……」

怪我をしてまでゆりさんを助けたんだ。電話が来たときも凄く怖い感じになつてた。きつと恋愛漫画みたいに、助けてそのまま付き合うって流れになつたんだ。ゆりさんが玲音さんを好きなのは分かつてたこと。玲音さんだつて口ではああ言つてるだけで、ゆりさんを想つてるのは誰だつて分かる。玲音さんはきつちりしてる人だから、きつと私

にそれを告げて、私達の関係も一区切りつけるんだ。

「彩のことが好きだ。俺と付き合ってくれ」

「……………え」

なにを……………言つて……………。あ、きつとこれは夢なんだ。私はもう家に帰つてて、もうベッドで寝てるんだ。そうじゃなかったらこんな展開になるはずがない。私が望んでる展開になるはずがない！

「もう覚めて……………もうこんな夢いらない！」

「彩？」

「玲音さんももういいです！ 私のために夢にまで出て来てもらわなくていいです！」

「彩!!」

「っ！」

「これでも夢だつて思うか？」

玲音さんの右腕が背に回されて体を引き寄せられる。玲音さんの体温、心音。全部

知ってる。たしかに夢じゃないかもしれない。けど、分からない。もう私には何も分からない。

「だって……玲音さんはゆりさんが好きで、ゆりさんも玲音さんが好きで……。だから私が玲音さんに好きって言われるはずがなくて！」

「残念ながら、今この状況が現実だ。俺が彩のことを好きなのが現実なんだよ」

「そんなの……。じゃあ証明してみてくださいよ！　玲音さんが私のこと好きって！　ゆりさんじゃなくて私を選んでことを信じさせてみてください！」

「分かった。文句言うなよ？」

玲音さんが私の後ろに回していた手をどけて、私の顎を軽く持ち上げる。そのまま被さるように唇を塞がれる。そこから玲音さんの想いが流れ込んで、私の冷えた心が温まる。無色な私が、萩近玲音という一人の異性の色に染まっていく。

これが夢なんて思いたくない。これが現実であってほしい。私は夢中になって玲音の首に腕を回して、離れられないように唇を押し当て続けた。

これが現実であってほしい

私にだって叶うものがあるんだって

そんな結末もあるんだって

「あれ？」

ふと気づいたら私は自室にいた。私のベッドにいて、時間はいつも起きる時間より10分早いかな。

ふと胸が苦しくなったのを感じた。そうだ。私はさつきまで凄い幸せで……。でもやっぱりあれは夢だったんだ。これが現実なんだ。

そこで、右手が動かしにくいことに気づいた。そつちを見て理解した。そこには玲音さんがいて、夢なんかじゃなかった。私は昨日いっぱい玲音さんに愛されて、私も玲音さんを愛したんだった。

私はまだ寝てる玲音さんに被さるように寝転び直す。聞こえてくる玲音さんの心音。大好きな人の温かさ。私だけが感じられる玲音さんの全て。その全てが愛おしい。

「玲音さん、大好きです」

番外編

牛込ゆり誕生日回

いつも通りバイトを詰め込んで働く。ギリギリの生活をしているのだから、働ける時に働いておかないと生活していけない。社員や先輩たちには心配されるが、事情も知っているからそこまで言われぬ。差し入れだったりご飯を奢ってもらったりと、申し訳なさとありがたさを同時に感じる手段でサポートしてもらってるけどな。

よくサポートしてくれる人の一人であり、このバイトのムードメーカーである先輩がニヤつきながら肩に腕を回してくる。上機嫌なようでその勢いが無駄に良くて体がぐらつく。

「レ〜オト！ ちゃんと準備したのか〜？」

「作業中にちよつかいかけないでくださいよ……。てか準備って何の話ですか？ この後予定ありましたっけ？」

「明日と明後日を一日中働く人間を連れ回すほど俺は鬼畜じゃないぞ？ そうじゃなくて、今日があの子の誕生日なんだろ？」

「……なんで知ってるんですか」

「ひなこちゃんから聞いた!」

二十騎のやつ、よりによってこの人に話したのか。そこはもちろんあいつの自由だし、俺がどうこう言う立場でもないけどさ。この人に話した理由は、おそらく俺の逃げ道を塞ぐためとか、そんな理由なんだろうな。この先輩がこの手の話を聞いたら、俺の方に言及しないわけがない。

簡単な清掃作業と食材の補充をしながら先輩を横目のため息をつく。こんな対応は失礼なんだが、俺の性格を分かってくれているし、この人はこういうのを流してくれる。そこに甘えていては、この先が思いやられるのも分かっているんだけどな。なかなか変えられない。

自分から話を振らない俺の肩を叩いて先輩が離れた。相変わらずニヤついてるけど、揶揄ってるだけでその答えは真剣に知りたいたんだろうな。

「プレゼントは用意してるのか?」

「なんでそこまでグイグイ来るんですか……」

「恋のキューピッド役って楽しくない?」

「それ先輩がやったら亀裂入るだけでしょ」

「失礼なやつだな?!」

もちろん冗談ではあるんだけど、先輩はリアクションが面白いからつい揶揄い返してしまう。先輩ではあるんだけど、気持ちとしては友人。そんな感じがするんだよな。器が大きいってのはこの人みたいなことを言うのだろうか。……たぶん違うな。

「で、プレゼントは？」

「……はあ。二十騎がしつこいんでちゃんと用意しましたよ。大して絡みもない奴へのプレゼントなんて、ハードルが高過ぎますけどね」

「はっはっは！ それはたしかにな！ でもま、それでも用意してるあたり、お前の人の良さが出てるよ」

「……そんなものないですよ」

「照れやがって。可愛い後輩だな！」

「照れてません！ その腹立つ笑顔もやめてください！」

この人揶揄ってんな。俺がさっきやったことを実は根に持ってたのか。違和感なく自然な流れで揶揄ってきたぞ。しかも俺が本気では嫌がらない程度で。

これも話術の一つってことなのか。この人の相手をするの疲れるんだけど、嫌な疲れじゃない。純粹に楽しかったと思えるような疲れだ。

「ま、なんにしてもちゃんと渡してやれよ。今日が終わつちや意味ないし」

「分かってますって」

「それならよし！　じゃ、玲音はあがりな」

「は？」

「渡して終わりってわけにはいかないだろ」

物凄いわれ顔されたんだが、渡して終わりじゃ駄目なのだろうか。俺と牛込の関係なんてただの知り合いなのに。一応サポーターであるってだけで、実際には何もしていない。ほんのたまに練習を見に行くぐらいだ。強制連行の時もあるけど、それはほとんどないし。

そんな思考を読まれたようで、先輩は珍しく目を鋭くした。彼女持ちの人間からしたら、異性に対してのプレゼントでこれは見逃せないらしい。

「プレゼントってのは貰えると嬉しいだろ？」

「まあ、嫌いな奴相手でなければ」

「そうだな。んで、あの子は明らかに玲音を好いてる」

「そこは断固として否定します」

「そんなにかよ……。とりあえず、Loveかどうかは置いて、少なくともLikeではある。じゃないとそれだけコンタクト取ろうとしないだろ？」

否定する要素が見当たらない。この人はほとんど俺と牛込の絡みを知らないくせに、なんで当ててくるんだよ。監視でもされてたのかってぐらい怖いんだけど。監視され

てるのは先輩の方なのに。あの彼女さん行動力半端ないし。

俺が押し黙っていると、先輩は作業をしている手を止めて体ごとこつちに向いてきた。作業を中断してでも話すほど重要なことのようなのだ。

「そんな玲音相手からサプライズプレゼントになるのが今回だ」

「まあ、そうなりますね」

「それなのに渡して終わり、なんてなるわけがない。あの子なら玲音と話をしたがる。それに大人しく付き合え。本人の誕生日なわけだしな。……誕生日じゃなくても贈り物をする日は、本人に合わせるといいぞ」

「最後に遠い目するのやめてくれませんか？ ご愁傷さまですとしか言えませんよ」

一番最後のだけは先輩の経験談だな。でも参考にはできるだろう。俺みたいな人間に彼女なんてできるわけがないし、そもそも作る気もないけども。俺がやってる人生設計は単独だし、相手をこの道に巻き込むのは嫌だからな。

その後は、黄昏れるのが終わった先輩に追い出されるように退勤させられ、俺は更衣室に押し込まれた。タイムカードはまだ切つてないんだが、そこはサービスで最後までつけてくれるらしい。給料泥棒になってしまいが、ありがたく貰つとくとしよう。

「プレゼント取りに家に戻らないとな……。まあ隣だから近いんだが」

~~~~~

「お姉ちゃん。今日はみんなにお祝いしてもらえてよかったね！」

「うん。りみもありがとう」

「私は何もしてないよ」

「そんなことないよ。一緒に祝ってくれたもん。だから、ありがとう」

部屋でりみをハグしながらお礼を言う。家族だからってお祝いの仕方じゃない。りみもお父さんもお母さんも、毎年毎年盛大に祝ってくれる。だから私もみんなの誕生日の時はそうしてるんだけどね。たぶんお互いにこうするから、毎年凄いことになる。

それに加えて、今回は *Glitter\*Green* のみんなも一緒に祝ってくれた。りみが声をかけて呼んでくれた。これだけでもりみは十分功労者だよ。ひなとリイは普段から手がつけれないことになるけど、その分こういう時の活力が凄まじい。盛り上げ役に向いている。七も真面目そうに見えて、こういう時は全力で楽しむタイプ。

……彼はどうなんだろう

ふと脳裏を過ぎるあの捻くれ者の姿。呼んでも来ないだろう人物。高校になって初めてできた男の子の友達。彼はそうとは思ってくれてなさそうだけど。

彼の生活を考えたら仕方ないんだけどね。よっほどの理由じゃないとその邪魔をで

きない。でも、彼にも祝ってもらえたらな、なんて都合のいいことを考えちゃう。

「お姉ちゃん？」

腕の中にいるりみが不思議そうに首を傾げる。私が彼のことを考えて、意識が逸れていたことに気づいたみたい。何でもないよと返事をして、誤魔化すように髪を撫でてからりみを離す。時間はまだ少し早いし、せつかくの誕生日なんだけど、早めに寝てもいいかもしれない。

「あれ？ お姉ちゃんのスマホ通知来てるよ？」

「あ、ほんとだ。全然気づかなかったや」

机の上に置いてあるスマホを手取る。ロックを解除してメッセージアプリを開くと、その一番上に彼の最近音の名前がある。それを見た瞬間、心臓が一瞬止まるようにドキッとす。彼から連絡が来ることなんて一度もなかったから。しかもついさつきまで考えてた相手。

煩い鼓動が抑えられない。トーク画面を開くためにタップする指が震える。画面を押せそうで押せない。内容を見ないといけないのにそれが怖い。嫌がる彼をサポーターにしたのは私。我慢の限界とか言われたら引かないといけない。繋ぎ止めるのと首輪を嵌めるのでは違うから。

「あ……」

指が震えてることで画面に当たった。当たってしまった。

トーク画面が開かれてメッセージの内容が目に入る。

『マンシヨンの下に来い』

たった一言。ただこれだけの内容。頼みでもなく命令形。理由が分からなくてさらに混乱する。ただけと言われたなら下りないといけない。彼のことだからどうせもう来てる。用件は直接じゃないと言ってくれない。

指の震えはまだ収まらない。心なしかさつきよりも震えてる気がする。止められない。その震えを誤魔化すために、私はすぐに行動に移すことにした。

「りみ。ちよつと下に行つてくるね」

「へ？」

「彼が来てるみたいだから」

「彼？ ……あ、萩近さん。お父さんたちには誤魔化しとくね」

「ありがとう」

彼はわざとお父さんとお母さんに嫌われるように動いた。私との繋がりを切れるように。結局は今の状態になつてゐるんだけど、お父さんとお母さんは彼のことをよく思つてないまま。りみはそうでもないみたいで、私の味方をしてってくれる。

そんなりみがフオローしてくれると言つてくれて、私はお礼を言つてから上着を羽



織つてすぐに家を出た。部屋着姿で上着を一枚羽織つただけ。履いてるのは靴じやなくてサンダル。こんな格好で行つたらまた小言を言われそうだけど、今回は彼が悪い。いきなり呼び出してきたんだもん。

「来るなら先に言つてよね」

自動ドアを通つて外に出た私は、柱を背もたれにして目を瞑つてる彼にそう言った。私が来たことに気づいた彼は、目を開けて眠たそうに顔だけをこつちに向けた。疲れるなら後日でもいいし、まずバイトを減らして休んだらいいのに。彼だつて体を壊したら元も子もないつて分かつてるはず。

「思つたより早かつたな」

「いきなりあんな文面が来たらね。君疲れてるでしょ？　ちゃんと休んでよ」

「お前には関係ないことだろ。……用件はあるけどさ」

「その用件つて？　早く済ませられるならそうしよ。君の体調に響かせたくないし」

「そんなヤワじゃねえよ」

相変わらず捻くれてる。こつちは純粹に心配してるのに、それを素直に受け取つてくれない。分かつてきたことではあるけど、ムツてなるものはなる。

あくびをする彼をジト目で見るけど、特に効果もない。眠たげな表情から普段の表情に戻った彼は、その後すぐに嫌そうな表情になった。10秒以内に三つも見せるなんて珍しい。なんて的外れなことを考えつつ、いったい何をしに来たのか頭を悩ませる。

そんな私のことなんて気にせず、彼は彼のペースで話しかけてくる。予想していたことを。

「なんて格好で来てんだよ」

「これも君のせいだよ。こんな時間なんだしよ」

「それもそうか」

少なくとも私が不安に思った最悪の事態にはならなさそう。それだったらもう少し表情が明るいはずだから。それにこうやって雑談も交えてるわけだし。

「時間かけてもしゃーないか。お前の親に俺は嫌われてるし、こんな時間に娘が外にいるってのも思うところあるだろ」

「全部君のせいだけどね」

「今回の場合で言う二十騎と先輩のせいだけどな」

「え？」

なんでここでその二人のことを言うんだろ。ひなは彼と繋がりがあるけど、先輩さんとはそこまで繋がりが無いはず。どうにもそこが結びつかない。

驚いてる私をよそに彼は小さな袋を突き出してきた。ぶつきらぼうに突き出されたけど、そこに苦言を呈する余裕が私にはなかった。それが目に入ったと同時にひなたちに帰る前に言われたことを思い出したから。

『ゆりちゃん今日はまだ終わらないぜ〜?』

『誕生日は23時59分までだからな! デベ子はプレゼント対象外だけど』

『ふふつ、二人ともそのへんで。ゆり、みんなに祝われるわね』

「……固まってないで受け取ってくんね?」

「あ、ご、ごめん。……え、これ……」

袋を持つてる腕を突き出したままの彼が、嫌そうな顔で言ってくる。私は慌ててそれを両手で包んで受け取った。今日贈り物をされるってことはそうなんだろうけど、普段の彼からは考えられなくて確認が持てないでいる。そんな私に確認を持たせたのは、当然彼の言葉。

「誕プレだよ誕プレ。渡さなかつたら強制的にバイト減らされるからな。二十騎が先輩經由で社員に交渉したせいで。社員もそれに乗っちゃったし——」

顔を逸らして愚痴を溢してるみたいだけど、私はその言葉が耳に入らなかった。最初

に言われた『誕プレ』という単語。それを聞いた途端、混乱していた思考が停止したから。

手元にある袋の中身を覗き込む。わざわざプレゼント用に梱包されてる箱。中身が何なのかさっぱり分からない。エメラルドグリーン of 包装紙を、白と青のリボンが括つてる。ワンポイントの装飾品には『Happy Birthday』の文字が刻まれている。

パツと視線を上げたら、やつぱり嫌そうな、でもどこか照れ臭そうな彼がいて、開けていいか聞いてみた。不器用で捻くれてる人。たいていこういうのは「開けていいよ」とか言うだろうに――

「お前のやつなんだから好きにしるよ」

なんて言うんだから。

でも今はプレゼントを貰えたことが嬉しくて、袋からその箱を取り出す。袋は一旦彼に持つてもらって、リボンを解く。包装紙はリボンだけじゃなくてテープでも止められてて、私はそれを慎重に剥がす。こういうのは包装紙が破けるのも嫌なの。

包まれていたのは碧い箱。宝箱を開けるような気持ちになる。そんなはやる気持ちを抑えて箱をゆつくりと開ける。

「……………きれい……………」

箱に入っていたのは金色のブローチ。少し小さい花のブローチだけど、きつとこういうものなんだろうね。たしかモチーフにも意味があるんだっけな。七葉が詳しそうだし、今日のうちにメッセージでも飛ばしてようかな。

「微妙なセンスで悪かったな」

「全然そんなことないよ！ すっごく嬉しい！」

「……ならいいや」

頭をブンブン振りながら彼の言葉を否定して、すぐさま気持ちを正直に伝える。何だかんだで彼も緊張してたのかな。表情が柔らかくなってる。それに気づいたら自然と私の頬も緩んじやって、少し吹き出しちゃった。

「なんだよ」

「ううん。君も可愛いところあるんだな〜って」

「はあ!? マジで病院行ってこいよ！」

「行きませ〜ん。私は正常だもん」

「……いっ……！」

不機嫌になる彼に反比例して、私は機嫌がよくなっていく。プレゼントを貰えたっただけで私としては十二分に嬉しいのだけど、彼を少しでも揶揄えるのも楽しい。いつも翻弄されるのは私だからね。

「? あれ?」

もう一度箱の中に視線を戻したら、ブローチとは別に紐も入っていることに気づいた。ブローチとしても扱えるし、紐を通せばネックレスにもできるみたい。いや、よく見たらピンもついてないから、これブローチってわけでもないんだね。自由度が高そうなアクセサリー。私次第で何通りかの使い方ができるってことかな。

今はとりあえず――

「ねえ」

「……なんだよ」

「私に付けてくれる?」

「やだ」

「先輩さんに断られたって言うね」

「おまつ……! ……ちつ、付けたらいいんだろ付けたら!」

ぶつきらぼうに突き出された彼の左手に、花のブローチもといアクセサリーを渡して、箱に入ってた紐も渡す。それを受け取った彼は、難なくアクセサリーに紐を通した。彼女ができたことないはずなのに、なんで女性ものの扱いが上手なんだろ。

ネックレスとしてつけてもらうために、彼に背を向けて髪を上げる。後ろから手が伸びてきて、ネックレスが視界に入る。それも束の間、すぐに視界から外れて後ろで彼が

紐を繋げてくれる。それが終わったら彼の手からネックレスが離れて、私の胸の前に花のアクセサリーが止まる。

それを見届けたら上げていた髪も戻したんだけど、そこで反撃された。前に回らず、私が振り向くのも待たず、彼は私の首周りに腕を回して私を引き寄せる。肩越しに顔を出して、チラツと下を見た。

「よく似合ってるよゆり」

「っ!! あ……ありがと」

こんなことを耳元で囁かれたら心臓に悪過ぎる。跳ね上がったまま鼓動が煩くなる。今回はさらに頬まで熱くなってきた。そのせいでお礼を言うのも詰まったし、声も小さくなった。それもこれも彼のせいだね。

だから

お返ししなくちゃね

「んじや俺帰るから」

離れて颯爽と帰っていこうとする彼を追いかけてその手を掴む。止まって振り返ってくれた瞬間、その胸に飛び込んで体重を預ける。彼は優しいから私が倒れないように支えてくれる。必然的に距離は零。

「……いきなり何すんだよ」

「ねえ、もう少しいいかな？」

「なにが」

「もう少し……君といたいな」

「っ!？」

「少しだけ——このままでもいいよ」

視線は上げずに、彼の胸に手を添え、額を押し付けたまま我儘を言う。私とは違う体つき。引き締まった体で印象としては固い感じ。当然で分かりきっていることだけど、彼が異性なのだとは体感で理解させられる。

頬が熱くなってくるのが分かる。胸が締め付けられて、心臓がバクバクになる。彼に聞こえちゃうんじゃないかって。伝わっちゃうんじゃないかって。

それは嫌なんだけど、胸の真ん中には温かいものが籠ってる。これが何かは分からない。い。

苦しい感じもする。

だけど

それ以上に心地良い。

彼の体調に悪影響が出ないように、なんて言っておきながらこんなことを言うなん



て、我ながら無茶苦茶だと思う。だけど、彼はそんな我儘を許してくれて、黙って腕を回してくれた。

そのことに安心感を覚えて、自然と緩やかに肩の力が抜けていく。添えていた手を彼の背に回す。彼の温度に包まれて、私の温度で包む。りみとはやっぱり違う。彼とこうするとなんだか――

『花のモチーフの意味は“幸せ”や“美”よ』

翌朝、七菜から送られたメッセージにはそう書かれていた。

~~~~~

「なんてことがあつたよね〜」

ソファに座つて彼から貰つた金色のアクセサリーを手のひらに乗せ、当時のことを思い返しながらかく。ずっと大切にしていた、手入れたって欠かしたことがない。私がアクセサリーを眺めているのに気づいたレオくんが、こつちに近づきながら声をかけてくる。

「ん？ まだ持ってたのか」

「当然だよ！ レオくんが始めてくれたプレゼントだもん！ ライブの時にもつけてるんだから」

「まじか……」

失礼なことを言うレオくんに軽く怒るけど、それをサラツと流されちゃう。本気で怒ってるわけじゃないし、レオくんのあの言い方の本当の意味も分かっているからね。本当に捻くれてて素直じゃない人。今表情が少し柔らかくなつたのこっちは気づいてるんだからね。

「あ、そうだレオくん」

ちようどいい機会だし、前々から聞こうと思つて忘れていたことを今聞くことにしよう。私の横に座つて小首を傾げるレオくんに、確認のための質問をする。

「お店の人に選んでもらつた、とかじゃないんだよね？」

「そうだな。自分で選んだ」

まず大前提として聞きたかつたことはこれで聞いた。レオくんが選んでくれたつて分かつただけで胸がいっぱいなんだけど、もう一つ確かめたいことがある。

「じゃあ次の質問。これつてひまわりだよね？」

「んー、まあそうだな。小輪だつたかな」

「ふーん。そつかそつか」

「なんだよ」

「なんでもないよ」

絶対何かあるだろって不貞腐れるレオくんを抱きつく。レオくんが自分で小輪を選んでくれたつてことが本当に嬉しい。ここでダメ押しというか、トドメを指すためにレオくんにネタバレをしちゃう。

「花言葉は分かかってるんでしょ?」

「花言葉……? 小輪のだと『高貴』じゃなかったか?」

「誤魔化すの下手になったね。もう一つ、あるでしょ?」

「もう一つっていうと……あ……いや、待てゆり! これを買った時はだな!」

「私はそういうことだと思っとくね」

騒ぐレオくんを黙らせるためにその口を私の口で塞ぐ。こうされたらレオくんも大人しくするしかないからね。

本人は否定しちゃうけど、でも私は構わない。だってもう受け取ってるんだから。解釈の仕方なんて私次第だもん。それに今はレオくんがこうして側にいてくれるから。

そつと口を離すと、レオくんがジト目で見られる。それに対して私はニコニコと笑顔で返す。言いたいことがあるみたいだけど、今日は私の誕生日だから私のペースに嵌っ

てくれる。それに甘えてこっちも遠慮はしない。

「今はもう一つの方なんでしょ？」

「……そうだな」

「えへへ、私もだよ、レオくん。……ずっと一緒にいてね？ 私……もうあんなのは嫌だよ。」

「ああ。俺も嫌だからな。もう二度とゆりと離れないよ」

レオくんの瞳が力強くなる。決意の籠った瞳で、私はその虜になる。優しい引力に逆らうことなくレオと距離を縮め、もう一度唇を重ね合う。今度はさつきよりも熱く、深く。お互いの存在を確かめ合うように。

私にレオくんの想いが注がれる。私もレオくんに想いを注ぐ。

右手をそつと彼の頬に添える。その手の指に収まっているのは、彼の気持ち幸せの形。

——お互いの気持ちを言の葉を紡がずに伝え合う

レオくんがくれた小輪の花言葉も、アクセサリーとしての花の意味も、どっちも——

愛する人への祝福を

人生で一番幸せな瞬間とはいつなのだろうか。それをはつきりと言える人は、はたしているのだろうか。もしかしたらいるのかもしれないが、俺には無理な話だ。俺が断言できる瞬間なんてただの一度も来ない。それは、俺にとって幸せとは、順列をつけられないものだからだ。

そもそも俺は幸せだと思える瞬間なんて滅多に無い。短い人生を振り返ってみても、結花妹と再会した時やゆりと交際を始めた時、あとは母さんと結花と三人で過ごした日々くらいか。俺の中での幸せの瞬間は、上げるとしたらこれくらいだ。それに追加されるのが、先日の結婚式と今日という日。そして、これから始まっていく日々なのだろう。

「玲音さんがスーツ着てると違和感満載ですね」

「言ってくれるじゃねーか雄弥。写真で見させてもらったけど、お前も大概だぞ」

「まだ様になってたと思えますよ？ リサがそう言ってくれましたし」
「二言目には惚気けるって話本当だったのか……。何でもいいけどよ」

俺が身に纏った衣装を見せるや否や、雄弥が辛口評価を下してくる。こいつは嘘をつ

かない性格をしてるし、俺も鏡を見たときにあんまり合わないなと思ったわけだけでも。それはそれとして、当日に本人にズバツと言ってくるのはどうなんだろうな。

「時間にはまだ余裕があるか」

「椅子に座っててください。飲み物入れますから」

有無を言わず素早く飲み物を用意し始める雄弥。その姿に初めて会った時とのギャップを感じ、雄弥も変わったのだなと実感する。俺はそこまで交流がなかったし、長く寝たこともあって今になってそれを感じている。感情なんて一切なく、空虚な人間だった雄弥が、こうして自ら動くつてのは大きな変化なんだろう。人を変えるのは困難だし、こいつの周りの人間はだいたい根気強く接したつてことか

「どうかしました？」

「いや……、お前の周りは強い人が多かったんだなつて」

「あーまあ……、でも玲音さんが思う程じゃないと思いますよ。俺が言うのも何ですけど、強い人が多かったんじゃないかと、絆が強かったのかなつて」

「絆、か」

飲み物が入ったカップを両手に持ちながらサラつと言ってくる。差し出されたカップを受け取りつつ、雄弥を観察する。虚ろな印象は消え去り、淡泊さが目立つ。それが本来の性格なんだろうが、子供とかできたらまた変わるんだろうな。頭のネジが弛みそ

うだ。

「失礼なこと考えてます?」

「妥当なことを予測してるだけだ」

「……そうなる……、玲音さん。ブーメラン発言って言葉をご存知ですか?」

「煽ってくるな。暇つぶしに買ってやろうか?」

「お互いパートナーに怒られますし、今日みたいな日にするんじゃないでしょ」

「だな」

暇つぶしとして雄弥とドンパチしてみたかったが、それは今日じゃなくていい。それに、こいつ相手に勝った試しがないんだよな。どう足掻いても痛み分けに持っていくのが精一杯。

「……美味しいな」

「それはどうも」

「お前、料理本でも出せば?」

「そこまでじゃないですから」

売れる気はするんだが、こいつの知名度が補正值として働くか。内容が大事だし、雄弥がそこまでじゃないと言うなら、本当に大した内容にはならないだろう。

そうこうしているうちに入場の時間になる。結婚式なんて今まで出席したことな

かったし、どういふものかさっぱり分からなかった。だから、ゆりと二人でプランナーと打合せした時には、驚きの連続だった。

日本式は未だに知らないけど、西洋式だと結婚式と披露宴って別なんだな。家族とか身内を中心に來てもらって、教会で指輪交換とか誓いの言葉とかやるのがこの前の結婚式。今日やる披露宴は友人とか仕事先の人を呼んで、改めて結婚の報告をするんだとか。ケーキ入刀とか、ゲストの余興とか、親への手紙とか、そういうのは全部披露宴なんだとか。

「たしか雄弥たちは一日に纏めてやったんだっけ？」

「そうですね。大きめの場所を借りて、結婚式をやったらすぐ近くの会場に移動、そこでそのまま披露宴をしました」

「そんなやり方もあるんだな」

「珍しい方かと」

「だろうな。そんなことできるのって、本当に限られてる気がする。超人気バンドで海外ツアーやら全国ツアーやらして、テレビにも出演してるから多少の無理を通せるんだらう。実際に、こいつらの後に予約が殺到してるらしいし。その辺も狙って許可が降り立ってとこか。」

「それじゃあ俺は来客側に戻るのぞ」

「悪いな、話しに付き合ってもらって」

「いえ。なかなか有意義でしたよ。……改めまして玲音さん。ご結婚おめでとうございます」

「ありがとう」

丁寧にお辞儀をした雄弥は、堂々とした足取りでこの場を後にする。雄弥が気遅れる場があるのかは知らないが、あそこまで堂々とされるとあいつが主役じゃないかと思ってしまう。

「レオくん」

「ゆり、準備は終わったようだな」

「うん。待たせちゃったよね？」

「時間には間に合ってるし、女性の支度は長いものだって相場が決まってる。いくらでも待てるさ」

「ふふっ、相変わらず捻くれた言い方」

「なら素直に言ってやろうか？ ゆりのためならいくらでも待てるって」

「っ！ もう！ 押揃ってるでしょ！」

結婚式の時に着ていたウエディングドレス。それに身を包んだゆりと合流する。化粧をしているようなのだが、素がいいから余計に美人さが際立つ。結婚式のリハーサル

や結婚式本番でも見た姿だというのに、どうやら慣れることは無理らしい。

「れ、レオくん?」

その姿に目を奪われる。思考も消え去って、頭の中にはゆりを絶賛する言葉しか出てこない。

理性が働いているのか、それとも絶句しているだけなのか。俺はそれすら判断できない。無言でゆりの腕を引いて寄せる。戸惑いの色を浮かべる赤い瞳が、俺にはそれが魔性の眼差しに見える。

それに引き寄せられていき――

「んっ……」

ゆりと唇を重ねた。ずっとこうしていたい。ずっとゆりを間近に感じていたい。そんな我儘な感情が心を支配する。

ゆりに頭をポンポンと優しく叩かれ、それでハツとして俺はゆりから少し離れた。謝ろうとしたが、それよりも先に俺の口にゆりの人差し指が当てられる。ゆりの表情は穏やかで、器の大きさというか包容力の大きさを感じさせられる。

「時間がないから、ね?」

「……そうだな。ごめん、ゆり。魅了されてた」

「んっ……!! 調子狂うってば!」

口を尖らせるゆりに謝りながら、手を引く。今回の披露宴で司会をしてきてるのは、バイトでやたらと世話になった青葉先輩。この人はこの人で式を上げたらいいのに、まだしてないらしい。元彼女さんこと嫁さんがプロデュースしたいらしく、その要求が高いのだとか。いろんな意味で。

司会者に呼ばれて、俺とゆりは会場の袖から入っていく。招待した人たちが来てくれていて、大勢の拍手に包まれる。俺の方は家庭がいろいろとアレだから、身内が結花と結花の祖母しかない。牛込家は揃っているし、両祖父母もいる。それ以外だと、グリグリのメンバーやオーナー。ポピパメンバーもいるし、雄弥を始めとした Augsburg やドイツ、スイスの友人など、本当によく来てくれたなと思った。

というか呼ぶ前に『式の日程立ててるだろ？ いつだ？ 教えろ』って連絡が来た時はビビった。それよりも意外だったのは、パスパレメンバーか。彩が誘ったらしい。彩を呼ぶか悩んでたんだが、花音経由で知られて彩に怒られた。祝いたいのにって。強い女性だよ、彩。

本当に大勢の人たちが来てくれてる。だいたい70人くらいかな。俺は結構閉鎖的な人間だし、ゆりの人望だろう。

「いっ………！ 抓るなよ」

「レオくん。レオくんが思ってる以上に、レオくんはいろんな人に親しみを持たれてるんだからね?」

ジト目で言われた。考えを読まれていたし、俺の考えが凄い不服だったらしい。まあ、実際そうなんだろう。自分の夫が卑屈な人間とか誰だつて嫌か。

「それでは始めましょう。祝電は両家から。ご友人方は後の立食パーティー時にどうぞ」

先輩が真面目に司会をしてくれていることに内心驚いていると、先輩から笑顔でもの凄い圧をかけられた。最近人に考えを読まれることが増えたような気がするんだが、なんでだろうな。

「ゆり、玲音くん。結婚おめでとう。玲音くんと初めて会った日のことを、今でも鮮明に覚えてるよ。第一印象は……うん、本当に申し訳ないことに最悪だったのだが——」

ごめんなさいねえ!! 俺がそう受け取られるように立ち回ってましたからねえ!!

居た堪れない気持ちでいっぱいなんだが、ゆりも、牛込家の人たちも思い出話の一つと捉えているのか、ココココ笑ってる。他の人も苦笑だったり、外国友人は笑いを堪えるのがキツそうな顔してたりするんだが、祖母が思いため息をついてる。本当にごめんなさい。あと結花。耳打ちで何か言ってるようだけど、それ絶対に碌でもないことだね。

「ゆりの気持ち、玲音くんの本当の姿を見て、私たちは勘違いしていたことに気づいた。

ぶつきらぼうで、素直じゃないことが多いけど、それでも玲音くんは、ゆりのことを真剣に見てくれていた。時に大怪我をしてまで、ゆりのことを助けてくれた。いつからだっただのか。それは自分でも分からないが、ゆりのことは玲音くんには任せられない。そう思うようになっていたよ。本当におめでとう。これからも、二人で力を合わせて歩んでいってくれ。そして、時には帰ってきてゆっくり休んでくれ。私たちは、たとえ離れようとも家族なのだから」

親父さんの言葉を、俺は黙って真剣に聞き届けた。一言一句聞き逃さないように。謝りきれないことだってあった。感謝しきれないことだってある。だから、その全てを含め、ゆりを幸せにしようと改めて心に誓った。ゆりを幸せにして、そこに俺自身もいて、一緒に嘸み締めていくのだと。

涙をぼろっと零すゆりの手を握る。客席からは見えない。手の甲に重ねた俺の手の指は、上からゆりの指と絡まる。言葉にはせず、ただ行動で寄り添うんだ。

牛込家の方の話が終わると、今度は俺の家の代表として祖母が席を立つ。母親は死んでるし、クソ親父は刑務所の中。俺の本当の祖父ももう他界してる。だから、義理の妹である結花の祖母が、代わりに代表を務めてくれる。

いつたい何を話されるのやら。半分ほど怖いのだが、祖母は先輩に何かを渡していた。それを大切に受け取った先輩は、司会席から移動。それに合わせてスタッフたちも

数人動く。

俺達の真後ろにあつたらしいスクリーンが下ろされていき、プロジェクターが起動されてそこに画面が浮かび上がる。今は準備中のようで、画面いっぱいが真っ青。

「お二方、今のうちに椅子の向きをお変えください」

「わかりました」

状況が飲み込めないが、そう言われたのならそうするしかない。椅子を横に向けてゆりとう向かい合うように座り直し、あとは可能な限り体を斜めにして画面を見上げる。もう映像が始まるようで、カウントダウンが始まっている。

— 3

— 2

— 1

『母さんちゃんと撮れてる? ……え、もう始まつてる? マジで!? カットカット!

やり直し! え、させてくれないの!?! まじかー。こんなスタートなのかー。あゝ、こういうところあるんだよねーあたし』

「……母……さん……?」

「え?」

俺の眩きにゆりが反応したが、俺はそれに反応できない。画面に映し出されてる母さんの姿に意識が釘付けにされているから。

結花と同じ赤い髪色。毛先に近づくと赤くなっていくところまで一緒だし、顔もよく似てる。結花は完全に母さん似だつてこと。……性格も母さんに近いし……父さんの遺伝子はどこへやら。

『恥ずかしい始まり方だけど、まあいいや！ 改めまして藤森結衣^{ゆい}花^かです。玲音と結花の母親です！ どう？ どう？ レオ、結花、ビックリしてる？ ぜーったいビックリしてるよねー。サブライズ！ イエイ！』

あまりものテンションの高さに笑いが溢れる。これだけテンション高くても、それに圧されることはない。こっちまで上げられる。自然とそうさせるのが、母さんの魅力だな。

『二人が結婚するとき用に、一本ずつ撮っておこうかなって思つて、母さんつまりお婆ちゃんに協力してもらつてるんだよ。お婆ちゃんつては気難しそうに見えるけど、こういうの好きだったりするんだよね。あ、ヤバイ。目の前でこめかみピクピクしてほ。つとまあそれは置いといて。どつちのを先に撮るか悩んだんだよね。だつてほら、レオつてば捻くれてるところあるじゃん？ 結婚相手が見つかるか不安でさ。その点結花はあたしに似てるし？ いい男ゲットできると確信してるんだ。あ、変な男が寄

らないようにちゃんとレオが見守つてよ?』

母さんや。いろいろツツコミたいことがマシガンの如く飛び出してきてるぞ。

『あれ? そうなるとレオと結花が結婚した方がいいのかな? ……んー、まあその辺は二人の自由だね! お母さん的には背徳感あるけど、背中を押してあげるからね!』

近親相姦だぞ?! 血は繋がってないけど世間的にアウトだわ! 結花を本気で好きになつてたら気にしてなかつただろうけども。

『で、えーっと、悩んだ結果ね。レオの分から先に撮ることにしたんだ。レオの方がお兄ちゃんだし、捻くれてるだけでレオは誠実なところがあつて、優しくて、大切な人を優先できる男の子だからね。ちゃんと見てくれる子と巡り会えるつて信じてる』

自然とゆりの方に向いてしまう。ゆりも同タイミングでこつちを見てきてて、二人で思わずクスツと笑つてしまう。ゆりは照れ臭そうにしてたけど。

『まずは謝らないとだね。……二人が大人になる前に、二人の前からいなくなつてしまうことを許してください。あたしが二人に残せたことは、たぶん全然ないんだと思う。一緒にいられた時間だつてすつごく少ない。それでも、やっぱりあたしは二人のお母さんでいたいから。ずっとずっとそう思つていてほしいから、少しでも残せるものを残したい。そう思つて、結婚式用のを撮ることにしたの』

だんだんと真面目な雰囲気になっていく。母さんは本当にそう思つて謝つてるんだらうけど、謝らないでほしかつたな。

『結婚おめでとう。お嫁さんの方はごめんね。誰になるかなんて分からないから、名前を言つてお祝ひしてあげられないや。……玲音。結婚つていうのは、人生において一つの区切りになることだよ。結婚しない人もいるけど、どっちが良いとかの話じゃない。結婚をしたのなら、それは分かりやすい区切りを得たことになる。覚悟はできてるはずだよ。背負うものが増えたつてことを』

母さんは名言を言つてるわけじゃない。当たり前のことを、なあなあにするなど言外に言つてるんだ。

『男の子だから、俺が守らなきゃーとか、思つちやうんだらうけど、そんな事はないんだよね。何のために結婚したのか。今一度考えてみて?』

何のためにつて、そんなの——

『一緒に幸せになるためだよね?』

一緒に幸せになるために決まつてる

『これが一番大切なこと。自分のためだけに結婚してるんじゃない。相手のためだけに結婚してるんじゃない。お互いのために結婚してるつてこと。それが大切なの。だから、辛いことも苦しいことも、楽しいことも嬉しいことも、全部を一緒に分かち合うの。』

それが家族だから！ 喧嘩しちゃうこともあるだろうね。一緒にいるのを疎んじやうかもしれない。だけど、そういう時こそ初心に帰るんだよ。誰よりもその人といたいって思ったのは、他でもない自分自身なんだから。それと、忘れないでね。祝福してくれる人たちのことを。本気で想ってくれる人たちって本当の本当に貴重な存在なんだから。感謝の心を忘れないで』

これまで経験してきたこと。それはこの先でも経験するんだろう。違った形で、違った見え方で。だけど、それを乗り越え続けられれば、俺達は絆がより強固になるんだろう。『柄にもない』ことを言ったけど、あたしはそれだけ結婚ってことが大切なことだと思ってるから。家族が大切なものだって思ってるから。……信じてもらえるか分からないけどね。家族の時間を全然作れなかったダメダメな母親だし……あはは……。うん、でもね……そんなあたしでも、レオと結花のお母さんでいられて幸せだったんだよ。二人がいてくれたから頑張れたことがいっぱいあったんだよ。だからね……お母さんに幸せをくれてありがとう。あたしと巡り会ってくれてありがとう。生まれてきてくれてありがとう。自慢の子どもたち。幸せになってくれてくれることを、心から願っています。改めて結婚おめでとう。藤森結衣花より』

「ダメなわけないだろ。……俺達にとつて、最高の母親なんだから」
いつも見せてくれてた笑顔。それを今回も母さんが最後に浮かべて、映像がそこで止

まった。EDまで付けたみたいで、母さんの最後のシングルが流れながら、俺と結花と母さんの三人の写真が映し出されていく。家にいる何気ない日の写真も、俺と結花が一緒に登下校してる写真も、食事の写真、学校行事や年間行事の写真。最初で最後の三人での家族旅行の写真だつてある。

ほんつと、エモい母さんだよ。

そうだよな

——大切な思い出はいつだって心にある君との時は消えずにここにある

「う、うう……」

「……つたく、なんでゆりが泣くんだよ」

「ご、めん……でも……」

「相変わらずの泣き虫め」

また泣いたゆりを、今度は他の人に見えないように腕の中に包み込む。胸に頭を当てさせ、泣き止むまでそつと抱きしめて。

映像が完全に終わったら、静かな拍手が送られてくる。俺はそれを会釈して受け取り、映像を持ってきてくれた祖母にも頭を下げた。

ゆりが泣きやんだ後は、プログラム通りに進行していった。用意してくれた芸……と、いか盛大なライブを特等席で鑑賞し、二人でケーキ入刀もした。最後まで終われば、

後は自由な立食パーティに。そうになると友人たちがこぞつて話をしにくる。俺とゆりは一旦別々になって、それぞれで話をしていた。のだが、腕を掴まれてそつちを向こうとしたら頬に柔らかな感触。一瞬固まってから犯人を見ると、頬を赤らめながらハニカムゆりが。

「大胆になつたな」

「びつくりした？」

「まあな。でも」

「わっ……んっ」

湧き上がっていて頬い周りを放置し、俺を出し抜いたと思つているゆりの腰に手を回す。細く、くびれもあるその腰は力を強めたら折れてしまいそうだ。鮮やかな瞳は揺らいでいたが、柔らかな唇を奪い取ると、その瞳も閉じられて首に腕を回される。俺達はお互いが離さないようにと熱く抱き締めあつた。

——ああ、ゆりと結ばれてよかつた

「お兄ちゃんお兄ちゃん。私と既成事実作つてみない？ 母さんは賛成してくれてたみたいだし」

「作りません！」

『ヤーんねん！』